

令和 5 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座

令和 5 年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター
熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座



もくじ

I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長・病院長あいさつ	1
2. 地域医療支援センター長あいさつ	2

2 熊本県地域医療支援機構 (熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要	3
2. 活動報告	
(1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師の キャリア形成支援	4
(2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援	8
(3) 女性医師キャリア支援及び子育て医師の就業継続及び復職支援	9
(4) 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関する取組み	14
(5) その他、機構の目的を達成するために必要な取組み	15

3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要	19
2. 活動報告	
(1) 調査研究	20
(2) 教育活動	20
(3) 教育拠点への支援	24
(4) 地域医療の支援	25

4 教育拠点

【くまもと県北教育拠点】	
1. 活動概要	26
2. 年間活動実績	26
3. 活動報告	27

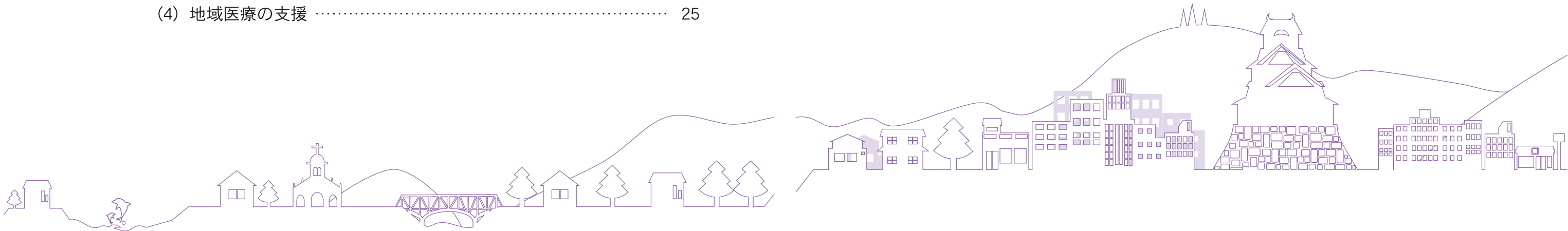
【河浦教育拠点】	
1. 活動概要	30
2. 活動報告	30

5 熊本県医師修学資金貸与学生からの報告

1. 地域医療ゼミ	33
2. 地域医療特別実習	36
3. 令和5年度卒業生の声	38

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

1. 活動概要及び地域医療の現状分析と考察	41
2. 教員一覧	42
3. 事業報告及び派遣先医療機関データ	43



I はじめに

1. 熊本県地域医療支援機構理事長・病院長あいさつ



熊本県地域医療支援機構 理事長
熊本大学病院 病院長

馬 場 秀 夫

皆様方には、平素より熊本県地域医療支援機構の運営、ならびに「地域医療・総合診療実践学寄附講座」、「地域医療連携ネットワーク寄附講座」及び「感染症対応実践学寄附講座」の取り組みに、多大なご支援とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。この度、令和5年度の活動報告書を作成致しましたので、ご一読いただければ幸いに存じます。

さて、熊本県における医師の地域偏在を解消することを目的に、平成25年12月に県により設置された本機構も、設置から早10年が経過しました。また、医師の地域偏在の解消とともに、地域医療の充実のため地域医療を担う総合診療医等の養成を目的に設置した「地域医療・総合診療実践学寄附講座」も設置から8年、熊本県の地域医療連携ネットワーク構想を推進するために設置した「地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座」も5年が経過し、昨年度は新たに、新興感染症や院内感染予防などに対応可能な感染症専門医の育成等を目的に「感染症対応実践学寄附講座」も設置したところです。

熊本県は全国的には医師多数県に数えられますが、県内の地域ごとの比較をすると熊本市への集中がみられ医師の地域偏在が顕著となっています。医師が慢性的に不足している地域においては、人口減少と高齢化が進展する中で、この数年、日本中、そして世界中に蔓延することとなった新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、地域の医療機関は地域住民への適切な医療サービスの提供に非常に苦労されてきました。地域における持続的かつ適切な医療提供体制の確保を図ることがいかに重要であるか改めて認識しました。

本機構においても、コロナ禍での事業展開は決して容易ではなく、寄附講座も含めて、当初の計画を中止、変更、縮小するといった決断を余儀なくされ、十分な取り組みができないこともありましたが、オンライン配信等々の工夫をこらし、事業の歩みを止めることなく、できることを一つ一つ着実に取り組んでまいりました。

令和5年度に入り、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行する中で、国内の社会経済活動も徐々に平常へと向かいつつありますが、本機構や寄附講座の取り組みについても、ようやく計画どおりに事業が実施できるようになり、この活動報告書でもこうしてその報告ができるようになったところです。

しかしながら、医師の地域偏在の解消には長い時間を要します。依然として本県の地域医療を取巻く状況が厳しい中にあることは、引き続き、本機構と「地域医療・総合診療実践学寄附講座」、「地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座」が相互に連携して、それぞれの役割を果たしていくことが肝要であると考えます。

本機構といたしましては、今後とも熊本県、医師会、市町村並びに地域医療関係者などの関係諸団体との連携を一層強化し、県内各地のニーズに沿った地域医療が提供されるよう努力してまいりますので、関係者の皆様におかれましては、引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

(令和6年3月吉日)

7 感染症対応実践学寄附講座

- 活動概要
 - 寄附講座設置概要 106
 - 熊本県内における感染症専門医および施設認定の状況 108
- 年間活動実績 109

8 業績

- 熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター）… 117
- 地域医療・総合診療実践学寄附講座 118
- 教育拠点（くまもと県北教育拠点・河浦教育拠点） 119
- 総合診療科 医局員・専攻医 119

9 おわりに

- 教員 121
- 非常勤講師・客員研究員 123
- 総合診療科 医局員・専攻医 125
- 事務スタッフ 129

10 あとがき 131

2. 地域医療支援センター長あいさつ



熊本大学病院
地域医療支援センター センター長
地域医療・総合診療実践学寄附講座
総合診療科 教授

松 井 邦 彦

いつも地域医療支援センター /地域医療支援機構、および当寄附講座の活動に、ご協力いただき、有難うございます。令和5年度の活動報告書をお送りいたします。ご高覧いただければ幸いです。

この一年を振り返ると、新型コロナウイルス感染症の流行は収束し、令和5年度は、以前の日常を取り戻すための期間でした。この数年間、流行のために中止され途切れてしまった様々な活動を、少しずつ再開することになりました。

その一つに、夏季地域医療特別実習の再開があります。新型コロナウイルス流行のために、この数年間、開催することができませんでした。流行の波が一段落した時点で、今回こそはと計画し、手筈を整え準備したものの、数か月後の実施する頃には次の大きな流行波が到来し、中止を余儀なくされたこともありました。そのような中、4年ぶりとなる実習の再開です。本年度は天草地域に実習先を定め、一泊二日で御所浦島、湯島、および上天草で、行いました。更に冬休みの期間中にも、冬季地域医療特別実習を、小国・阿蘇地域で行いました。夏の実習に参加できなかった方々にも、ご参加いただきました。これは、以前は行っていなかった、新しい取り組みです。いずれの実習でも、行く先々で大変温かくお迎えいただきました。お世話になった方々に、この場を借りて、感謝申し上げます。

この数年間で、ウェブ上で画面を通じた会議や面談が、すっかり一般化しました。往来の必要がなく、非常に便利であることは、言うまでもありません。その一方で、直接、顔を合わせてお話する意義について、考える機会にもなりました。地域に赴いた実習や、対面での面談では、何が得られると期待されるのでしょうか。医療の分野でも、DXの導入は当然です。地域医療を取り巻く様々な問題についても、医療DXの導入により大きな恩恵が期待されます。オンライン診療も、すでに普及しつつあります。しかし、それでは得られないものは何か、手間と時間をかけて、対面で行う意義は何なのか。本年度、さまざまな活動を再開するにあたり、常に意識することになりました。今後も引き続き、検討を行うべき課題だと思います。

最後に、いつも私たちを支えてくださっている、熊本県医療政策課の皆様、また熊大病院地域医療支援センターのスタッフの皆様に感謝を申し上げます。

2 熊本県地域医療支援機構 (熊本大学病院 地域医療支援センター)

1. 活動概要

熊本県地域医療支援機構は、熊本県(以下「県」という。)における医師の地域偏在を解消することを目的として、県内における医師不足の状況等を把握・分析し、医師のキャリア形成支援と一体的に医師不足医療機関の医師確保の支援等を行うため、平成25年11月に県により設置されました。以来、本機構が担う事業の一部については、県から国立大学法人熊本大学に委託され、同大学病院に設置されている地域医療支援センターと本機構が一体となって様々な事業を実施しているところです。

令和5年度においても、本機構の理事会において承認された令和5年度事業計画に基づき事業を進めて参りましたが、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行されたことに伴い、地域医療特別実習やこの数年、コロナ禍において活動の中止や縮小を余儀なくされてきた多くの事業について、徐々に活動を再開することができました。

また、県の寄附を受けて、熊本大学(大学病院)に設置されている地域医療・総合診療実践学寄附講座や地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座とも密接に連携しつつ、県内の地域医療連携ネットワークを構築することにより、地域の安定的医療体制の整備・充実に努めました。

【主な取り組み】

- (1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援
- (2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援
- (3) 女性医師及び子育て医師の就業継続及び復職支援
- (4) 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関する取り組み
- (5) その他、機構の設置目的を達成するために必要な取り組み
 - ・熊本県地域医療支援機構講演会の開催
 - ・地域医療支援機構広報誌「COCODE！（ココデ）」の発行

【スタッフ】

松井 邦彦	地域医療支援センター長／総合診療科 教授
荒木 智	地域医療支援センター 副センター長
高柳 宏史	特任助教／総合診療科
古賀 義規	客員研究員(天草市立御所浦診療所 所長)
片岡恵一郎	客員研究員(小国公立病院 病院事業管理者)
松本 朋樹	客員研究員(松本内科・眼科 理事)
無田 英昭	地域医療支援コーディネーター
川添 光芳	地域医療支援コーディネーター
原田 淳子	女性医師復職支援コーディネーター
横手友紀子	事務補佐員

2. 活動報告

(1) 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師のキャリア形成支援

① キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与学生及び医師へのきめ細やかな支援 (一人一人の状況に応じた助言、相談対応、熊本大学病院各診療科との連携・調整等)

● 貸与学生及び貸与医師に対する情報提供、相談窓口の運営

貸与学生及び貸与医師のキャリア形成と義務履行の両立を支援するために、貸与制度に関する質問や相談等に適宜対応するとともに、キャリア形成プログラムの制度改正等の際には、メールやホームページにより情報提供を行いました。また、貸与医師に対して、義務年限及び当該義務の履行状況が確認できるよう、年度当初に各貸与医師へ義務履行の状況を文書で通知しました。

● 知事指定病院等への協力依頼 (令和5年4月)

貸与医師が勤務する知事指定病院等の病院長に対して、貸与医師のキャリア形成支援への協力を依頼する文書を発出するとともに、第2、第3グループの病院に勤務する医師については、専門性の向上等のため、毎週1回の勤務先以外の医療機関での研修の実施について協力いただくよう依頼しました。

● 貸与学生及び貸与医師との面談の実施 (令和5年5月～9月)

県医療政策課と連携して、貸与学生35名(既卒者1名含む)、貸与医師60名を対象に対面形式(県外枠2名を除き)で面談を実施しました。貸与学生については、生活状況や将来の希望等について聞き取り、各学生の状況に応じた生活面、学習面等に関して指導、助言を行いました。貸与医師については、生活状況や勤務状況、今後のキャリアプラン等について聞き取り、各医師の状況等に応じた指導、助言を行いました。

● 地域医療特別実習の実施

地域医療特別実習は地域医療・総合診療実践学寄附講座と連携し、貸与学生や自治医科大生(熊本県出身者)のキャリア形成の一環として地域医療の現場を知ってもらうために実施してきました。新型コロナウイルス感染症の影響により3年間の休止を余儀なくされていましたが、今年度は4年ぶりに実施しました。

8月に一泊二日の日程で天草上島・御所浦地域において実施した夏季実習には、20名の貸与学生及び自治医科大生が参加しました。また、12月に一泊二日の日程で阿蘇地域において実施した冬季実習には、大学の試験等のために夏季実習に参加できなかった12名の貸与学生が参加しました。
(詳細については21ページ参照)

● 熊本大学病院関係診療科への訪問 (令和6年1月～2月)

県医療政策課と連携し、令和6年度から専門研修プログラムに従事する貸与医師が所属する予定の診療科(医局)を訪問し、修学資金貸与制度について説明を行うとともに、貸与医師がキャリア形成プログラムに基づきキャリア形成と義務履行の両立を図ることができるよう働きかけました。

② キャリア形成プログラムに基づく修学資金貸与医師に係る派遣計画案の作成及び負担軽減策の実施

● 貸与医師の派遣人事説明会の開催 (令和5年5月)

次年度の派遣計画案の策定を、熊本大学病院の関係診療科(医局)の理解と協力を得てより円滑に進めるため、県医療政策課と連携し、貸与医師の派遣人事に関する説明会を開催しました。

説明会では、県医療政策課から、大学病院の関係診療科長・医局長に対して、医師修学資金制度や貸与医師の令和6年度の派遣先医療機関決定に向けた事務スケジュール等について説明を行うとともに、①貸与医師との面談時に貸与医師が提出することとなっている次年度勤務先の希望調書やキャリアプランに関する「医局と貸与医師との意見交換の実施」、②各診療科(医局)に所属する貸与医師の令和6年度派遣先医療機関の調整結果の報告等について協力を求めました。

● 貸与医師の派遣計画案の策定 (令和6年2月)

計画案作成にあたっての基本的な考え方について、その考え方の基本的なルールも含めて、考え方の整理を行いました。なお、令和6年度に医師3年目以上となる医師については、各診療科における貸与医師の派遣人事の調整結果の報告(10月)をベースに、県内各地域における医師不足の状況や研修先・勤務先の状況等を踏まえ、大学(医局)による医師派遣との整合性の確保にも配慮しつつ、貸与医師本人の意向を最大限尊重し、貸与医師が所属する大学病院の診療科との調整等を行った上で、派遣計画案を作成しました。

【派遣計画案概要】

- 貸与医師(時点：令和6年4月1日)
 - 医師年数3年目以上の医師 52名
 - 臨床研修医(医師年数1～2年目) 14名(予定)
- 医師3年目以上の医師の病院区分ごとの派遣数
 - 知事指定病院等 31.5人(34.2人)
 - 第1グループ 14.0人(34.2人)
 - 第2グループ 12.5人(13.7人)
 - 第3グループ 5.0人(5.0人)
 - その他の病院(後期研修・義務内) 9.0人(5.0人)
 - その他の病院(後期研修・義務外) 10.5人(6.8人)
 - その他 1.0人(0.0人)

※年度内に勤務先が変わり、複数の病院で勤務する貸与医師もいるため、人数は「人年法」でカウント。
※()は令和5年度の実績。

③ 地域医療を志す医学生及び地域医療に従事する医師を支援する制度の運営

● 貸与学生及び貸与医師に対する修学資金貸与制度及びキャリア形成プログラムに関する周知

令和5年4月に、地域医療・総合診療実践学寄附講座と連携し、県医療政策課の協力も得て、新入学貸与学生を対象とした制度説明会及び、令和6年2月に貸与学生を対象とした制度とキャリア形成に関する説明会を開催したほか、令和5年5月～9月にかけて貸与学生及び貸与医師の面談等の機会を活用し、制度とキャリア形成プログラムの周知を図りました。

【熊本県医師修学資金貸与人数一覧(2023年3月現在)】 (単位：人)

区分	年数・学年	地域枠	一般枠	県外枠	計	男	女
後期研修 /地域勤務	9年目		2		2	1	1
	8年目	4	1		5	3	2
	7年目	4	3		7	6	1
	6年目	5	2		7	4	3
	5年目	5	4		9	7	2
	4年目	3	6		9	8	1
	3年目	5			5	3	2
	小計	31	21	0	52	37	15
臨床研修	2年目	5	3		8	2	5
	1年目	6	1		7	2	5
	小計	11	4	0	15	4	10
在 学 生	6年生	6	1	1	8	3	4
	5年生	6			6	3	2
	4年生	4		1	5	2	2
	3年生	5			5	1	1
	2年生	2			2	5	4
	1年生	8			8	4	3
	小計	31	1	2	34	18	16
合 計		73	26	2	101	59	41

58.4% 40.6%

● 知事表敬訪問及び知事感謝状贈呈(令和6年3月)

令和5年度卒業生(修学資金貸与者)7名のうち6名(1名は体調不良のため欠席)が、蒲島知事を表敬訪問し、それぞれ貸与医師としての今後の抱負などを知事に語り、知事からは激励の言葉をいただきました。また同日、令和5年度をもって義務年限を満了する貸与医師2名が、同じく自治医科大卒医師で令和5年度末をもって義務年限を満了する医師2名と共に、知事感謝状の贈呈を受けました。



知事表敬訪問



知事感謝状贈呈(左：松田医師、右：河野医師)

④ 熊本県医師修学資金貸与条例に規定する知事指定病院等における医師不足の状況等に関する調査・分析

知事指定病院のなかでも特に医師の確保が難しい第2、第3グループの18病院を対象に、医師不足の状況や子育て支援等に関する調査を実施しました。調査結果については、調査協力を得た病院にフィードバックするとともに、熊本県、熊本大学病院関係診療科と情報を共有し、貸与医師及び貸与学生にも情報提供を行いました。

調査結果の概要については以下のとおりです。

【調査結果の概要】

1) 医師不足の状況について

- ・今後、常勤医師の不足が見込まれると15病院が回答しました。
- ・医師不足が見込まれる理由としては、①地域の診療ニーズの変化等への対応、②常勤医師の慢性的不足、③職員(医師)の退職、④常勤医師の高齢化が上位を占めています。
- ・医師が不足している診療科については、①総合診療科、②整形外科、③消化器内科、④呼吸器内科が上位を占めています。
- ・常勤医師の熊本大学病院からの派遣に関して、第2グループの病院と第3グループの病院との比較においては、第2グループに比べ規模が比較的大きい第3グループの病院の方が、一病院当たりの常勤医師の派遣が多く、各グループ内においても、病院の規模(病床数、標榜診療科数等)との正の相関(規模が大きいほど派遣者数も多くなる)が一定程度見られました。

2) 義務履行中の地域枠医師の受入れについて

- ・義務履行中の地域枠医師の受入れが可能との回答があった病院は15病院で、いずれも受入れにあつ

て専門医資格を必要とする病院はありませんでした。

- ・診療科としては①総合診療科、②呼吸器内科、③消化器内科、脳神経内科、整形外科が上位を占めています。
- ・今後、医師不足が見込まれるとしながら、地域枠医師の受入れについては「受入れ可能」との回答がなかった2病院について、その理由を事後調査(聞き取り)で確認したところ、「病院に若手医師を育成する環境がないため、臨床経験の浅い地域枠医師の受入れは難しい」、「病院としての医療機能の確保、医療体制の整備といった面では常勤医師の不足はあるものの、人件費コストと医療費収入の兼ね合い(病院経営)の面から考えると、地域枠医師に限らず、常勤医師の新たな雇用が難しい」といった主旨の意見があげられました。

3) 非常勤医師の採用について

- ・非常勤による診療を行っている診療科があるとの回答があった病院は15病院でした。
- ・診療科としては、整形外科のほか、消化器内科、循環器内科、総合診療科が上位を占めますが、ほとんどの診療科で非常勤医師による診療を行っていました。
- ・非常勤医師の派遣元については、その約7割(総診療時間ベース)を熊本大学病院が占めており、第2グループの病院と第3グループの病院との比較においては、比較的規模の小さい病院が多い第2グループの病院の方が、非常勤医師による一週当たりの延べ総診療時間が長い傾向にある一方で、各グループ内においては、病院の規模との正の相関が一定程度見られました。

4) 宿日直体制について

- ・14病院が外部に応援を依頼している状況です。
- ・医師一人当たりの宿直の頻度については「週に1回」の病院が最も多く、他は「週に2～3回」から「月に1～2回」までと、病院による差が目立ちました。応援元では、熊本大学病院が最も多く、全体の6割近くを占めています。

5) 保育環境の整備状況について

- ・17病院が、近隣(病院から概ね1.7Km以内)に保育施設があることが確認されました。

⑤ その他

● 地域医療ゼミの開講

地域医療ゼミについては、貸与学生へのきめ細やかな支援の取組みの一環として、貸与学生及び自治医科大生(熊本県出身者)の地域医療マインドを卒前から涵養していくことを目的に、地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、地域医療ゼミを開講し、年間を通して学生企画を基本としたシネメデュケーション、多職種連携についての演習、コミュニケーションをテーマに外部講師による講演会などを実施しました。

(詳細については21ページ参照)

● 地域医療総合演習の開講

地域医療総合演習は、令和4年度の文部科学省のポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業で長崎大学、熊本大学、鹿児島大学の3大学連携のプロジェクトが採択され、その一環で、熊本大学では、医学科のカリキュラムの中の選択科目として特に地域枠学生(5年次)を主な対象にした地域医療総合演習を開講し、毎月1回実施しました。内容は教育指導者として必要な能力を講義とワークショップ形式で学修し、11月の地域医療ゼミでは受講学生が講師となり他の地域枠学生に教育を行うことで、教育指導者としての学びを深めることができました。

(2) 地域の医療提供体制の確保に向けた支援

① 医師が不足する医療機関への診療支援並びにテレビ会議システム等を活用した遠隔診療・教育支援

● 外来診療支援及び医師が不足する医療機関への診療支援

熊本大学病院においては、地域医療・総合診療実践学寄附講座と連携して「総合診療科」の外来診療を、月曜日から金曜日まで実施しました。また、学外においては、当機構の専任医師による診療支援のほか、地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、医師が常勤又は非常勤医師として、医師が不足する病院へ赴き診療支援を行いました。

【熊本大学病院 総合診療科外来】

月	火	水	木	金
荒木	松井	高柳	佐土原	北村

【医師が不足する医療機関への診療支援】

	医師名	支援先医療機関	支援内容
専任医師	高柳 宏史	上天草総合病院	非常勤 通年（週1回）
		御所浦診療所	非常勤 通年（週1回）
地域医療・総合診療 実践学寄附講座	松井 邦彦	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
	荒木 智	荒尾市立有明医療センター	非常勤 通年（週1回）
		天草中央総合病院	非常勤 通年（週1回）
	佐土原 道人	小国公立病院	非常勤 通年（週1回）
		阿蘇医療センター	非常勤 通年（週1回）
	北村 泰斗	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
		そよう病院	非常勤 通年（週1回）
	鶴田 真三	河浦病院	常勤
	中村 孝典	くまもと県北病院	常勤

● 合同カンファレンス、レジデントデイの実施

地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、総合診療科の若手医師を対象にテレビ会議システム等を活用した合同カンファレンスやレジデントデイなどの取組みを実施し、総合診療医としての能力向上に向けた助言、指導を行いました。

● 医療情報の提供

インターネット臨床支援ツールである「今日の臨床サポート」や「プロシージャーズ・コンサルツ」の利用登録を行い、貸与医師や貸与学生、自治医科大学卒の医師（義務履行中の者に限る）や自治医科大生、特別臨床実習（クリクラ）で総合診療科を選択した学生に対して、エビデンスに基づく最新の医療情報や幅広い診療科にわたる臨床手技に関する情報を入手できる体制を構築しました。

【活用実績】（令和6年2月現在）

今日の臨床サポート	
ユーザー登録数	236人
全ログイン件数	3,727件
全アクセス件数	26,495件

プロシージャーズ・コンサルツ	
ユーザー登録数	223人
全ログイン件数	79件

② 熊本県地域医療連携ネットワークの構築に向けた全体調整

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座との連携の下、熊本県からの要請に基づき、熊本大学病院の関係診療科と調整を行い、熊本大学病院から医師26名を地域医療拠点病院等に所属する常勤医師として派遣することにより、地域の中核的な医療機関の機能強化を図りました。

また、同寄附講座の特任教員24名を、週2日、非常勤医師として地域の医療機関に派遣し、同医療機関において専門医療を提供するとともに、同医療機関に所属する貸与医師や研修医に指導等を行うことにより、上記の常勤医師の派遣と併せて、地域医療連携ネットワークの構築による、地域の安定的な医療体制の整備・充実に努めました。

同寄附講座の特任教員が担う上記の役割を明文化した職務通知書を作成し、各特任教員に熊本大学病院長から交付することで、特任教員が地域医療連携ネットワーク構築に係る役割を認識、理解を深める取組みを実施しました。

③ 地域の医療機関・自治体に対する将来の医療提供体制の構築に向けた助言・提案、関係機関の役割や方向性に関する連携、調整の支援

地域医療・総合診療実践学寄附講座との連携により、くまもと県北病院及び河浦病院に教育拠点を設置し、地域で必要とされる医師の育成・教育機能向上を図るとともに、当該講座から派遣した教員が病院で診療を行うことを通して、地域で求められる医療に適切に対応できる医師の育成と病院の医療機能の向上に貢献しています。

本機構（地域医療支援センター）及び同寄附講座の教員が、診療支援先の病院において、医療提供体制の課題等について情報を共有するとともに、意見交換を通して地域に求められる医療提供の充実に努めています。

④ 修学資金貸与医師の派遣対象医療機関に関する医療勤務環境改善支援センターとの相互連携

熊本県地域医療支援関係機構等連絡会議を毎月、定期的に開催し、本機構の事業をはじめ、地域医療の推進にあたり必要な事項について、熊本県医療勤務環境改善支援センターをはじめ関係機関の情報共有や相互連携を図りました。また、本機構の職員が、同センターの運営協議会等の会議にオブザーバーとして参加し、県内病院の勤務環境の改善状況や労働行政に関する情報等についても共有し、相互連携に努めました。

(3) 女性医師キャリア支援及び子育て医師の就業継続及び復職支援

熊本県女性医師キャリア支援センターでは、①復職支援、②短時間勤務、③育児支援、④メンター制度、⑤セミナー（啓発活動）を5つの柱にキャリア支援を進めることが重要と考え活動しています。

令和5年度からは、「女性医師」に加え、男性を含む「子育て医師」を支援の対象として明示しました。

今年度は以下の事業に取り組みました。

● 相談件数

令和5年度（令和5年4月1日～令和6年3月31日まで）の相談件数は、総計14件（対面0件、電話10件、メール4件）でした。

● 相談内容の内訳（延べ相談数）令和5年4月1日～令和6年3月31現在

お留守番医師制度について	1件	復職相談	0件
働くこと働き方について	0件	メンター制度について	1件
求人の問い合わせ	6件	同僚・医局の医師について	0件
保育施設について	2件	子育てについて	1件
支援制度についての問い合わせ	0件	社会保障等について	0件
ネットワークづくり	0件	マタニティ白衣・パンツ	3件

今年度は「求人」「マタニティ白衣貸出」に関する問い合わせの相談が多い状況でした。

● 復職支援(お留守番医師制度)

週1回(場合によっては月1回も可能)から復職したい方へ「お留守番医師制度」を設けています。「お留守番医師制度」では、家庭との両立や自身の健康などに不安を抱える方にも復職しやすい環境の協力機関(現在18医療機関)と連携しています。

在宅医療を開始したい医療機関にとっては代診医師の確保に繋がり、地域住民にとっては、かかりつけ医の訪問診療を受けることが可能になるwin-win-winの相互システムです。

診療所の先生方
訪問診療時間に「お留守番Dr」システムを利用してみませんか？

かかりつけの患者さんの訪問診療をお断りされたことはありませんか？
訪問診療に割く時間がないし、
ましてやもう一人医師を雇う経済的な余裕なんて・・・

解決できます

長年培われた先生と患者さんの関係をそのまま継続し、
患者さんの自宅に赴く訪問診療に取り組まれては
いかがでしょうか？

貴院の外来診療に協力してみようと思っている医師に、
医療機関の情報を開示し、まずは体験の機会を得て頂く
システムです。
条件が合えば外来診療の協力が繋がればと思います。

県下各地域で何ったお話を元に、在宅医療へ取り組む医師への応援団として、
この事業を企画しました。
県内どこへでも、詳しい説明に参ります。地域の先生方にもお声がけいただければ幸いです。

お問い合わせ：熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター内）
TEL:096-373-5795
メールアドレス：k-joseishishi@kumamoto-u.ac.jp
復職支援コーディネーター 原田 淳子

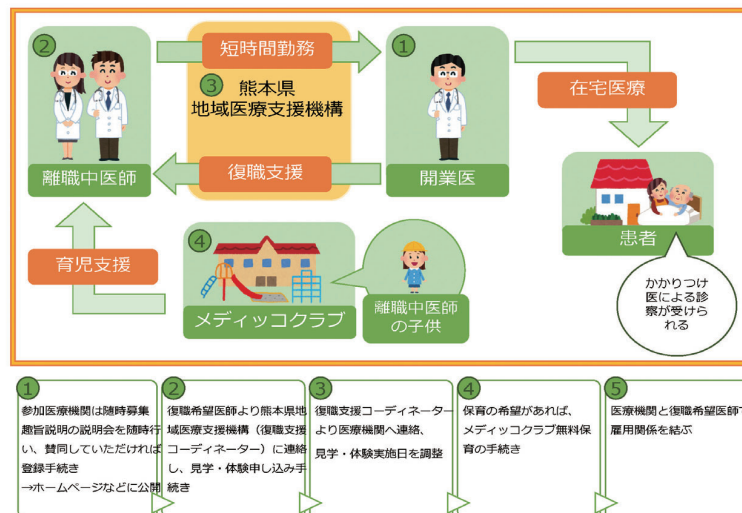
● お留守番医師制度に加入している医療機関

熊本市中央区	明午橋内科クリニック
熊本市南区	土井内科クリニック
熊本市南区	御幸病院
熊本市北区	清藤クリニック
熊本市北区	なかむらファミリークリニック
熊本市北区	まえだクリニック
荒尾市	西原クリニック
玉名市	ひがし成人・循環器内科クリニック
菊池市	菊池郡市医師会立病院
菊池市	宮本内科クリニック
阿蘇郡	阿蘇立野病院
上益城郡	谷田病院
上益城郡	山地外科胃腸科医院
上益城郡	益城なかぞのクリニック
宇土市	宇土中央クリニック
宇城市	済生会みすみ病院
宇城市	中村医院
水俣市	山田クリニック

(2024年3月31日時点)

熊本県女性医師キャリア支援センターの復職支援コーディネーターが復職希望者の体験申込みを受け在宅医療を開始したいドクターと繋ぎ、体験日を決めます。体験が上手くいけば当事者同士で3か月更新の契約を結びます。この制度で勤務中には、体験時のみ熊本市医師会保育所「メディッククラブ」が無料で利用できます。

今年度のお留守番医師制度の体験者はありませんでしたが、継続されていた2名のうち1名の医師が終了され、子育てをしながら医療機関に勤務しておられます。平成28年度開始からの利用者は体験のみも合わせて7名です。



● マタニティ白衣・マタニティパンツの貸出しサービス

熊本県女性医師キャリア支援センターでは、熊本県内に在住の妊娠中の医師にマタニティ白衣・パンツを無料で貸出ししています。

マタニティ白衣 マタニティパンツ 貸し出しを しています。

熊本県女性医師キャリア支援センターでは、
妊娠中の医師にマタニティ白衣と
マタニティパンツの貸し出しをしています。
貸し出しの対象は熊本県内に在住の
妊娠中の医師で、
非常勤医師や研修医もOKです。

体型の変化に対応
動きやすさを重視
すっきりとした
シルエット

詳しくは裏面を
ご覧ください。

熊本県女性医師キャリア支援センター
Kumamoto career support center for women doctors

マタニティ白衣について

- ✓ S・M・L、パンツのサイズはM・Lがあります。（当センターで試着ができます。）
- ✓ 胸もと、腰もとのアジャスターで調整ができます。



サイズ	着丈	バスト	肩幅	袖丈
S	90	112	38	51
M	95	116	39	51
L	100	120	40	51

マタニティパンツについて

- ✓ パンツのサイズはM・Lがあります。（当センターで試着ができます。）
- ✓ ウエストのアジャスターで調整ができます。



サイズ	腰囲	ヒップ	股上	股下
M	85~100	102	27	68
L	84~109	108	30	78

- 白衣の腕と
ポケット・
パンツの
刺繍
- ▶ 熊本県女性医師キャリア支援センター シンボルマーク
女性医師も復職がうまくいってV、現場の医師も助かってV。
お互いのVとVが合わさってW。
Win Winの関係のWと、Woman doctorのWを表現しています。
 - ▶ 熊本県医療人キャリアサポート CLOVERの会 シンボルマーク
“地域 (aree) を愛 (love) で満たして個々のキャリア (career) を”

令和5年度は新たにLサイズの白衣、パンツを6着ずつ製作し、白衣はS、M、Lサイズ、パンツはM、Lサイズを揃え、より多くの方が快適に利用できるようにしました。

これまでに利用された方からは、「お腹が大きくてもボタンをとめて白衣が着られたのが一番良かった。外来の時もありお腹が目立たなかったようでした。」と好評を得ています。

今年度は熊本市外にお住まいの医師を含め3名が貸出を受けておられます。県内どこにお住まいの医師でも利用することができます(送料は利用者負担)ので、サービスの周知を図り、是非多くの医師にご利用いただきたいと思います。

(4) 県内外の医師、医学生等からの相談対応及び求人に関する取り組み

① 県内外の医師、医学生等からの相談窓口の設置、面談対応

本機構(地域医療支援センター)に相談窓口を設置。貸与制度の内容や諸手続き、キャリア形成と義務履行の両立等に関して、貸与学生や貸与医師がいつでも相談できる窓口体制を整えています。

今年度、相談窓口には、貸与医師を中心に、主としてメールにより、育児休業に関すること、傷病による医師業務従事の中止や再開に関すること、第2及び第3グループに勤務する貸与医師の週1回の勤務先以外の病院での研修に関すること、婚姻に伴う氏名(姓)の変更に關すること等についての質問や相談があり、相談や質問内容によっては、県医療政策課とも連携を図りながら、それぞれ適切に対処しました。

また、支援機構のホームページ上に、熊本県が開設している医師の求人情報サイト「熊本地域医療ステーション」のリンクを張り、求人情報の提供を行っています。

② 熊本県地域臨床実習支援制度の実施

医師を目指して県外の大学(医学部)で学ぶ学生が、県内の医療機関で実施する臨床実習等を支援し、将来の医師偏在の是正や医師不足の解消につなげることを目的とした本制度(肥後ふるさと医学生実習支援事業)については、新型コロナウイルス感染症の影響により3年にわたる休止を余儀なくされていましたが、今年度は4年ぶりに事業を再開し、令和6年3月現在までに1名の利用がありました。

- ・対象者：
県外大学に在学中の地域医療に関心を有する医学部生
- ・募集人数：5名以内(期間中)
- ・実施期間：2023年6月～2024年2月まで
- ・実習期間：原則として7日間以内(最低でも2日以上)
- ・実習内容：診療参加、診療見学等
- ・実習先施設：知事指定病院のうち協力を得られた26病院

くまもとの地域医療は、覗いてみらんね？

くまもとの地域医療の現状を学びたい熊本県出身の医学部生や将来、くまもとの医療従事者を考えている医学部生を対象に、地域医療を学ぶ場所の提供、実習のための費用の支援を行っています。
(※実習費あり)

対象者	熊本県外の大学に在学中の地域医療に関心を有する医学部生
募集人数	年間 5名以内
実施期間	2023年6月～2024年2月まで(予定)
実習期間	原則として7日間以内(最低でも2日以上)
実習内容	診療参加、診療見学等
実習先	熊本市内を除く県下26の公的医療機関(裏面一覧参照)
お申込み先	熊本地域医療支援機構ホームページを参照のうえ、参加希望日の20日前までにお申し込みください。

詳細は熊本県地域医療支援機構へお問い合わせください。
ホームページ(右QRコード)をからもご確認いただけます。

熊本地域医療支援機構(熊本大学附属 地域医療支援センター内)
☎ 096-373-5627 m.chiki-ryo@kumamoto-u.ac.jp

③ 県内外医師へのリクルート活動

地域医療を担う総合診療医の確保につなげることを目的に、令和5年5月に愛知県で開催された「第14回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会」に専任医師及び専従職員(コーディネーター)が参加し、熊本大学病院総合診療科のブースを出展しました。

大学病院の総合診療科の医師が支援先の病院で地域医療に奮闘する姿を紹介した動画を上映したほか、熊本大学総合診療科のプログラム紹介のポスターを掲示し、本機構の取り組みを紹介するために、広報誌「COCODE J」を展示、配布しました。

また、同学術大会のポスターセッションには、本県から6人の貸与学生が参加し、「熊本大学の地域医療ゼミの取り組み」など2つの取り組みについて、学生自らが発表を行いました。



(5) その他、機構の目的を達成するために必要な取り組み

① 熊本県地域医療支援機構理事会の運営

令和6年2月21日に、第15回熊本県地域医療支援機構理事会を実施しました。
以下の議題について審議され、いずれも異議なく承認されました。

【議題】

- (1) 令和5年度(2023年度)事業実績について
- (2) 令和6年度(2024年度)事業計画案について
- (3) 令和6年度貸与医師派遣計画(勤務先)案について

【報告事項】

地域医療連携ネットワーク事業について

② 熊本大学病院総合診療科及び地域医療・総合診療実践学寄附講座、同大学病院総合臨床研修センター、熊本大学医学部、熊本県へき地医療支援機構との連携

医師が不足する病院への診療支援、地域医療ゼミの開講、熊本県地域医療支援関係機構等連絡会議を開催のほか、支援機構の職員が、熊本県医療勤務環境改善支援センターが開催する運営協議会等の会議にオブザーバーとして参加し、県内病院の勤務環境の改善状況や労働行政に関する情報等を共有し、相互連携に努めました。

③ 地域医療に関する周知啓発

● 熊本県地域医療支援機構講演会

【令和5年度熊本県地域医療支援講演会】

日時 2024年2月9日(金) 18:00～
会場 熊本大学医学総合研究棟3階講習室(※対面とリモート併用によるハイブリッド方式)
講師 青森県立保健大学大学院健康科学研究科 特任教授 大西 基喜 先生
演題 青森県における保健医療の課題解決に向けた取り組み

人口減少・高齢化の進展、労働人口の減少に伴うマンパワーの制約等、地域医療を取り巻く環境は相変わらず厳しい面があり、今後、持続可能な医療提供体制を維持していくためには地域医療に関わる全ての当事者が連携し、中長期的な観点に立った取り組みを進めていくことが求められています。講師としてお招きした大西先生は本県と同様に地域医療を担う医師不足や人口減少、高齢化の進展という状況に加え、厳しい自然・地理条件という様々な課題を抱える青森県において、地域医療に応えるべく、青森県立保健大学で教鞭をとり次世代の医療人育成に取り組まれるとともに、青森県健康福祉政策課で保健医療政策推進監としてこれらの課題改善に尽力されています。本県におけるこれからの地域医療提供体制の在り方や、課題改善について関係者全体で考える機会とするために講演会を実施しました。

講演会には、リモート併用のハイブリッド方式で行い、対面と合わせて74名の方にご参加いただき、講演後のアンケートでは、聴講者の93%が「大満足」又は「満足」という結果となり、有意義な講演会となりました。



WhyGP?

熊本大学病院 地域医療支援センター 特任助教 高柳宏史先生(右)
熊本大学医学部医学科4年 西山 麗さん(中央)
熊本大学医学部医学科4年 山口 真子さん(左)

熊本大学医学部医学科4年 山口 真子さん(左)

**若手医師×学生二人座談会
総合診療医のリアルを直撃
「教えて先輩！」**

日々、学びを深める医学生が抱える疑問や不安を、実際に総合診療医として活躍している若手医師に直撃する人気企画！
今回は熊本大学病院地域医療支援センター特任助教の高柳宏史先生に、学生二人が総合診療医の魅力などについて聞きました。

地域でのケアの難しさを目的に、家庭医へ
高柳先生：皆さん、こんにちは。熊本大学病院に勤務を、家庭医専門医、そして指導医として、若手を指導しています。よろしくお話しします。
西山：よろしくお話しします。早速質問ですが、先生が総合診療医を目指されたきっかけを教えてください。
高柳先生：家庭医としての熊本県立医科大学の聴講生として、初年研修2年目の夏に福岡で開催されたサマーフォーラムに参加したことがきっかけです。そこで、家庭医という専門領域があることを知りました。また、後援研修で、もともと自分のコトローリングが強い方や米田先生の方、家庭医研修や心療内科で働いてくることが多くありました。家庭医として地域で患者さんのケアをしつかりすれば、3次の救急外来に搬送されるようなイベントが起きることを防げるし、家庭医が重要だと感じるようになりました。
西山：どうして指導医を目指されたのですか？
高柳先生：日本での家庭医の歴史は深く、大学の講義でも学ぶ機会が少ないと思います。総合診療医は、自分が出たかった医師像そのものだという学生さんも、学ぶ機会が少ないことで、違う道に進んでしまわれるケースも多く、教える人が必要だと思ったからです。

横断的に診る経験を積むことが大切
山口：外科などで特長のある技術をもつてから総合診療医の道に進んだ方がいいのか、すぐに総合診療医として経験を積み重ねる方がいいのか悩んでいます。

高柳先生：私は、総合診療に最初から進んでいいと考えています。総合診療以外の専門領域では、薬品、分子細胞など、横断的に診ていくことで、病状の解明や治療方法を考えます。総合診療というのは、分ける視点を持ちつつも、本人や家族、地域などをトータルにみていくという考え方です。別の領域に進んで横断的な経験を積むと、横断的に診ることに不安や抵抗を感じるかもしれません。最初から総合診療医を目指すことで、横断的に診ることを知り、その経験を積んだ方がいいと思います。

一日のスケジュールを教えてください
山口：先生、一日のスケジュールを教えてください。
高柳先生：曜日によって異なります。たとえば昨日は、御所浦診療所に診療支援に行きました。7時30分の新幹線で水俣まで行って、その後船に乗って、9時ぐらいに御所浦診療所に着いて外来をします。午後の外来が終わる17時までは診療所にて、18時半くらいに帰宅し、23時には寝て休めます。今日は大学病院勤務でした。8時から17時まで救急外来を担当しました。その間の時間に横断的な研修やメールの返信などをしました。
山口：出社、育児とキャリアとの両立がなかなか難しいですね。
高柳先生：最近では地方でも働き方改革が進み、タスクシェアリングなどにより医師の負担が軽減される傾向にあります。また、旦那さんや両親がサポートを受けながら地域で出産、子育てをしながらか、働いている女性の方も増えています。

「いい医療面接」ってどのようなものですか？
山口：総合診療の現場で、やりがいを感じたエピソードを教えてください。

3 地域医療・総合診療実践学寄附講座

1. 活動概要

「地域医療・総合診療実践学寄附講座」は、平成27年度末に廃止された「地域医療システム学寄附講座」の後継として、平成28年4月1日に設置期間3年の講座として設置されました。その後、本講座のそれまでの実績を踏まえ、本県における医師の地域偏在の解消、地域医療の充実、地域医療に従事する医師育成のためには、引き続き取り組みの継続が必要との熊本県(寄付者)の判断から、平成31年4月及び令和4年4月にそれぞれ3年間の延長がなされており、令和5年度は3期目の中間年度となりました。

本講座は、設置目的でもある地域医療を担う医師の養成を目指して、これまでの医師循環システムに関する調査研究や地域医療実習教育に関する調査研究等の成果を踏まえ、「医学生や若手医師への卒前からの一貫した地域医療教育」、「総合診療医の育成」、「地域医療実践教育拠点の運営」など、より実践的な取り組みを進めて参りました。

令和5年度においても、熊本大学医学部医学科の学生(熊本県医師修学資金貸与学生を含む。)や若手医師に対して、卒前からの一貫した地域医療教育を通した地域医療マインドの涵養に取り組むとともに、今後、本県の地域医療への貢献が期待される総合診療専門医の育成に向けて、県内の公的病院等の連携を進めるに当たっての中心的な役割を担いました。また、総合診療専門医の育成のために県北及び県南地域に設置している教育拠点において、地域の医療機関に対する積極的な診療支援を行いました。

【主な活動内容】

- I 調査研究
- II 教育活動
 - ・卒前教育(カリキュラム外)
 - ・卒前教育(カリキュラム内)
 - ・卒後教育
 - ・専門資格取得後のキャリア支援
- III 教育拠点への支援
- IV 地域医療支援

【スタッフ】

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

荒木 智 特任准教授／総合診療科
佐土原 道人 特任助教／総合診療科
北村 泰斗 特任助教／総合診療科
山口 香 事務補佐員
山並 美緒 事務補佐員

くまもと県北教育拠点（くまもと県北病院）

田宮 貞宏 総合診療科
小山 耕太 熊本大学非常勤講師／総合診療科
中村 孝典 特任助教／総合診療科

河浦教育拠点（天草市立河浦病院）

鶴田 真三 特任助教／総合診療科

熊本大学病院 総合診療科 医局員

武末 真希子 松田 圭史 平賀 円
久保崎 順子 空田 健一 永田 洋介
早川 香菜美

専攻医（熊本大学総合診療専門研修プログラム）

下地 徹 本田 宏介 松岡 隼平
西富 友哉 足立 瑛彦 田添 英典

2. 活動報告

(1) 調査研究

● 地域医療実習教育に関する調査研究

修学資金貸与による義務年限を有する学生の将来のキャリア支援と定着要因の解析のために、地域医療特別実習の教育的効果を見るためのアンケートを例年実施しています。結果は、令和5年(2023年)10月の世界家庭医機構カンファレンス(WONCA)で発表を行いました。

なお、令和5年(2023年度)の地域医療特別実習の結果については、令和6年(2024年)5月の米国総合内科学会で発表の予定であり、また、参加した学生も参加者の立場からの経験を令和6年(2024年)6月の日本プライマリ・ケア連合学会で発表予定です。

● 総合診療専門医普及に関する調査研究

本講座では、日本専門医機構の基本領域専門医である総合診療専門医の育成を担っています。また、医師の働き方改革の解決策の一つのモデルを米国のホスピタリスト(病院総合医)に求めており、米国のホスピタリスト(病院総合医)にインタビューしたデータを基に、日米の医療制度、労働形態の違いを質的に解析したものを、令和5年(2023年)5月に米国総合内科学会で発表を行いました。

総合診療専門医のアカデミックな活動の支援としてこれまで、令和元年(2019年)には兵庫医科大学臨床疫学共催で臨床研修ワークショップを、令和3年(2021年)には、研究倫理ワークショップを開催してきましたが、これらの活動の一環として、令和5年度(2023年度)から、AMED(日本医療研究開発機構)の研究公正高度化モデル開発支援事業の「臨床研究者による活用を目指した臨床研究技能と研究公正の統合学修の実用化」の分担研究開発を行っています。

● 医療機関の勤務環境に関する調査研究

研修医が地域医療研修において困難を克己して安全な研修生活を送るためのキャリア支援につなげるために、研修医のレジリエンスと地域医療研修との関係について科研費により令和元年(2019年)から令和3年(2021年)までアンケート調査による縦断研究を行っており、現在論文化を進めています。

● 教育拠点での教育効果についての検証

熊本大学病院総合診療科、各教育拠点が、総合診療専門研修プログラムの基幹施設、連携施設という関係で専門研修プログラムを運用しています。また、指導教員と総合診療専攻医が初期臨床研修医、地域医療・総合診療に係る学生実習の指導も行っています。

くまもと県北教育拠点については、2名の総合診療専攻医が勤務し、令和3年(2021年)に設置された天草市立河浦病院は、令和3年(2021年)10月からは総合診療科の1名の専攻医が配属されています。令和5年度(2023年度)においても、レジデントデイなどの定期的な集まりなどにおいて、教育効果についてヒアリングし、プログラム管理委員会で諮問して、プログラムの教育効果の検証と改善に取り組みました。

(2) 教育活動

① 卒前教育(カリキュラム外)

● 修学資金貸与学生の支援

将来、地域の病院で勤務することとなる貸与学生に対して、一人一人の状況に応じた助言や個人の相談に対応するため、年度当初(6月)に、地域医療支援機構と連携して当寄附講座教員が、熊本県医師修学資金貸与学生35名(既卒者1名を含む)の面談を実施(県外大学在学の2名の貸与学生を除き、全員対面形式で実施)しました。

面談においては、生活状況や将来の希望等について聞き取り、各学生の状況に応じた生活面、学習面

等に関して指導、助言を行いました。特に6年生に対しては、将来のキャリアプラン等を聞き取り、進路について義務の履行とキャリア形成の両立に関して個別具体的なアドバイスを行いました。

● 地域医療ゼミ

地域医療ゼミは、熊本県医師修学資金貸与学生及び熊本県出身の自治医科大学医学部医学科医学生を主な対象に実施しており、令和5年度は11回開催しました。6月は「多職種連携」を学ぶために、熊本大学薬学部・大学院生命科学研究部臨床薬理学分野准教授の近藤悠希先生を講師に招き開催しました。10月は「コミュニケーション」をテーマに、まどかファミリークリニック院長の加藤光樹先生を外部講師として招聘し開催しました。11月は、令和5年度から開講した地域医療総合演習で学んでいる地域卒5年生が講師を担当し、「地域卒学生のキャリア形成」の一助となるワークショップを開催しました。12月は、自治医科大学の学生が担当し、大学間交流を深めるようオンライン上でグループに分かれて活発な意見交換がなされました。令和6年1月は熊本県医師会主催の医学生・研修医をサポートするための会とのジョイント開催となりました。内容は「医師のキャリアとワークライフバランスーロールモデルを探そう!」と題して、熊本県内の女性医師の先生方にご講演いただきました。

● 夏季地域医療特別実習

地域医療特別実習は、熊本県医師修学資金を貸与されている学生及び熊本県出身自治医科大生を対象として毎年県内各地で開催しています。当実習は、これから地域医療に従事することが予定されている学生が地域の行政関係者及び医療・福祉関係者等に対する聞き取りを通して地域の問題点を探り出すとともに、自らが見聞して体験することで、地域を知り、地域との関係性を身近にする中で、地域医療に前向きに取り組んでいく意欲を醸成することを主な目的としています。

8月に一泊二日の日程で天草上島・御所浦地域において実施した夏季地域医療特別実習には、20名の貸与学生及び自治医科大生が参加しました。参加者を4つのグループに分け、2グループずつが湯島(上天草市)と御所浦島(天草市)にある診療所の見学、周辺地域のフィールドワークを行い、地域医療の現場を体感しました。また、上天草市役所では市の担当者から地域の保健・福祉等の現状や課題について、上天草総合病院では病院長から地域医療の現状や課題等について講話を聴講するとともに、病院内の見学に合わせて、隣接する看護専門学校の見学も行いました。実習を締めくくる発表会では、学生らが実習で学んだ成果等をグループごとに発表、意見交換等を行い、学生にとって地域医療の現場を多角的に学ぶ充実した実習となりました。

● 冬季地域医療特別実習

12月に一泊二日の日程で阿蘇地域において実施した冬季地域医療特別実習には、大学の試験等のために夏季地域医療特別実習に参加できなかった12名の貸与学生が参加しました。阿蘇市役所の担当者から阿蘇市における保健や介護の現状・課題について講話を聴講後、阿蘇医療センター、小国公立病院をはじめ、へき地の診療所や熊本地震の影響を受けた立野病院など6つの医療機関と2つの高齢者施設を訪問し、施設の見学や意見交換を行い、地域医療や福祉等の地域の厳しい現場を体感しました。各医療機関や施設では、高い志をもってそれぞれの職務に邁進されている病院長や施設長等から、自身の経験や思い等も交えた熱意のこもった講話があり、学生にとって多くの学びを得る充実した実習となりました。

② 卒前教育(カリキュラム内)

熊本大学医学部のカリキュラムとして、医学科4年次学生に対して総合診療学、医学科5年次学生に対して選択科目として地域医療総合演習、医学科5・6年次学生に対する特別臨床実習(地域医療)(総合診療科)を担当しました。

● 特別臨床実習(地域医療)

現在、5学年の6月から6学年の9月までの全15ターム(1タームは3週間)で実施(第1～13ターム必須、第14、15タームは選択)されている特別臨床実習において、当講座は、平成26年度から地域医療を提供しています。令和5年度は、第13タームまで本講座が担当し、14ターム以降並びに、新5年生の1タームからは、医学部連携教育センターが担当することとなりました。

● 特別臨床実習(総合診療科)

令和5年度の総合診療科の特別臨床実習は、大学病院、くまもと県北教育拠点及び河浦教育拠点の3か所で行いました。令和5年度は5年生、6年生合わせて、延べ44人の学生を受け入れ、臨床実習を実施しました。

● 地域医療総合演習

令和5年度からの新たな取り組みとして、5年生に対して選択科目である地域医療総合演習、全8コマを開講しました。6名の学生が履修登録をしました。地域医療総合演習では、地域医療に従事する際にもとめられる医療者教育を実践するための知識・能力の獲得を目的としています。6コマかけて、教育指導を実践するための基礎知識や準備を行いました。11月の地域医療ゼミでは実際に講師となって、ゼミ受講生に対して教育実践を行いました。今年度は、「キャリアプランニング」をテーマに設定して、参加者のキャリア形成を促進するように個人とグループワークを行いました。最後の1コマは、受講生の事前・事後アンケートの結果の考察とともに、教育実践の内省的振り返りをもとにしたカリキュラム評価を行いました。

● 令和5年度の地域医療総合演習の1年間の実施状況

年月日	内容	担当教員
4月13日(木)	教育計画書作成のための基礎知識	高柳 宏史
5月11日(木)	事前アンケート作成 *5月18日 事前アンケート実施	高柳 宏史
6月8日(木)	事前アンケート結果分析・テーマ決定	高柳 宏史
7月13日(木)	教育方略についての基礎知識・役割分担・準備	高柳 宏史
9月14日(木)	教育評価についての基礎知識・役割分担・準備	高柳 宏史
10月12日(木)	実施にむけての準備・事後アンケート作成	高柳 宏史
11月16日(木)	地域医療ゼミで実施 事後アンケート実施	高柳 宏史
12月14日(木)	カリキュラム評価 事後アンケート集計・分析・考察・振り返り	高柳 宏史

● 総合診療学

4年次の学生に対して、全10コマの講義を下記のとおり実施しました。

● 令和5年度の総合診療学の講義の実施状況

日時	科目	内容	担当教員
4月4日	総合診療学概論1	総論	松井 邦彦
4月11日	総合診療学概論2	EBM、診療ガイドライン	荒木 智
4月18日	総合診療学概論3	臨床推論	佐土原 道人
4月25日	総合診療学概論4	身体診察	佐土原 道人
5月9日	総合診療学概論5	家庭医療学1	高柳 宏史
5月16日	総合診療学概論6	家庭医療学2	高柳 宏史
5月23日	総合診療学概論7	病院総合診療	小山 耕太
5月30日	総合診療学概論8	高齢者ケア、地域包括ケア	鶴田 真三
6月6日	臨床推論演習1	体重減少	北村 泰斗
6月13日	臨床推論演習2	倦怠感	中村 孝典

● その他の講義等

- その他、以下の授業を担当しました。
- ・臨床実習入門医療面接(4学年)
 - ・公衆衛生学(4学年)

③ 卒後教育

● 地域医療に従事する修学資金貸与医師への支援

地域医療支援機構と連携して、地域医療に従事する修学資金貸与医師60人全員について対面で面談を実施し、本人の専門医としてのキャリア形成と義務履行の両立が図られるように、一人一人の実状に沿ったアドバイスを行いました。

令和5年度の貸与医師の勤務先については、おおよそ地域の医療機関での勤務が始まる医師4年目以降の貸与医師41名中35名が知事指定病院での勤務となり、うち年度中途での勤務先変更も含めて18名が、第2、第3グループの病院等で勤務することとなりました。

● 初期臨床研修医に対する指導

熊大病院群初期臨床研修プログラムで総合診療科を選択した初期臨床研修医1人に対し、内科分野および外来研修の教育指導を行いました。

● 専攻医に対する指導

熊本大学総合診療専門研修プログラムでは、令和4年度に本プログラムを修了した専攻医1人が令和5年度の総合診療専門医の資格試験に合格しました。令和5年度においては、6名の専攻医がそれぞれの基幹施設および連携施設で勤務を行いました。本寄附講座においては、地域で必要とされている総合診療医の育成に向けて、後述の合同カンファレンスやレジデントデイ等の取り組みをはじめ、様々な機会を通じて専攻医に対して必要な指導を行いました。

【合同カンファレンス】

● 研修の支援・指導の充実を図るため、テレビ会議システムを活用した「合同Webカンファレンス」を4回開催し、総合診療に関する困難事例の情報共有や、専攻医の抱える症例の共有化を図るとともに、システムを活用した遠隔指導により、適宜必要な助言を行いました。また、同システムを通じて、専攻医等が経験した症例・事例の発表を各病院へ配信しました。

【レジデントデイの開催】

● 当寄附講座では、専攻医の研修修了要件であるポートフォリオ(経験省察験修記録)の作成指導なども行っており、4回のレジデントデイを開催し、専門研修の進捗状況の確認を図り、よりきめ細かい指導を行うとともに、プログラム修了に向けてさらに丁寧な指導に心がけました。

● 専門医資格取得後のキャリア支援

本講座では、専門医資格取得後も、熊本大学病院総合診療科として様々なキャリア支援を実施しています。大学病院という診療・教育・研究機関の特色を活かし、個別のニーズに合わせ、臨床経験だけでなくアカデミックなキャリアも含め、様々な研鑽を積むことができることが特徴で、総合診療専門医取得後の5年間は、指導医取得に向けてこれまでも増して重要な時期であるとの考えのもと、様々な指導、支援を実施しています。

令和5年度においても、熊本県内に多数存在する連携機関の協力のもと、専門医資格取得後、変化する各人の様々なニーズに即し、総合診療領域外、あるいは関連する領域についての研修を支援しました。1名の専門研修修了者が、緩和ケアの研修を行いました。

また、本講座においては、教員が地域支援先でカンファレンスや相談に応じるほか、対象の医師に対して英語論文の執筆支援も行ってきました。

さらに、熊本大学の大学院へ進学し、医学博士の修得を目指す者への支援も実施。それまでの臨床経験の中で得た様々な疑問の解決を目指し、各人の興味に応じた臨床研究を推進し、学位の取得に向けての指導を行っています。令和4年度からは、社会人大学院学生として、3名が博士課程に在籍しています。

● 総合診療セミナーの開催

本講座では、若手医師に総合診療の魅力を伝えながら総合診療のプログラムを周知し、熊本大学病院の総合診療の知名度向上を図るとともに、熊本県内及び九州全域において総合診療医の連携強化を図ることを目的とした勉強会である「総合診療セミナー」を令和2年度から開催しています。

令和5年度は、総合診療に関心のある若手医師、学生等の総合診療への理解がより深まるよう、グラウンドラウンドも含めて、次のとおり開催しました。

【総合診療セミナー】

□ 9月20日「もう一度“DNA R”を勉強しなおそう！」

講師：熊本大学病院地域診療・総合診療実践学寄附講座（くまもと県北教育拠点）

特任助教 中村孝典 先生

【総合診療グラウンドラウンド】

□ 10月19日「プライマリ・ケア外来での聴き方ーWellbeing迫る医療面接ー」

講師：まどかファミリークリニック 院長 加藤光樹 先生

□ 12月21日「アンゴラ共和国からの報告：総合診療医の軌跡」

講師：外務省在アンゴラ日本大使館参事官兼医務官 高橋 理 先生

● 総合診療医育成のためのPR活動

令和3年3月に新たに設置された総合診療科について、総合診療科の活動状況等の紹介を通して、総合診療の魅力、必要性、重要性等を医療関係者のみならず広く一般に情報発信し、理解を深めてもらうため、総合診療科のホームページを新たに開設し、当寄附講座ホームページとリンクして、より広く関係者に総合診療科の活動をPRしました。

● 総合診療特別研修プログラムの提示

令和2年度、新しいキャリア支援策として、専門研修に進む卒後3年目以降の貸与医師等に対しては、専門研修プログラム従事前に知事指定病院の第2グループの病院で総合診療「特別研修プログラム」に参加して義務の償還を優先することを選択できる体制を構築。「熊本県医師修学資金貸与医師キャリア形成プログラム」の更新に当たって、4年度からキャリア支援策の一つとして同プログラムに掲載し、受け入れできる体制を作っています。

（3）教育拠点への支援

① 設置目的

地域医療に貢献できる優秀な医師の養成を円滑に行いつつ、地域における診療活動を通じた教育・研究を推進することで熊本県内における地域医療の再生に資することを目的に地域医療・総合診療実践学寄附講座教育拠点を設置しています。

令和3年4月から河浦教育拠点を設置するとともに、「公立玉名中央病院」が組織を改編して「くまもと県北病院」となったことで、同年10月から玉名教育拠点に変えて新たに「くまもと県北教育拠点」を設置しました。それぞれの教育拠点には、当寄附講座から教員を配置して、地域の施設において求められる医療の提供を行いながら、専門研修医、初期臨床研修医、卒前の医学生に対する教育、さらに研究を実施する施設として、以下の役割を担っています。

② 役割

- i 総合診療専門医の養成
- ii 熊本大学病院の臨床研修協力型病院として臨床研修医の教育
- iii 自治医科大卒医師（自治医）の指導・教育
- iv 総診特別プログラムに従事する医師の指導
- v 義務償還のために地域の施設で総合診療医として勤務する他の診療領域の修学資金貸与医師の指導
- vi 医学部学生の教育（臨床実習の受入れ）
- vii 病院での臨床に即した研究、地域医療のあり方、教育や人材育成に関する研究、調査

③ 教育活動

- ・くまもと県北教育拠点では、熊本大学医学部学生の総合診療科の特別臨床実習、地域医療特別実習の受入れを行うとともに、基幹型臨床研修施設としての臨床研修医の受入れと共に熊本大学病院等の協力医療施設として臨床研修医の受入れも行いました。
- ・また、熊本大学病院総合診療専門研修プログラムの専攻医3人が、総合診療科の指導医の下に研修に従事しました。
- ・河浦教育拠点については、現在本講座の教員1人が常駐し、病院での日々の診療に従事しつつ、総合診療特別実習の学生を受け入れ、実習指導を担当しました。また、総合診療科の専攻医2人が、講座教員の指導を受けながら実地の業務に従事しました。
- ・天草教育拠点については、令和4年（2022年）に寄附講座教員が退職した後、後任の特任助教がいない状況が続いています。

（4）地域医療の支援

下表のとおり、河浦及び県北の教育拠点においては、それぞれ本講座から派遣された医師が、その他の医師が不足している地域の病院については講座所属の医師が、各病院に対する診療支援を行いました。

● 令和5年度における地域医療支援実績

医師名	支援先医療機関	支援内容
松井 邦彦	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
荒木 智	荒尾市立有明医療センター	非常勤 通年（週1回）
	天草中央総合病院	非常勤 通年（週1回）
佐土原 道人	小国公立病院	非常勤 通年（週1回）
	阿蘇医療センター	非常勤 通年（週1回）
北村 泰斗	くまもと県北病院	非常勤 通年（週1回）
	そよう病院	非常勤 通年（週1回）
鶴田 真三	河浦病院	常勤
中村 孝典	くまもと県北病院	常勤

※令和5年10月、荒尾市民病院から有明医療センターへ名称変更

このほか、熊本県地域医療支援機構／地域医療支援センターと連携し、本講座及びセンターに所属の医師が、大学病院において総合診療科の外来診療に対応するとともに、救急外来診療等も担当しました。

● 大学病院 総合診療外来担当医

月	火	水	木	金
荒木 智	松井 邦彦	高柳 宏史	佐土原 道人	北村 泰斗

4 教育拠点

くまもと県北教育拠点

1. 活動概要

くまもと県北教育拠点は2015年4月、公立玉名中央病院に地域医療の支援及び地域医療の実践教育を行うべく開設されました。2名の常駐寄附講座教員でのスタートでしたが、2021年3月、玉名地域保健医療センターと合併し、新たに「くまもと県北病院 くまもと県北教育拠点」として移転し、2024年3月現在、指導医4名、総合診療専門医研修の専攻医2名に加え、さらに地域医療・総合診療実践学寄附講座から人的サポートもあり、病院の診療支援および実践的な教育の提供を継続しています。

2023年卒後臨床研修プログラム研修医(基幹型1年次：4名、2年次：8名、協力型：計1名)特別臨床実習(クリニカル・クラークシップ)の「総合診療科」の受け入れも積極的に行っております。地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフは、医学生、初期研修医、専攻医とともに総合診療科として救急外来、一般外来、入院、在宅医療に取り組み、地域の医療を支援しつつ、実践的な教育を行っています。9年経過した現在までに、診療面については救急車不応受率4%を下回り、救急車受け入れ台数も3400台/年以上を維持(いずれも県北地域最高の成績)しております。結果、2023年度も基幹型研修医は比較的高いマッチ率を維持しております。

教育面については、タイ国のメーファールアン大学医学部との教育協力協定を更新し、日本では経験し難いCross border community medicine(国境を越えた地域医療)の研修を当院研修医が国際医療の枠組みで実践可能となりました。

研究面については、学会発表はもとより、くまもと県北病院卒後臨床研修医初となる、筆頭著者での英文誌へのケースレポート執筆も達成しました。くまもと県北教育拠点として、臨床・教育・研究を更に発展的に展開することが期待されます。言うまでもありませんが、当拠点は地域医療において円滑に発展し、行政並びに玉名郡市医師会とも引き続き協力し、常に前進する次第です。

2. 年間活動実績

月	日	行事
4	1	オリエンテーション
	3	メーファールアン大学医学部 教育協力協定更新
	3～18	同大学医学部生(5名) 地域医療実習実施
	14, 28	研修医症例カンファレンス
5	28	研修医振り返り
	1, 2	研修医振り返り
	12～26	研修医症例カンファレンス
6	13	マイレジナビ@「熊本城ホール」
	1, 2	研修医振り返り
7	9	研修医症例カンファレンス
	7, 14, 21	研修医症例カンファレンス
8	13	感染症講演会(大路 剛 先生、海老澤 先生)
	26	研修医振り返り
	4, 11	研修医症例カンファレンス
9	23, 25	研修医振り返り
	30	第3回熊本県Resident Web Seminar
10	8, 15, 22, 29	研修医症例カンファレンス
	16	有明地区研修医合同カンファレンス
11	6, 13, 20	研修医症例カンファレンス
	19, 20	研修医振り返り
12	10, 17	研修医症例カンファレンス
	16, 17	研修医振り返り
1	8	研修医症例カンファレンス
	21	膠原病内科、病理診断科合同カンファレンス
	12, 26	研修医症例カンファレンス
2	12, 26	阿蘇医療センター総合診療科合同症例カンファレンス
	10, 11, 12	研修医振り返り
3	9	阿蘇医療センター総合診療科合同症例カンファレンス
	9, 16	研修医症例カンファレンス
4	1, 15, 22	研修医症例カンファレンス
	8, 22	阿蘇医療センター総合診療科合同症例カンファレンス
	未定	初期臨床研修 修了式

3. 活動報告

(1) 教育活動

● 特別臨床実習

熊本大学医学部の1ターム3週間の特別臨床実習(総合診療科 クリニカル・クラークシップ)をくまもと県北教育拠点で受け入れています。本年度も各学生に入院患者の担当を割り当て、それぞれが日常診療業務に医療スタッフの一員として診療に参加し、診療の中から自らのクリニカルクエストョンを見出し、これに基づいた論文検索から担当患者への適応までを期間内で実践することとし、学習成果の発表を抄読会形式で実施し、評価の場としております。

また、教育協力協定を締結しているメーファールアン大学医学部学生5名の地域医療研修も受け入れ、日本の医療制度における地域医療を学ぶ機会を提供しました。この取り組みについては、実習生から医師としての役割のみならず、地域全体の健康維持の視点で、様々な役割を果たす職種としての新たな視野をえるいい機会になったとの評価を得ております。このことについては、2023年10月に開催されたWONCA(世界家庭医機構)国際学会で報告しております。

一方で、くまもと県北教育拠点責任者で総合診療科部長の小山先生が、教育拠点での成果を基に、2023年4月から熊本県医療政策課に熊本県へき地医療支援機構 専任担当官として着任されました。これに伴い、教育対象を県北地域から熊本県全土に広げ、特に自治医科大学医学部学生及び卒業医師の教育支援に取り組んでおります。今後、熊本県地域医療発展のため、多くの視点、広い視野、俯瞰して見る/診る視点の高さを追求し続け、多くの医学生が満足できる地域での医学教育の環境、質の向上に努めたいと思います。

「ゆっくりだけど、確実に前進」



メーファールアン大学医学部 教育協力協定調印



メーファールアン大学医学部 地域医療実習生

くまもと県北教育拠点における週間スケジュール					
1-2週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン 研修	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー			
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or 緩和ケア回診 (不定期) or 病棟研修	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾンカンファ		病棟研修	病棟研修
16:30	新患 カンファレンス	病棟研修	病棟研修		皮膚科 合同カンファ
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

3 週					
	月	火	水	木	金
7:30			プライマリケア レクチャー	プレゼン 研修	
8:00	救急合同 カンファ	モーニング レクチャー			
8:30	医局ミーティング/総合診療科入院患者棟回診				
9:00	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修	外来研修 or 訪問看護	外来研修
13:30	外来レビュー	外来レビュー	訪問診療 or 緩和ケア回診 (不定期) or 病棟研修	外来レビュー/ 各種講義	外来レビュー
15:00	病棟研修	リエゾンカンファ		病棟研修	病棟研修
16:30	新患 カンファレンス	病棟研修	病棟研修	TMEC	皮膚科 合同カンファ
17:00	振り返り				週間振り返り
17:30	自己研修				

プライマリケアレクチャー	熊本県地域医療支援機構で受講可能なオンラインレクチャー
モーニングレクチャー	臨床のみならず、地域医療に関するレクチャー
リエゾンカンファ	総合診療科入院患者の退院に向けての目標設定、鑑長調整を多職種で検討するカンファレンス
TMEC	クリニカルクラークシップ医学生による担当症例についての発表会

● 初期臨床研修(総合診療科研修)

2023年度はくまもと県北病院の基幹型研修プログラムに4名の研修医がマッチし、基幹型2年次8名と国立熊本医療センタープライマリケアコースの協力型として1名、計14名の初期臨床研修医(研修医)を受け入れました。くまもと県北教育拠点は、総合診療科研修および地域医療研修を担当し、指導を行いました。

まず総合診療科研修で研修医は、外来・入院・訪問診療を研修し、自らが診療の始めから終わりまでを一貫して実践し、研修医中心の参加型研修を実践しました。研修医は患者を「主治医」として担当し、指導医との連携の中で中心的な役割を担います。この事で、研修医からは「自分の患者」という意識が芽生え、責任感と医師になったことの実感が得られたとの評価を得ています。

結果、2023年度の基幹型卒後臨床研修医は6名マッチを達成しました。

● モーニングレクチャー

モーニングレクチャーとは…

- ・各診療科、部署のエキスパートから実践に即した知識や技術を学ぶ場です。写真は、眼科医による眼底鏡の使い方指導の風景です。
- ・指導は医師に限らず、様々な職種のスタッフに協力していただき、幅広いテーマの研修が可能となっています。



● 講演会・セミナー

コロナ感染症が5類感染症に社会的には移行され、多くの学会が対面式に切り替わりました。これに伴い、「日本病院総合診療医学会九州地方会」「有明地区研修医合同カンファレンス」「日本プライマリ・ケア連合学会九州地方会」が現地開催され、初期研修2年次の水野航佑先生が症例発表を行いました。

● 総合診療専門医(専攻医)研修

くまもと県北教育拠点およびくまもと県北病院では、熊本大学病院 総合診療専門医研修プログラムの「総合診療Ⅱ」、「内科研修」、「小児科研修」および「救急研修」を実施しております。2023年4月から、本プログラム2期生で、家庭医療専門医の中村孝典先生が教育医長として着任されました。プログラム出身者ならではの専攻医目線の研修を実践が可能となり、新たな取り組みを模索しております。

教育拠点として、常に前進し続け、地域医療を担う新たな人材育成を今後も担っていく所存です。昨今話題の医師の働き方改革にも対応し、専攻医の身体的・精神的負担を軽減するシステムの構築と総合診療専門医研修プログラムへのリクルートは重要になっています。その様な中、2024年度からは1名の新しい専攻医を迎えることになり、今後の更なる発展が期待されます。

(2) 診療

くまもと県北病院で、総合診療科での外来および入院診療を行っています。また、他診療科からの相談(院内コンサルテーション)や救急診療にも携わりました。

総合診療科での診療に当たり、くまもと県北教育拠点に常駐する指導医5名(内科専門医・指導医、プ

ライマリケア認定医・指導医、病院総合診療認定医・指導医、リウマチ専門医、総合診療専門医、家庭医療専門医、血液内科専門医)の他、研修医、地域医療・総合診療実践学寄附講座の教員も外来診療、救急医療に携わりました。

くまもと県北病院 総合診療科外来担当医表

月	火	水	木	金
佐藤	中村	小山	小山	中村
田添	足立	田添	足立	田添
			松井	大里
佐藤(午後)		小山(午後)	小山(午後)	佐藤(午後)

(3) 年間診療報告

玉名拠点開設から8年目となりますが、医学生、初期研修医、専攻医および地域医療・総合診療実践学寄附講座スタッフがチームを形成し、総合診療科外来として外来診療および他診療科からのコンサルト対応を行うとともに、平日の救急外来を担っています。コロナ禍で受診控えの受診患者数が減少する中でも、入院患者数は徐々に増加傾向にあります。

また、救急診療では受入件数もくまもと県北地域最多を維持しており、不応需率も低い値で推移しています。



2023年度 研修医 全13名
くまもと県北病院基幹型：12名(1年次：4名、2年次：8名)
熊本医療センター：1名(2年次)

河浦教育拠点

1. 活動概要

河浦教育拠点は2021年4月に設置されました。過疎地域の小規模病院におけるプライマリケアタイプの教育拠点です。地域医療を行っていく中で、実践的なレジデント教育を行っており、現在もレジデント1名が研鑽を積んでいます。また、熊本大学医学部よりクリクラ学生を受け入れています。

2. 活動報告

(1) 教育活動

● 学生

熊本大学の特別臨床実習(クリニカルクラークシップ)「地域医療」「総合診療」枠で1チーム3週間の実習を受け入れています。

「総合診療」枠も、僻地のプライマリケアとしての実習を行っています。今年度から本格的に、院外での実習をスタートしました。社会福祉協議会、地域包括支援センターでの実習を取り入れることで、医療だけでなく介護、福祉との連携を学んでもらっており、おおむね学生からも好評です。また、地域の方との交流として、時期が合えば農作業や釣りなども経験してもらいました。

● 初期研修医地域医療研修

赤十字熊本病院より1か月ずつ3名の研修医が派遣されました。2次医療機関とは違う、限られた資源の中での外来診療、入院診療、そして在宅診療を経験してもらい、それぞれにフィールドの違いによる仕事の視野の違いを感じてもらいました。また、この地域だからこその歴史遺産見学や陶器見学、釣りなども体験してもらっています。

● 後期研修

6月末でレジデントが当院での研修を終え、7月より新たなレジデントが赴任しました。年度途中からの赴任のため、なかなか外来患者数が少ない状態でスタートしましたが、来年度も在籍予定であるため、徐々に外来患者が増えてきており、外来研修がより充実していくと思います。病棟診療、訪問診療もじゅうぶんに研修しています。また、院内外での多職種教育や地域活動、地域住民向けのヘルスプロモーション活動なども積極的に取り組んでもらっています。

(2) 診療

月	火	水	木	金
鶴田 (初診+再診)	鶴田 (初診+再診)	鶴田 (初診+再診)	下地 (初診+再診)	下地 (初診+再診)

※訪問診療はチームで分担 火・水・金

(3) 年間診療報告

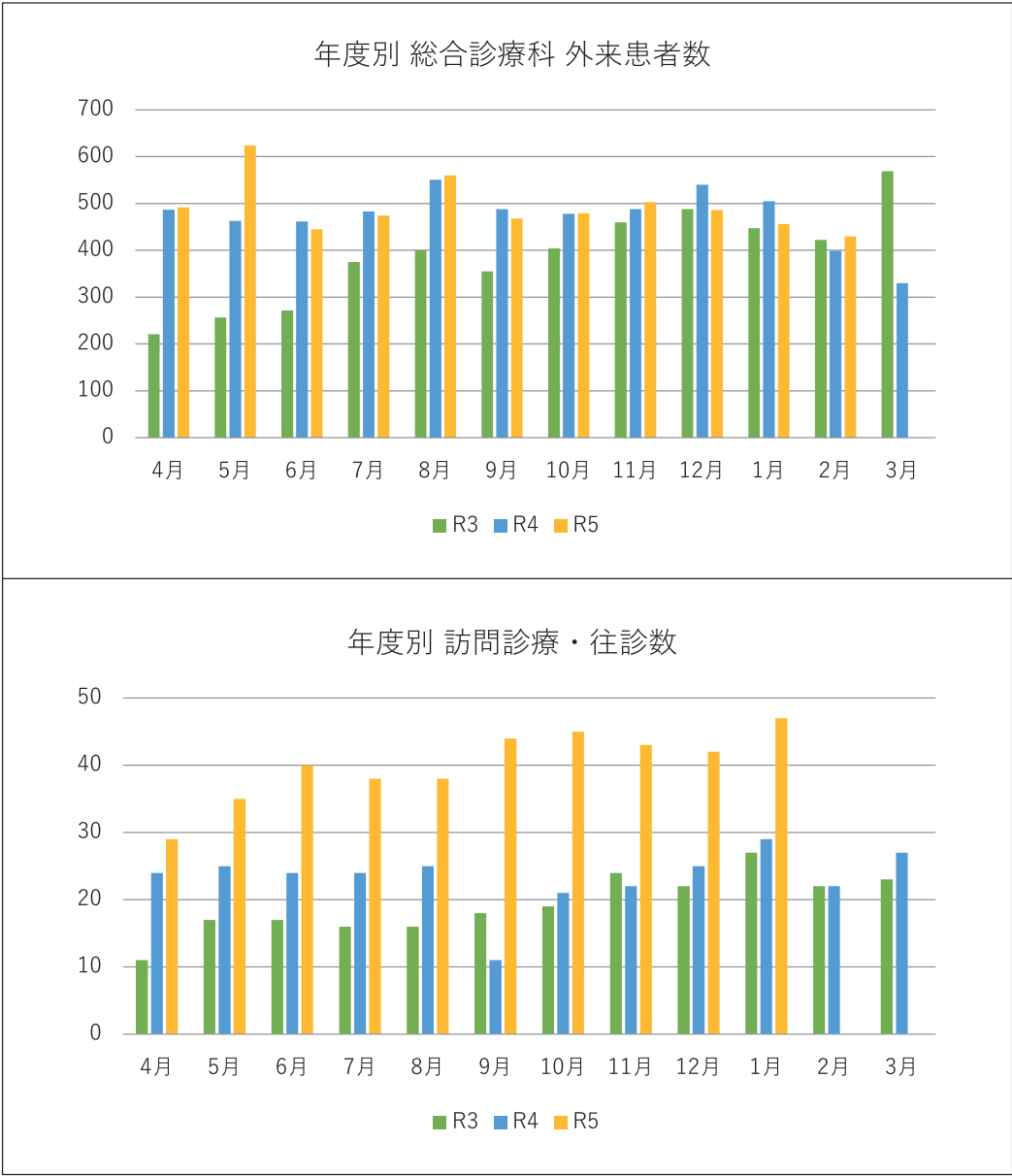
総合診療科としての外来患者数は、昨年からすると微増しています。病院全体では患者数が減っていることから、地域への貢献度は上がっていると考えられます。

レジデントは年度途中での赴任となったため、定期通院患者数がなかなか伸び悩んでいます。今春の他科の医師の転勤等により、2024年度は慢性期患者の定期通院を増やすことが出来ると見込まれ、よ

り研修が充実するものと考えます。

また、天草市高浜町にある巡回診療所についても、2024年度から前任の医師から引き継ぎ当科レジデントがメインで関わってもらうことになりました。無医地区の外来診療のみならず、診療所の運営、地域や行政との関わり等も学ぶ絶好の機会だと期待しています。場合によっては、今後、ローテートするレジデントにとって、この巡回診療が一番の河浦病院での魅力になるかもしれません。

このほか、訪問診療数は大幅に増加しており、徐々に地域への周知が広まり、ここ1年で依頼が増えてきたためと考えています。総合診療科として、地域のニーズに答えることができている事例だと思います。



(4) セミナー・勉強会

住民向け講座が昨年より増加しており、レジデントも講師等で大に関わってもらっています。また、院内多職種教育にレジデントが積極的に関わっており、ACLS等の勉強会を積極的に開催してきました。

その他、河浦・天草地区での地域活動を行っているしきちの会のメンバーとして鶴田、下地とも日々活動しており、地域の医療・介護・福祉の多職種向けの勉強会も行いました。

<住民向け講座>

6月26日	久留ひまわり講話
9月13日	上津留老人会講話
10月4日	崎津コミセン講話
10月18日	こつこつ会講話
11月8日	倉田いきいき会講話
11月15日	白木河内老人会講話
11月29日	笑○クラブ講話
12月13日	2025会講話
3月14日	下津留老人会講話
3月20日	天草都市医師会住民公開講座

<地域祭りへの参加>

7月16日	虫追い祭
3月30日	一町田さくら祭

<院内外勉強会（運営または講師等を行ったもの）>

7月18日	国診協若手の会勉強会「人生会議」
9月27日	院内多職種勉強会「BLS」
10月13日	循環器科合同勉強会「河浦病院と循環器科との連携」
10月25日	院内多職種勉強会「ACLS①」
11月13日	国診協若手の会勉強会「マルチモビリティ」
12月20日	院内多職種勉強会「ACLS②」
1月20日	のさりの島天草の地域医療教育セミナー 「天草における地域医療での医師養成の現状と課題」
1月24日	院内多職種勉強会「院内トリアージ」
1月24日	しきちの会勉強会「社会的処方」など
2月5日	他院との合同勉強会「僻地での在宅医療」



天草都市医師会住民公開講座



地域の祭に参加



院内勉強会の様子



地域住民向け講話



学生実習の様子

5 熊本県医師修学資金貸与学生からの報告

1. 地域医療ゼミ

(1) 概要

現在、熊本県医師修学資金貸与制度を利用している学生は34名おり、毎月1回、地域医療に関する興味・関心を深めることを目的として、学生達で企画した内容を中心に「地域医療ゼミ」を開催しています。

今年度は新型コロナウイルスの制限も緩和され、コロナ前のように、対面での開催が中心となりましたが、オンラインの利点を生かしたハイブリッドによる開催も行いました。特に第6回では、グランドラウンドとのジョイント企画として、学外より講師の先生をお招きし、ハイブリッド開催にしたことにより、全国から多くの医師や専攻医の方にもご参加頂き、大変充実した回となりました。また、今年度は4年振りの夏季地域医療特別実習も実施されたため、第4回のゼミでは、「夏季地域医療特別実習説明会」として、夏季実習についての事前説明や事前学習、実習地区別による班員の顔合わせ等を行ったことにより、実習当日は円滑なコミュニケーションのなか、楽しく有意義な実習を行うことができました。

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
8人	2人	5人	5人	6人	8人

(2) 活動内容

●第1回地域医療ゼミ（2023年4月20日／対面にて開催）

新たに熊本県医師修学資金貸与学生として入学した1年生8名の紹介と、県庁医療政策課の方から熊本県医師修学資金貸与制度及びキャリア形成プログラムについての説明を行いました。また幹事学年が企画したレクリエーションを実施し、学年を超えて親睦を深めることが出来ました。



●第2回地域医療ゼミ（2023年5月18日／ハイブリッドにて開催）

シネメデューケーションとして、新しく制作した熊本大学病院総合診療科のホームページ用動画を視聴し、熊医生、自治医生それぞれに感じた総合診療医の印象、動画の感想を発表し、意見交換を行いました。

●第3回地域医療ゼミ（2023年6月15日／対面にて開催）

多職種連携企画として、熊本大学 大学院生命科学研究部 臨床薬理学分野 近藤悠希先生をお招きし、「地域医療から考える腎機能を考量した医薬品適正使用」と題してご講演頂きました。



●第4回地域医療ゼミ(2023年7月20日／オンラインにて開催)

8月16日・17日の夏季地域医療特別実習について、地域医療・総合診療実践学寄附講座・地域医療支援センターの教職員より事前説明を行いました。参加学生たちは、夏季実習のスケジュール及び訪問地区別の班分けを確認し、その後、ブレイクアウトルームを利用して、班毎に自己紹介、連絡先の交換を行いました。

●第5回地域医療ゼミ(2023年9月21日／対面にて開催)

今回はシネメデューケーションとして、ジョニー・デップ製作・主演「MINAMATA-ミナマタ-」を鑑賞。鑑賞後、2つのグループに分かれて、個々の感想を発表し、グループディスカッションを行いました。

●第6回地域医療ゼミ(2023年10月19日／ハイブリッドにて開催)

今回は第19回熊本大学グラウンドとのジョイント企画として、福岡県小郡市のまどかファミリークリニック加藤光樹院長をお招きし、「プライマリ・ケア外来での聴き方-Wellbeingに迫る医療面接-」と題してご講演頂きました。講演は、学生が参加してのロールプレイングを挟みながらお話し頂き、大変インタラクティブなゼミとなりました。



●第7回地域医療ゼミ(2023年11月16日／対面にて開催)

今年度から始まった5年次の選択カリキュラム「地域医療総合演習」で学んできたことを基に、履修した5年生による教育セッションを行いました。自己分析、個人ワーク、グループディスカッションなどを行い、参加学生のこれからのキャリア形成に有意義なゼミとなりました。



●第8回地域医療ゼミ(2023年12月21日／オンラインにて開催)

自治医科大生の企画により、「自治医大生・熊大地域卒生の卒後キャリア形成」をテーマ開催しました。自治医科大学の紹介後、自治医大もしくは熊大地域卒を選んだ理由と専門医を取るタイミング・取りたい科についてのグループディスカッションを行い、その後、各グループで出た意見を発表し、参加学生全員で意見の共有を行いました。

●第9回 地域医療ゼミ(2024年1月29日／対面にて開催)

熊本県医師会が主催し、熊大病院地域医療支援センターと日本医師会の共催で開催された「令和5年度医学生・研修医等をサポートするための会セミナー」とのジョイント企画としておこなわれました。今回のテーマは、「医師のキャリアとワークライフバランス-ロールモデルを探そう!-」で、3人の女性医師から講演いただきました。また、講演後、参加者でグループワークを行い、活発な意見交換が行われました。



●第10回地域医療ゼミ(2024年2月15日／対面にて開催)

「制度とキャリア」をテーマにゼミを開催しました。最初に当センターの教員から、専門医制度の内容や女性医師のライフイベントに係る義務年限の取り扱いについてなど、クイズ形式による説明があり、次に県医療政策課から令和6年3月更新予定のキャリア形成プログラムについての詳細な説明が行われました。また、今年度は女性医師キャリア支援センターより、実際に着衣したマタニティ白衣の紹介など、より具体的に制度やサポートについての案内がありました。

●第11回地域医療ゼミ(2024年3月22日／対面にて開催)

今年度最後となったゼミは、1年の締め括りとして、夏季・冬季地域医療特別実習報告や今年度から医学科5年生のカリキュラムとなった「地域医療総合演習」についての報告が行われました。その後皆勤賞、功労賞の表彰、新たな幹事学年(4年生)代表の紹介や4月からの地域医療ゼミの実施計画についてなど、来年度に向けた地域医療ゼミの説明も行われました。

その後、4年ぶりに追いコンも開催され、卒業生の挨拶、花束贈呈等、6年生の卒業を祝し、大いに盛り上がった思い出に残る1日となりました。



2. 地域医療特別実習

(1) 概要

地域医療特別実習は、これまで「夏季地域医療特別実習」(以下「夏季実習」)と表し、熊本県医師修学資金の貸与学生及び熊本県出身の自治医科大学医学部生を対象に、熊本市外の地域を訪れ【地域を知る】ことに視点を置いた企画・構成で実習を行い、例年、2泊3日の日程で地域を訪問し、医療機関等の見学型実習及びフィールドワークをメインとして、実際に地域を“見て・聞いて・感じる”ことで、参加学生が多方面から広く地域を知ることができるような内容を心がけ取り組んでまいりました。

例年、夏季にのみ実施していた本実習ですが、今年度は夏季実習に加えて、大学のカリキュラム等で夏季実習に参加できなかった学生を対象に「冬季地域医療特別実習」(以下「冬季実習」)を行いました。

(2) 夏季地域医療特別実習

夏季実習は、天草上島地域にて1泊2日で実施しました。上天草市、天草市、湯島、御所浦などの自治体や医療機関、地域住民の方など、多くの皆さまのご理解とご協力のもとでの充実した実習となりました。湯島、御所浦の両離島でのフィールドワークをはじめ、グループでの活動が中心となり、グループ毎の全体発表も行いました。

- 開催日程及び実習地域
日程：2023年8月16日(水)～8月17日(木)
地域：天草上島地域(上天草市湯島、天草市御所浦)
- 参加学生
熊本県医師修学資金貸与学生(熊本大学医学部) 9名
自治医科大学医学部生(熊本県出身者) 11名
- 実習スケジュール



8月16日(水)			
8:00	～	8:15	集合・受付 (熊本大学病院)
8:30	～	10:00	移動
10:15	～	11:25	講話 (上天草市役所 松島庁舎 保健センター)
11:30	～	11:40	移動
11:40	～	12:30	ランチミーティング (リゾラテラス天草)
12:40	～		フィールドワーク (湯島、御所浦)
16:15	～	17:15	病院等見学 (上天草総合病院、上天草看護専門学校)
17:15	～	17:30	移動
18:00	～	19:30	懇談会・意見交換会 (よしやホテルきらら亭)
20:00	～	22:00	全体発表準備
22:00	～		宿泊

8月17日(木)			
7:00	～		朝食 (よしやホテルきらら亭)
8:20			集合
8:30	～	8:45	移動
9:00	～	10:45	全体発表・考察 (上天草看護専門学校)
10:45	～	11:10	会場撤収作業・休憩
11:20	～	11:55	移動
12:00	～	13:00	ランチミーティング (島観光ホテル岬亭)
13:10	～	15:10	移動
15:15			事務連絡・解散 (熊本大学病院)

(3) 冬季地域医療特別実習

例年、地域医療特別実習は夏季のみ行っておりましたが、今年度は、大学のカリキュラム等で夏季実習に参加できなかった学生を対象に、1泊2日の日程で阿蘇地域にて冬季実習を行いました。

冬季実習は、阿蘇市、産山村、小国町、南阿蘇村において、関係自治体をはじめ関係機関の多くの皆さまのご理解とご協力のもと、3つの診療所を含む6つの医療機関、2つの高齢者施設を訪問しての充実した実習となりました。

- 開催日程及び実習地域
日程：2023年12月25日(月)～12月26日(火)
地域：阿蘇地域(阿蘇市、小国町、産山村、南阿蘇村)



- 参加学生
熊本県医師修学資金貸与学生 12名

- 実習スケジュール

12月25日(月)			
8:00	～	8:15	集合・受付 (熊本大学病院)
8:30	～	9:50	移動
10:00	～	10:45	講話 (阿蘇市役所)
10:50	～	11:30	見学・グループワーク (阿蘇医療センター)
11:35	～	11:40	移動
11:45	～	12:15	見学 (特別養護老人ホームみやま荘)
12:20	～	12:25	移動
12:45	～	13:35	ランチミーティング (道の駅 波野 神楽苑)
13:45	～	13:55	移動
14:00	～	14:30	見学・意見交換 (波野診療所)
14:35	～	14:55	移動
15:00	～	15:30	見学・意見交換 (産山村診療所)
15:35	～	16:25	移動
16:30	～	17:20	講話 (小国公立病院)
17:25	～	17:45	移動
17:50	～	18:35	準備・休憩 (旅館 白水荘)
18:40	～	18:55	移動
19:00	～	20:30	懇談会・意見交換会 (食事処 三軒家)
20:30	～	20:50	移動
20:55			休憩・就寝 (旅館 白水荘)

12月26日(火)			
7:00	～	8:00	朝食
8:25			集合
8:30	～	8:50	移動
9:00	～	9:30	見学 (小国公立病院)
9:30	～	10:00	見学 (おぐに老人保健施設)
10:05	～	10:15	移動
10:20	～	11:15	見学 (北里紫三郎記念館)
11:20	～	11:25	移動
11:30	～	12:00	見学 (おぐにサテライト診療所)
12:05	～	12:15	移動
12:20	～	13:10	ランチミーティング (道の駅 阿蘇)
13:15	～	13:55	移動
14:00	～	14:30	休憩
14:35	～	14:55	移動
15:00	～	15:40	講話 (阿蘇立野病院)
15:50	～	16:40	移動
16:45			解散 (熊本大学病院)



3. 令和5年度 卒業生の声

● 星野 朱音（熊本大学医学部医学科6年）

私は6年間の学生生活を通して本当にさまざまな経験をすることができました。この6年間は勉強を通して医学を学ぶことはもちろん、実習を通して実際の医療について学び、学外活動を通して社会の中のさまざまな人の役割などについても学ぶことができました。

特に印象深かったことは臨床実習や病院見学を通してそれぞれの病院に役割が分担され、雰囲気や患者さんの層が違うことを実際に感じたことです。大学病院ではより高度な医療を必要とする患者さんが多く、また、地域医療ではより患者さんの生活環境に近い所で急性期から慢性期まで幅広い患者さんを見る必要があります、私がこれから働く上で、どのような環境でどのような人の力になっていきたいのか、より具体的に考えるととてもいいきっかけになりました。

加えて、卒業試験、国家試験を通してこれまで学んだ知識の総復習をしたと同時に、その膨大な知識量に医者は一生涯勉強が必要という言葉を感じました。試験勉強を通して知識を身につけることはもちろん重要ですが、友達と知識を出し合って考えること、自分の勉強方法を見つけること、忍耐強くコツコツ努力を続けることの重要性を再確認することができました。

これから私は医師として働いていきますが、この6年間で学んだことを忘れず、活かしていくことで自分の目指す医師像に近づいていきたいと思います。最後になりますが、六年間お世話になった先生方、地域医療支援センターの皆様、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

● 岩井 秋子（熊本大学医学部医学科6年）

試験が多い、実習がきつい、勉強が難しい、などという声も聞きますが、生まれておよそ四半世紀が過ぎるまでモラトリアムを得られるという点を考慮すれば、医学部生は恵まれていると思います。そのうえ地域枠生は経済的な援助を頂き、さらには先生方や優しいスタッフの皆様の日々気にかけてもらい、夏季実習では熊本県内の色々な地域に連れて行ってもらえるわけです。そんな自由で素晴らしい6年間、私は1年生から再試常連で、ポリクリでは不勉強がすぎると追加レポートを課され、卒留の危機に陥りました。でもそんなのは些細なことです。なんとか進級し無事国家試験を合格した今、これから先の長い医師人生の中で勉強をし続けるための足がかりはできました。

大学は専門的な知識を得るだけでなく、本質的なことを考える時間をもらう場所であると思います。「何事も楽しんで、苦労を苦労と思わない。反省はしても、後悔はしない」

この一生をほんの少しでも他人様の役に立つものにするため、そして十分に謳歌するための極意です。大学時代を経て自分の芯となる部分を言葉にできたことが、この6年間の意味だったと思います。とても素敵で幸せな日々でした。

話は変わりますが、先日ふとした事から高校卒業時に自分が書いた合格体験記を目にしました。6年前の私は「大学は長い人生の休憩時間」と言っていました。いよいよその休憩時間が終わるわけですが、これまでの人生24年間、両親をはじめたくさんの方々に面倒をみてもらいながら、十分に遊ばせてもらったと思います。

大人になる準備は整いました。これからは有用な社会の歯車となるべく頑張っていきますので、正しい道を歩いているか見守っていただけたらと思います。6年間ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

● 富士登 璃子（熊本大学医学部医学科6年）

国家試験の合格発表の日に自分の受験番号を見つけた時、6年前にも同じように受験番号を見つけた時の情景が鮮明に浮かび上がり、あれから6年が経ったものだと思うと、時の流れの早さに驚きます。医学部に合格した喜びは、一生忘れられないものとなっています。6年間はあっという間でしたが、それぞれの学年を振り返ると、講義や試験、実習に加えてCBTやOSCE、IGEなどの節目となる大きな試験があり、一つ乗り越えたと思うと、また一つの壁が立ちはだかり、それらに挑んでいるうちに学年が上がり、気

づけば卒業まできたような感覚があります。そうした中でも、基礎医学から臨床科目、実習を経るにつれて、学んできたものが様々なところで繋がっていき、全く分からなかったものが少しずつ理解できるようになると面白いと思うようになりました。卒業試験や国家試験の前には、その膨大な範囲を目の前にして、何度も心が挫けそうになりましたが、自分の根底にこの6年間を通して感じた医学は面白いという気持ちがあったからこそ、立ち向かうことができたと思っています。そして勉学だけでなく、部活動でも尊敬する先輩方や頼もしい後輩達、信頼できる同期に恵まれ、忙しいながらも楽しい思い出の多い学生生活だったと思います。

地域医療ゼミでは、夏季実習に一番思い出があります。実際に地域に伺い、医療の現状や住民の方々との交流、文化や名産品を通してその地域について学ぶことができるため、帰る頃にはその地域の魅力をたくさん知ることができ、この地域に住んでみたい、そして医療に少しでも貢献したいと思いながら実習を終えていました。それに加え、先輩や後輩の皆さんと交流もできるため、同じ志を持った方々と縦のつながりがができることは、部活動で得られるものとはまた違った、地域枠ならではのとてもありがたいものであると思います。昨年の夏に4年ぶりに開催されるとのことでしたので、6年生でしたが許可をいただき、参加させていただきました。やはりとても充実した時間であり、楽しかった実習のおかげでその後の卒業試験も頑張ることができました。

その他にも毎月のゼミも楽しみの一つであり、先生方やスタッフの皆様がいつも笑顔で迎えてくださり、とてもあたたかい場所でした。6年間支えていただきました、地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方をはじめ、地域医療支援センターの皆様、並びに県の医療政策課の皆様に心より感謝申し上げます。ようやく医師のスタートに経ち、何も分からない状態ですが、地域に貢献できる医師になるために精一杯精進してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

● 中村 水紀（熊本大学医学部医学科6年）

地域枠として入学してから6年間、地域医療ゼミや夏季地域医療実習など様々な行事に参加し、多くのことを学ぶことができた。私は1度だけしか参加できなかったが、夏季地域医療実習は特に印象に残っている。私のグループは津奈木町を訪ねて、介護施設や役場で職員さんのお話を聞いたり、四季彩でモノレールに乗ったりして、とても楽しい思い出になった。中でも保健師さんのお話が特に印象に残っている。それは、津奈木では高血圧の患者さんが多い。それは住民に高齢の方が多いこともあるが、海が近く海産物を摂取する機会が多いことも原因の一つかもしれない。というお話だ。当時1年生だった私は地域医療がどんなことを求められているのか、よく分かっていなかった。しかしお話を聞いて、その地域の特色を把握しておくことは地域住民の健康問題を解決する上でとても重要なことだと知った。夏季実習は、実際にその地域を訪ねて、自分の目で現場を見て、地元の方とお話することで地域医療を知るきっかけとなった。

他にも印象に残っているのはCOCODEの取材で総合診療科の中村先生とお話した時のことだ。そこではわからないことはわからないと患者さんに正直に伝え、他の専門の先生に頼ることの大切さを学んだ。私は「わからない」という言葉は患者さんに不安を与えてしまうのではないかと思っていた。しかし、中途半端な知識でその場を取り繕うよりも、わからないことは正直に伝え、自分で調べたり他の先生に相談したりすることで、いち早く解決につなげることが、患者さんにとって誠実な対応だという先生の話聞いてとても納得した。これから医師として働く上で、よくわからない症例に直面することは多々あると思う。そんな時にこの取材でのお話を思い出して患者さんに誠実な対応をしていきたい。

この6年間、たくさんのことを学んだ。これから様々な地域で医療を行うことになると思うが、どの地域でもこれまで学んだことを活かし、地域の方々の健康を守るお手伝いをしていきたい。

● 坂本 萌（熊本大学医学部医学科6年）

熊本大学医学部医学科に地域枠生として入学し、あっという間に六年の月日が流れました。右も左もわからずに入学しましたが地域枠の先輩方が地域枠のゼミではどんなことをするのか、試験勉強はどのようにするのかなど優しく教えてくださり、とても安心したのを覚えています。地域枠学生の活動として、

月に一度のゼミがありましたがシネメデューションや地域で実際に働いていらっしゃる医師の方々や他職種の方の講演などを通して地域医療とは何なのか、女性医師の働き方、チーム医療の進め方など様々なことを学ぶことができました。またゼミでは学生主体に活動させていただく機会も多くあり先生方や職員の皆様のサポートのもとグループワークやレクリエーションも交えながら自由楽しく活動させていただくことができ、他学年や他大学の学生との繋がりも得ることができたと思っています。

六年間を振り返ってみると様々なことを経験させていただきましたが一番思い出深いのはやはり夏期実習です。一年生の時は水俣に、二年生の時は球磨郡に行かせていただきましたが、実際に見て触れて、その地域で生活する方や実際に医療に携わっている方々から直接お話を聞かせていただくことで、ひとくちに地域医療といえどもその現状は地域によって千差万別であることを実感し、教科書を見ているだけではわからないことを知ることができ自分が将来熊本の地域でどのように働いていきたいかを具体的に考えるきっかけになりました。二年生の終わりごろから新型コロナウイルスが流行し病院実習ができなくなるなど学校生活の中で様々なことが制限されるようになり不安も多くありましたが面談やゼミをオンラインで行うなど先生方や先輩方が工夫をしてくださったことでコロナ禍でも私たちは安心して充実した学校生活を送ることができたと思っています。これから研修医として働くことになりましたが地域卒学生として学んだことを実践しながら二年間の研修を乗り切るものにしていきたいです。

● 森嶋 純平（熊本大学医学部医学科6年）

卒業が目前に迫り新生活への準備に追われている今日この頃ですが、入学したのがつい最近のように思い出されます。私は最後の一般卒の学生として医師修学資金貸与制度に参加させていただきました。入学してすぐのガイダンスでこの制度を耳にした時、生まれ故郷である熊本の地域医療に携わりたいという私の思いにマッチした制度であると感じすぐに手続きをしました。幼い頃から思い描く将来の自分は、いつも決まって地域医療に従事する医師としての自分の姿でした。この確固たる将来像はときに自分を奮い立たせるものとしてときに挫けそうになったときの心の支えとして、多くの場面で私を助けてくれました。ついにこの姿に近づく第一歩が歩み出せると思うと筆舌に尽くし難い気持ちでいっぱいです。

この6年は本当にあっという間でしたが、今までの人生の中でも特に密度の高い期間でした。途中でコロナ禍に見舞われ、課外活動はおろか大学への登校すらできなくなりましたが、それでもその時分ではできない学びや経験は数多くありました。どれか一つの経験を選び取って文章にするには多すぎるほど多くのことを学ばせていただきましたが、同級生、先輩・後輩、座学でお世話になった教員の先生方、実習でお世話になった臨床の先生方、実習で担当させていただいた患者の方々、その他大勢の私に関わってくださった全ての方々があってこそ今の私であると改めて強く思います。こんなにも多くの方に支えられていることに対する感謝や何事にも謙虚に誠実に向き合うことの大事さを実感できた6年でした。特にゼミ等に際して、私をご支援くださった地域医療・総合診療実践学寄附講座の先生方・スタッフの方々並びに熊本県医療政策課の皆様には大変お世話になりました。これからも多くの場面でお世話になることと思いますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

新年度からは荒尾市立有明医療センターで初期臨床研修医としてお世話になります。まだまだ未熟ですが、医師として熊本のために尽力できるよう精一杯研鑽を積んでいく所存です。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

6 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

1. 活動概要

本講座は、熊本県の地域医療連携ネットワーク構想を推進するため、県知事が各医療圏域に指定する「地域医療拠点病院」へ大学病院（本講座）から医師を派遣することで、専門医療を実践するとともに、行政や医師会と協力しながら地域医療連携の強化に努め、また、医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師へのキャリア形成支援、各医療圏域における医療機能の向上を図るための調査・研究を行うことを目的に、熊本県からの寄附を得て、平成31年度から令和3年度までの3年間設置され、この3年間の活動実績を踏まえ、さらに令和4年度から令和6年度までの3年間、本講座が継続設置されている。

令和5年度は、熊本大学病院の各診療科より選出された24名の専門医が本講座所属の特任教員となり、ネットワーク推進医として地域医療拠点病院（以下、拠点病院）に派遣され、同じく各診療科から派遣された常勤ネットワーク推進医と協力して業務を遂行した。

詳細な活動状況、地域医療の現状報告については、各特任教員の報告書を参照されたいが、以下に概要を記す。

本講座は、第1、2期合わせて発足後5年となり、所属教員のネットワーク推進医としての自覚と認知度が高まるとともに、活動も活発になってきている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への支援・指導は、主に通常の診療を通して専門的知識・手技を指導する中で行われている。加えて、若手医師の学術総会への参加、発表の促進・支援も行われている。今後、修学資金貸与医師が拠点病院に配属される数が増えるにつれ、ネットワーク推進医の役割はより大きくなることが予想される。

3. 診療支援の取り組み

各拠点病院において、ネットワーク推進医の専門性を活かし、外来・入院診療、専門性の高い手術・手技が提供されており、これにより、地域完結型の医療が実践され、遠方への受診等による不便さの解消や、制約のある高齢患者への質の高い医療が提供された。

また、より高度な治療を要する患者には、高度医療機関に適切に紹介が為され、医療の均てん化にも貢献しており、さらに、同一医療圏域のネットワーク推進医が連携し専門医療を相互に提供することで、複雑な症例に対しても地域完結型の医療の提供が可能となった事例が報告された。このように、圏域内で同じ診療科が集約された結果、医療過疎の地域への支援（玉突き支援）が可能となり、その相乗効果で勤務環境の改善にもつながったことが報告されており、医師の働き方改革に対応する上で集約化の有用性が示唆されている。

さらに、ネットワーク推進医が地域の研修会やワーキンググループへ参加し、多職種医療チームによる患者介入にも貢献していることが報告されている。

4. くまもとメディカルネットワーク(KMN)の普及状況

拠点病院によっては KMN の普及の遅れが見られるが、全体的に文書送受信機能を中心に活用が進んできている。

とくに県南では、各拠点病院の院内での利用体制が確立し、拠点病院間での情報共有に文書送受信機能が標準となりつつある。さらに、まだ一部の拠点病院ではあるが、生活情報ビューアの活用による、介護関連での KMN の普及活動が強化されつつある。

また、大学病院との画像情報の共有に KMN が用いられ、患者の利便性が向上していることも報告されており、KMN の実用性が認識されつつある。

一方で、KMN の普及が進んでいない施設もまだあり、院内の KMN 使用体制が確立していないことが主

な要因であるが、コンピュータの使用や ICT に精通したシステムエンジニアの不足もうかがわれ、なんらかの外部支援が必要ではないかと思われる。

5. 拠点病院としての役割の推進状況

多くの地域で高齢患者が増加しており、上述のように、診療科、拠点病院間が連携して地域完結型医療を目指した医療を推進している。また、ネットワーク推進医の派遣に応じて、玉突き派遣による医療過疎地域への医師の派遣が実行されており、KMN についても拠点病院間で差があるものの、普及に努めている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域の各種専門医の不足は持続しており、大学病院診療科からの医師派遣、本講座からの医師派遣に大きく依存している。医師の高齢化も進んでおり、地域における次世代の医師の不足が今後ますます危惧される。

また、高齢患者が増加しており、合併する慢性疾患を複数の診療科で管理する症例が増えている。現在は、本講座事業を含めた地域医療連携ネットワークの体制により、ある程度対応できているようであるが、今後その重要性が益々高まると思われる。

独居や家族のサポートが不十分、公共交通機関の整備が不十分なことなどから、圏域内であっても受診が困難な高齢者がいることや、周辺の回復期病院の不足などから社会的入院も担っている拠点病院の現状についても報告されている。さらに、一部の診療科では、専門的な特殊機器の不足から診療に制限が生じている。

産科・小児科については専門医不足が慢性的であり、今後ますます深刻になることが危惧される。行政も入って医師配置の議論を深める必要性についての提案もあった。

7. おわりに

以上、各教員の事業報告を総括した。本講座は第 1、2 期合わせて設置後 5 年となり、所属教員のネットワーク推進医としての自覚と認知度が高まるとともに、活動も活発になってきている。令和 6 年度も、熊本県の地域医療連携ネットワークの構築と地域医療の構築に向けて活動を継続していく。

令和5年度(2023年度) 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座(熊本大学病院) 特任教員一覧

部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク推進リーダー)	職名	派遣先拠点病院	部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク推進リーダー)	職名	派遣先拠点病院
内科	腎臓内科	12	泉 裕一郎	特任准教授	宇城総合病院	外科	消化器外科	4	北野 雄希	特任助教	水俣市立総合医療センター
	呼吸器内科		猪山 慎治	特任助教	小国公立病院、人吉医療センター		間端 輔		特任助教	水俣市立総合医療センター	
			坂田 晋也	特任助教	阿蘇医療センター、 有明医療センター		後藤 理沙		特任助教	くまもと県北病院	
			赤池 公孝	特任助教	小国公立病院、有明医療センター		泌尿器科		穴見 俊樹	特任助教	人吉医療センター
	消化器内科		徳永 堯之	特任助教	阿蘇医療センター	成育医療	小児科	3	永田 裕子	特任助教	小国公立病院、 水俣市立総合医療センター
			松野 健司	特任助教	熊本労災病院				宮村 文弥	特任助教	小国公立病院、 水俣市立総合医療センター
			飯尾 悦子	特任助教	有明医療センター		産婦人科		楠木 横	特任助教	熊本労災病院
	血液内科、 膠原病内科		坂田 康明	特任助教	熊本総合病院	感覚・ 運動	整形外科	4	徳永 琢也	特任助教	小国公立病院
	糖尿病・代謝・ 内分泌内科		小野 薫	特任助教	小国公立病院、上天草総合病院				湯上 正樹	特任助教	阿蘇医療センター
			循環器内科	木山 卓也	特任助教		公立多良木病院		米満 龍史	特任助教	そよう病院
	平川今日子			特任助教	そよう病院		眼科		松村 智世	特任助教	小国公立病院
	山本 正啓			特任助教	上天草総合病院	脳・神経・ 精神	神経精神科	1	日高 洋介	特任助教	熊本県立こころの医療センター

合計 24 名

派遣先地域医療拠点病院名	宇城総合病院
氏 名	泉 裕一郎
診療科名	腎臓内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

教員の主な業務として、それぞれ週1回の腎臓内科外来診療と維持血液透析患者の管理を行った。他診療科からのコンサルトに対応し、適宜診察・治療介入を行った。くまもとメディカルネットワーク(KMN)について、地域連携室・医療秘書課とのミーティングを重ね、院内での利用体制の構築の支援を行った。また、周辺施設を対象とした研修会で講演し、利用促進活動を支援した。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現在、派遣先施設に該当する医師は所属していない。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

本事業が開始され、腎臓内科が派遣される2018年以前に比べ、外来初診・再診患者数は高い水準を保っている。紹介元となる施設数が増加してきており、地域における当科の認知度が上がっているものと思われる。また、腎臓内科派遣の常勤医の診療活動により、入院患者数も増加が維持されている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

2022年(令和4年)度に構築された、地域連携室と医療秘書課の連携による文書送受信機能の院内利用体制が確立し、本年度は文書送受信数が大幅に増加した。熊本大学病院を始め、隣接する医療圏域の病院(人吉医療センター、水俣市立総合医療センター、熊本労災病院、熊本総合病院など)との文書のやり取りはほとんどKMNで一本化されている。本利用体制の構築については熊本市内の病院でも注目され、その視察を受け入れている。また、生活情報ビューアの利用普及のため、周辺の介護施設とKMNワーキンググループ研修会を開催している。

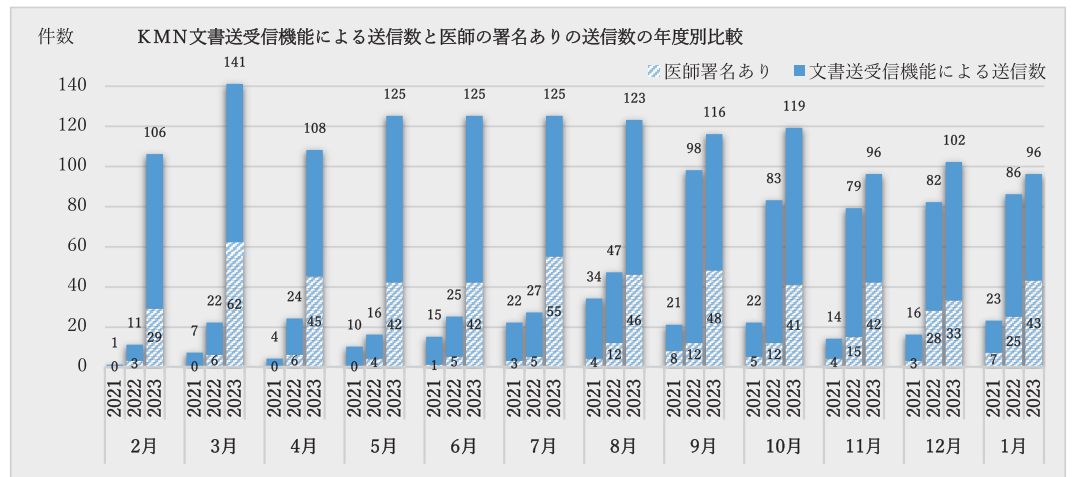
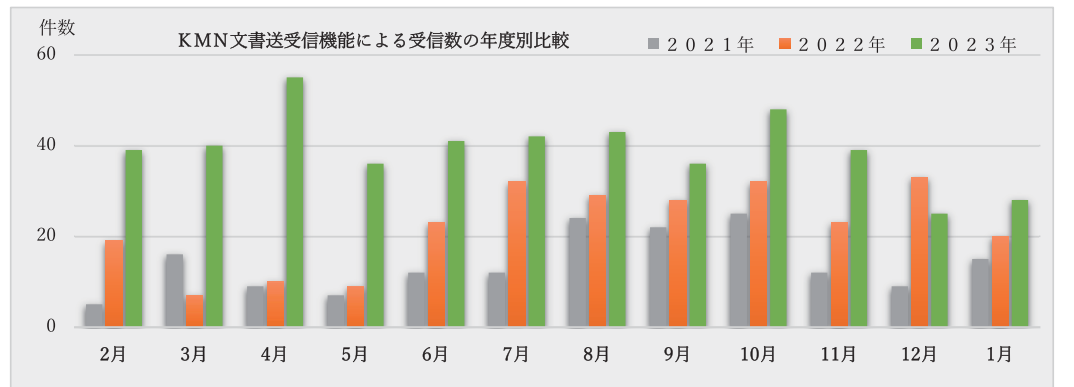
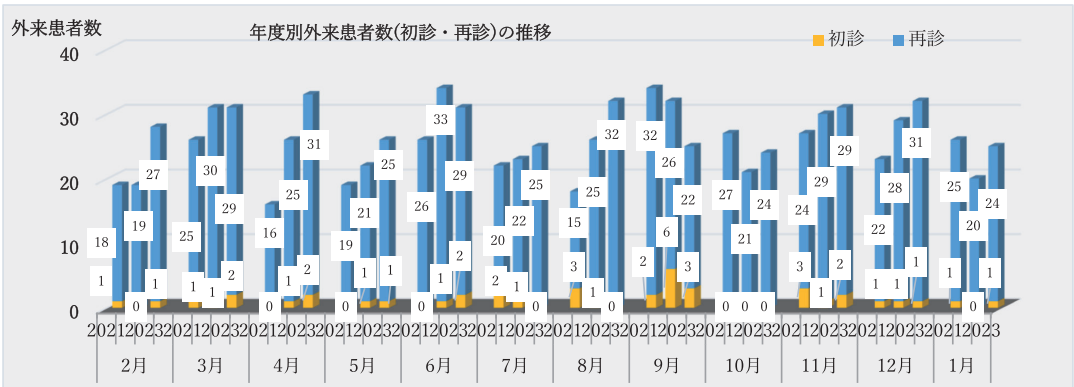
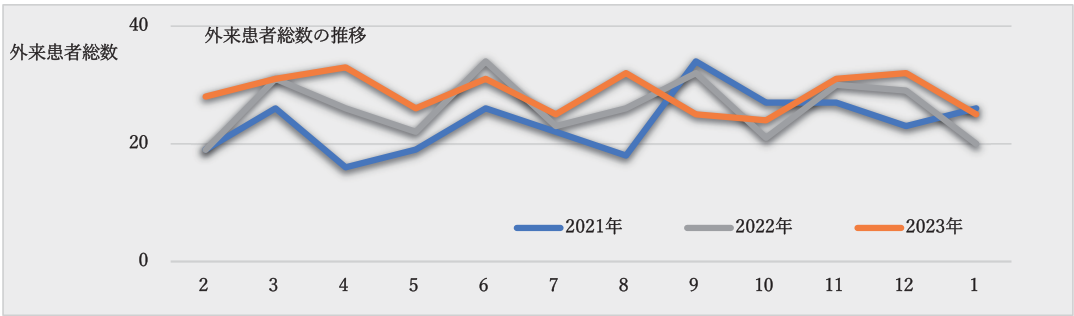
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

宇城総合病院は、宇城圏域の中核病院であり、地域に救急医療を提供するとともに、高度医療機関への紹介や、急性期・回復期のリハビリから転院までの調整も行い、他機関への橋渡しを行うハブ的な役割を担っている。人口対医師数の比較的多い熊本圏域と八代圏域に挟まれた、医師数の少ない地域にあり、東西に広い圏域の地域医療を支える上で、同院の役割は大きい。高齢者の多い地域で、地域包括ケアシステムの充実も求められており、地域連携室を中心に周辺施設との連携を維持している。地域医療拠点病院としての役割を積極的に果たしていると思われる。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

宇城総合病院の診療活動は、30名ほどの医師によって成り立っているが、そのうちの約3割は、ネットワーク推進医も含めた非常勤医師に頼る状況であり、同院にとって医師の確保は常に重要な課題である。また、他の地域と同様に医師の高齢化が徐々に進んできており、今後、医師不足に拍車がかかる可能性が高い。当科が関わる透析医療に関しても、常勤ネットワーク医が主に業務を行い、報告者と定年後の嘱託勤務医師2名がそれぞれ週に1クールの診療を担当することでなんとか維持されている現状である。来年度は嘱託医師1名の退職が決定している。約80名の維持透析患者を管理するには不安な体制であり、今後も人的支援の継続が望まれる。

宇城総合病院 腎臓内科



派遣先地域医療拠点病院名	人吉医療センター、小国公立病院
氏 名	猪山慎治
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

近隣の診療所、病院からの紹介患者の診断治療、再紹介、高次医療機関への再紹介を行った。
また、くまもとメディカルネットワークの推進のために、近隣医療機関へ参加加入依頼を行ってきた。
呼吸器内科若手常勤医の症例相談、診断、治療方針、学会での発表等のアドバイスを行い、自治医科大学の専攻医や初期研修医にも呼吸器疾患の指導、アドバイスを行い、研修医教育にも貢献している。
呼吸器疾患以外にも内科医として地域住民に対して長年苦しんでいた症状の診断治療や教育、生活指導、常用薬の整理を行い、コミュニケーションを重視した良好な医師関係の構築および適切な医療を届けている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

自治医科大学の専攻医に対しては、専門医取得に必要な症例登録や要約登録の促し、学術集会参加の勧め、病欠時の外来患者代行、入院患者のアドバイスを行っている。初期研修医には、呼吸器疾患の診断治療の評価、アドバイス、呼吸器疾患の外来引継ぎを行い、研修医教育にも貢献している。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

小国公立病院は、2023年度から外来1枠から2枠に増やした。呼吸器疾患の地域医療機関からの紹介は少ないが、院内コンサルトは増加、地域住民の健康管理、予防医療、疾患治療を中心に継続診療支援を行っている。
人吉医療センターは、呼吸器常勤医2名いるが、患者数が多く、診療支援が必須である。外来患者初診、再診患者は例年通り推移している。呼吸器疾患の診療支援を十分に行え、近隣医療機関や地域住民の貢献は出来ていると考える。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

くまもとメディカルネットワークの送受信数は人吉医療センター、小国公立病院ともに伸びている。継続推進していきます。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- ① 専門医療実践による診療支援：専門的診断、治療を行いながら、総合内科領域も専門的診断、治療を行った。
 - ② 若手医師への指導：症例の相談、検査治療方針のアドバイス、学会報告や論文作成の指導、専門医取得の支援を行った。
 - ③ 地域住民・医療従事者への啓蒙活動、専門的知識の提供：予防医療のためのワクチンの推進、自宅でできるリハビリテーションの情報提供を行った。
 - ④ くまもとメディカルネットワークの普及：送受信数は増え、新規加入者も増加している。
 - ⑤ 各医療圏における地域医療の現状と新たな方策の検討
- 人吉球磨地区の医療は常勤2名の負担が大きく、外来支援で何とか出来ているが、疲弊もみられ、時間外労働も多く、もう一名の常勤医の追加が必要である。

小国公立病院は、自治医大卒や地域枠の若手医師と50-60代の医師で成り立っているが、マンパワー不足は感じる。地域枠の若手医師の支援、阿蘇医療センターの充足、連携をすることで、より専門性の高度な医療提供が出来る可能性がある。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

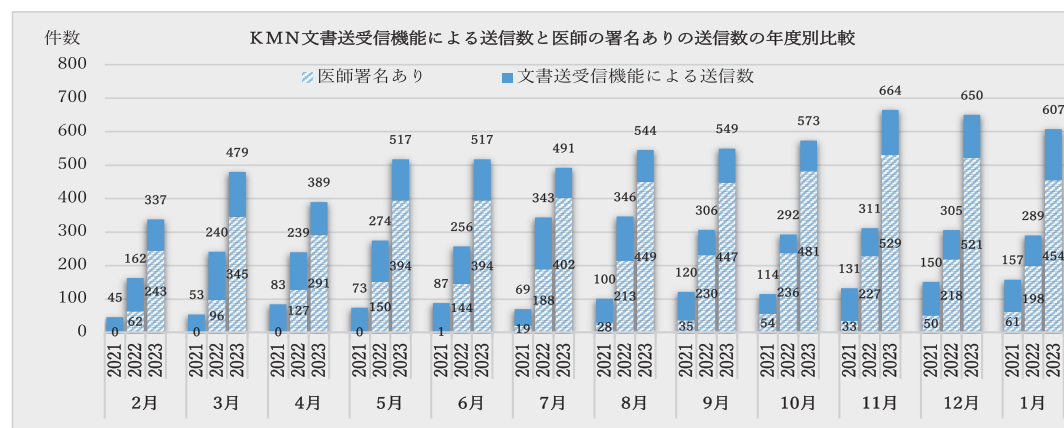
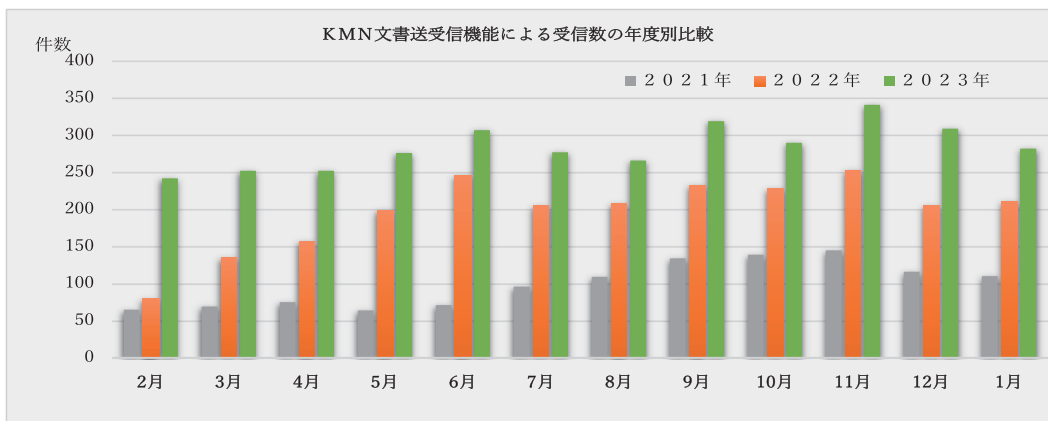
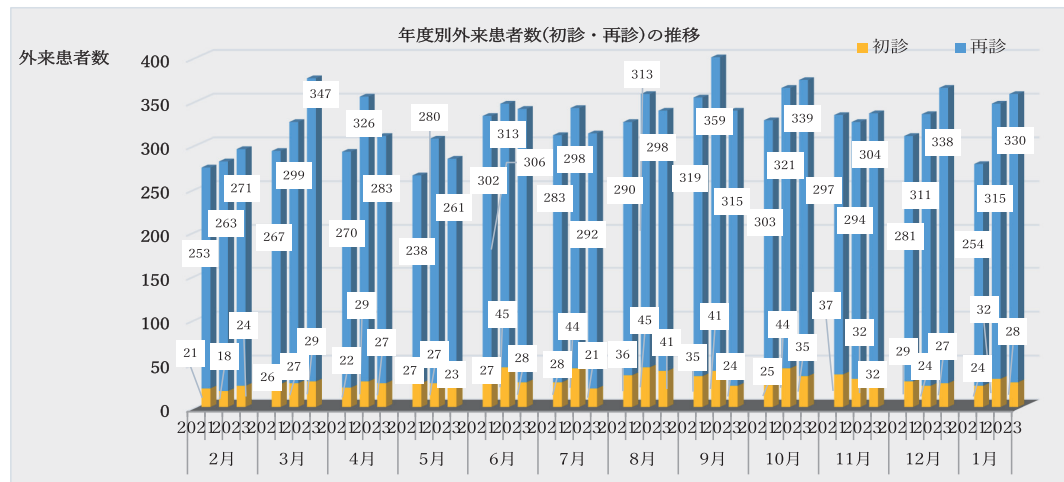
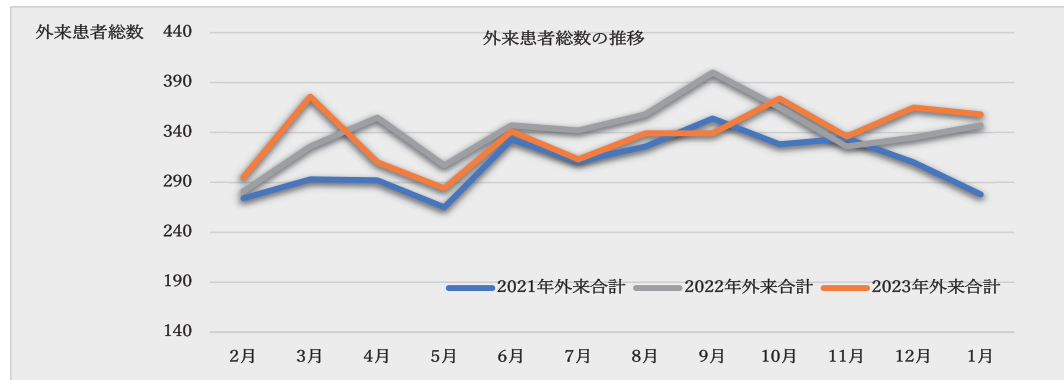
2024年4月から医療機関での働き方改革が施行される。これまでは、常勤医の少ない病院での夜間、休日の医療提供は、医師の犠牲のもと24時間の医療提供が出来ていたが、4月以降は、医療機関の受け入れが難しくなる状況が出てくる可能性がある。

解決策としては、住民の啓蒙や夜間休日の加算や患者側の自己負担増加等の対策が必要である。医療側の対策としては、夜間、休日診療後休息を必須とし、常勤並びに非常勤医師の連携が必要となると思う。働き方改革の不満を訴えることよりも、現実を受け入れ、対策を練り、それに合わせた働きを行うことが大事である。

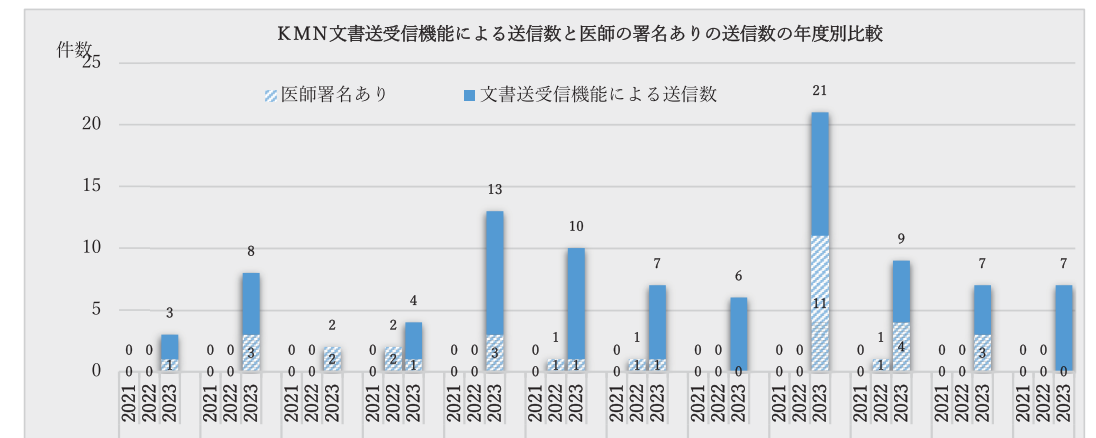
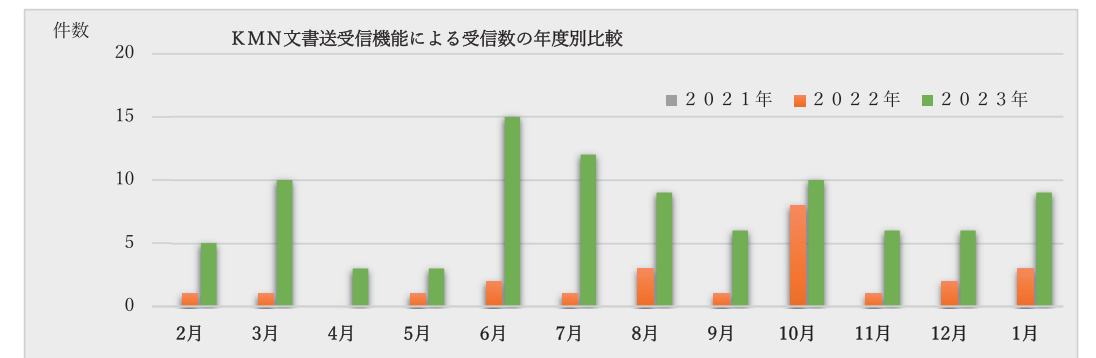
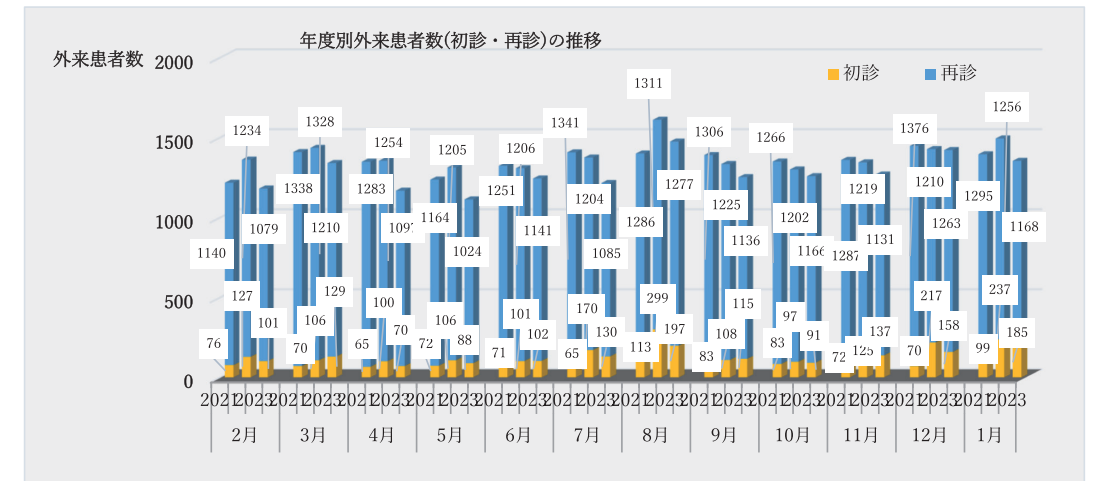
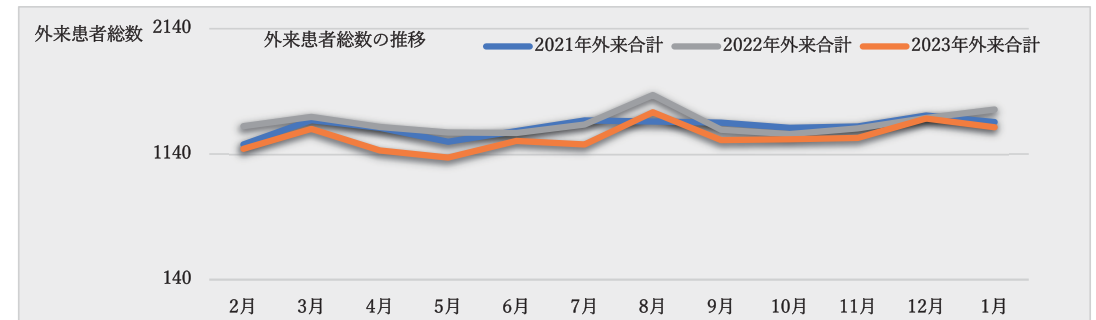
若手医師がより成長でき、一人前の医師として自立を促すために、教育、支援、学びの提供を熊本大学病院の地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座で行っていただきたいと思います。

地域医療においても最適な専門医療を患者さんに提供できるように、今後も努力していきたいと思っています。ご支援の程、何卒宜しくお願い致します。

人吉医療センター 呼吸器内科



小国公立病院 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター、荒尾市立有明医療センター
氏 名	坂田晋也
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【阿蘇医療センター】

- 毎週火曜日の外来診療を中心に勤務している。
 - 阿蘇の医療圏においては呼吸器内科専門医療施設がなく、阿蘇医療センターの外来において呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供を実践している。
 - 阿蘇医療センターは、医局内で診療科間の垣根が低く、症例の相談を行いやすい雰囲気がある。呼吸器疾患に関しても、気軽に相談して頂けるような状況である。
- 【荒尾市立有明医療センター】
- 毎週金曜日の外来診療を中心に勤務している。
 - 呼吸器内科の常勤医師がおらず、呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供、院内コンサルトの対応を中心に行っている。重症度が高い症例や専門的検査を要する症例など必要に応じて近隣の呼吸器内科専門施設との連携を取りながら地域医療を実践している。本院より呼吸器内科専門医師の派遣を行うことにより、他診療科で診療に難渋している症例などのコンサルトがより円滑となり、医師同士のネットワークも広がってきており病院内での専門医療の提供体制が充実してきている状況である。
 - 荒尾市民病院は臨床研修医が多く勤務しており、肺炎や肺腫瘍、COPD、気管支喘息、急性呼吸不全といった呼吸器疾患のコンサルト症例に対して、必要に応じて研修医への指導も実施している。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

本年度は阿蘇医療センターおよび荒尾市立有明医療センターには県の修学資金貸与医師は不在であったが、次年度には阿蘇医療センターに熊本大学医学部の地域枠入学医師1名の派遣が予定されており、診療指導やキャリア支援を行っていく予定である。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

【阿蘇医療センター】

- 呼吸器内科の外来診療患者数は下記の通りである。阿蘇医療センターにおける呼吸器内科外来の設置、専門医による診療の目的に近隣のクリニックからの紹介も増加してきている。院内の内科医師からのコンサルトも定期的であり、月に4-12例程度の初診外来症例を担当している。
- 【荒尾市立有明医療センター】
- 1カ月当たりの外来診療患者数は約30～60名程度である。
 - 荒尾市立有明医療センターでは、以前より呼吸器内科の外来でフォローしていた再診患者様の数が多く、診察予約枠が全て埋まっていることが少なくなかったが、専門的治療の後に安定した症例については、かかりつけ医や近隣のクリニックと連携を取りながら逆紹介も行っている。緊急症例を含め、他科医師からの院内コンサルト症例も対応している。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

【阿蘇医療センター】

- KMN文書送受信機能による受信数は、年間を通して増加傾向である。
 - 地域連携室の担当者との連絡を取りながら、KMNに参加している病院への紹介時など病診連携にて利用を推進している。
- 【荒尾市立有明医療センター】
- 呼吸器内科の専門施設で最寄りの病院が大牟田天領病院、次いで近い病院がくまもと県北病院である。大牟田天領病院は福岡県にあるためKMNの利用ができないが、くまもと県北病院呼吸器内科へ紹介する際や、熊本市内の病院への診療情報書の送受信にてKMNを活用している。
 - これまでに、荒尾市立有明医療センター内でのKMN普及のため地域連携室の担当者を含めたWebミーティングの開催や、実際に呼吸器内科外来より地域連携室へ出向いて、データの取り込みや送付の手続き等、KMNを用いた病診連携の推進に取り組んだ結果、KMNの利用数は増加傾向にある。

上記のいずれの病院においても、KMNの利用件数は増加傾向であるもののまだ医師署名ありの文書送信数は少ないが、ネットワーク推進医師を軸として各病院の担当者や他科医師を含めKMNの更なる普及を行っていきたい。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本県地域医療拠点病院としての役割には、紹介患者に対する医療提供、へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、地域の研修医、専攻医への教育、勤務環境改善に向けた取り組みがある。

【阿蘇医療センター】

地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。特に、救急医療については阿蘇地域における救急診療を一手に担っている状況であり、かかりつけ医からの信頼が厚いと感じる。常勤医師によるへき地診療(波野診療所)で定期的な外来診療も実施されている。また、呼吸器疾患については当科への研修医や内科専攻医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

【荒尾市立有明医療センター】

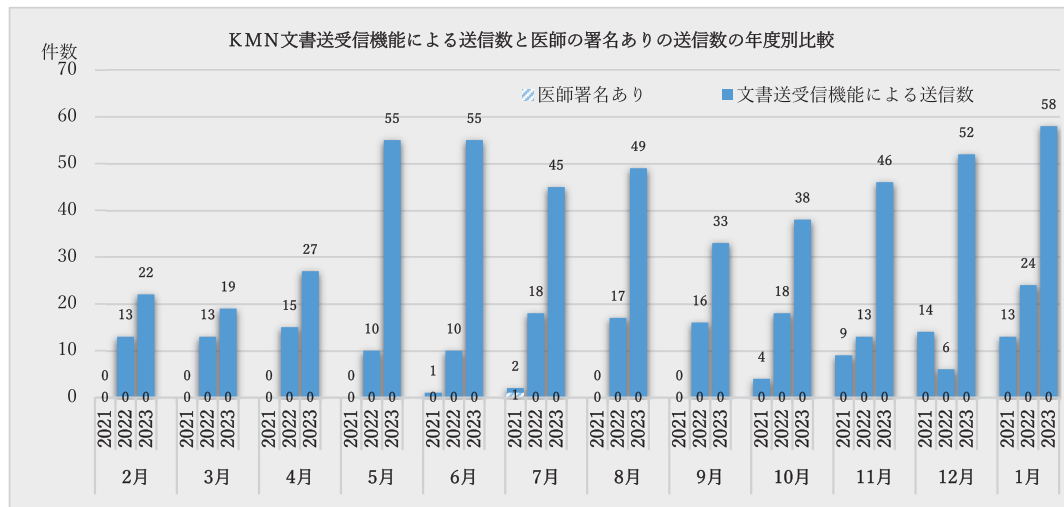
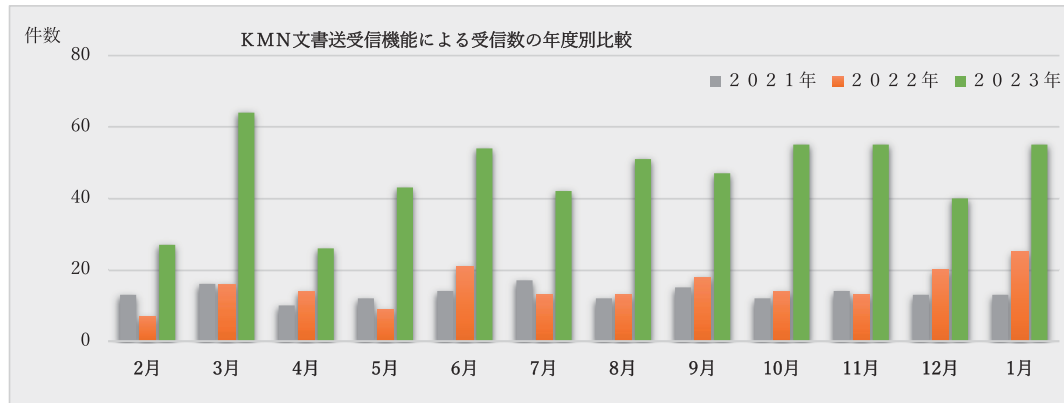
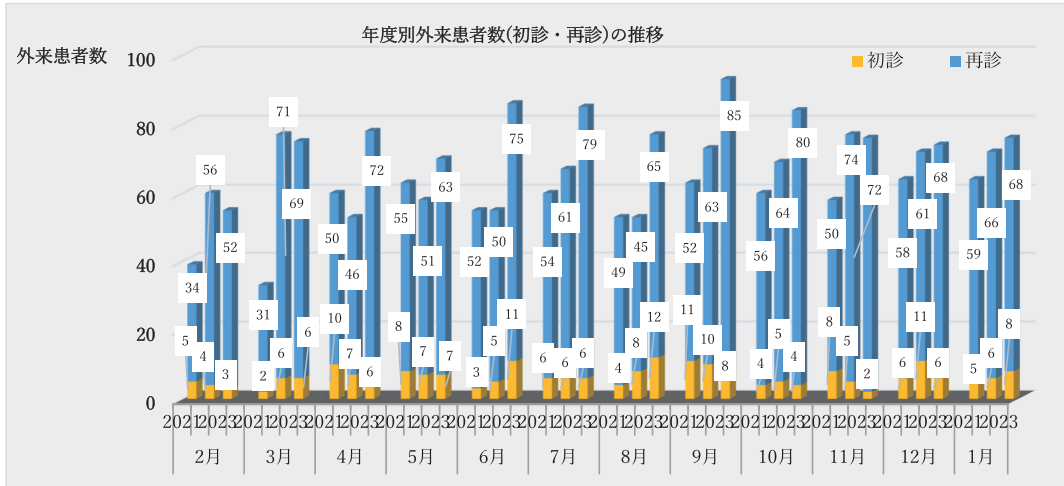
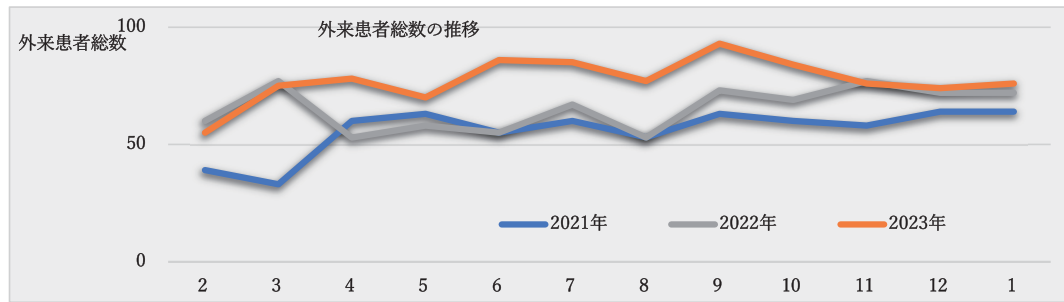
地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。呼吸器疾患についても、呼吸器内科への院内コンサルトで専門的助言を受けながら可能な限り自院内で治療が完結できるよう努力されている。そのような症例でも、呼吸器内科の専門施設でなければ検査あるいは治療などの対応が難しい症例については、近隣の専門機関への紹介を提案している。勤務する研修医の数が多く、救急医療を含めた地域医療研修に熱心に取り組まれていると感じる。また、呼吸器疾患については当科への研修医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

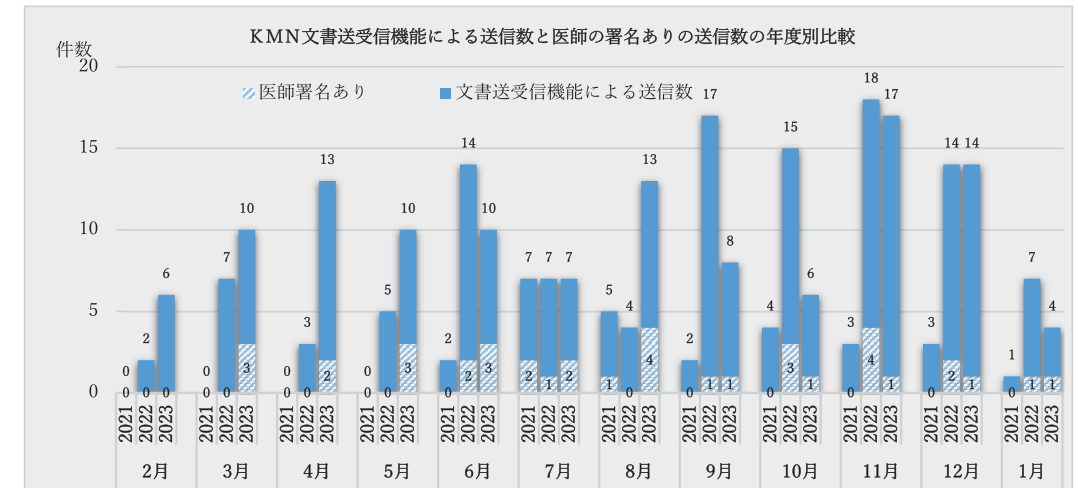
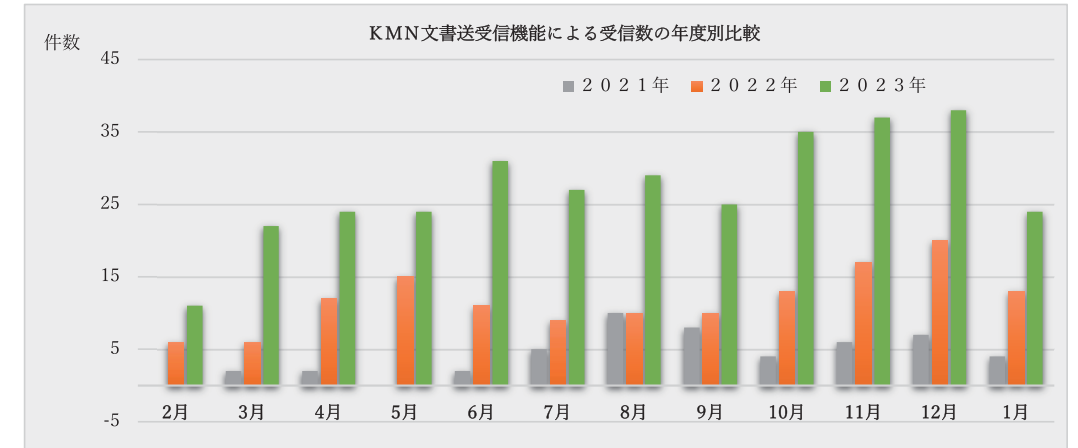
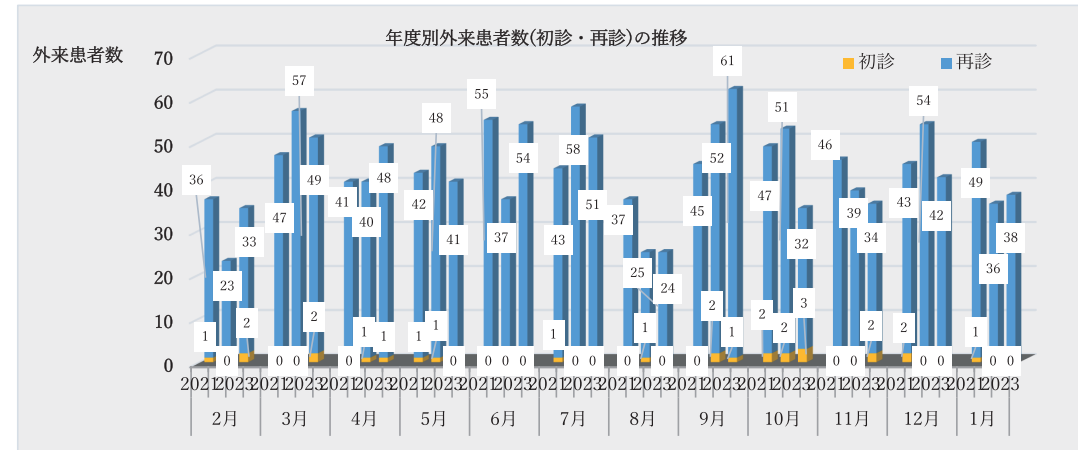
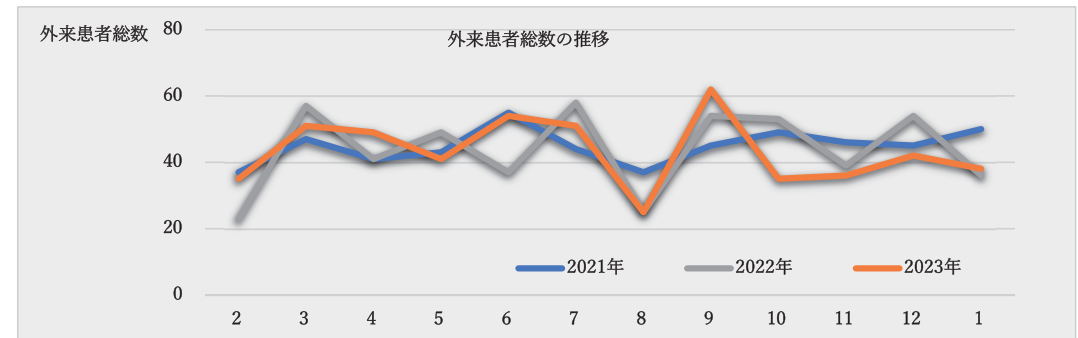
荒尾市立有明医療センターでは院内に呼吸器内科常勤医師がおらず、また近隣のクリニックでも呼吸器内科を専門とする医師が不在である。肺炎や気胸、気管支喘息発作をはじめとした呼吸器疾患で入院加療が必要なケースは内科、外科を含め各診療科が主治医となり対応しており、呼吸器内科への院内コンサルトや共診にて治療を行っている。また、胸膜炎・膿胸や間質性肺炎、肺癌など専門的加療を要する疾患については、近隣の呼吸器内科専門施設への転院なども含め対応している。課題としては、高齢者が多い施設であり呼吸器疾患以外に複数の重い基礎疾患を有している症例があり、症例によっては近隣の呼吸器内科専門施設でも総合的なケアが難しい場合がある点である。近隣の呼吸器内科専門施設でも基礎疾患毎に対処可能な専門医師、ないしは総合的な対処が可能な内科医師の配置が必要と考える。来年度より呼吸器内科医師が1名勤務する予定であるが、中堅医師の1名体制であるため引き続き診療支援を行う必要があると考える。

阿蘇医療センターも院内に呼吸器内科常勤医師がおらず、また近隣のクリニックにも呼吸器専門医が不在という状況である。また、呼吸器内科以外の専門診療科についても常勤医師の数が少ない点が課題と考える。地域で完結出来るような医療提供の実施のためには、各専門領域の医師の配置が必要と考える。また、救急医療についても地域の中核となる病院であるため、救急部の専属医師の配置が望ましいと考える。

阿蘇医療センター 呼吸器内科



荒尾市立有明医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、荒尾市立有明医療センター
氏 名	赤池公孝
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【小国公立病院】

診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。

●1ヵ月あたり20-30名です。

●肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、他病院へ紹介を行っています。

【荒尾市立有明医療センター】

活動内容としては、週1回4時間の呼吸器内科外来を行っています。

●診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。

●1ヵ月あたり約40-50名台です(外勤医が退職されその分の患者さんが増加しています)。

●肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、福岡県を含め他院呼吸器内科専門病院へ紹介を行っています。

●各科の他に救急外来からのコンサルトもあり、必要時は電話での指導・対応を行っています。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

【小国公立病院】

●若手医師からの相談もあり、必要時は電話や直接電子カルテを交えて指導も行っています。

【荒尾市立有明医療センター】

●現状ではありませんでした。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

【小国公立病院】

●昨年より初診・再診の患者数が減少していますが、呼吸器疾患に関しては間質性肺炎の管理や肺癌(経過観察や緩和主体の治療)症例の外来・入院治療も継続して診療できる状況です。

【荒尾市立有明医療センター】

●1ヵ月あたり約40-50名です(外勤医が退職されその分の患者さんが増加しています)。

●新患の数も増えており、呼吸器内科の必要度が増えている印象です。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

【小国公立病院】

●くまもとメディカルネットワークに関しまして、昨年と同様になかなか難しい状況です。登録件数は増えていますが、同院ではまだ使用が乏しく、係の方に相談しましたが、パソコンの機能が脆弱なため、ネットワークに使用をupするのに手間がかかり、ハード面のサポートも必要なようです。

【荒尾市立有明医療センター】

●KMNの利用状況：担当の方も配置いただいているため、経時的に使用頻度は増えている状況で、KMN使用には比較的問題なく行えている印象です。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

【小国公立病院】

●地域の拠点病院ですが、呼吸器内科において、気管支鏡検査などは施行できないため熊本市内への紹介が必要です。一方で、一般内科診療の需要も高い状況で、健診(X線読影)などのサポートも並行して行っています。

【荒尾市立有明医療センター】

●来年度は呼吸器常勤医が赴任されるため、本年度以上に患者さんの増加が予測されます。今後は徐々にとは思いますが呼吸器内科の診療能力の充実性が期待されます。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

【小国公立病院】

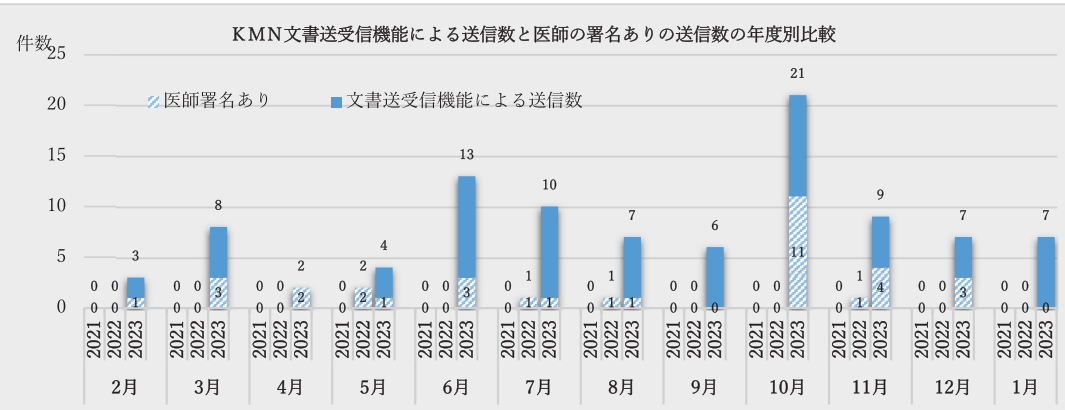
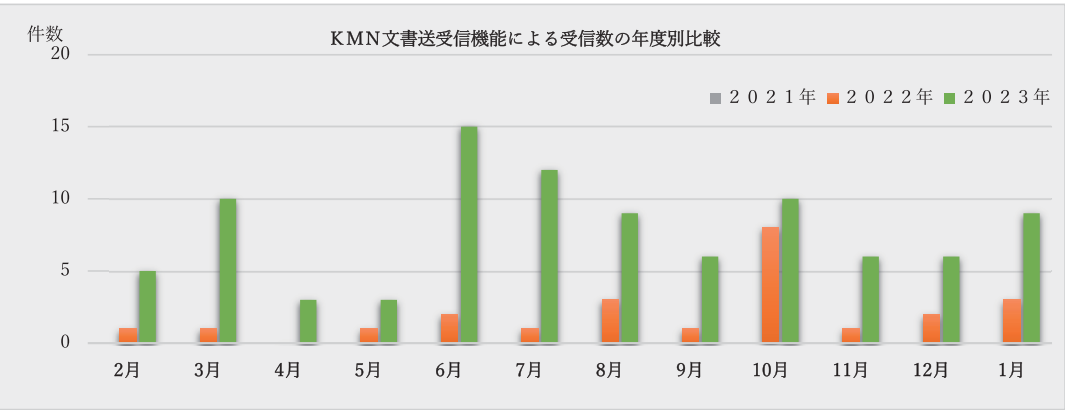
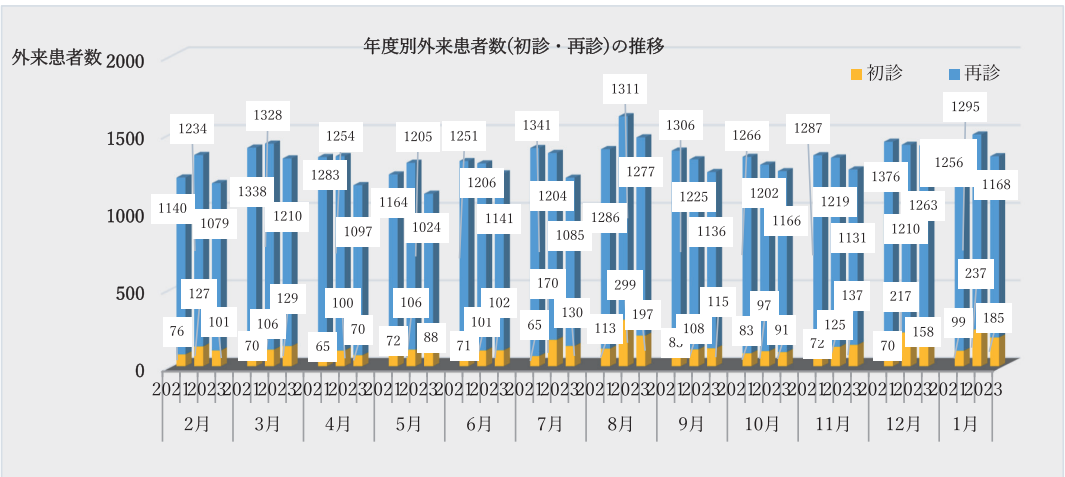
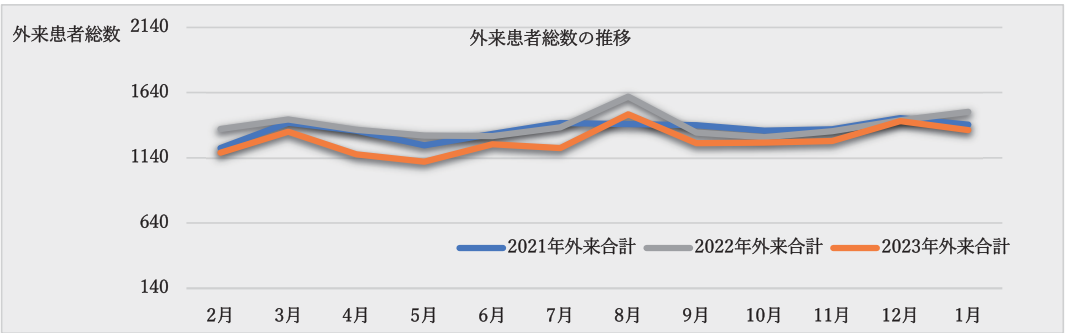
●熊本メディカルネットワークは機能していない状況。他病院から同院へKMNを使用しても診療情報の表紙のみしか取り込みができていないため、実質、手紙を別途に必要な状況です。

→ 同院の事務の強化が必要と考えます。

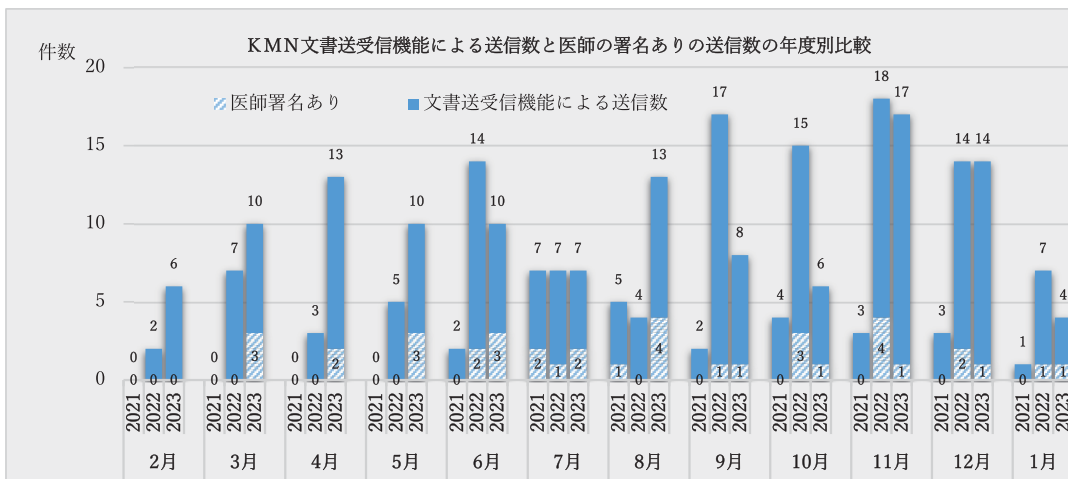
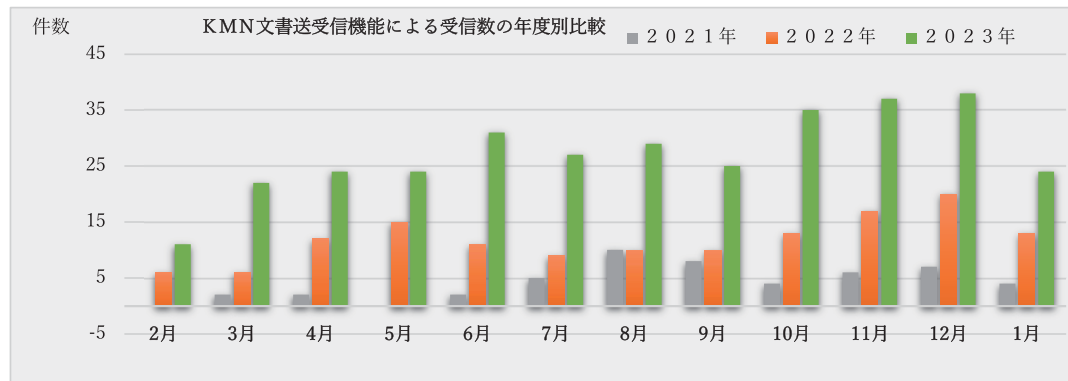
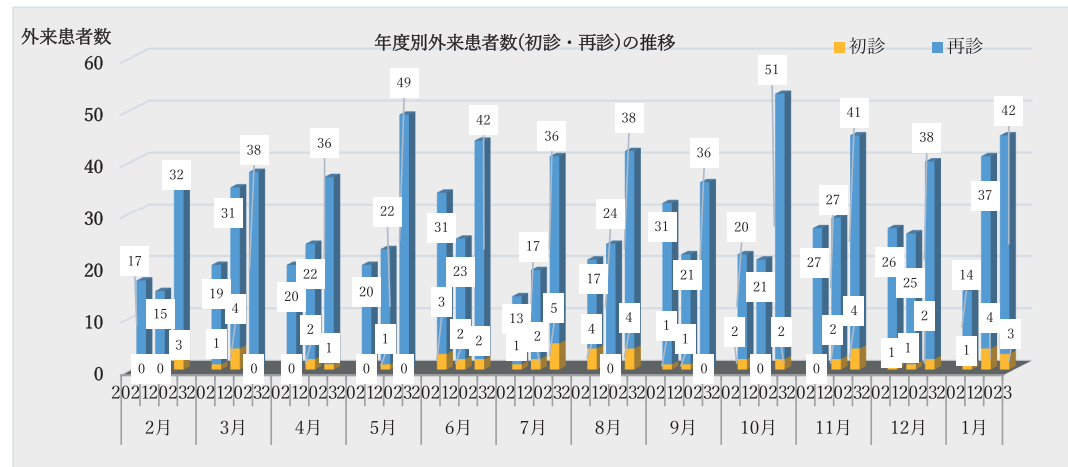
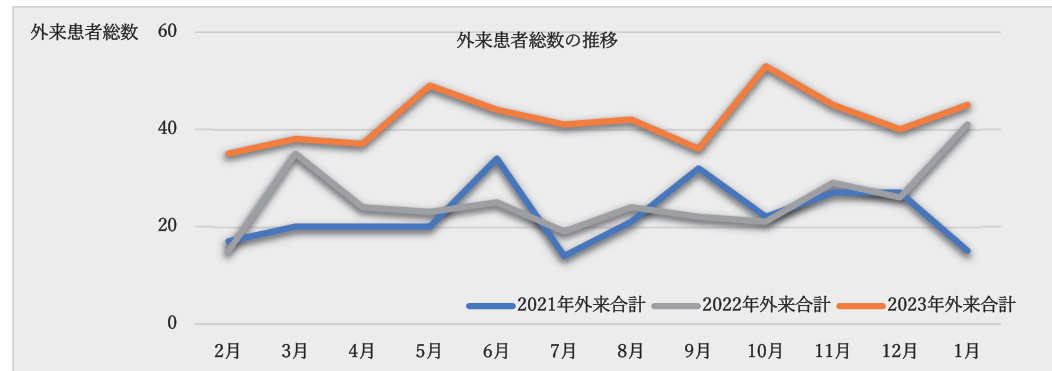
【荒尾市立有明医療センター】

●呼吸器常勤医の赴任はありますが1名のため、本年度以上に患者さんの増加が予測されます。同医師の負荷が予測されるため、非常勤医師のできる範囲でのサポートも必要になると考えます。

小国公立病院 呼吸器内科



荒尾市立有明医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター
氏 名	徳永堯之
診療科名	消化器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

3人の消化器内科医が、月・水・金に診療支援を行っている。消化器症状を有する初診患者、消化管・肝・胆膵疾患患者の定期外来、二次検診、消化管内視鏡検査および治療を行っている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当施設で臨床実習を行う学生で希望ある者に対して、内視鏡検査の見学および教育を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

消化管・肝疾患、胆膵疾患患者の診療として、診察、血液尿検査、腹部超音波検査、CT検査、MRI検査、生物学的製剤および化学療法を含む内科的治療を行っている。二次検診、消化管内視鏡検査、内視鏡的粘膜切除術を行っている。当年度は、初診患者数113名、再診患者数1120名であった。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

主に熊本大学に紹介する際、あるいは逆紹介する際に熊本メディカルネットワーク(紹介状、検査結果、画像データおよびレポート)を使用している。当年度の新規参加者は194名で、文書送受信機能による受信を559件、文書送受信機能による送信を458件行った。

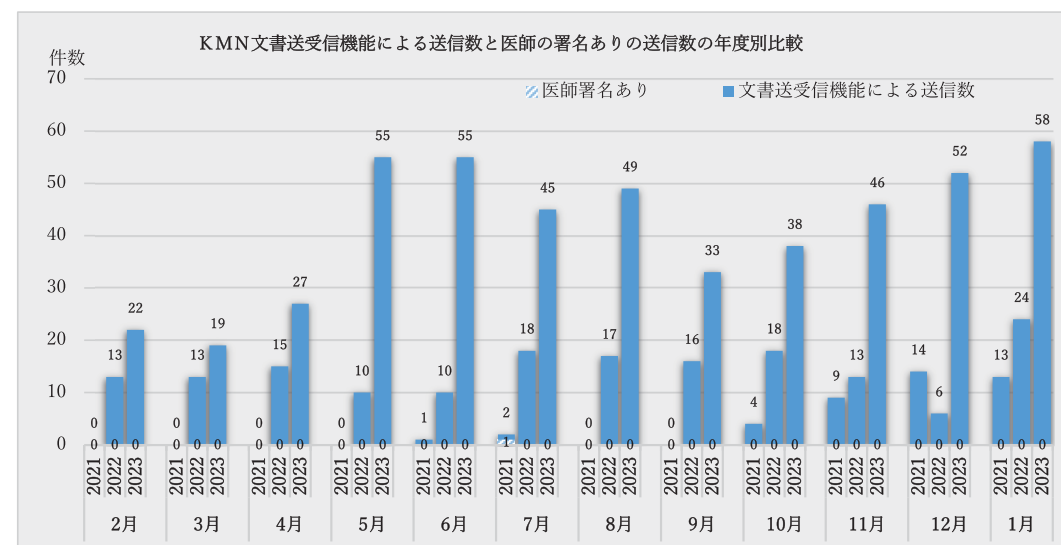
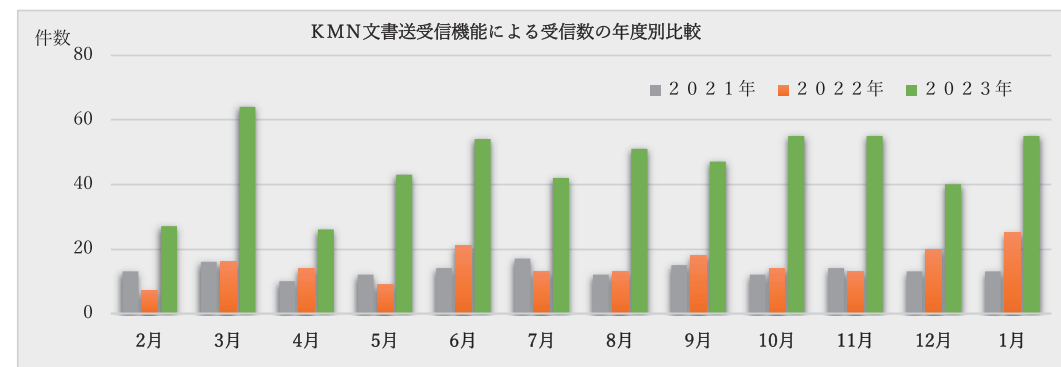
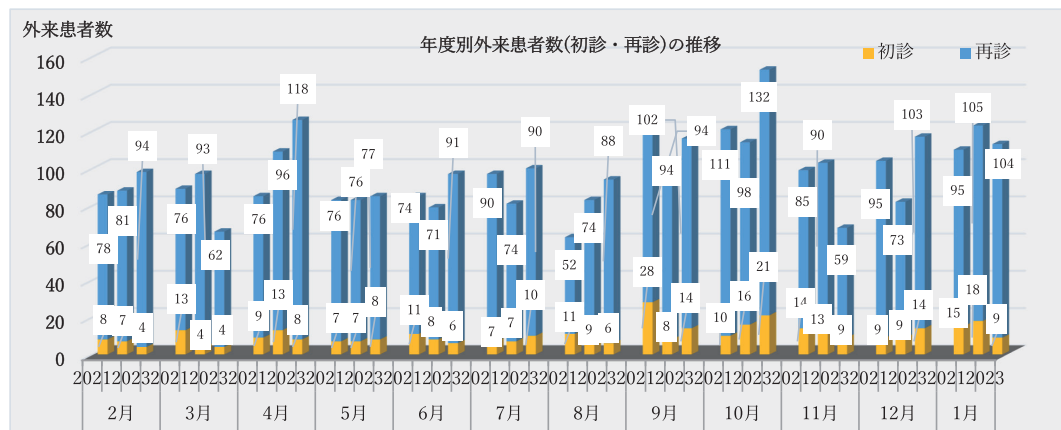
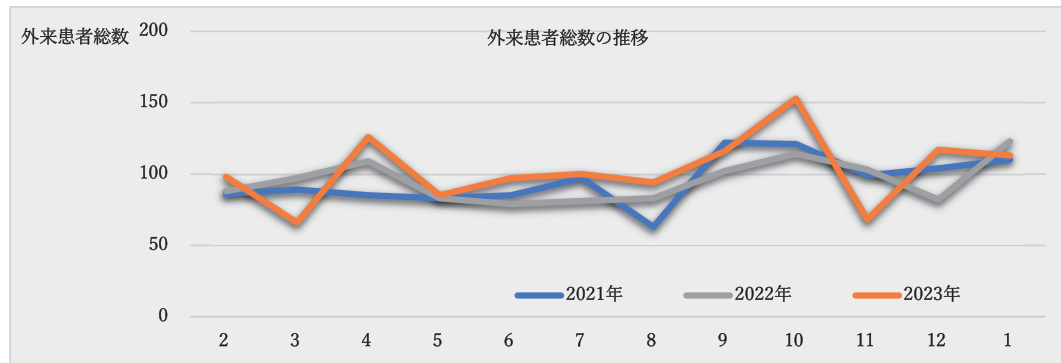
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

阿蘇地域の消化器疾患の診療および健診を通じての健康促進に貢献している。阿蘇医療センターで診療を完結できない症例は主に熊本大学病院に紹介している。熊本大学病院の診療後には当施設で引き続き診療に当たっている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

引き続き阿蘇地域の診療支援を行っていく。

阿蘇医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院名	熊本労災病院
氏 名	松野健司
診療科名	消化器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 消化器病学会指導医/内視鏡学会指導医の資格を有しており、消化管内視鏡検査および内視鏡治療の実施および若手医師の指導を行っている。特に治療難易度の高い内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)については中心的に実施および若手医師への指導を行っている。
- 内視鏡治療以外でも消化管領域については相談の機会を設け、推奨される方針などを提示している。消化管以外の領域についても相談を受けた場合には、熊本大学の各専門医師へ情報提供して推奨される方針などを確認し、その方針を伝達している。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 熊本労災病院の若手消化器内科医師へ指導を行っているが、R5年度には同院消化器内科には熊本県の修学資金貸与医師等若手医師は所属していなかった。
- R6年度から、同院消化器内科に熊本県の修学資金貸与医師等若手医師が1名赴任予定である。現在同医師は熊本大学病院消化器内科に所属し現在指導を行っているが、熊本労災病院へ赴任後も引き続き指導を行っていく予定である。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

2021年度から2023年度にかけて、外来患者数・入院患者数ともにほぼ横ばいで推移している。熊本市内への症例集中が進む中で、地域医療を維持できているデータを示していると考ええる。地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座医師が応援することで、治療を完結できていることも一因となっていると考ええる。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

熊本県内の拠点病院や八代圏域の中核病院、一般診療所とのオンライン連携を実践しており、メディカルネットワーク利用件数は増加傾向である。

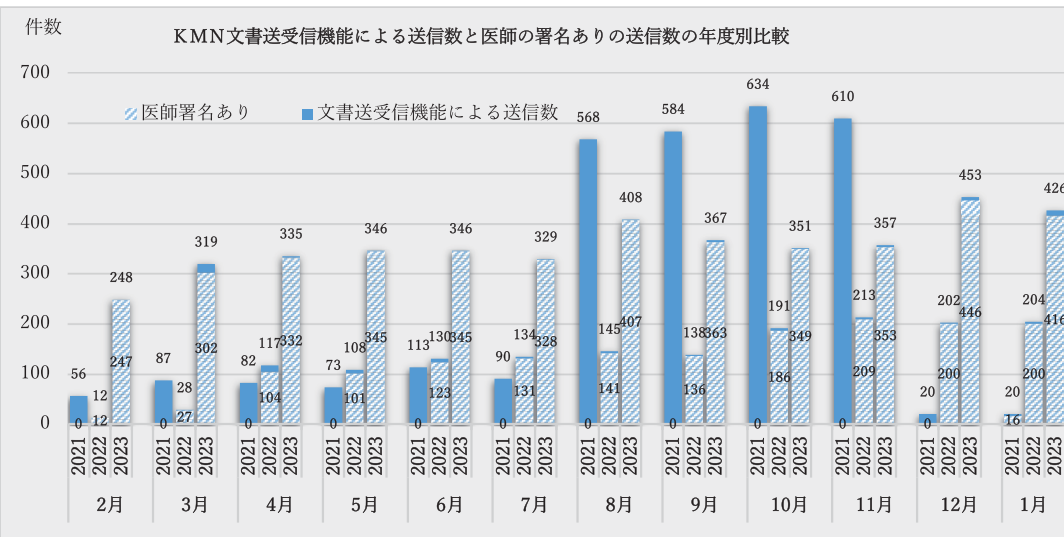
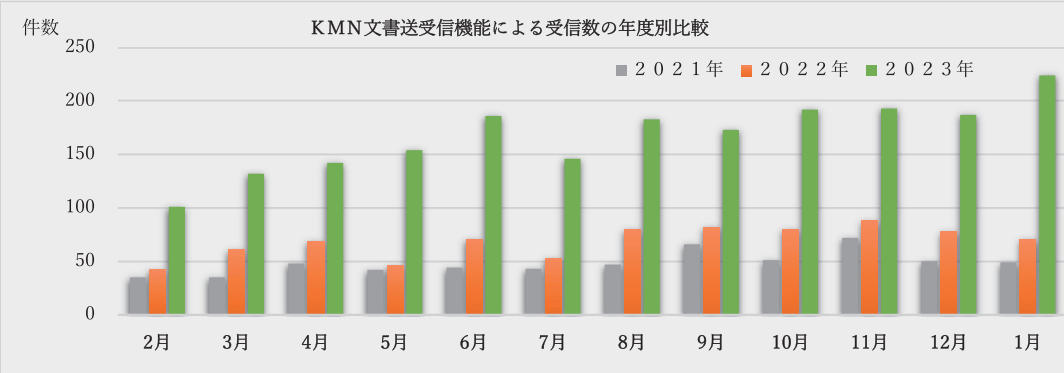
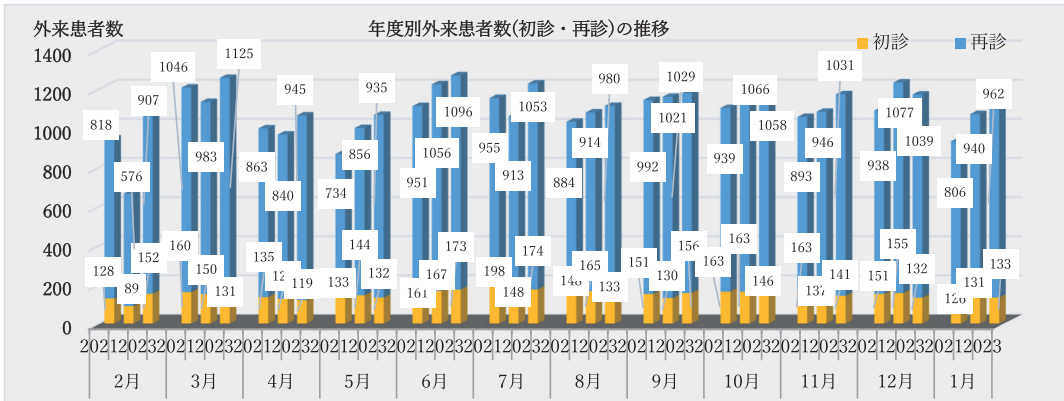
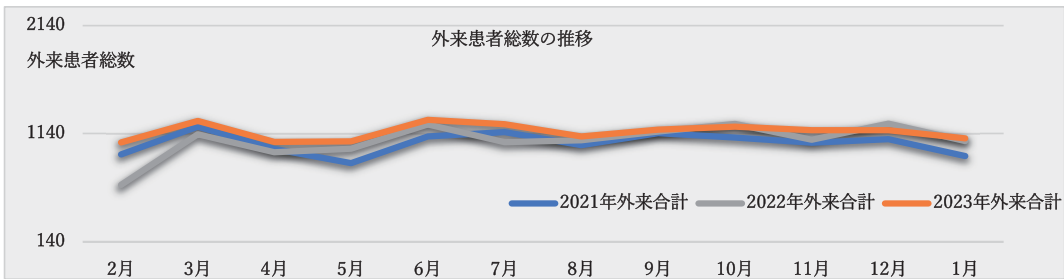
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- 熊本労災病院は八代地域のみならず熊本県南地域における中核病院の1つとして救急医療をはじめとする地域の高度専門医療を担っている。
- また熊本大学病院から医師が赴任することで定期的に医療連携の機会を設けることができ、より専門性が高い症例については転院加療などにスムーズに移行することができる。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

消化器内科診療は、消化管疾患・胆膵疾患・肝疾患と多岐にわたり、近年それぞれの分野内でも専門性がより高くなってきている。地域医療拠点病院において専門医師が各分野全てで揃うことは現実的には難しい。各病院の苦手分野などを、今後も地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座による専門医・指導医の医師派遣などで補っていく必要があると考えられる。

熊本労災病院 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院名	荒尾市立有明医療センター
氏 名	飯尾悦子
診療科名	消化器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

本年4月から新規で肝臓専門外来を立ち上げましたが、10月頃から近隣の医療機関から患者様をご紹介頂く機会が増えていきます。またこれまで大学病院に通院されていて状態が安定している患者さんを有明医療センターに紹介することで、患者さんの受診負担の軽減につながっています。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

今年度は週に1回午後のみの勤務のため、外来診察のみで研修医と接する機会はありませんでしたが、来年度は終日勤務になるため、研修医への肝臓疾患の教育・指導なども行っていききたいと思います。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

本年4月から新規で肝臓専門外来を立ち上げましたが、徐々に近隣の医療機関から患者様をご紹介頂く機会が増えていきます。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

KMNで大学と有明医療センター間のデータやり取りが増えています。患者様を大学病院に紹介すべきかどうか、事前にデータを大学に送り、各専門グループに相談可能になり、患者様の受診負担の軽減に役立っています。

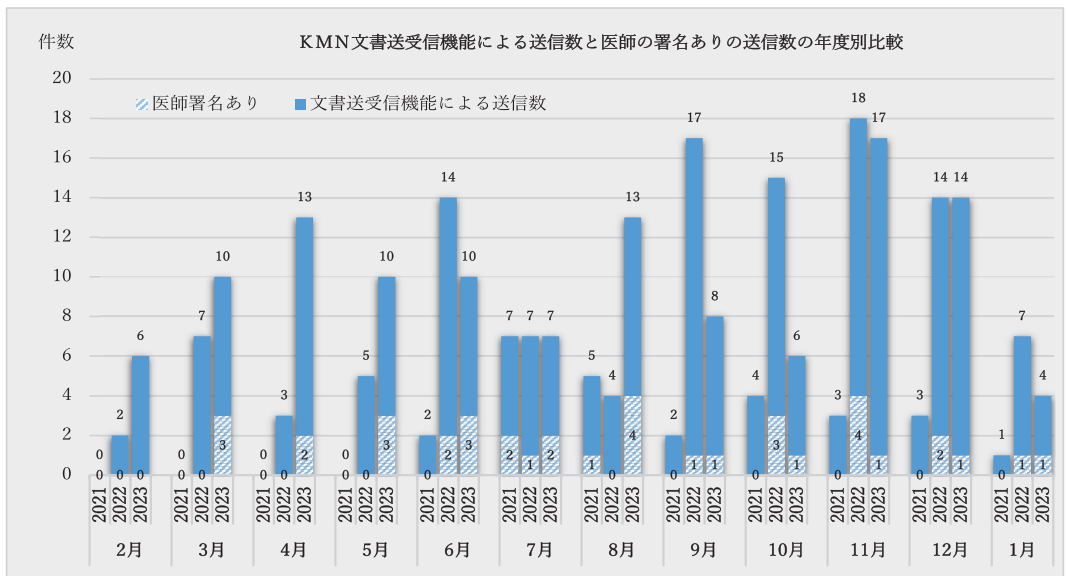
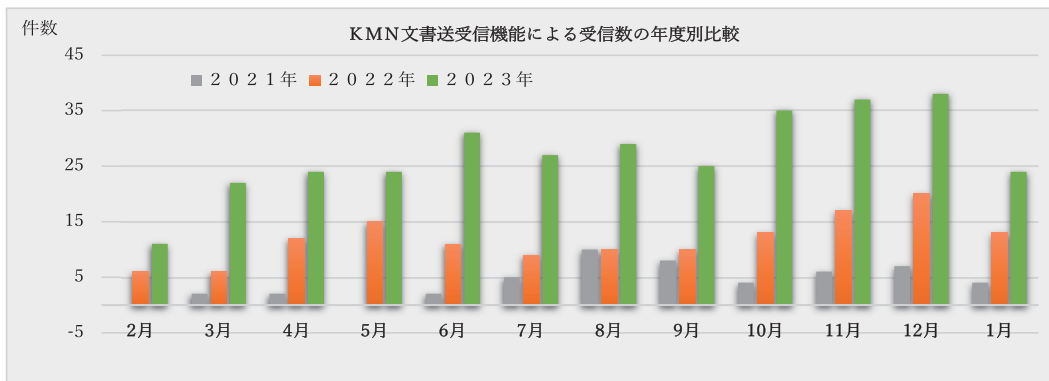
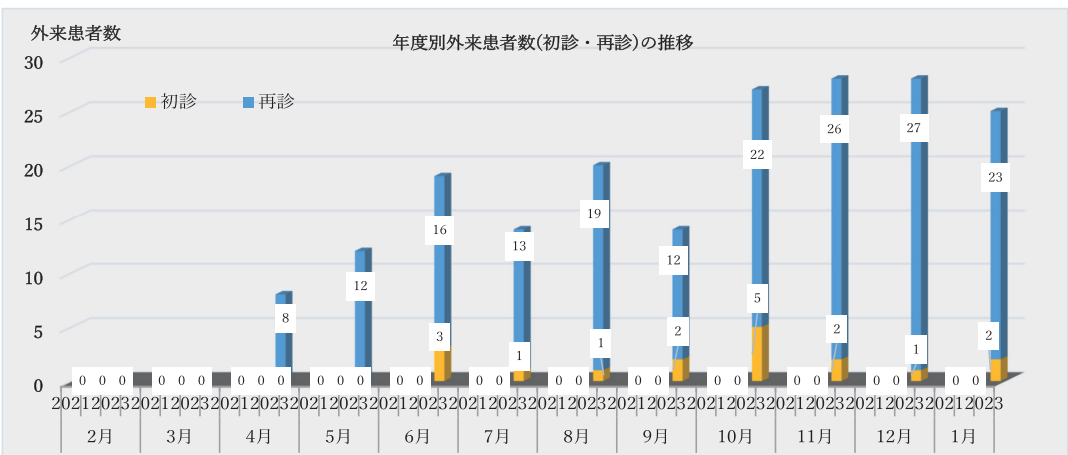
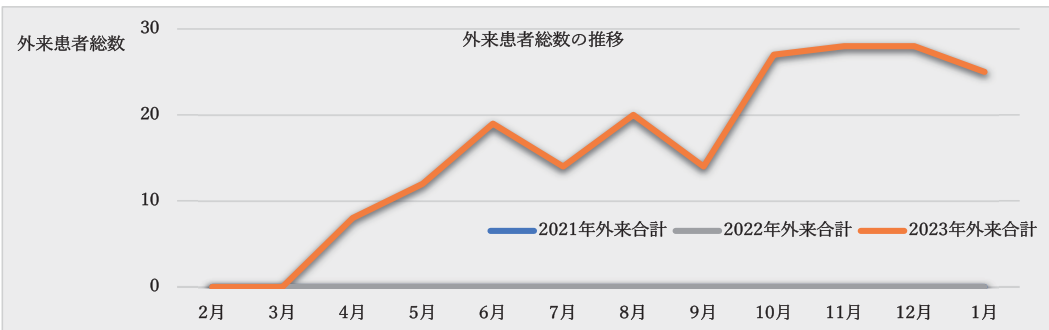
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

これまで有明医療センターでは肝疾患を専門に診療する医師がいなかったため、地域の医療機関から県北病院に紹介されていた患者さんを、地元で診療可能になると考えられます。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

熊本県は全国的にも肝臓が多く、またかなり進行した状態で発見されることも多いため、早期発見、早期治療のために地域の医療機関との連携が必要と考えられます。

荒尾市立有明医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院名	熊本総合病院
氏 名	坂田康明
診療科名	膠原病内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

地域連携ネットワーク推進医として、熊本総合病院の膠原病外来診療及びKMNネットワークの普及に努めた。KMNネットワークの使用率は年々倍増しており定着しつつある。診療面においては近隣の医療施設への逆紹介も増やすことができ、中核病院とクリニックの相互の医療連携が円滑になりつつある。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

熊本総合病院には日本リウマチ学会指導医(非常勤1名)、専門医(非常勤1名、常勤1名)が勤務しており、日本リウマチ学会認定教育施設の資格を維持している。医学部5年生の実習先でもあり、外来見学希望の際には陪席した医学生への指導を行った。

来年度からは当医局所属のリウマチ専門医を志望している修学資金貸与の若手医師が勤務予定のため、外来・病棟の業務に関して診療サポートを行う予定である。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

膠原病専門医がほとんどいない県南エリアにおいて、宇城周辺～鹿児島出水市に渡る広い医療圏を熊本総合病院でカバーしている。毎週水曜日の膠原病外来で、1外来につき初診2-3名、再診20名前後の診療を行った。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

KMNへの新規参加者数については39名(前年度105名)と頭打ちの状態ではあるが、KMNを利用した文書の送受信数については2072件(前年度638件)と3倍以上に増加しており、院内全体としてKMN利用が定着しつつある。

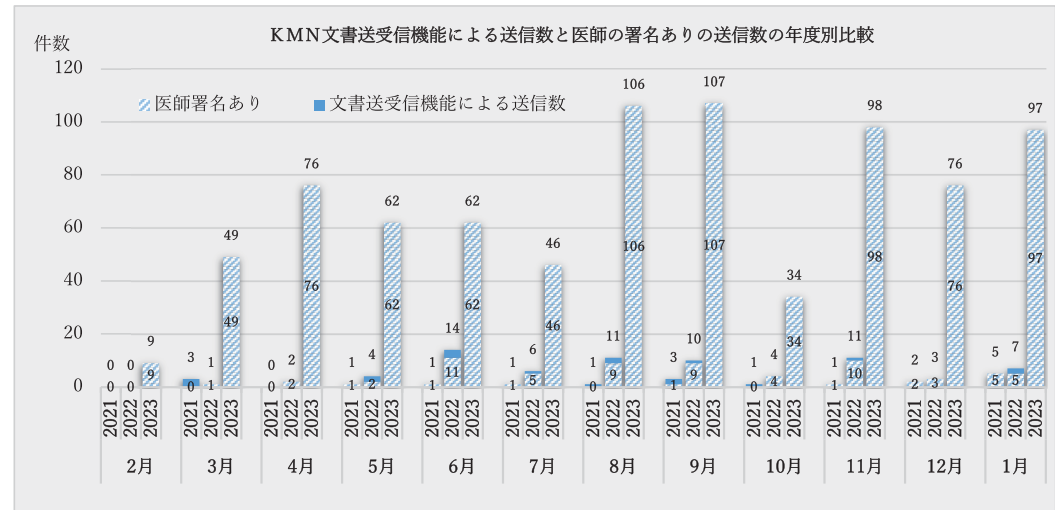
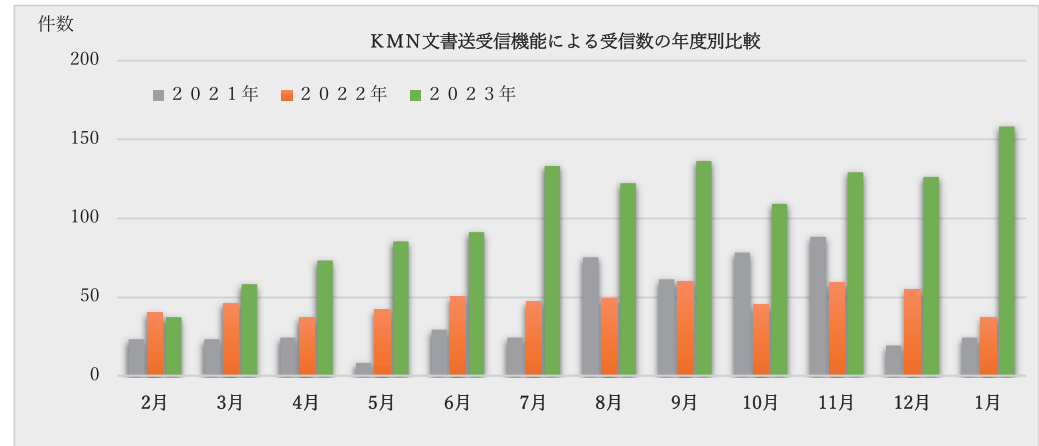
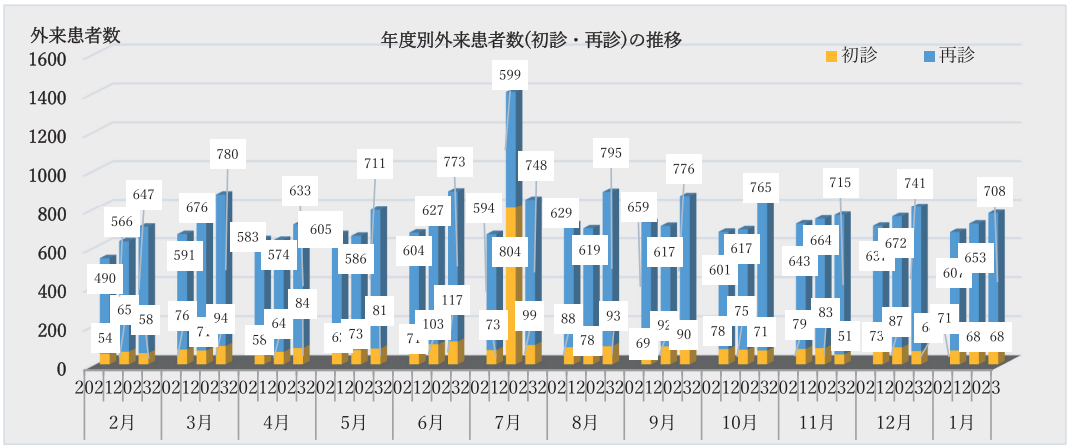
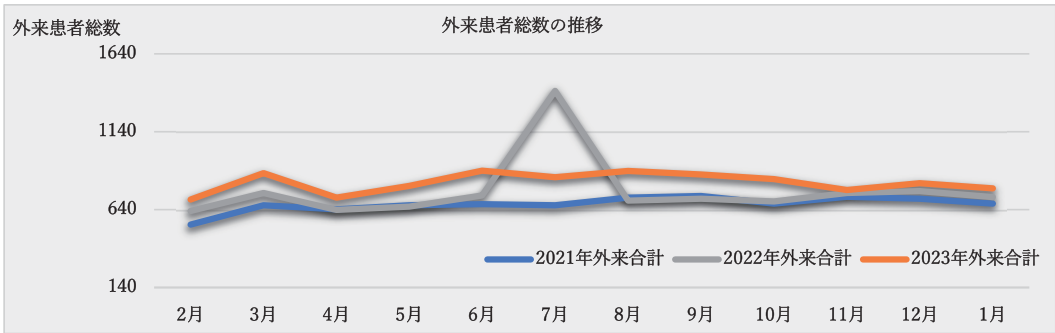
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

2023年9月には八代地域の拠点病院のリウマチ診療医をパネリストとして、県南地域の開業医を対象とした関節リウマチをはじめとした膠原病診療の地域連携の在り方について話し合う講演会が開かれ参加した。それにより安定した膠原病患者の逆紹介を受け入れ可能なクリニックや病院が明確となり、八代地域における膠原病診療における医療連携が円滑となった。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

八代地域においては紹介・逆紹介を含めて医療連携が整いつつあるが、人吉、球磨、水俣といった地域の医療圏の把握がまだ不十分であり、今後それらの地域にお住まいの患者さんの長期的な診療体系を構築していく必要がある。

熊本総合病院 膠原病内科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、上天草総合病院
氏 名	小野 薫
診療科名	糖尿病・代謝・内分泌内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

【小国公立病院】

糖尿病専門医がいない地域であり、阿蘇医療センターへの派遣医師とともに尽力している。外来業務はほぼ糖尿病専門外来になりつつあり、コントロール不良な患者の紹介を多く受けている。

月に1回、小国郷糖尿病対策チームブルーの定例会に参加している。病院スタッフや、小国圏域の保健師で構成された糖尿病対策チームであり、患者の通院中断の防止、若年層の糖尿病教育に力を入れている。毎月40名ほどの患者について受診状況、生活状況や保健指導の内容などの情報を共有している。来年度はコメディカル向けの研修会も行う予定である。

【上天草総合病院】

週3日の専門外来が行われており、糖尿病患者が多くを占めている。2型糖尿病に加え、1型糖尿病、その他疾患による糖尿病(脾摘出後、肝硬変等)などがあり、一般外来に比べると専門性が高い。専門医が中心に派遣されており糖尿病に関してはある程度、圏域内で完結していると思われる。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

【小国公立病院】

研修医が初期対応した患者について、それを引き継ぎ継続的な治療を行っている。診療の合間に相談を受けることもある。

【上天草総合病院】

外来の合間に専攻医からの相談も受けており、入院患者・外来患者問わず糖尿病診療、内分泌疾患についてアドバイスをを行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

【小国公立病院】

外来数は一定数を保っている。代謝疾患、特に糖尿病に関しては、近隣医療機関、院内からの紹介を受けており継続的に診療している。近年は大学病院に紹介する症例も増えている。患者はほぼ熊大から逆紹介で戻ってきており、円滑なネットワークが構築できつつあると考える。

【上天草総合病院】

増減はあるものの安定した患者数を維持している。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

【小国公立病院】

前年までは、ほぼ使用されていなかったと思わざるをえない状況であったが、送受信数が増えており、徐々に浸透しつつあると感じている。

【上天草総合病院】

着実に新規参加数、送受信数も増えており浸透しつつあると考える。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

【小国公立病院】

専門医療の提供を行い、拠点病院として医療の向上には力を尽くしてはいるが、マンパワー不足ではある。病診連携を積極的に行い、円滑な医療提供を行えるようにするのが課題と考えている。

【上天草総合病院】

専門外来が週3日あるということで、代謝疾患に関しては過不足なく医療を提供できていると考える。大学病院などへ紹介は、派遣医師が対応することで柔軟な対応が可能となっている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

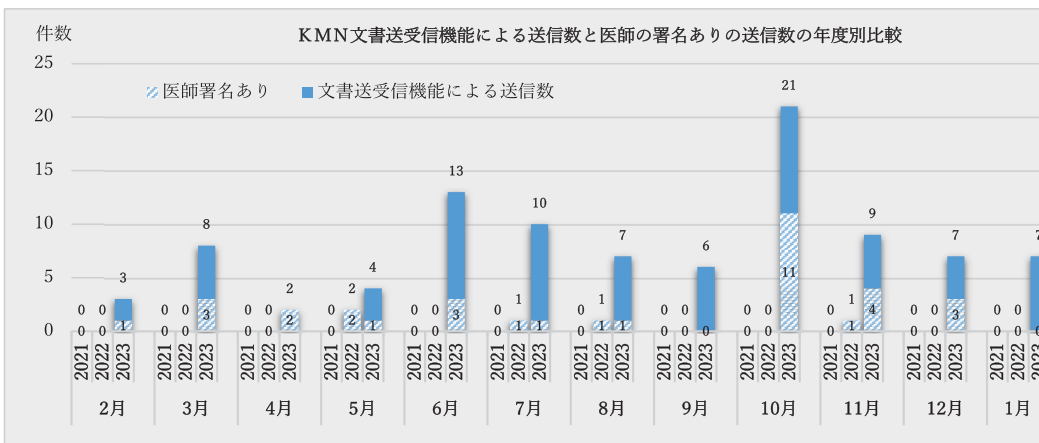
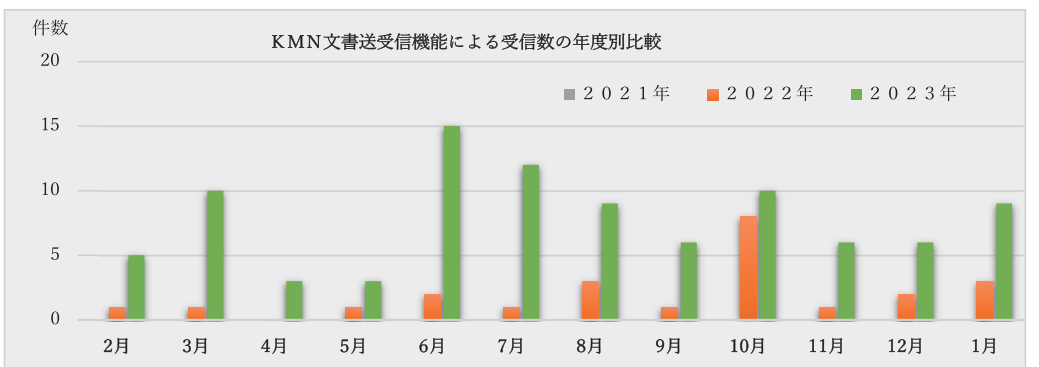
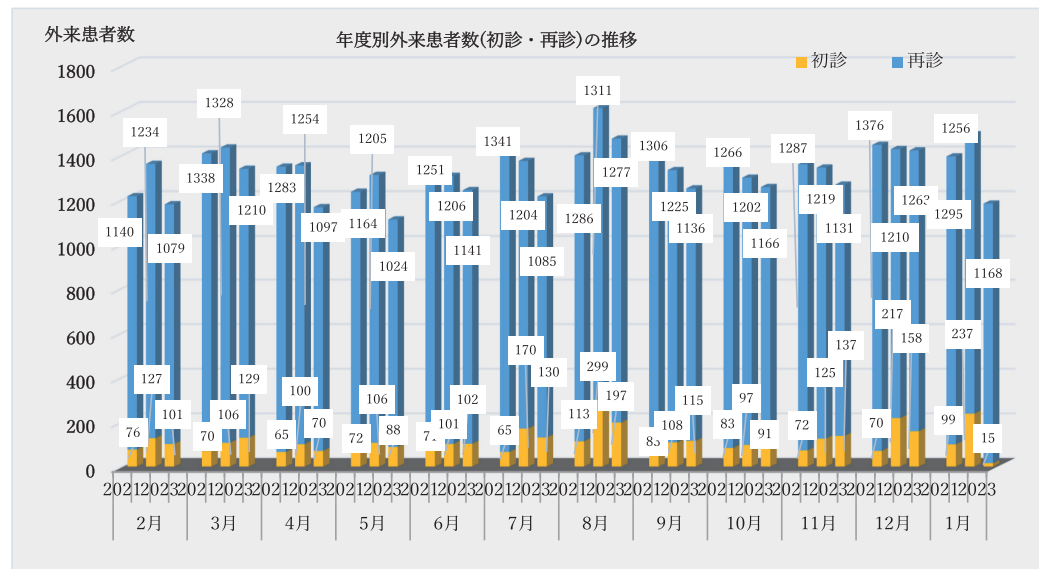
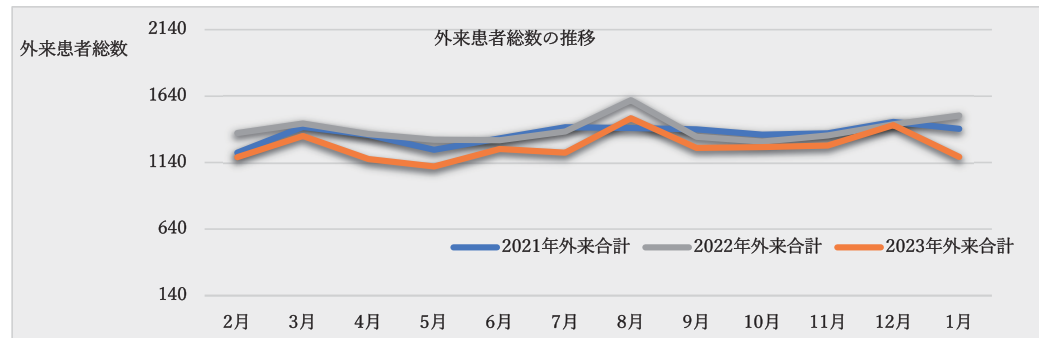
【小国公立病院】

高齢化率が高く、糖尿病患者が増えていくであろう地域である。若い世代に対する啓蒙活動が重要と考える。

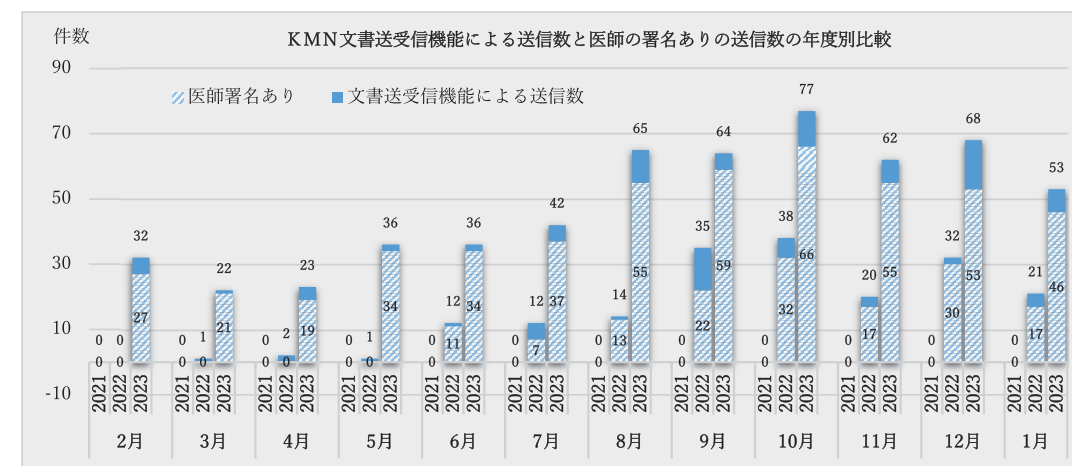
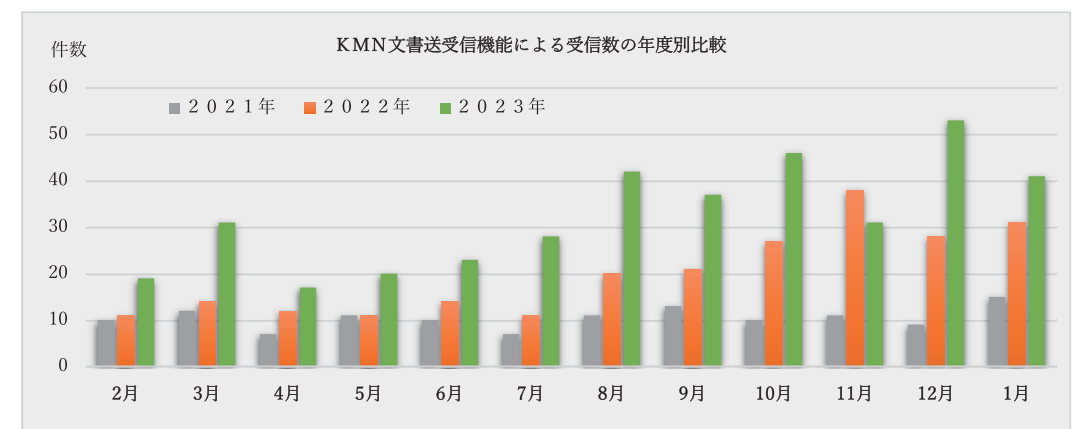
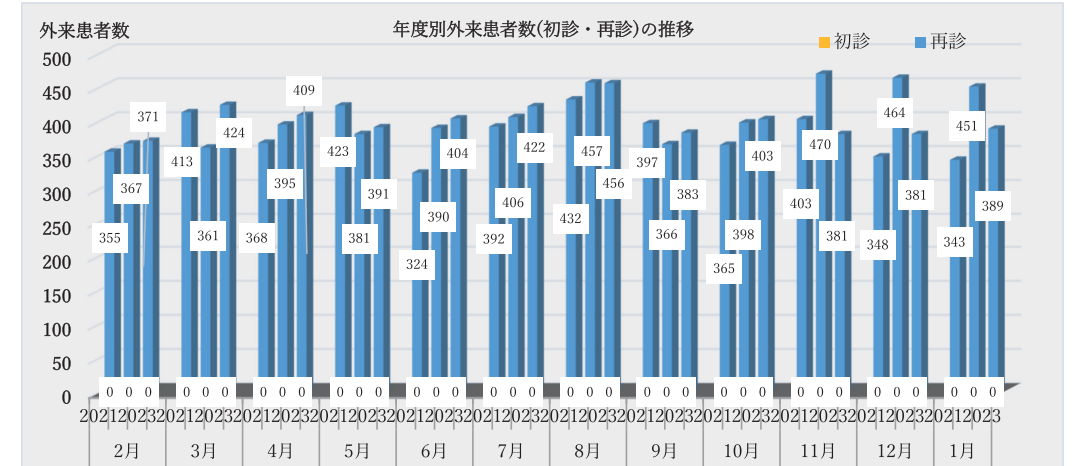
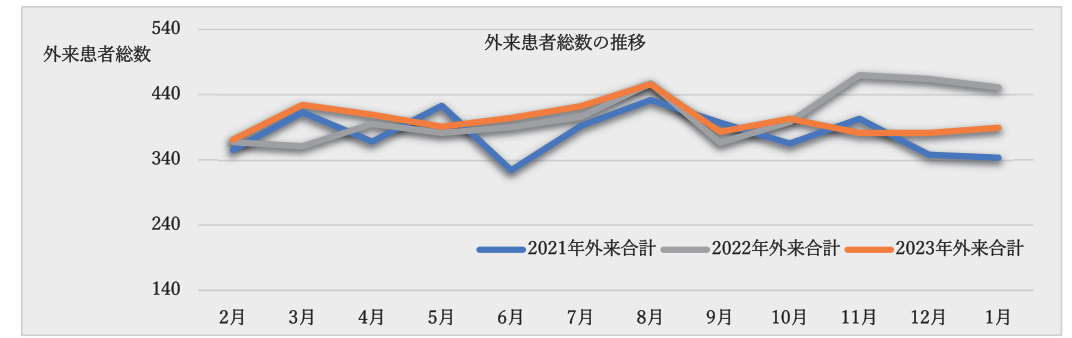
【上天草総合病院】

かかりつけ医作成を進めたいが、周辺に医療機関が少なく紹介先に難渋している。

小国公立病院 糖尿病・代謝・内分泌内科



上天草総合病院 糖尿病・代謝・内分泌内科



派遣先地域医療拠点病院名	公立多良木病院
氏 名	木山卓也
診療科名	循環器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

公立多良木病院の月曜日の循環器内科定期外来の支援を実施しております。
公立多良木病院の方針として、新患、再診に関わらず、walk inや救急搬送依頼のあった患者の受け入れは基本断らないことにしている為、毎週のように多くの外来患者の紹介を受けております。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

県就学資金貸与医師は循環器内科にはいないが、自治医科大卒の専攻医や若手医師や初期研修医に対して、学術集会参加の勧めや、外来患者診療面でのアドバイスを行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

外来患者、入院患者の総数に関しては、2021年から2023年にかけて、ほぼ横ばいで推移しており、明らかに目に見える増加は認めませんでした。

外来に関しては、やはり基本的にかなり高齢の患者様のフォローが多く、外来のブースは常に目一杯使用されている状態で、自身での平均外来患者数も20～30人あり、そこに新患者様や場合によっては救急対応も入ってくる状態です。

新しく外来でフォローする患者様が增える一方で、高齢による老衰をメインとして来院が難しくなるケースや、死亡による外来患者の減少がある為、患者数は見かけ上は増加していないのではないかと推測しております。

入院患者に関しても、病床使用率は高く、時折待機やコンサルトなどで病棟へ上がった際にも、病床が空いている印象は受けません。病床稼働は高い中であっても、こちらから外科へ手術を依頼してもすぐに対応頂けております。

しかし、入院している患者様の多くはかなり高齢であること、また近隣に回復期の病床を持った病院が全くないことから、急性期から慢性期まで公立多良木病院で担っており、一人当たりの入院期間が長くなっていることが、入院の患者総数の増加がしない一因ではないかと考えられます。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

2021年から2022年にかけては、新規でのメディカルネットワーク患者の総数は減少していましたが、2023年は倍ほどに増加しました。

また、熊本メディカルネットワーク文書送受信機能による受診者数は増加しており、2021年と比較しても4倍以上の受診数となっております。(2021：215人→2022：466人→2023：951人)

KMN文書送受信機能による送信数についても6倍以上の送信数となり、(2021：115人→2022：350人→2023：840人)、年々 KMNによる地域連携ネットワークの構築が進行している印象を受ける結果となっております。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

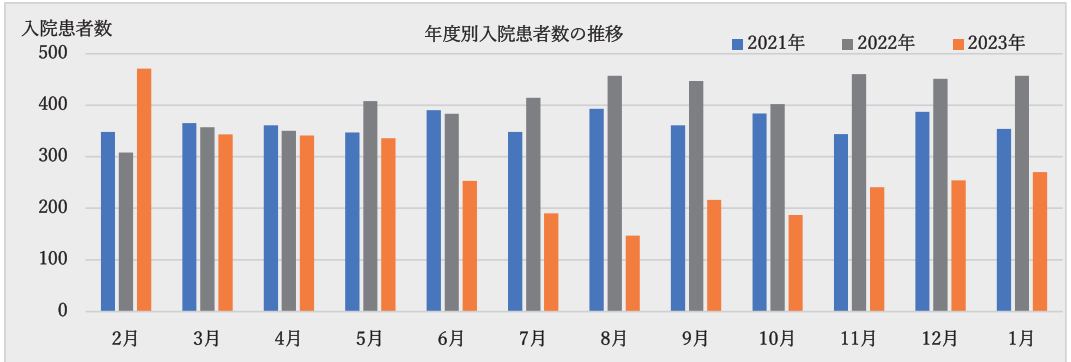
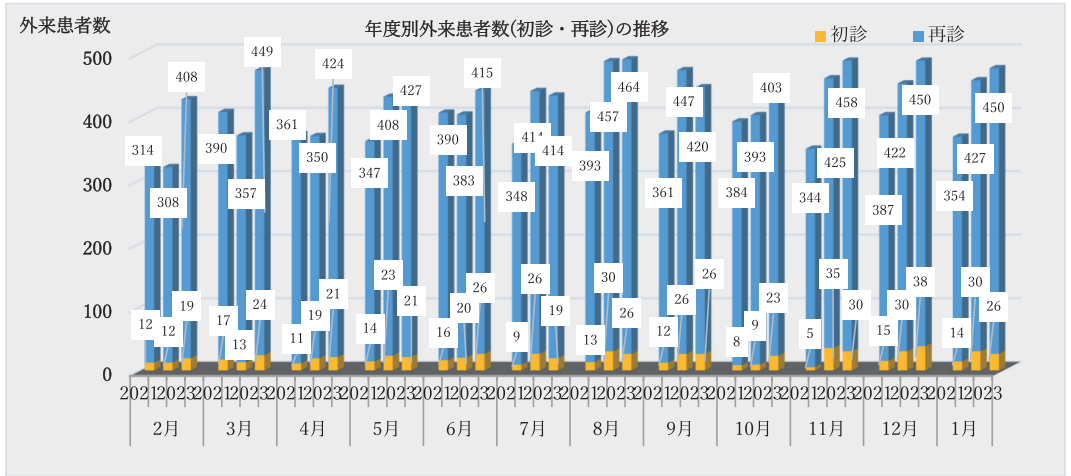
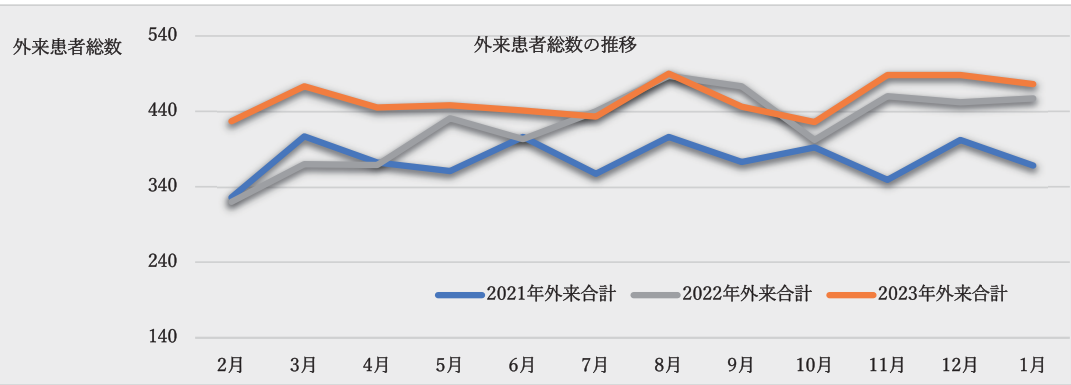
当院で対応の難しい患者の対応を近隣の病院へ紹介する際にも、連携室を通せば直ぐにKMNを通して送信できるシステムが構築できている印象であり、緊急の対応が必要な患者のスムーズな情報交換、受入や遠方の病院への患者の相談なども行いやすくなっております。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

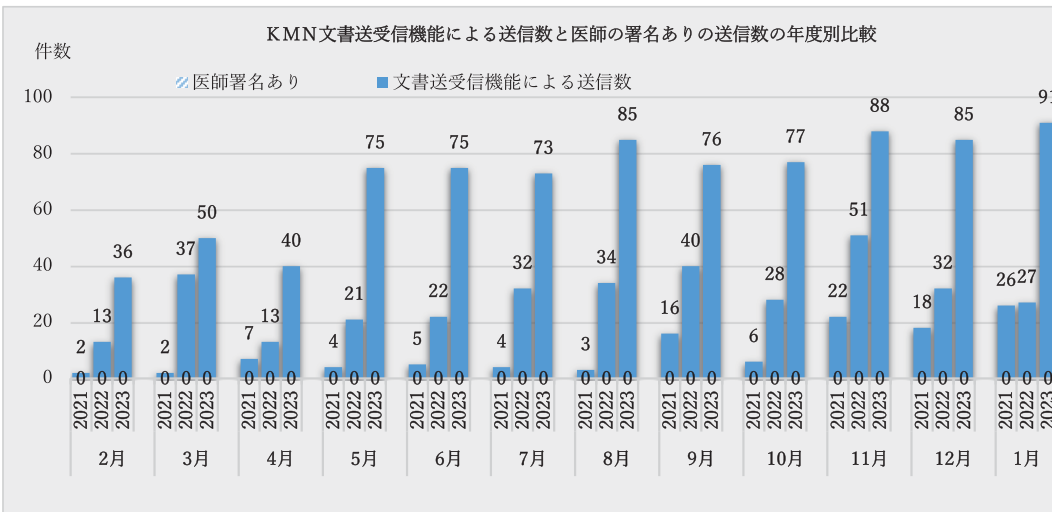
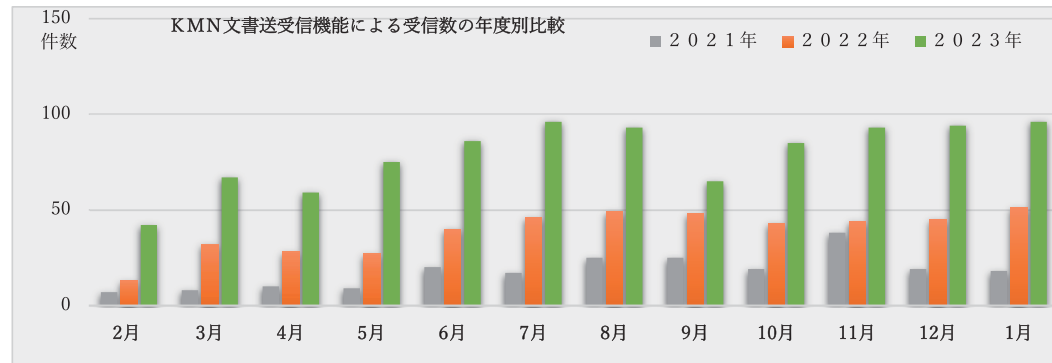
公立多良木病院は様々な病院からの受託があり、未だに紙文書での紹介も依然数多くある為、より多くの病院へのKMNの周知や加入を勧めていく必要があると思われます。

また、多良木地域における地域拠点病院として、地域医療に貢献している公立多良木病院において、今後よりKMNの普及を促進させ、地域医療連携ネットワーク体制の整備拡充を進めていく必要があります。

公立多良木病院 循環器内科



公立多良木病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院名	そよう病院
氏 名	平川今日子
診療科名	循環器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

そよう病院で循環器内科医として週に1回の外来診療、月に2回の当直業務にあたっている。外来診療においては1日あたり15～20人程度の定期外来、さらに新患・コンサルト対応、また同院にはエコー技師がいないため心エコーなどの業務にあたっている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師が当科外来で直接的に関わることは少なく、コンサルトや相談にたいしての対応を行なっている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

患者診察数は以下の通り。前年度と比較し+50人程度と受診人数は増加している。周辺病院からの紹介患者数も前年度と比較し+22人となっており地域の拠点病院として専門医療の維持が行えていると考えられる。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

KMN新規参加数はいなかったが、KMNを利用した紹介状のやり取り(特に受信数)は増加している。外来業務中にKMNを通じて送信を試みてはいるものの、PCが限定されていたり業務中の煩雑さからは難しい状況である。

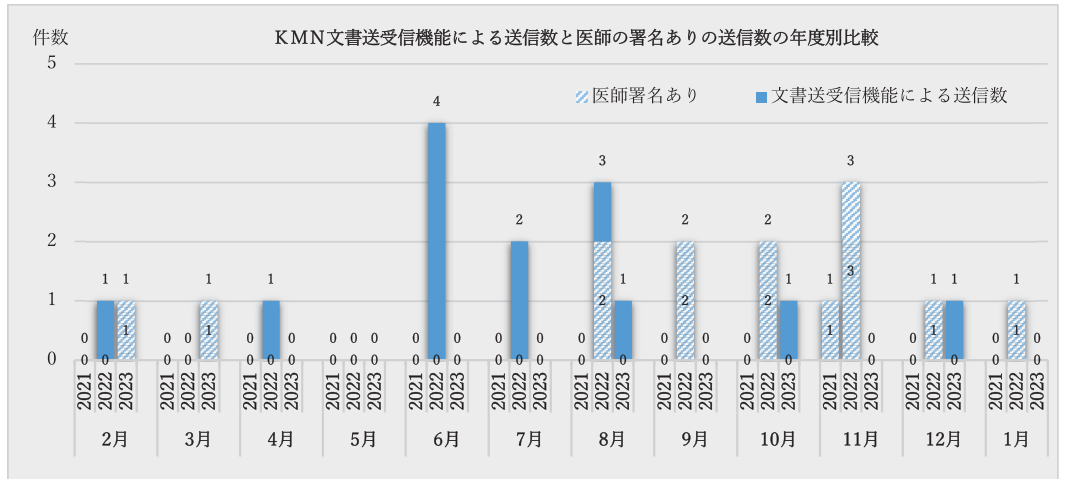
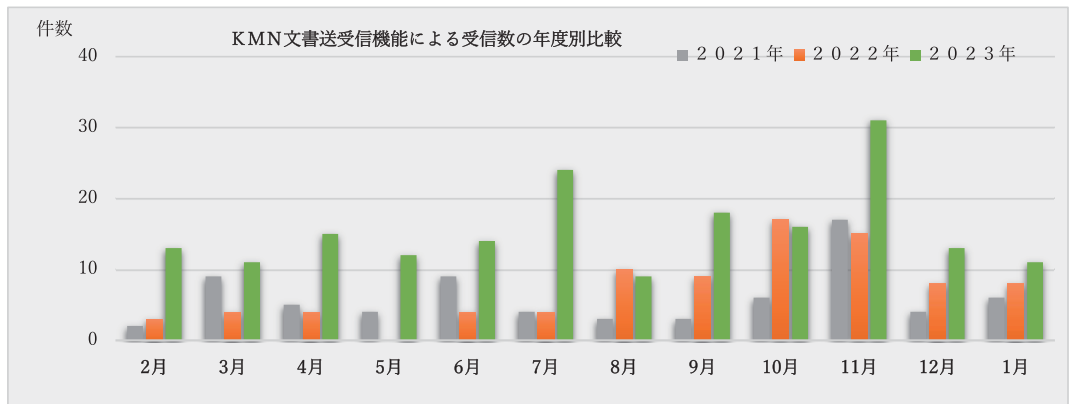
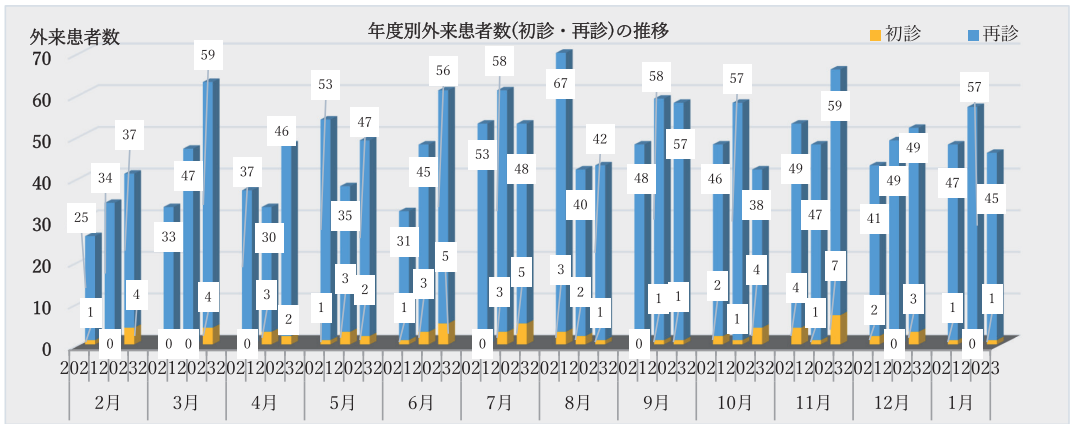
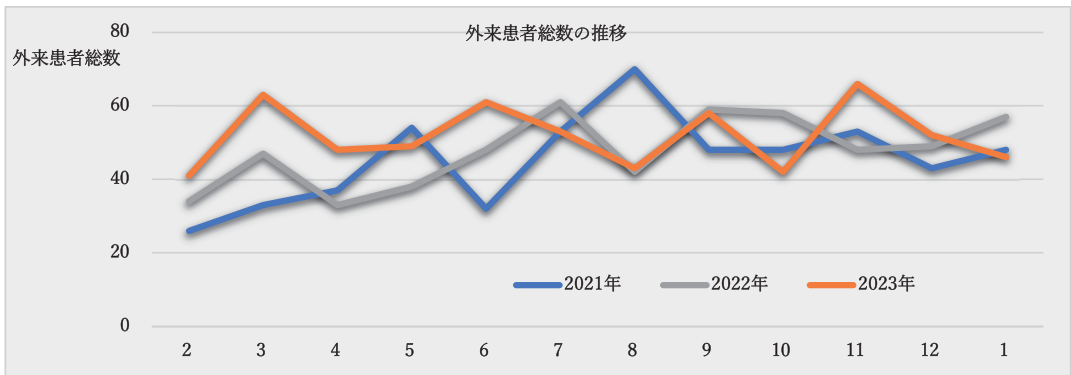
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の拠点病院において、循環器の専門診療の維持が行えている。受診患者に対するKMNの情報発信を行い参加者が増加傾向となった。また夜間においても救急患者を積極的に受け入れることにより、重症患者においての三次救急拠点病院への搬送をより安全に施行することが可能であり、また軽症～中症患者においても地域完結型の医療の提供が可能となっている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

KMN参加数は経年的には増加傾向にはあるものの、文書送信総数の増加には至っていない。そよう病院においては文書送信を一括して行う部署がなく、多忙な外来診療中へ送受信の手続きまで個々のDrで行うのは限界があり、他職種へのタスクシフトが必要であると考えている。

そよう病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院名	上天草総合病院
氏 名	山本正啓
診療科名	循環器内科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 午前中の循環器内科外来業務の中で、心臓アミロイドーシスといった循環器専門疾患のスクリーニングや専門医療機関への紹介、その後の医療の提供やリハビリテーションの案内を行っている。(拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。)
- 午前中の循環器内科外来業務の中で、循環器疾患以外の症例で、拠点病院における専門医不在の症例に対し、拠点病院の他科医師と連携を取り、大学病院等への紹介を行い医療の均一化に注力している。(地域におけるネットワーク構築に向けた地域医療の現状分析及び新たな方策の検討・提案・実践等。)
- 派遣業務中、拠点病院 循環器内科医師が、地域の看護学校の講義を実施いただいている。(熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と、新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援。)
- 大学病院や周辺施設との診療情報の共有に際してはくまもとメディカルネットワークを積極的に使用している。(各拠点病院が取り組んでいる「くまもとメディカルネットワーク」の普及活動の支援。)
- 午後はホルター心電図読影や、冠動脈造影CT検査、心臓カテーテル検査、心臓カテーテル治療を行い、専門医療の提供を行っている。(拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。)

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

症例に関して、相談いただいた際の情報提供にとどまっている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

午前中 外来 平均 34名/月
ホルター心電図 読影件数 平均 20件/月程度

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

次ページグラフ参照

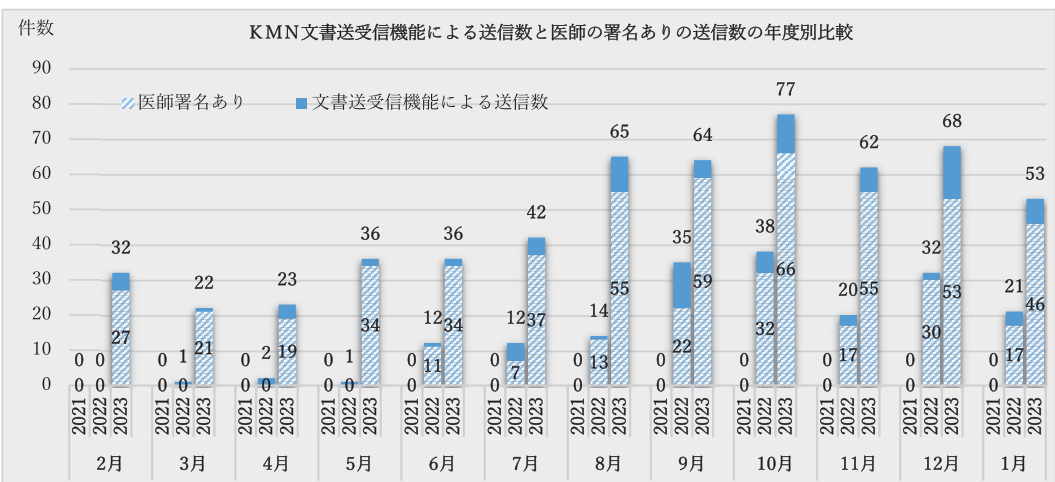
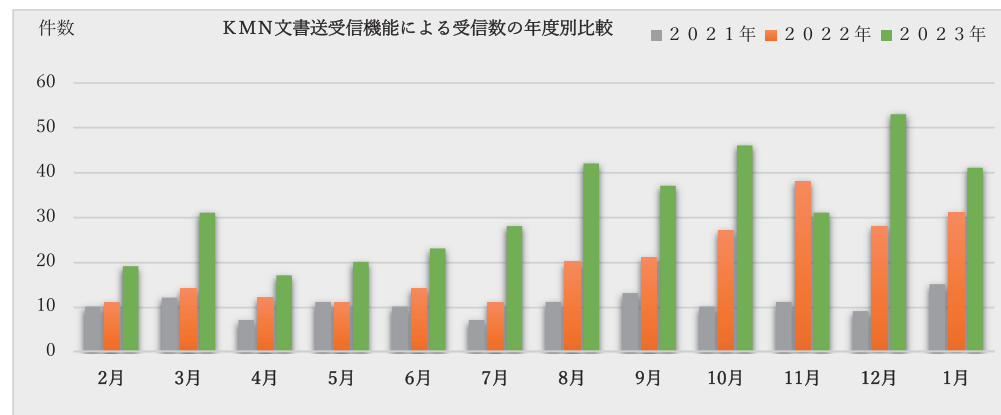
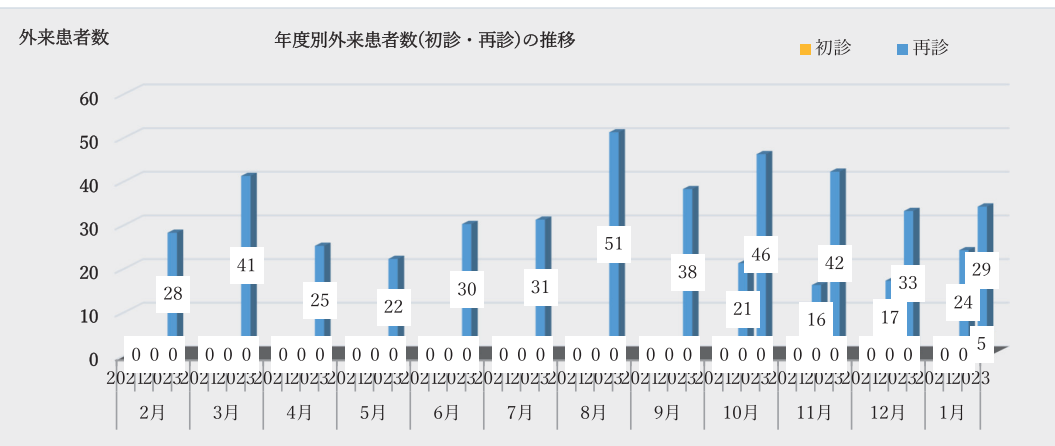
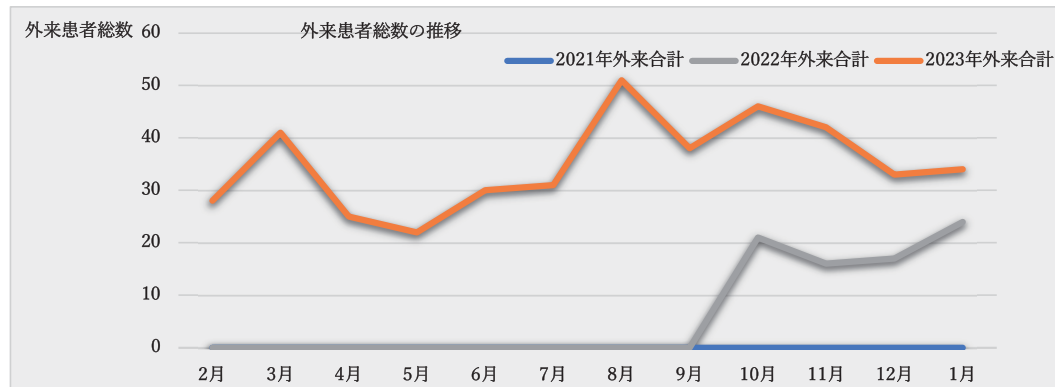
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

[項1.]への記載の通り、各業務を通して、地域医療拠点病院としての役割の一部を担っております。上天草総合病院の地域医療拠点病院の役割としては多岐にわたります。同病院は上天草の南部にあり、天草本渡と熊本市内との交通網からは少し異なる地域に位置しております。そのため、同地域の急性期疾患への早期治療や早期対応を多く担っております。また、周囲には熊本県唯一の離島である御所浦があり、同離島の県民の医療を担っております。さらに、上天草総合病院は健康管理センターをはじめ、介護老人保健施設、上天草訪問看護ステーション在宅看護支援センター、居宅介護支援センター、看護学校などを併設しており、同地域の健康や保健、看護、介護、リハビリテーション、そして教育に強く貢献している状況であります。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

教育という面では、上天草総合病院で勤務いただいている、『県の修学資金貸与医師等の若手医師』の情報を事前に頂戴できると大変ありがたいと考えます。

上天草総合病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院名	水俣市立総合医療センター
氏 名	北野雄希
診療科名	消化器外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

手術応援、外科手術症例の検討などを行ってきた。

水俣医療センターで手術可能な症例は、可能な限り現地で手術を行い、手術困難な症例は大学病院で受け入れることで、現地の患者に適切な医療が提供できるように心がけた。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

研修医に外科の魅力を伝え、外科への入局者が増えるように心がけた。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

前年度と比べ、若干の手術症例・入院患者の増加となった。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

前年度と比べ、若干の手術症例・入院患者の減少となった。

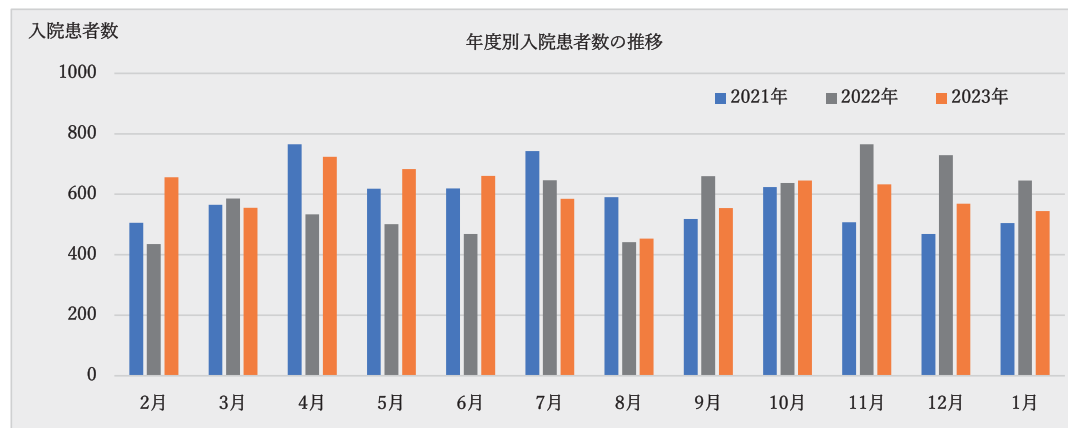
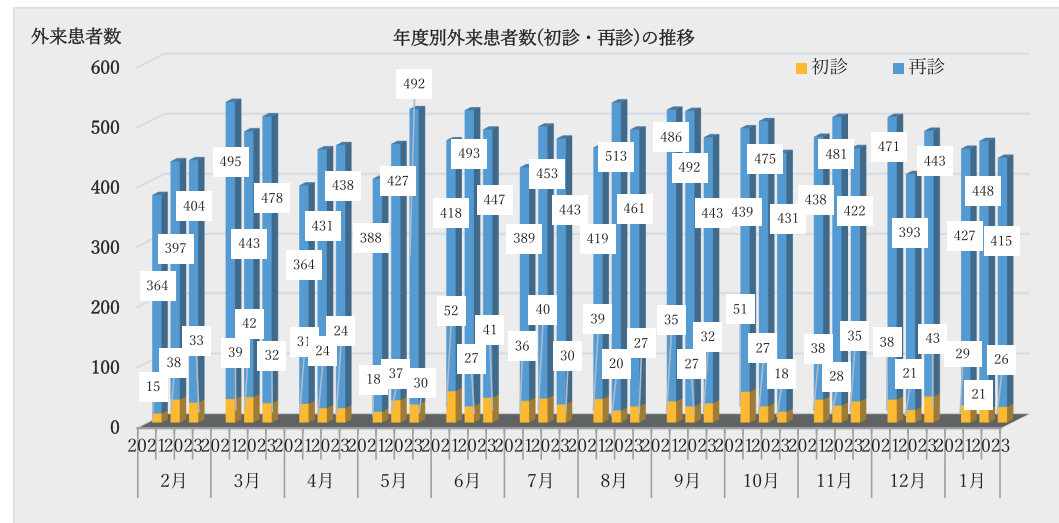
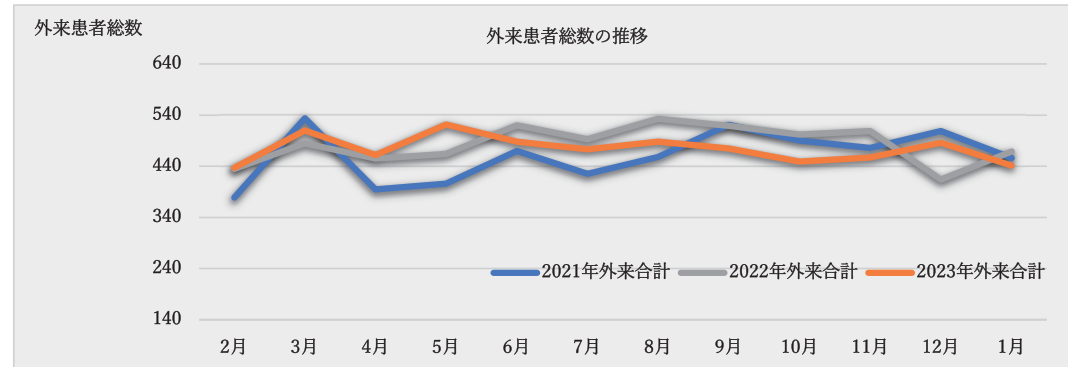
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

水俣医療センターで手術可能な症例は、可能な限り現地で手術を行い、手術困難な症例は大学病院で受け入れることで、現地の患者に適切な医療が提供できるように心がけた。

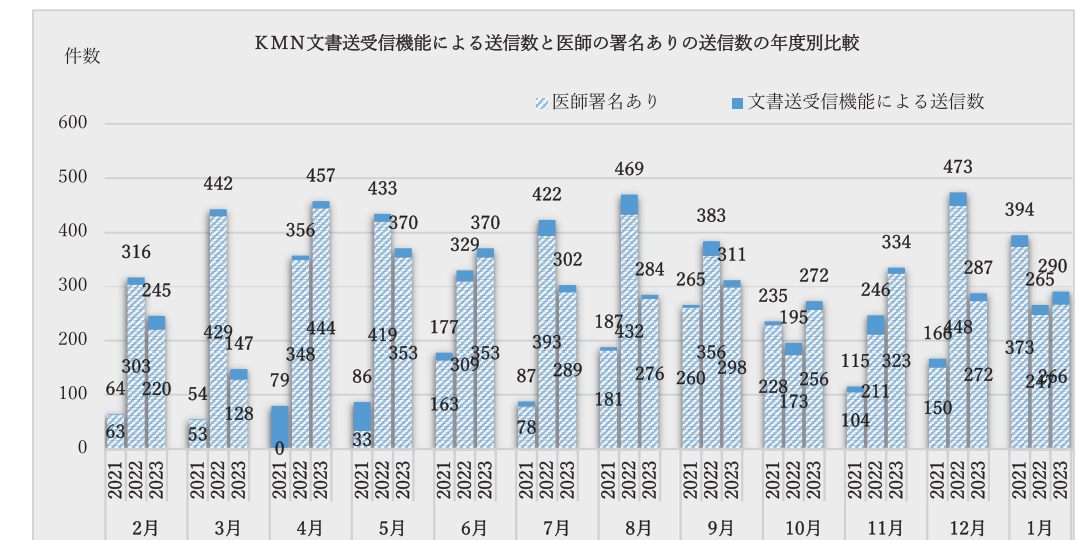
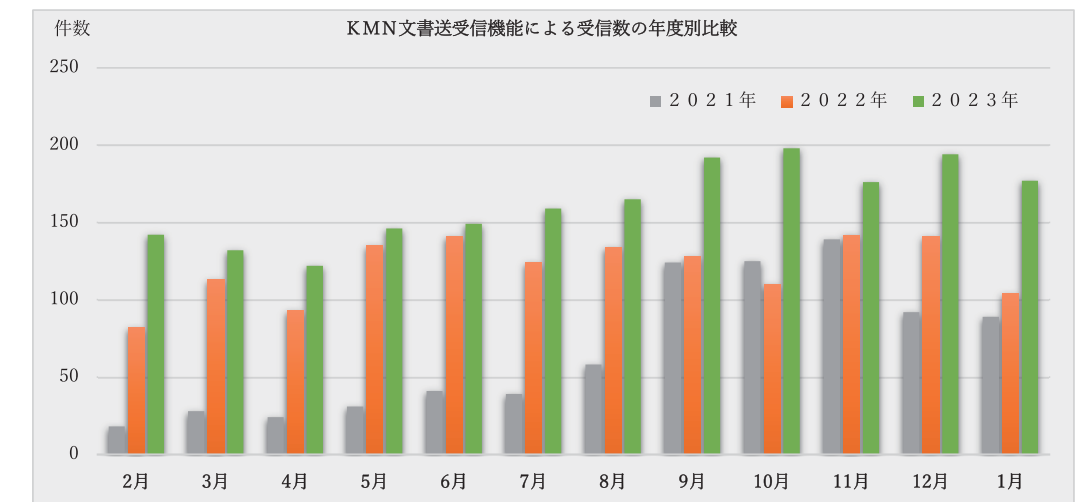
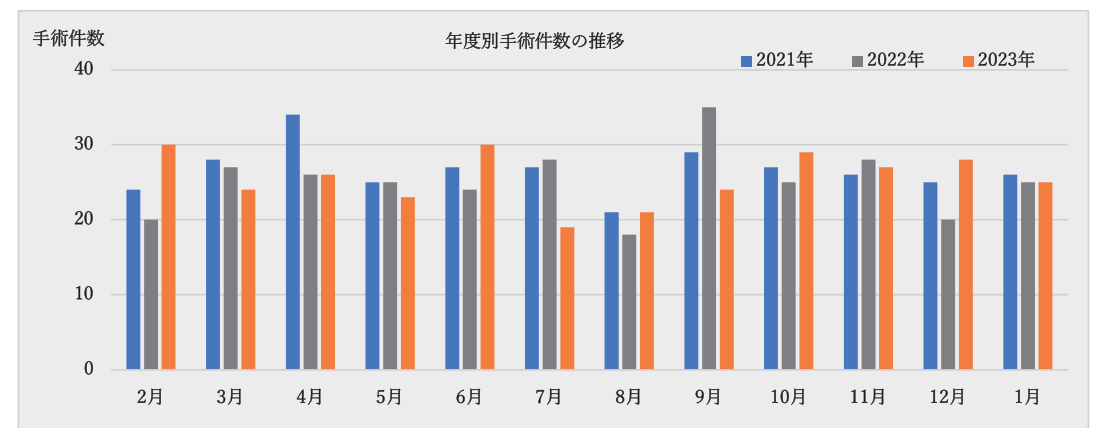
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

メディカルネットワークの普及をさらに進めていく必要がある。

水俣市立総合医療センター 消化器外科



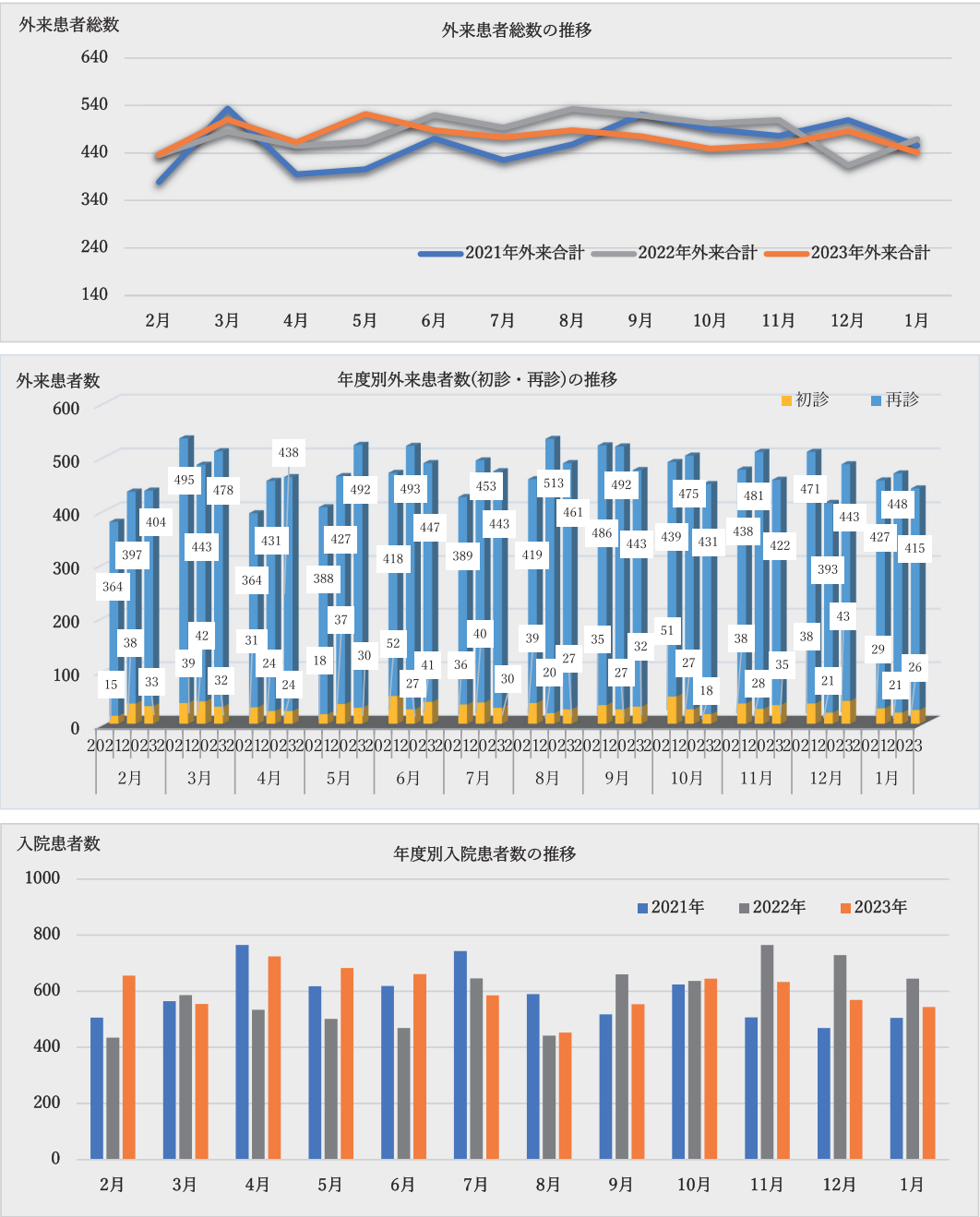
水俣市立総合医療センター 消化器外科



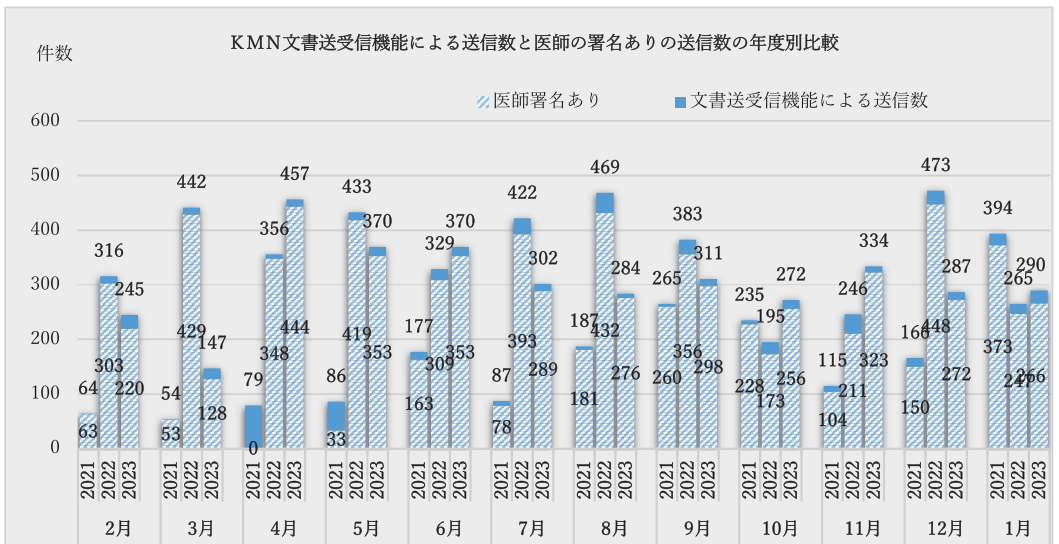
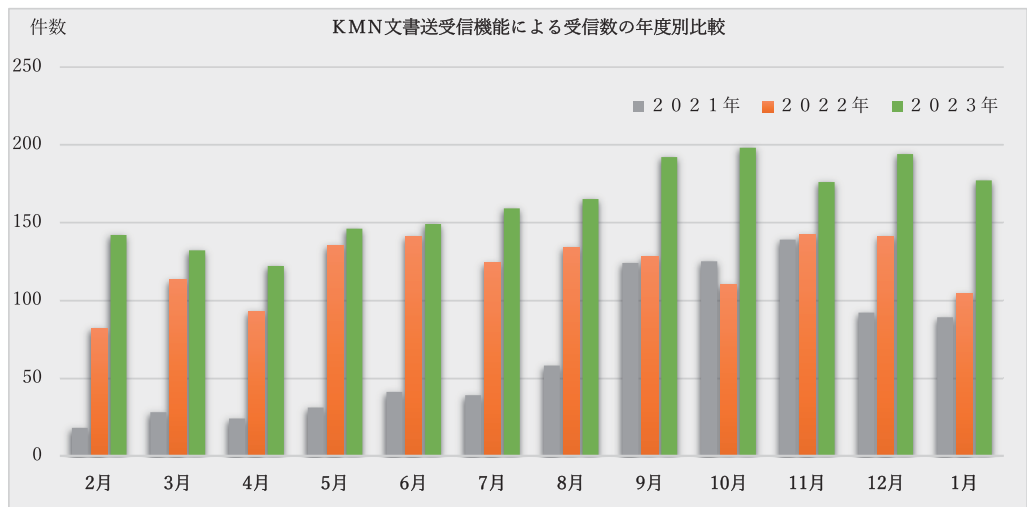
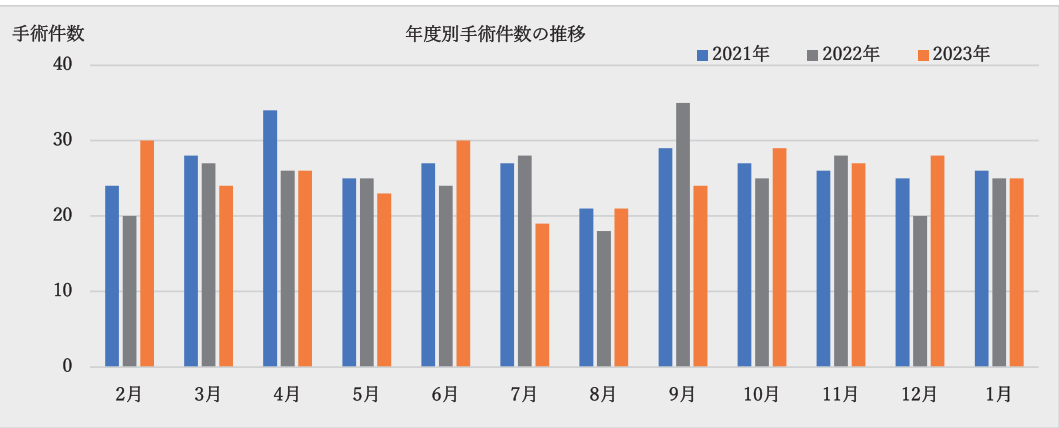
派遣先地域医療拠点病院名	水俣市立総合医療センター
氏 名	問端 輔
診療科名	消化器外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要
- 毎週水曜日の主にmajor手術と緊急手術の第一もしくは第二助手として手術に参加している。
2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況
- 研修医や医学生がローテーションする時期は短く数も少ないが、手術を通して外科手技を指導している。
3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)
- 手術件数を減らすことなく維持できている。
4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)
- 以前より積極的にKMNを利用している病院であり、普及は概ね良好である。
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況
- 急患も積極的に受け入れられており、地域拠点病院としての役割を果たしている。
6. 地域医療における今後の課題・解決策等
- 可能なら人員増加が望まれる。

水俣市立総合医療センター 消化器外科



水俣市立総合医療センター 消化器外科



派遣先地域医療拠点病院名	くまもと県北病院
氏 名	後藤理沙
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

派遣先のくまもと県北病院では主に外来業務を担当しており、月130症例程度の診察を行っています。主に乳癌検診で異常を指摘された患者の精査や乳癌の術後治療・経過観察、再発患者の治療を行っています。玉名近辺には乳腺専門医の資格をもつ医師は常勤でならず、専門的な化学療法の実施や、乳房再建術が必要な症例を熊本大学病院へ紹介する等の対応をしています。また、妊孕性温存の適応がある患者が希望した場合には、熊本大学病院の生殖医療チームへの紹介の窓口となっています。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

基本的に派遣先で若手医師とやりとりする機会が特にないため、積極的な指導は行っていません。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

外来患者数の推移は次ページの通りです。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

KMNの利用状況は次ページの表の通りです。熊本大学病院側からの送信が主体となっています。

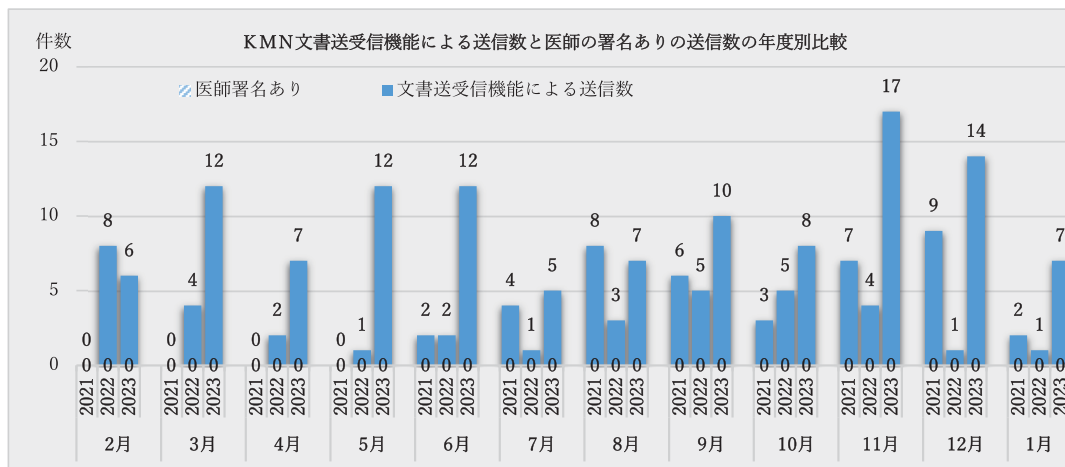
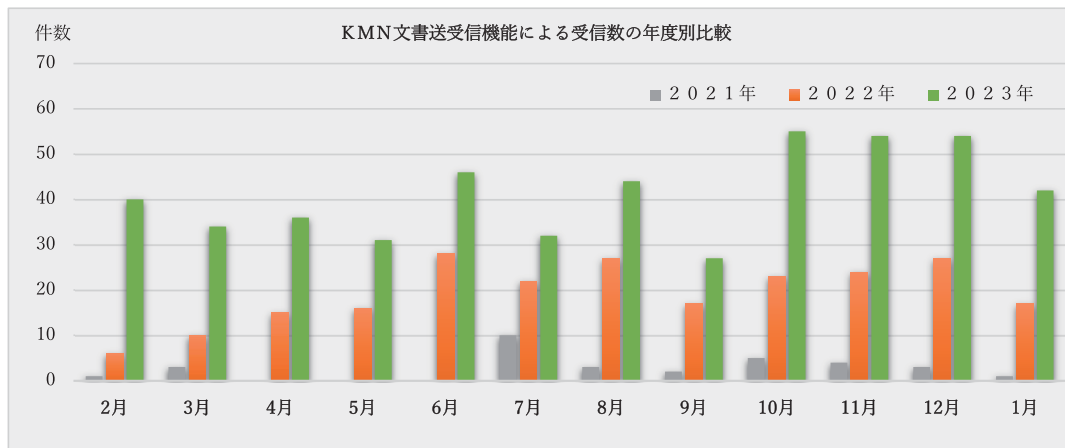
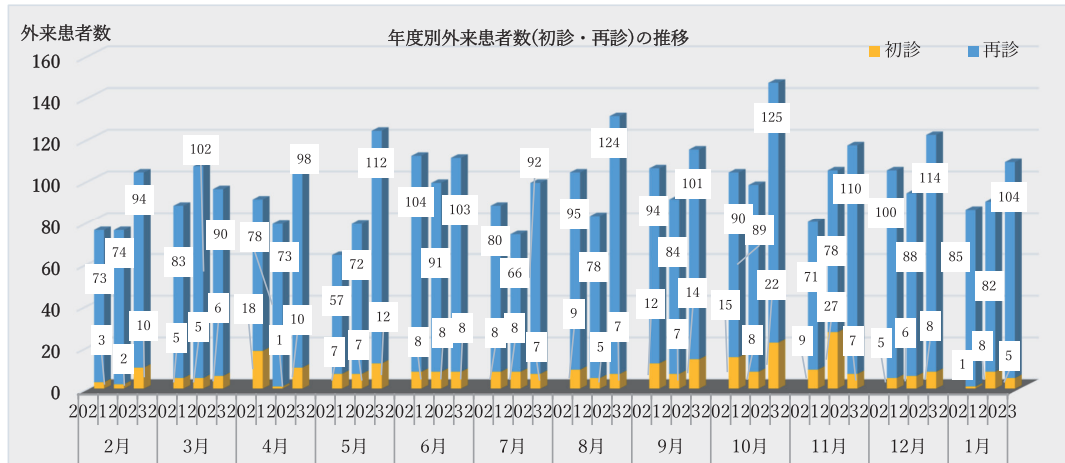
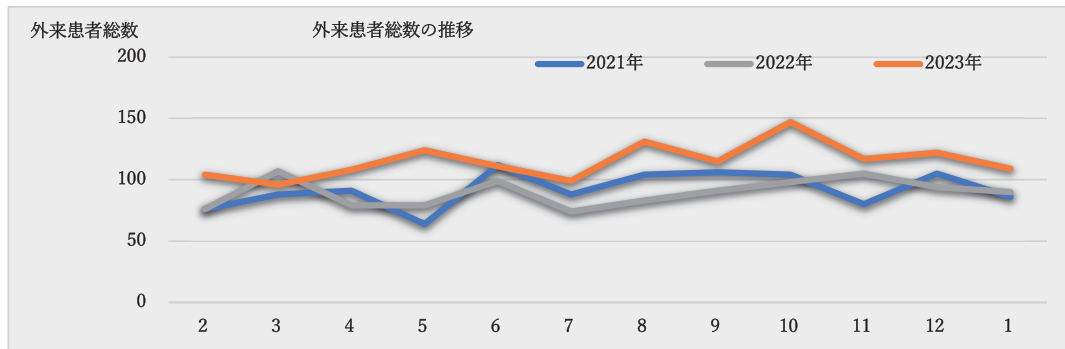
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

周囲のクリニックや中規模の医院からの紹介を受けたり、逆に処方を依頼するなどして拠点としての役割を果たしています。高齢患者の多い地域のため、熊本市内への紹介・通院が困難なケースが多く、地域医療への高い貢献をしていると考えます。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

マンモグラフィを設置している病院が周囲にないため、悪性の可能性が乏しい症例のフォローアップなども他の医院にたのむのが困難な状態です。検査を診察日と別日で行うなど工夫して、限られた外来時間でも極力多くの患者の診察ができるように調整しています。

くまもと県北病院 乳腺・内分泌外科



派遣先地域医療拠点病院名	人吉医療センター
氏 名	穴見俊樹
診療科名	泌尿器科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

人吉地域の医療連携体制は、大学病院との密な診療連携をとることで、高度な医療が必要な症例を大学病院に速やかに紹介できるようになり、大幅に改善された。大学病院との連携は、人吉地域の医療水準を向上させるとともに、患者さんの安心感を高められる。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

外来診療の合間の限られた時間ではあるが、後輩医師の治療方針に関する相談に対応したり、尿管ステント留置等の処置の実践的な指導を行い、後輩医師のスキルアップに努めている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

- 人吉地域では困難な治療(ロボット手術、難度の高い手術、稀少癌の化学療法など)を、大学病院へ迅速に紹介できる体制が構築され、医療連携体制が向上した。
- 外来の診療支援を行なっていることで、新患受け入れが可能となり、年々外来患者数が増加傾向である。さらに、外来の増加に伴い入院患者・手術件数も増加につながっていると思われる。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

- 人吉地域で治療に難渋する症例に関してはKMNを通じて熊本大学病院に相談・カンファレンスを行い、迅速な治療を行うことが可能であった。大学病院から人吉への逆紹介の際もKMNの利用でスムーズな転医が可能となっている。
- 人吉から大学病院へ治療紹介する際に、追加で画像検査が必要となった際に人吉医療センターで検査を行い、KMNを利用し大学へ送付することで、患者さんの通院負担も軽減された。
- メディカルネットワークを推進していることで、新規参加患者数、送受信数ともに年々増加傾向となっている。

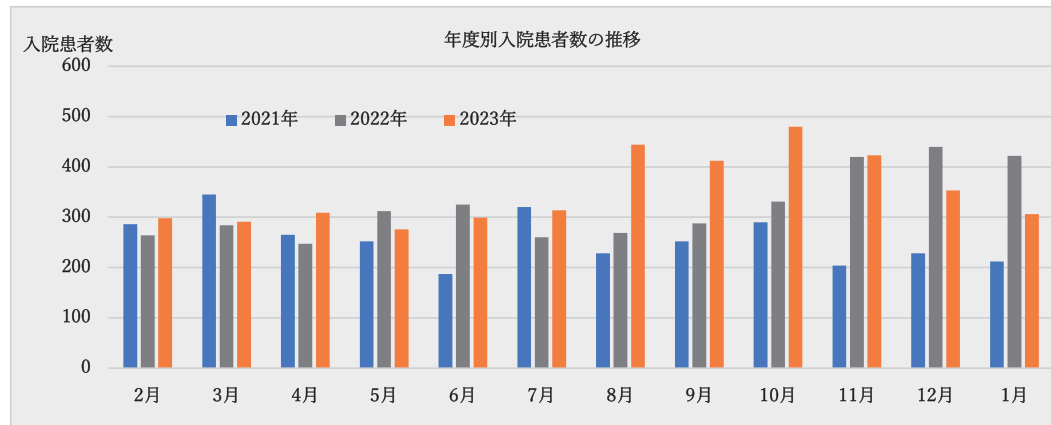
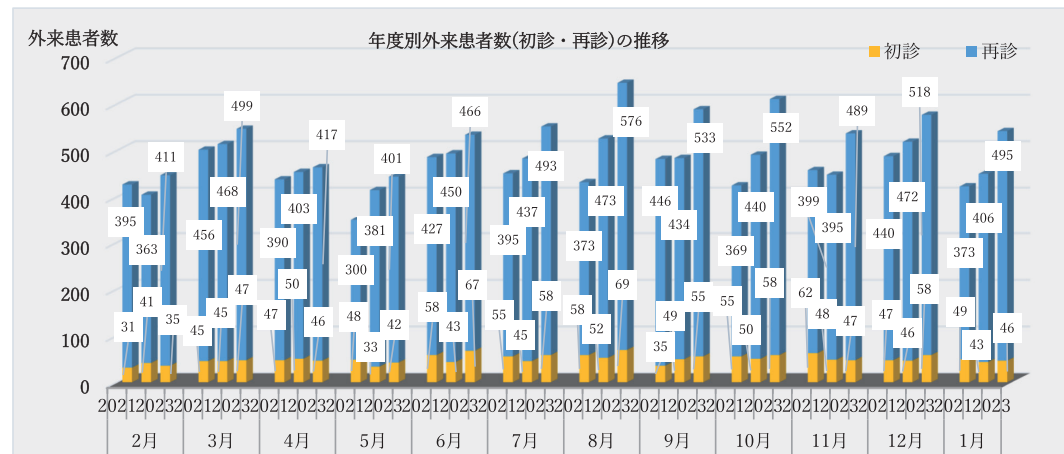
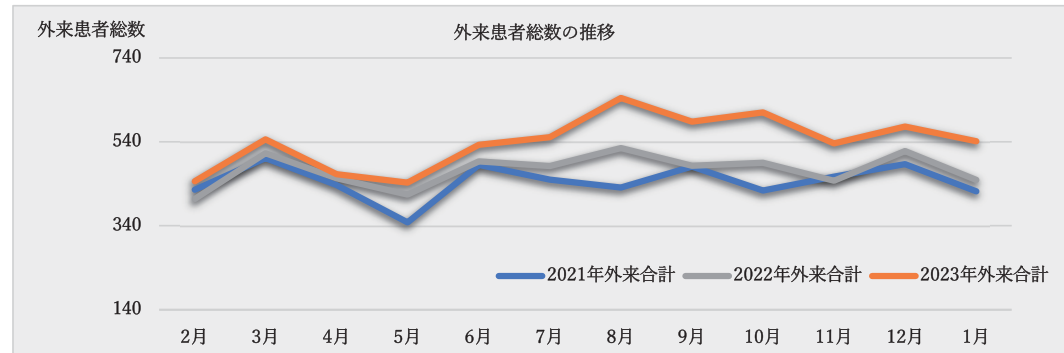
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療においては診療科の偏りや常勤医師数の不足などが影響し、高度な医療を充分に提供することが難しい状況にある。だが、本講座によって地域医療拠点病院と県拠点病院の連携を強化することで、人吉地域の診療困難な疾患症例に対して治療できるようになり、地域医療サービスの向上に取り組んでいる。

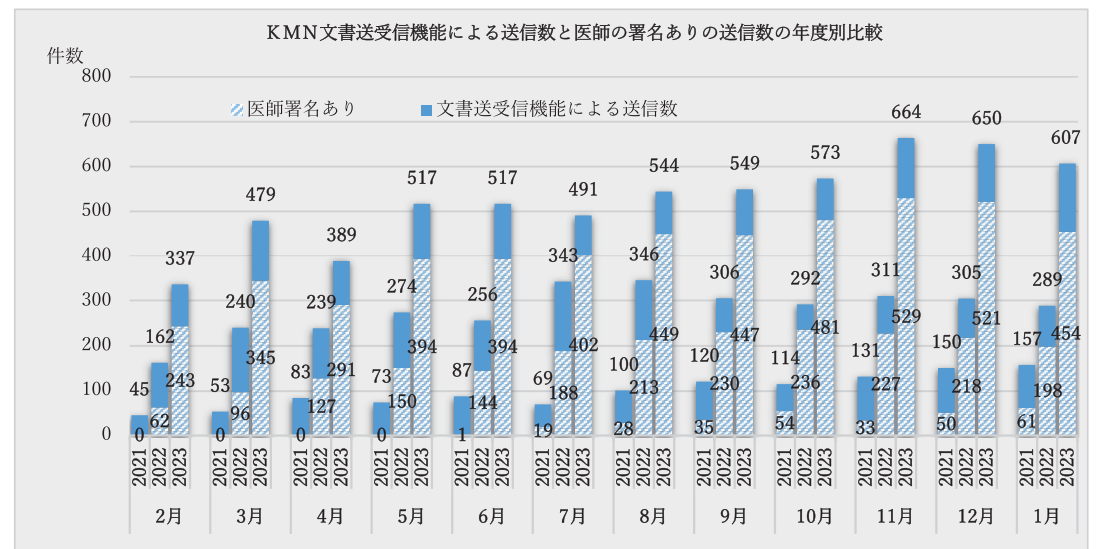
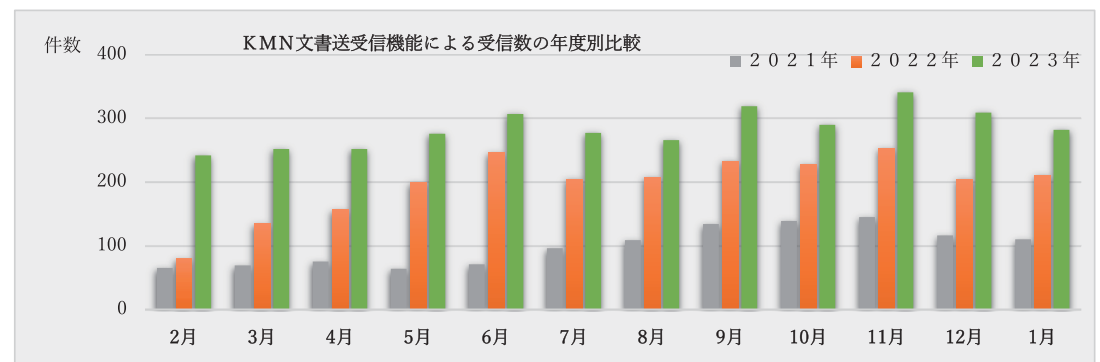
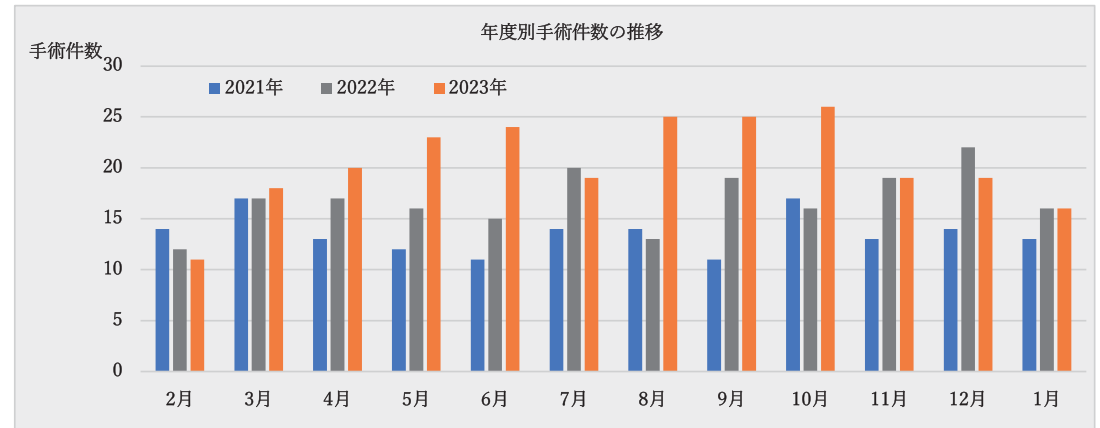
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

本講座に伴う地域医療拠点病院への医師派遣を適切に実行することで、大学病院を含む県拠点病院との間の距離が近くなり医療機能の強化が可能になる。また、医師数の減少により労働負担が大きい地域医療医師の支援にもなると思われる。今後は大学病院の他に、熊本市内の拠点病院も加わって地域拠点病院に医師派遣が行えるようになれば、各病院の特色を活かしながら医療格差もある程度は正されるのではないかと考える。

人吉医療センター 泌尿器科



人吉医療センター 泌尿器科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
氏 名	永田裕子
診療科名	小児科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

診療の主な内容は予防接種と一般小児科診療である。これらに加え、私は腎臓専門医であり健診や学校検尿の陽性の児の対応もしくは、腎臓疾患を持つ児のフォローを行っている。そのため、小児腎臓専門医のいる熊本市内の病院を受診することなく、小国や水俣において腎臓疾患のある児は診療・治療をその医療圏で完結することができることが本寄附講座事業における成果の一つであると考えている。

また、寄附講座特任教員として小国公立病院で診療する日には、常勤医であられる小児科の大崎先生は地域の健診に行かれており、私が寄附講座特任教員として小国公立病院に行くことにより地域の小児の健康保持及び増進を図ることにつながっていると考えている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現時点では、小国公立病院、水俣市立総合医療センターに熊本県の修学資金貸与医師等若手医師が不在である。小児科にご興味がおありになられる先生がいられれば支援・指導を行いたい。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

新型コロナウイルスが5類に移行となり、人の往来が増えた影響で小児のウィルスもしくは細菌感染症が増加しており、それに伴い小国公立病院、水俣市立総合医療センター共に、外来受診数が本年度は初診・再診ともに増加していると思われる。本事業により小児科の常勤医師先生方のご負担を少しでも減らせることができたと考えている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

メディカルネットワークは少しずつ普及している。今後も普及を進めていきたい。

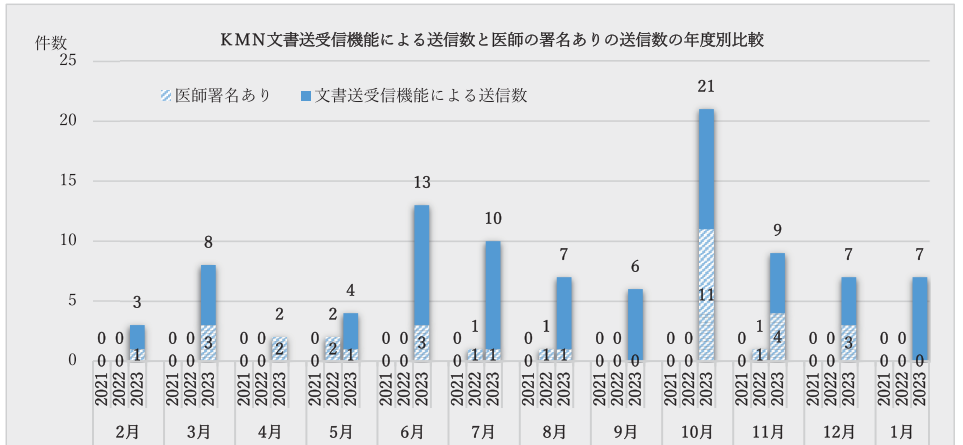
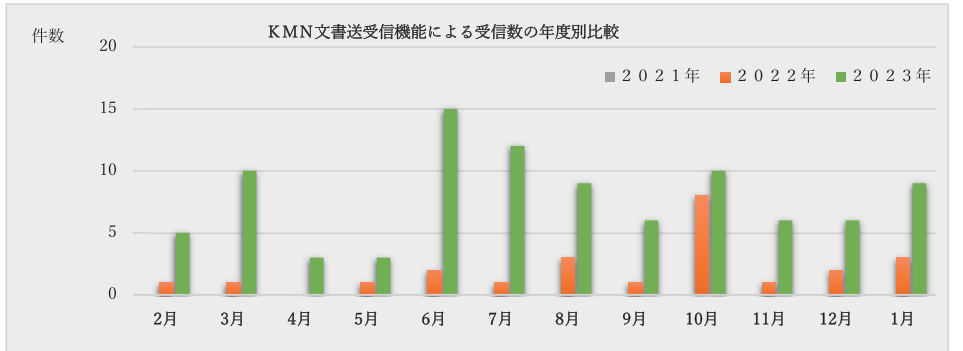
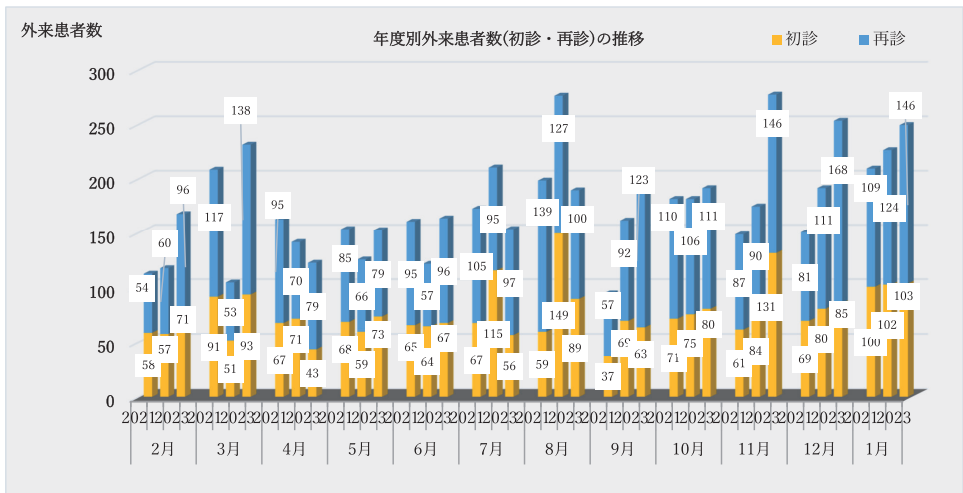
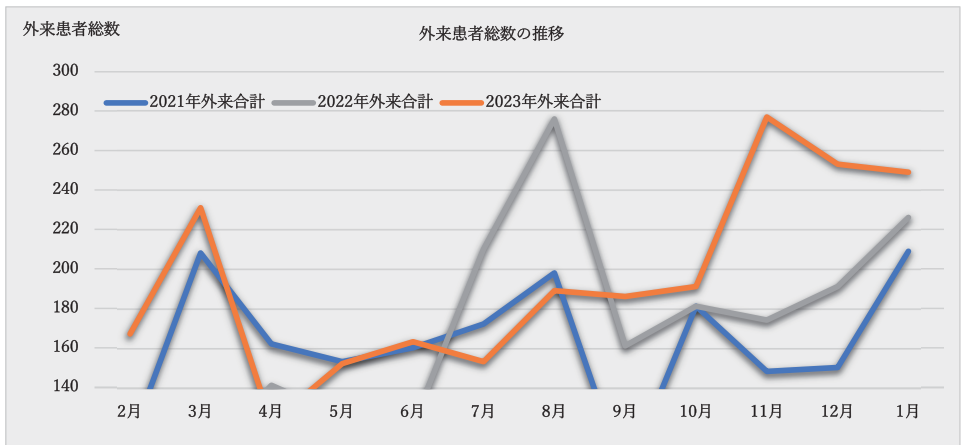
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院としての役割を継続して守るために、不要・不急の時間外受診をできるだけ減らすことも大事な役割のひとつである。そのために予防接種を推進することや日中受診された際に夜間緊急受診する必要がある目安をしっかりと説明するようにしており(日中の受診で良い旨)、地域医療拠点病院としての継続した役割を推進できるように努めている。

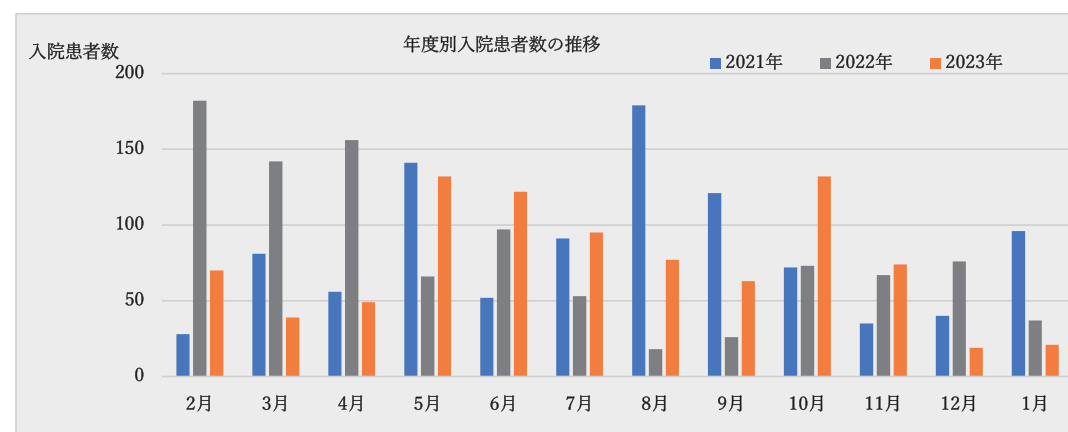
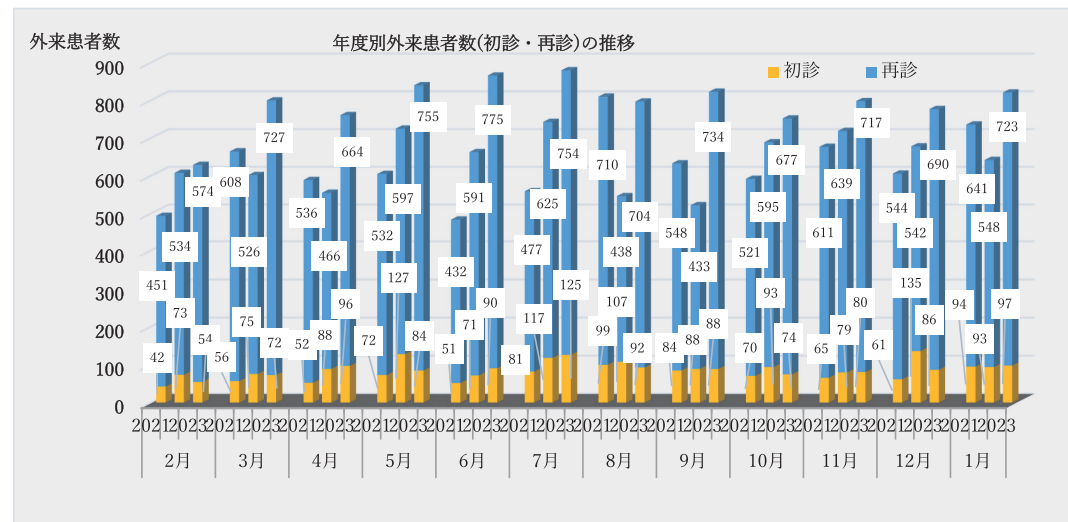
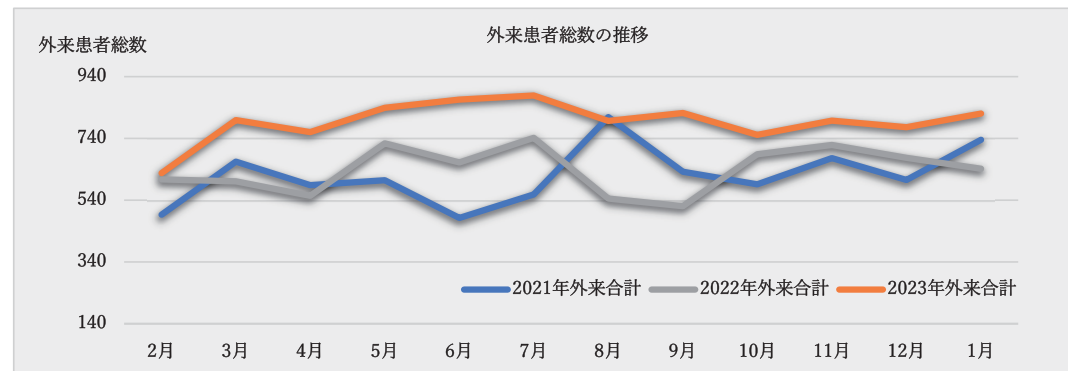
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域医療の課題としては、今後も医師不足は続き深刻さは増すと思われる。解決策としては今後も、継続して診療支援を行うことである。

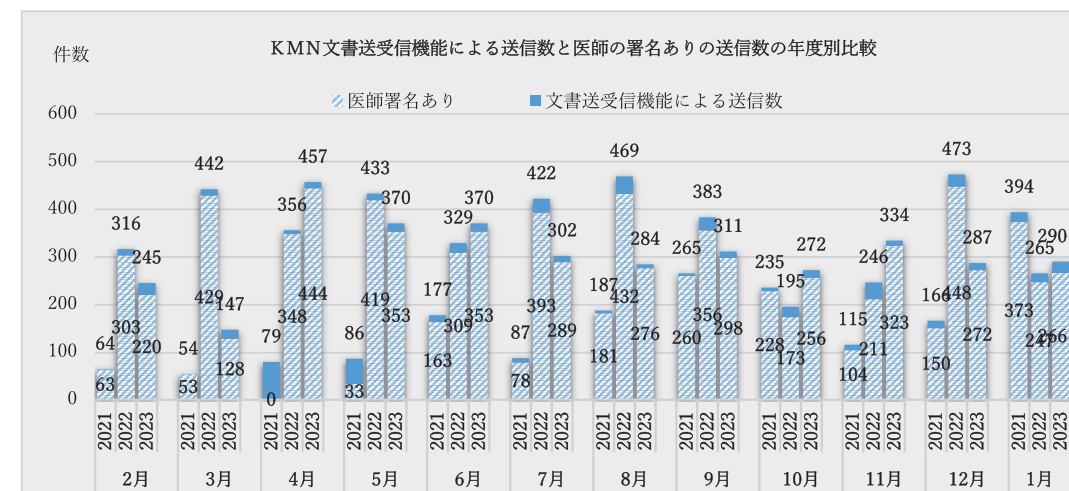
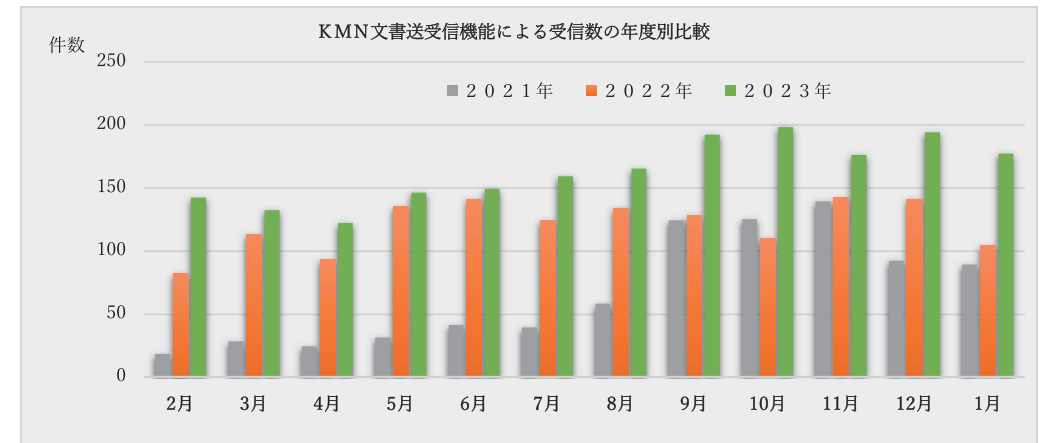
小国公立病院 小児科



水俣市立総合医療センター 小児科



水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
氏 名	宮村文弥
診療科名	小児科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

現在、小国公立病院には月1回、水俣市立総合医療センターには月2回勤務している。いずれの施設においても、小児一般診療だけでなく発熱外来や自分の専門分野である循環器診療を行うことで、今までは熊本市まで出てくる必要性のあった子供の診療を現地で完結することができている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

特になし

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

グラフのとおり専門医療を行っている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

以下のとおりの普及状況である。残念ながらKMNの普及にはまだ至っていない部分が多くある。ただ、今後も患者数増加に合わせて、当院だけでなく熊本労災病院や熊本赤十字病院などとの連携を図る必要のある症例は増えてくると推測され、そのようなケースにおいては積極的にKMNを利用し、その普及を図りたいと考えている。

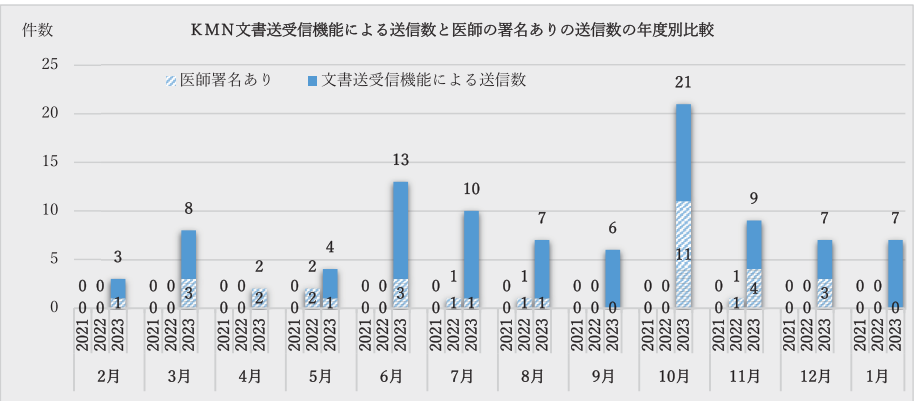
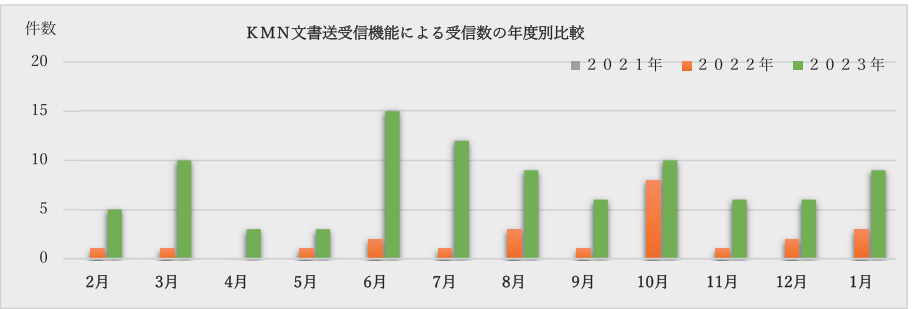
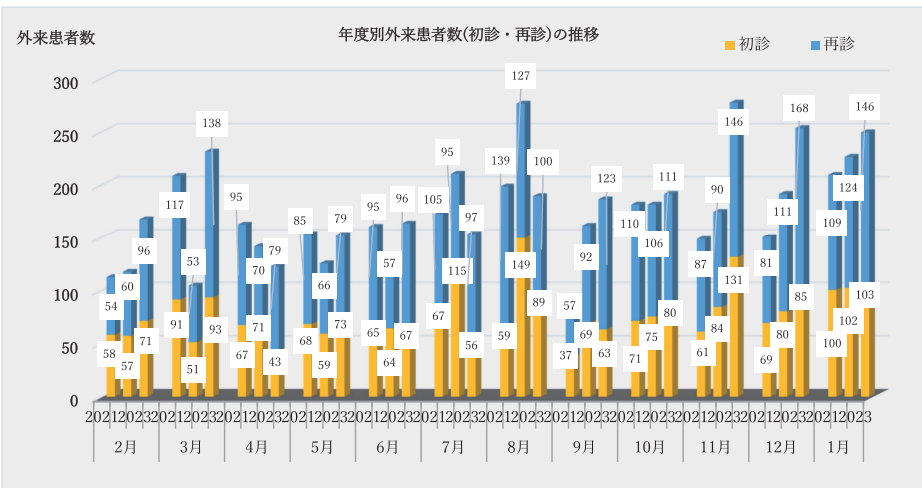
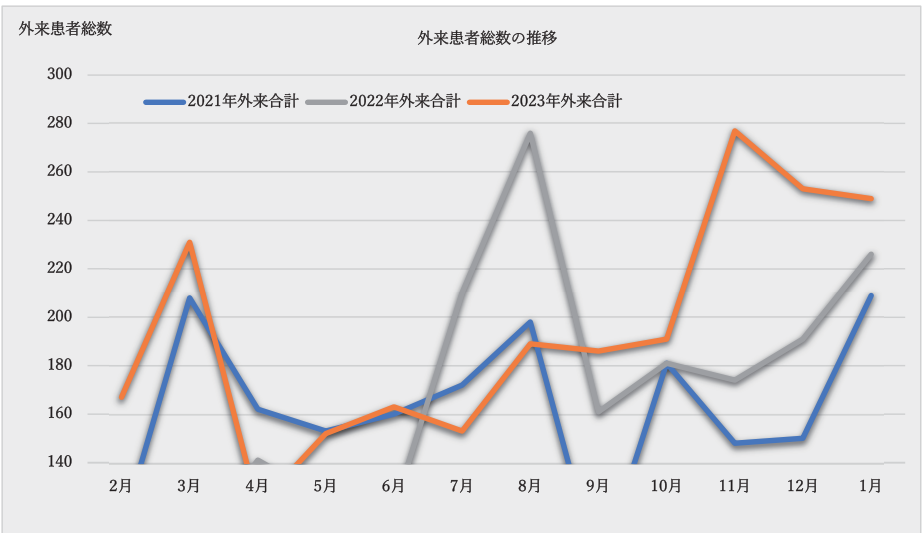
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

一次診療だけでなく、自分の専門領域(小児循環器)に関連した疾患や、学校心臓検診患者の対応などいままです現地では完遂できなかった診療が、可能となってきている。

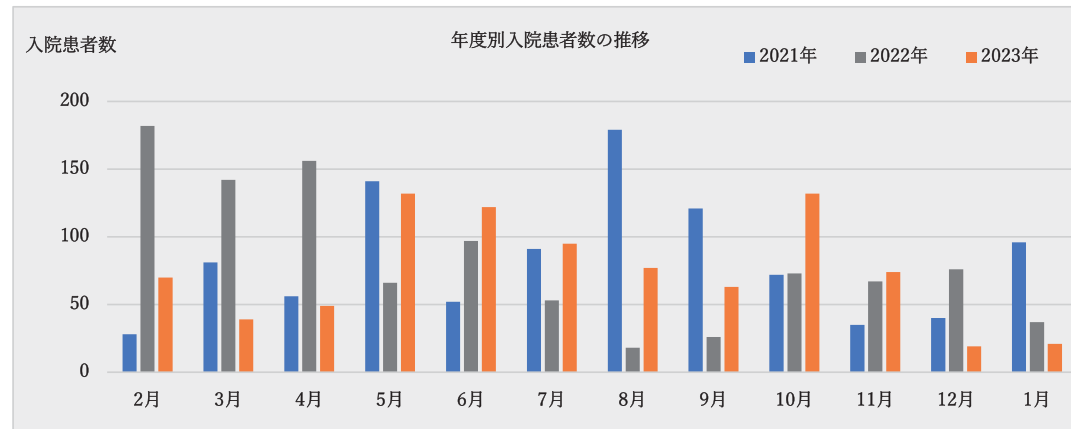
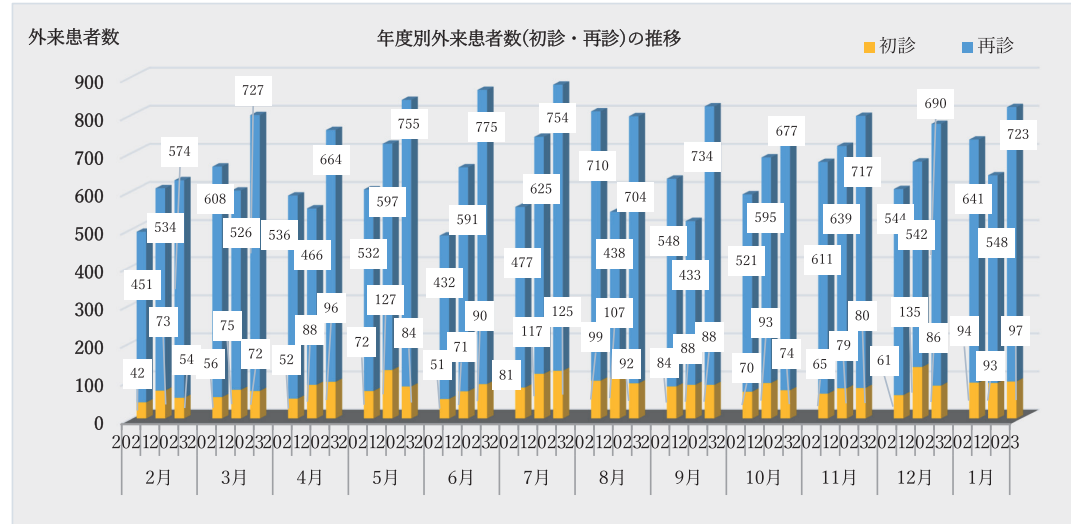
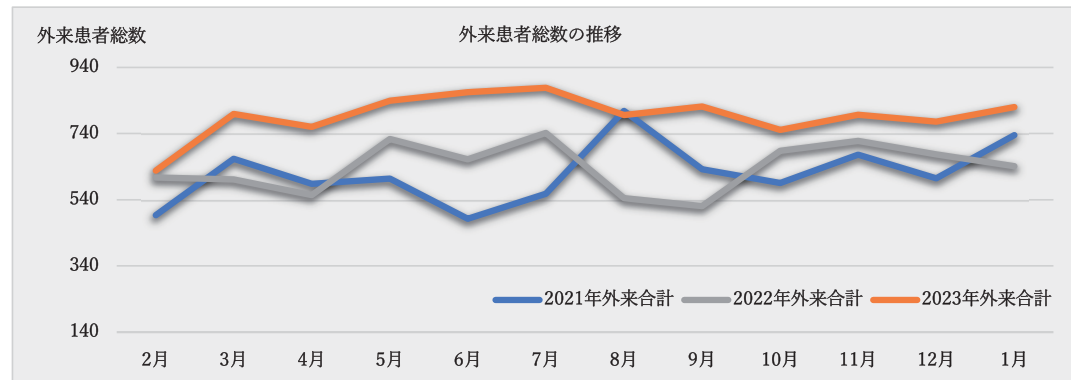
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

いずれの施設も地域唯一の小児診療施設となっており、一次診療のみならず、二次診療までは幅広く対応する必要がある。ただ、距離的な問題から熊本市内の医療機関まではなかなか紹介しづらい状況となっている。八代地区、阿蘇地区での小児診療体制の充実は課題であり、行政も巻き込んだ適切な医師配置の議論をしていかないと、いつまでも現場の努力任せであり、持続可能な診療体制であるとは思えない。

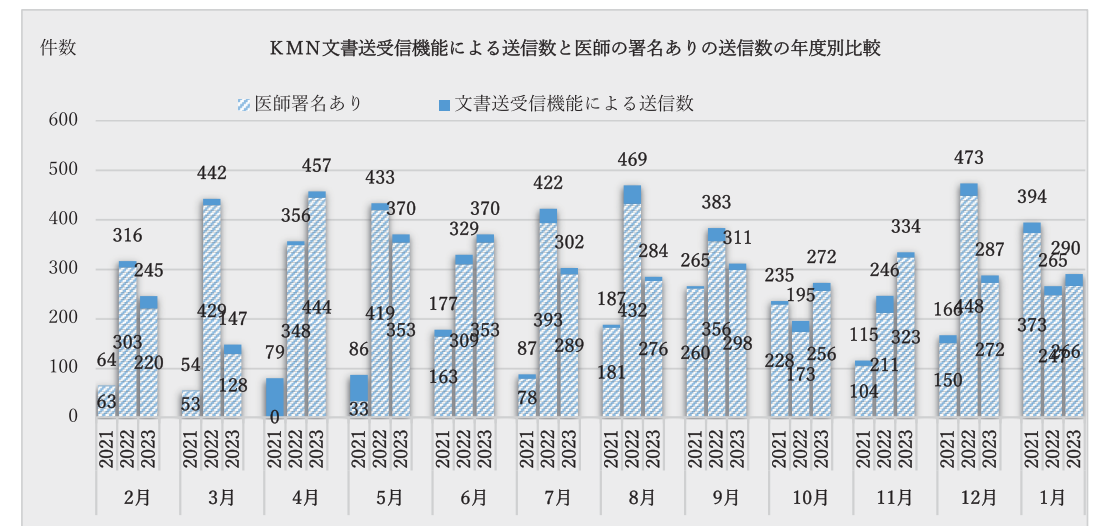
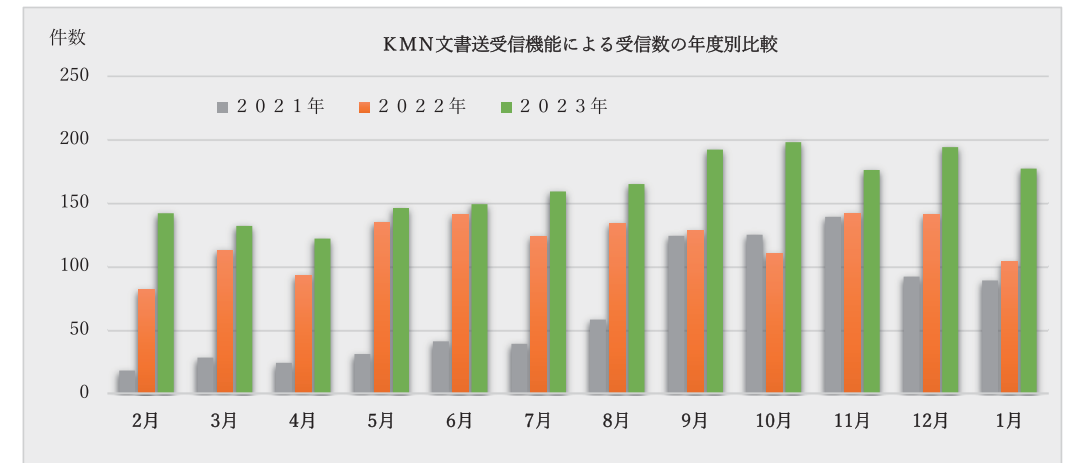
小国公立病院 小児科



水俣市立総合医療センター 小児科



水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院名	熊本労災病院、熊本総合病院
氏 名	楠木 慎
診療科名	産科婦人科
事業期間	熊本労災病院(2023年4月～2024年1月)、熊本総合病院(2024年2月～2024年3月)

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 2023年4月～2024年1月：熊本労災病院
外来診療：新来、常勤医師の代診(常勤医師が手術症例の主治医のため、午後手術が早く始められるように)、救急患者対応、1か月あたり12人程度
手術応援：手術の助手(部長の先生が常勤若手医師に指導をしながらの手術の第2助手、あるいは第1助手、常勤若手医師不在の場合は執刀)、1か月2～3例程度。
オンコール2nd待機：1か月に2～4日程度
- 2024年2月～2024年3月：熊本総合病院
外来診療：新来、再来、1か月あたり20人程度

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師の診療指導：症例カンファレンスでのディスカッション、常勤若手医師へのコルポスコピーなどの指導、研修医への手技(採血、ドレーン抜去など)の指導。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

熊本労災病院では10か月間で、新来20人、再来114人担当した。手術執刀・助手・見学は月2～3件行った。
熊本総合病院では、2か月間で、新来7人、再来20人程度担当し、健診センターでの子宮がん検診業務1回、手術見学1回を行った。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

熊本労災病院でのKMN新規導入者数は、2021年163人、2022年203人、2023年534人、文書送信数は2021年582件、2022年821件、2023年2013件、文書受信数は2021年2937件、2022年1622件、2023年4300件、といずれも増加傾向である。産婦人科においても同様に増加傾向である。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院が行うべき取り組みとして、①紹介患者に対する医療提供、②へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、③地域の研修医・専攻医への教育、④勤務環境改善に向けた取り組みがあげられている。

熊本労災病院の産婦人科は、これまで地域の一般産婦人科医院では対応できないハイリスク妊婦を受け入れ、安全な周産期医療体制へ貢献し、悪性疾患を含めた婦人科疾患についても手術療法を含め幅広く対応してきたことで、①に貢献してきた。さらに、腹腔鏡下手術を行わない点などやや偏りはあるものの、研修医・専攻医への教育体制も整っており(毎日のカンファレンスや回診、ベテラン医師による患者管理や手術の指導)、③、④に貢献してきた。②については、もともと常勤であった医師が地域の産婦人科診療所での診療に週3日従事することができており、ある程度達成していたが、へき地と呼ばれる地域への十分な派遣には至っていなかった。

2024年2月から、産婦人科に関して地域医療拠点病院が熊本労災病院から熊本総合病院に変更になった。熊本総合病院において、地域医療拠点病院が行うべき取り組みの①～④の達成状況は以下の通りである。

①については、婦人科疾患については、紹介患者への適切な医療提供が行われている。周産期診療については、2023年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や近隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。②、④については、熊本総合病院ではこれまで産婦人科常勤医師が2人と少ない中で多くの婦人科手術(腹腔鏡下手術含む)を予定しており、他科医師の応援も受けている状況であった。また人吉地域への診療応援も行っていた。1月からの新規の産婦人科医師2名の就職および、2月からの地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座所属医師の派遣により、外来と手術を同時並行で行えるようになり、人吉地域への診療応援時にも自院で待機する医師を十分に確保することができるようになっている。このことは、へき地医療への貢献や勤務環境改善に寄与していると考えられる。③については、熊本総合病院は初期臨床研修医が少ないため初期研修医の指導の貢献にはなっていない。専攻医への教育という面においては、婦人科疾患については、症例数は多く腹腔鏡下手術にも携わることができるが、産科管理については経験症例数が不十分な状況である。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

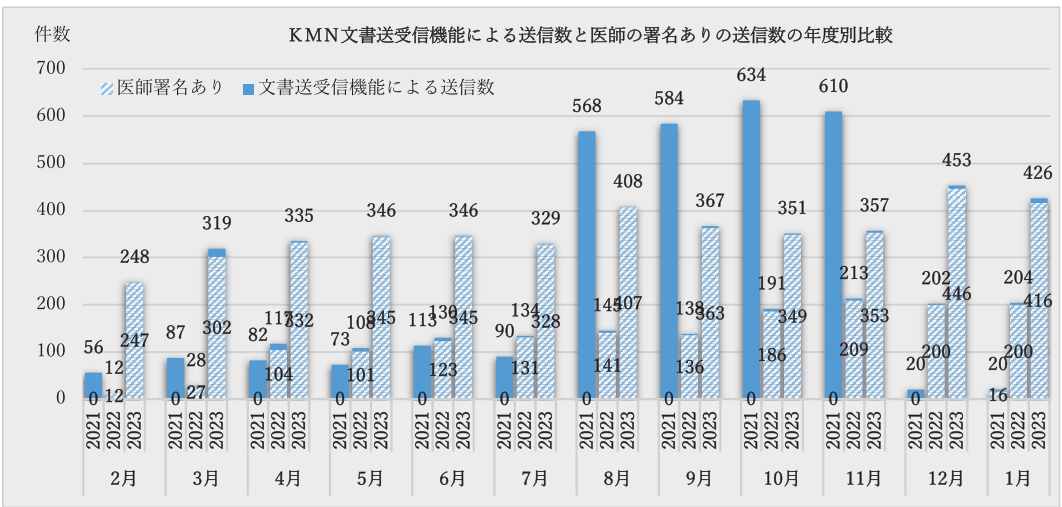
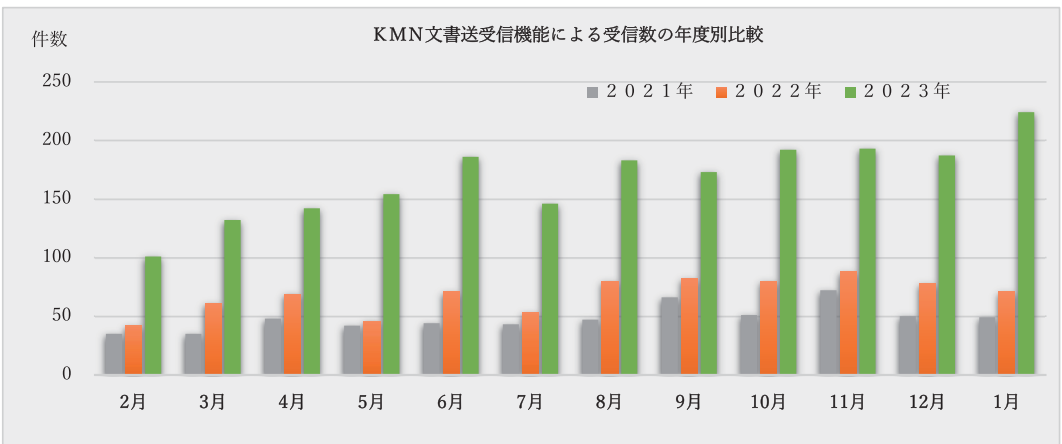
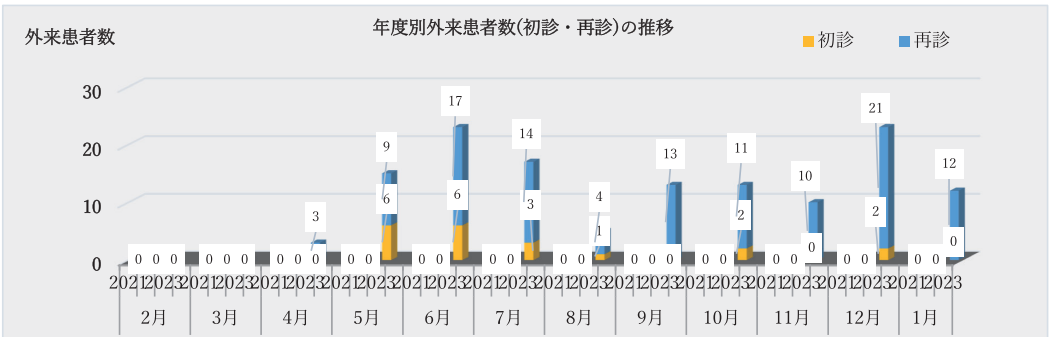
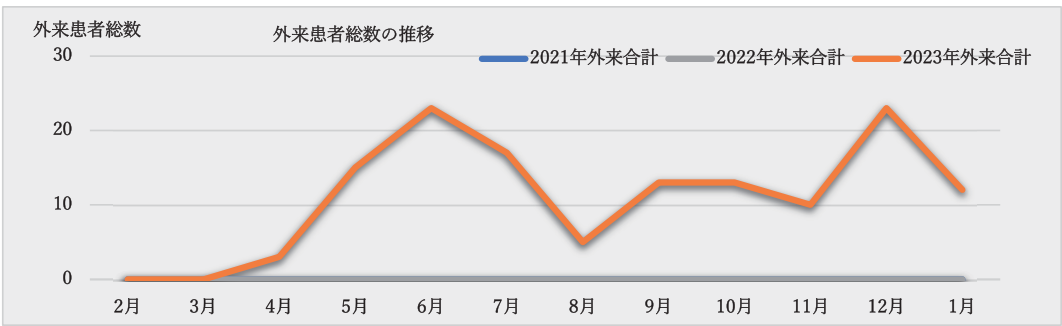
熊本県内における産婦人科診療の問題点として、①地域拠点病院の部長や指導的立場であった医師が高齢となり定年を迎えつつある一方で、それを今後引き継ぐべき30代後半～40代の医師が極端に少ない。②熊本市内の病院(熊本赤十字病院や福田病院など)では独自に若手医師の採用・教育を行えるが、地方(八代、人吉、天草など)の病院では、専攻医の研修プログラムの一環としての熊本大学の医局所属医師の派遣がなければ、人員の確保が困難である。の2点があげられ、さらに、③周産期診療は急な多量の出血や胎児機能不全などで緊急を要することも多いため、他の診療とは異なり熊本市内への診療の集約化が必ずしも適さず、居住地域から短時間でアクセスできる位置に緊急時の対応ができる産科拠点病院が必要であるという点も重要である。

2024年2月から、産婦人科に関して地域医療拠点病院が熊本労災病院から熊本総合病院に急速変更となり、熊本大学産科婦人科学講座から派遣されていた医師(地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座常勤医師および非常勤医師)の派遣先が熊本労災病院から熊本総合病院に変更になった。このため、熊本労災病院では、2024年1月まで行っていた、手術、入院患者の受け入れ、周産期診療(妊婦の外来診療および分娩を含む入院診療)を2月より停止せざるを得なくなった。一方で、新規に産科診療を開始した熊本総合病院については、2023年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や近隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。

地域医療拠点病院の変更の背景として、上記①、②がある。産婦人科医師不足の中、若手医師の経験と地域での安全な周産期医療の提供を両立させなければならないことから、熊本総合病院に周産期医療を集約させたいという熊本大学産科婦人科教授の考えのもとで、このような変更に至ったと思われる。しかし、熊本労災病院で周産期診療が一切停止したにも関わらず熊本総合病院では十分数の周産期診療を行えていない現状にあり、その理由は明確ではないが、地域住民や、紹介をする立場の地域の産婦人科医院が、熊本総合病院への受診や紹介を控えている可能性がある。ハイリスクの周産期医療を行うために必要な小児科や血管内治療担当医師の不在も懸念材料と思われる。

若手医師の経験と地域での安全な周産期医療の提供の両立のために行われた周産期医療の拠点の変更は、医師の派遣先の変更だけは解決していない。地域住民や地域の産婦人科医院の理解を得ていく必要があり、熊本大学産婦人科医局ではなく、県などが中心となって、最善の対応を再考していく必要があるかもしれない。

熊本労災病院 産科婦人科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院
氏 名	徳永琢也
診療科名	整形外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

●拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供

派遣先の地域医療拠点病院には整形外科常勤医は不在であり、令和5年度は大学病院から3名の整形外科専門医が週3回(火、木、金)派遣された。整形外科疾患に対する保存療法や、専門的な加療(手術)が必要な患者の紹介、入院患者の整形外科コンサルトへの対応、専門医療機関での急性期加療後の転院やリハビリテーションの指示、地域の開業医からの整形外科患者の紹介への対応を行った。急性期の外傷などの疾患や専門的な精査・加療が必要な場合は、近隣の日田市、菊陽町の医療機関や大学病院を含む熊本市内の医療機関に紹介し急性期治療後の逆紹介に対応した。

●地域におけるネットワーク構築に向けた地域医療の現状分析及び新たな方策の検討・提案・実践等

地域医療の現状分析として、農作業や旅館など観光業に従事する患者が多く、患者の大部分が高齢者であり、疾患としては変形性関節症や変形性腰椎症といった慢性疾患および骨粗鬆症を背景とした脊椎の圧迫骨折や橈骨遠位端骨折などの脆弱性骨折、ロコモティブシンドロームの患者の割合が高い。また、独居の患者や日中に家族のサポートが得られない高齢の患者も多く、腰痛の悪化の際などに日常生活動作のサポート目的での入院もまれではない。

新たな方策の検討・提案・実践等については、従来骨粗鬆症の治療介入、治療効果判定に際して前腕での骨密度検査のみの対応であったため、腰椎、大腿骨近位部での測定が望ましいことを提案し、派遣先に新たに腰椎、大腿骨近位部での測定が可能な設備が導入された。また、整形外科の中でも、膝関節や肩関節、足関節などの専門性が高い分野について、近隣で完結できる症例に対しては阿蘇医療センターに派遣されている整形外科医師との間で相互に紹介し対応した。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

地域医療で派遣された研修医からの患者の診察依頼について対応した。地域での講演活動は施行できなかった。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

2023年の整形外科の外来患者総数は4432人(初診213人)で1ヶ月あたり300名から400名で推移した。初診患者、再診患者ともに前年度と比較し微増した。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

小国公立病院におけるKMNの新規参加者数は2021年39名、2022年153名、2023年80名であった。また、KMNでの診療情報提供書の医師署名ありの送信数は、2021年度0件、2022年5件、2023年97件と増加傾向であった。今後も継続的な普及推進が必要である。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

整形外科常勤医が不在の派遣先病院において整形外科疾患に対する拠点病院の医療機能の向上および不足する専門医療を提供する役割については一定の成果をあげている。

また、KMNの普及活動についても新規参加者数や診療情報提供書の送信数データからみると少しずつ成果がみられている状況である。しかし、熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援については現状では不足しているため今後より一層推進する必要がある。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

●課題① 高齢化と移動手段

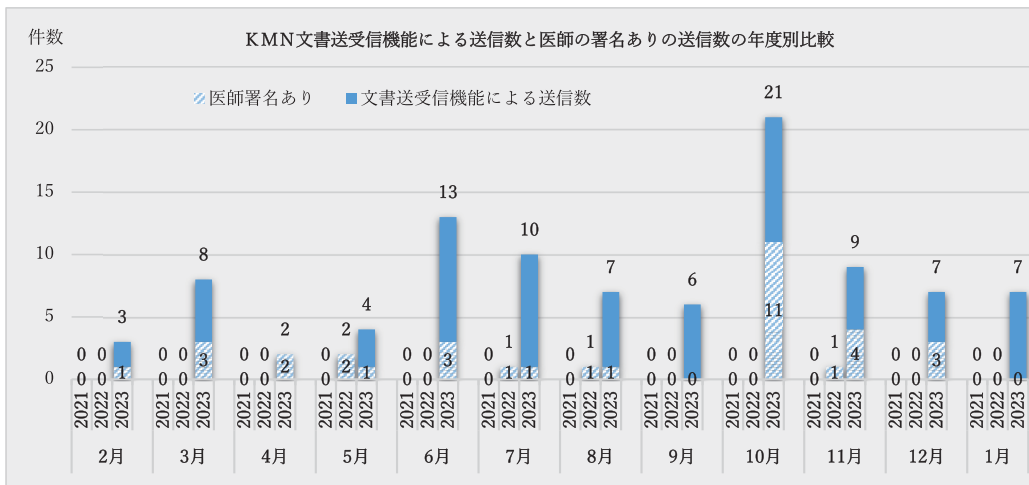
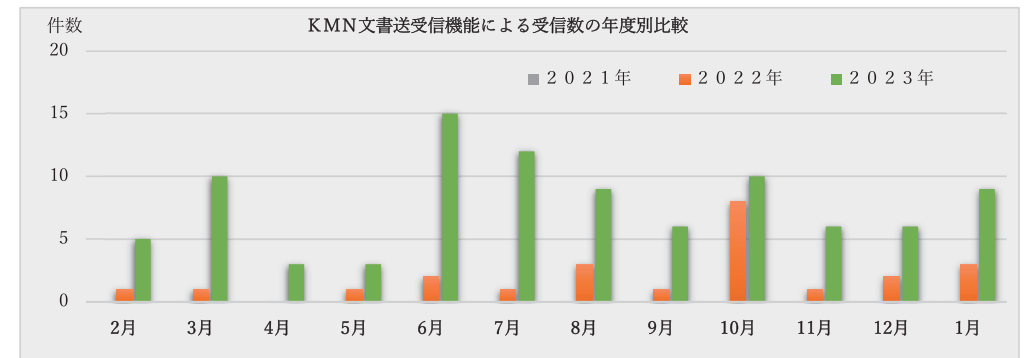
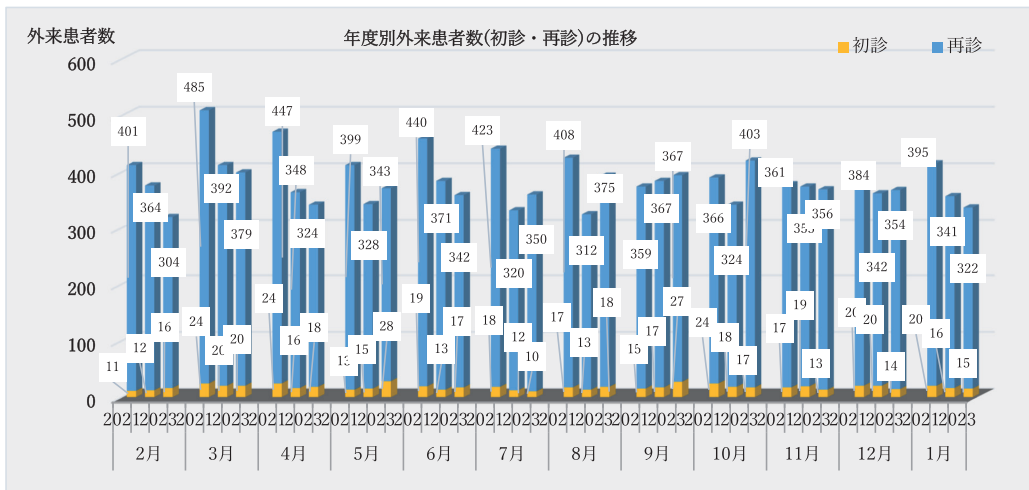
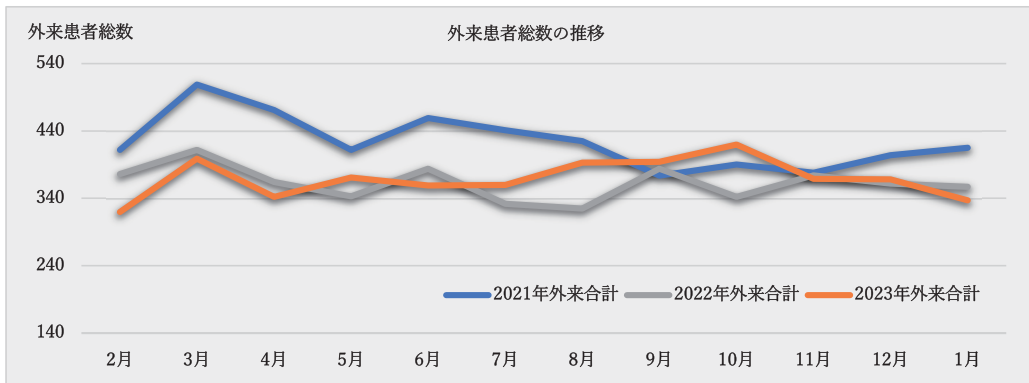
運転ができない高齢者の受診に際して、公共交通機関が不十分のため移動手段が限られ受診時間や回数に制約がある場合が多い。解決策としては乗り合いタクシーの利用などの他、診療科間での受診日調整などが考えられる。

●課題② 近隣医療機関・介護サービスとの連携

地域医療では一つの医療機関での診療科や対応可能な検査が限られている場合も少なくない。近隣の医療機関における診療科(対応可能な疾患)、対応可能な検査の情報が得られれば地域医療ネットワーク構築に有用であると考ええる。また、特に高齢者などでは、同一日に複数診療科の受診を要する場合も多く診療科間で情報を共有する必要がある。

また、日常生活での介護を要する場合も多く、通常は入院の適応のない疾患においても自宅での生活が困難であるため社会的な入院となる例も多い。解決策としては、本人、キーパーソン、介護サービスとの連携が必要と考えられるが、地域における利用可能な介護施設などは限られている。

小国公立病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院名	阿蘇医療センター
氏 名	湯上正樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来診療、手術、を中心に支援した。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

なし

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

外来患者数は、例年と大きな変化はなかった。

小生の専門分野である足部・足関節領域は、下肢伝達麻酔での手術が可能である。大学病院でも自家麻酔で手術を行っている。阿蘇医療センターにおいて手術器具を揃えていただき、自家麻酔にて足部・足関節領域の外傷・障害に対する手術が可能となった。患者自身は、自身の生活圏で手術を受けることができるメリットがあり、地域貢献の一つと考える。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

使用状況は、例年と大きな変化はなかった。今後も普及に努める。

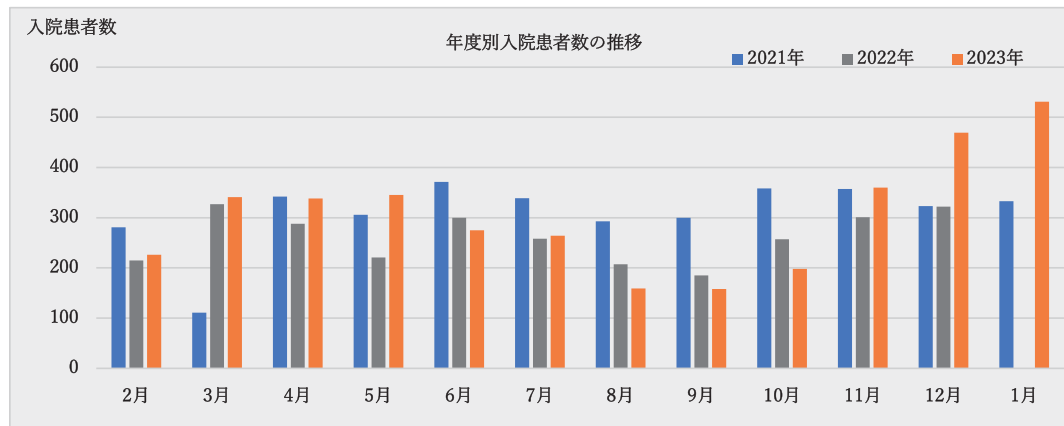
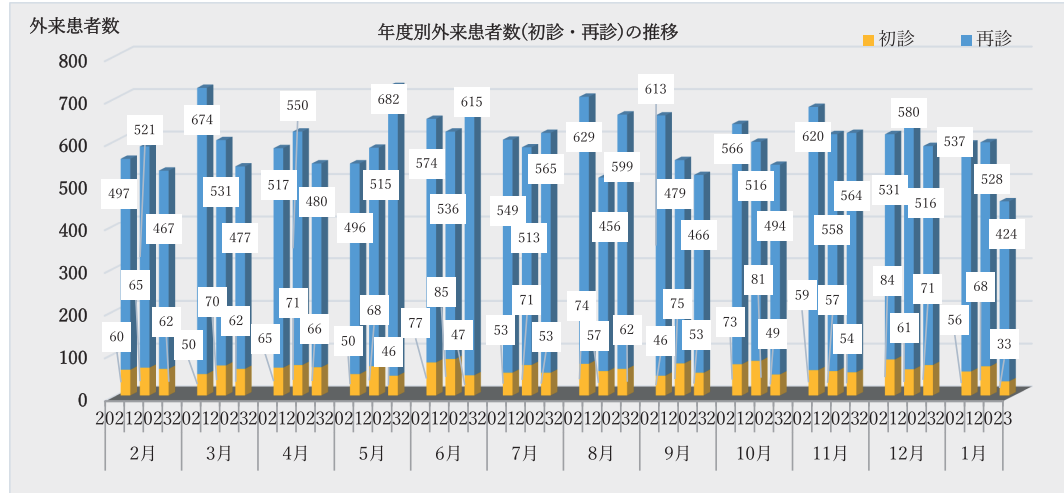
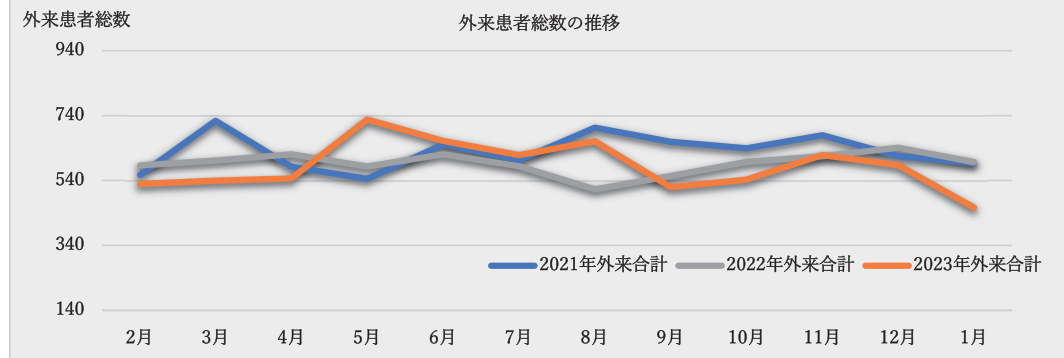
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

一部を、3.の手術実績として記したが、患者自身の生活圏での診療が完結できるように環境整備を進める。

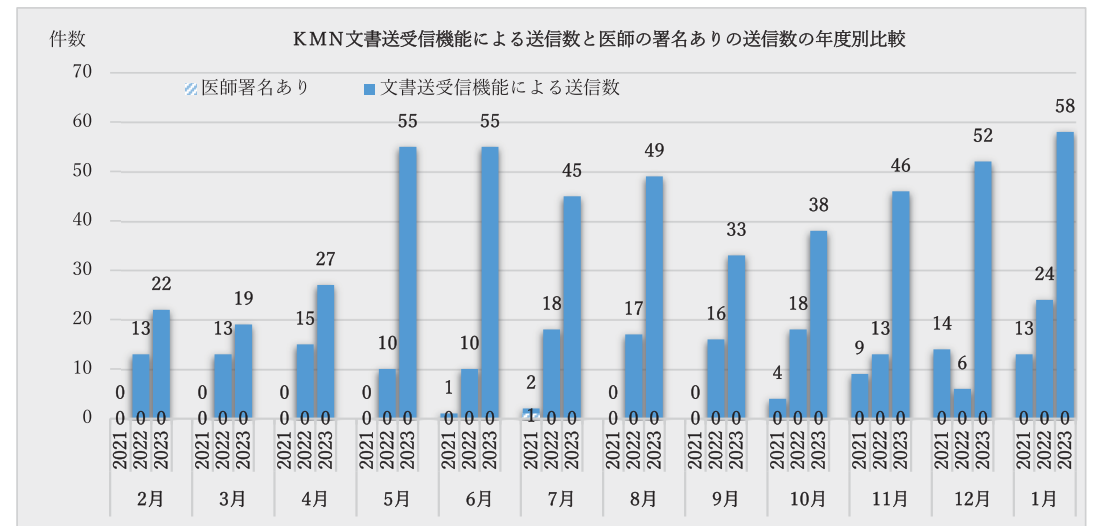
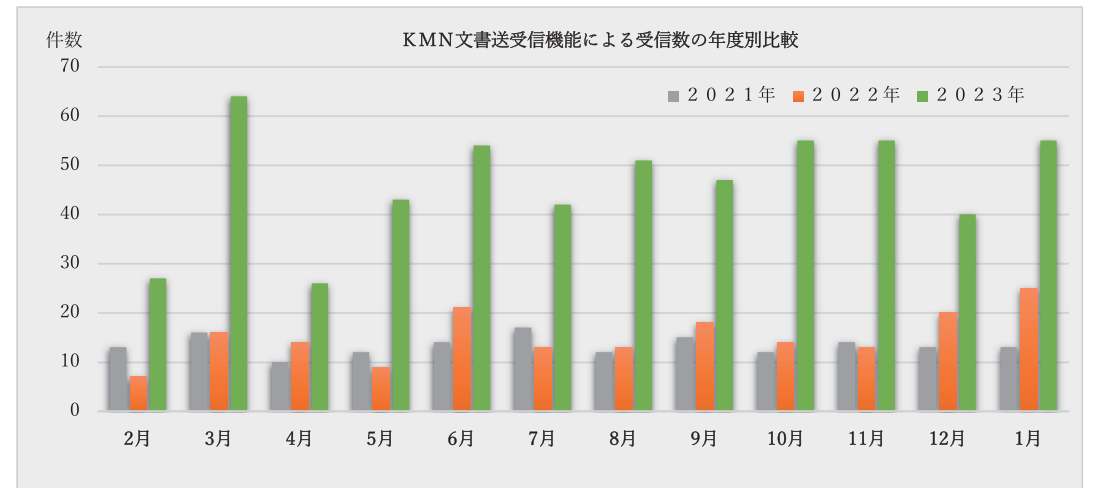
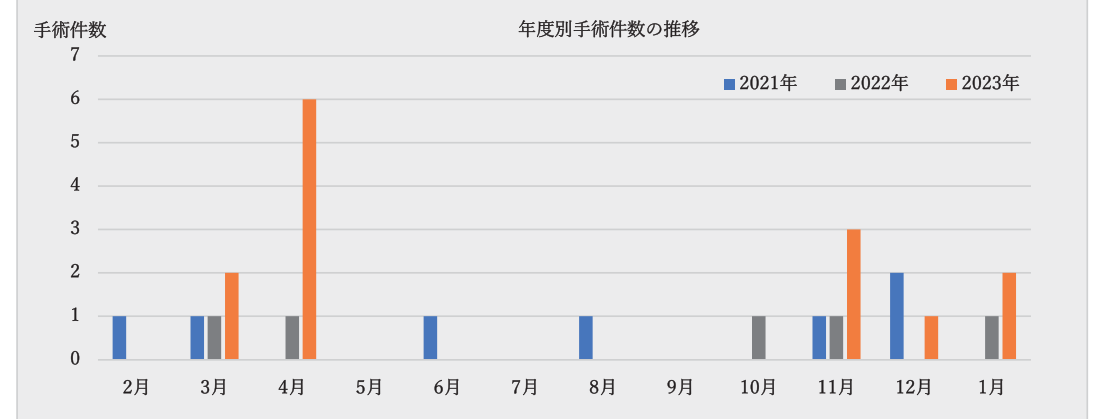
6. 地域医療における今後の課題・解決策等

5.に同じ

阿蘇医療センター 整形外科



阿蘇医療センター 整形外科



派遣先地域医療拠点病院名	山都町包括医療センターそよう病院
氏 名	米満龍史
診療科名	整形外科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

当科より整形外科として外来診療および入院診療にあたっている。入院患者については、常勤医師が主治医にて担当いただいている。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当科診療の範囲内で若手医師へOJTの形で指導している。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

2023年4月～2024年1月の10か月間において、平均約133名/月(初診12名、再診121名)の外来診療にあたっている。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

2023年2月～2024年1月の12か月間において、KMNの文書送受信機能による受信数平均15.6件/月、送信数0.4件/月で利用されている。

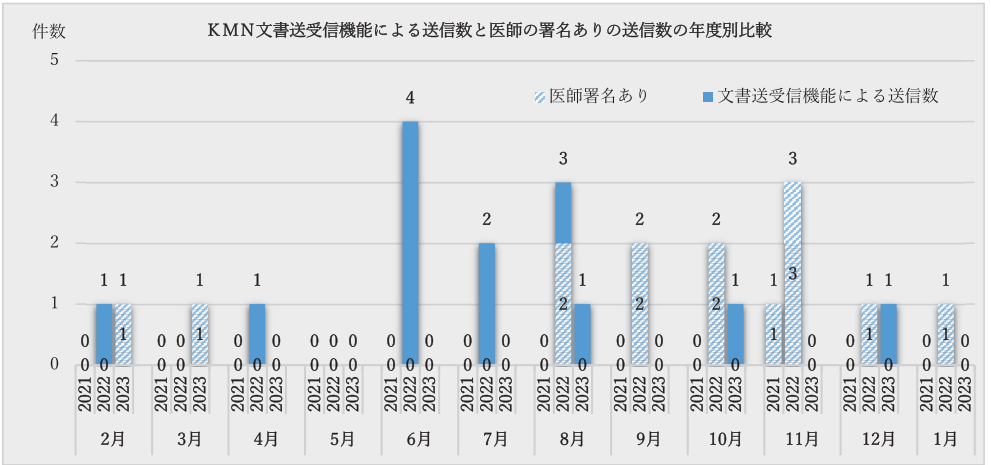
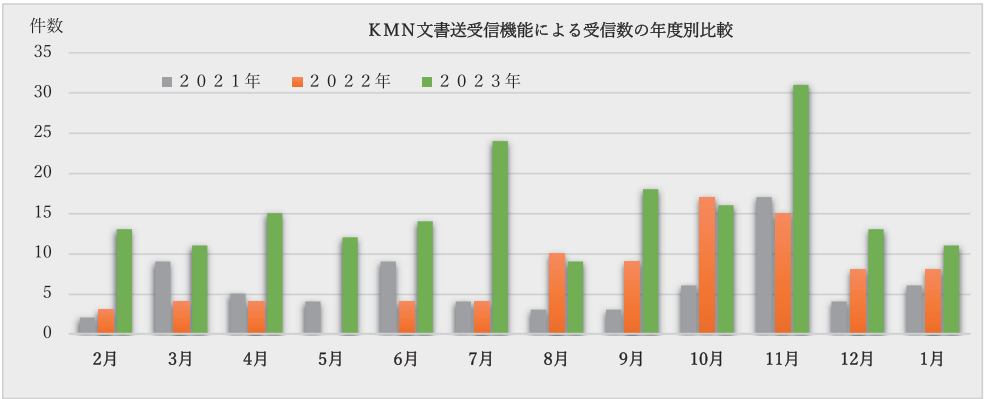
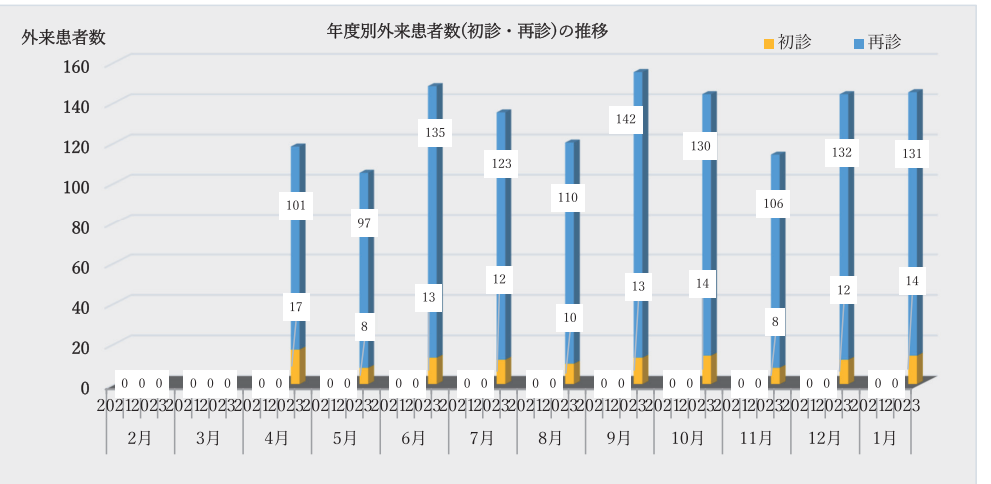
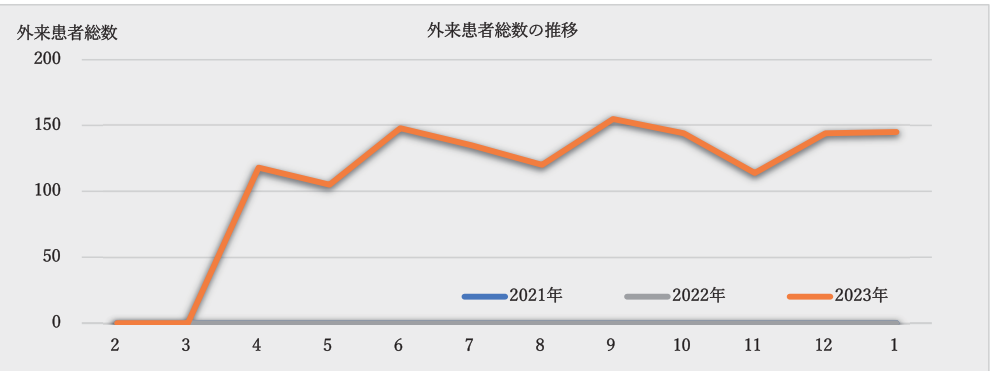
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院として、地域住民の診療に従事されており、整形外科領域では手術が必要な整形外科疾患(骨折等の外傷、人工関節等の変性疾患、脊椎疾患)の手術可能施設への紹介と術後のリハビリテーション(入院、外来)を担っている。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

問題点としてはKMNの送信がほとんど利用できないことが挙げられる。具体的には、KMN立ち上げまでに30分以上を要し、スムーズなKMN利用が難しい状況と思われます。

山都町包括医療センターそよう病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院名	小国公立病院
氏 名	松村智世
診療科名	眼科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週2回の外来患者の診療を行っている。

阿蘇方面には開業医も含め眼科が少なく総合病院の眼科も当院のみであるため、通院負担など地域の患者様にとっては重要な存在であると考える。白内障・緑内障や糖尿病で長期フォローアップが必要な患者や術後のフォローアップが必要な患者が外来には多い印象である。

2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

治療方針等について、連携を図りながら助言を行っている。

3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

2021年2月～2022年1月の診療人数は3560人(初診：247人、再診：3313人)、

2022年2月～2023年1月の診療人数は3307人(初診：187人、再診：3120人)、

2023年2月～2024年1月の診療人数は3108人(初診：161人、再診：2947人)であった。

前述のとおり緑内障、白内障、糖尿病網膜症、高血圧網膜症など加齢に伴う慢性疾患で長期にフォローが必要な患者の通院が3000人前後存在すると考えられる。

4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

眼科の画像検査はKMNでの利用ができないため、全患者が利用することは難しい状況だが、大学病院に紹介する際の文章のみの紹介状では積極的に活用するよう取り組んでいる。

5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

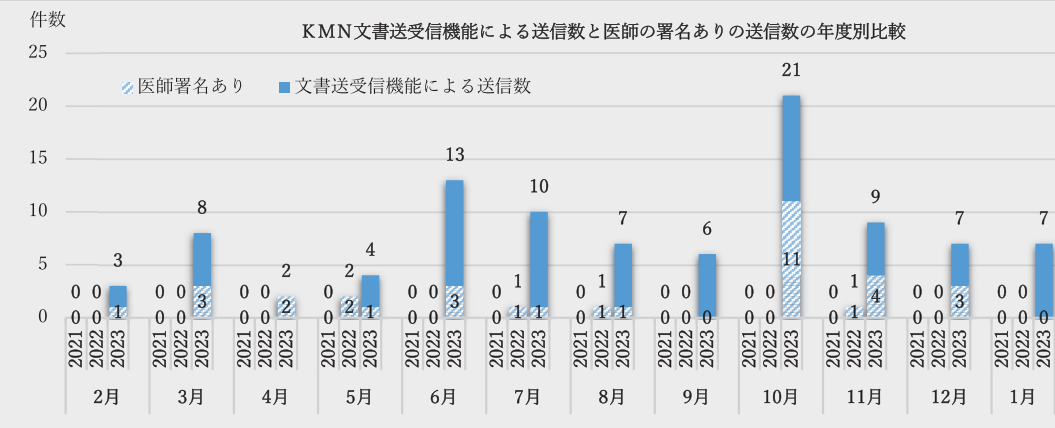
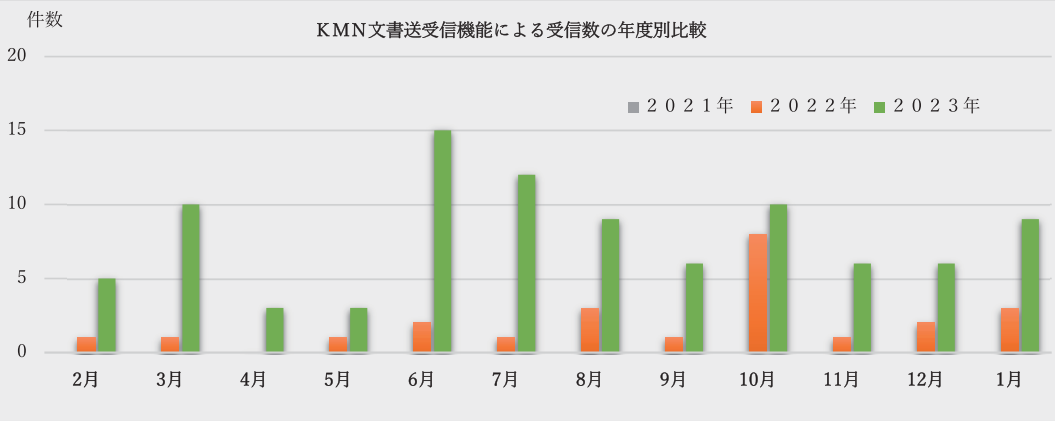
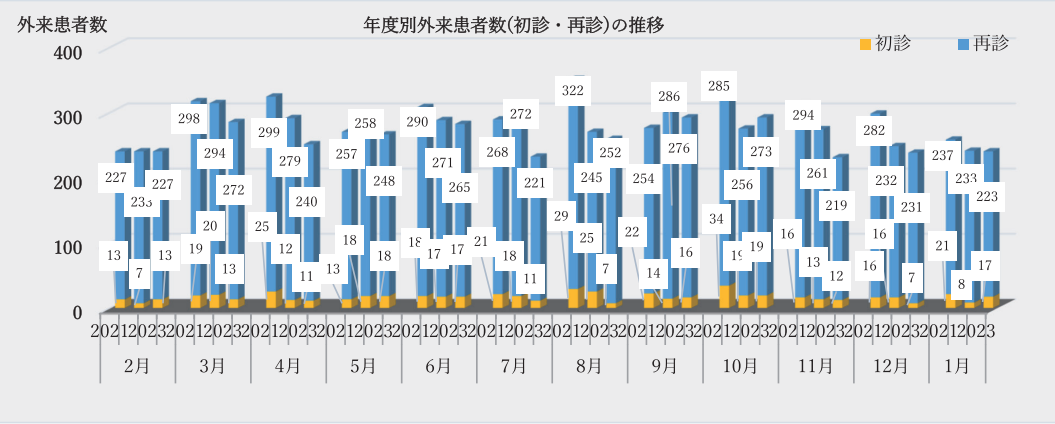
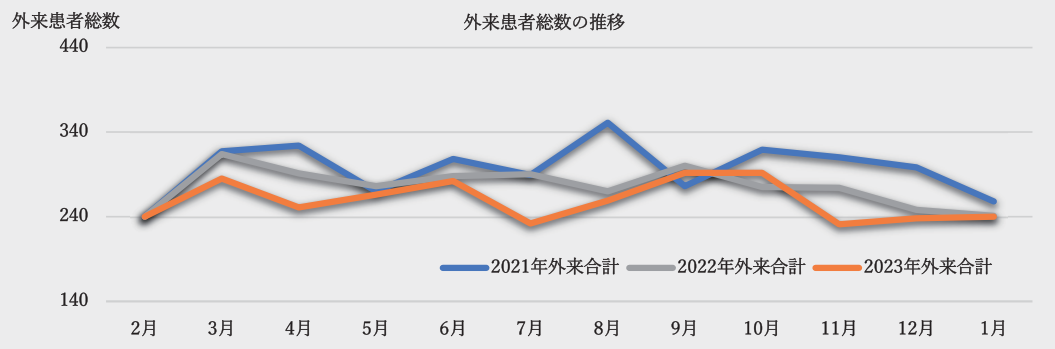
視力も悪く、車での通院が困難な高齢の患者さんを中心に、手術加療が必要かどうかの判断や他院で手術をした患者の術後のフォロー、慢性疾患の長期フォローアップなどを担っている。機器が不足している点はあるが、必要時には市中の総合病院、地域の眼科・内科・脳外科の先生方と連携を取りながら加療を行っている。これまでは他県まで通院していたが今後は小国公立病院眼科をかかりつけにしたいとの患者希望での紹介も多い。

6. 地域医療における今後の課題・解決策等

前項でも述べたように、機器が不足している点が挙げられる。また検査を行っている看護師も他科業務との兼任で、視野検査など検査時間の確保が困難になってきている。

検査機器の不足については、必要時にはご家族・ご本人に病状や検査について説明し、他眼科での検査受診をお願いしている。

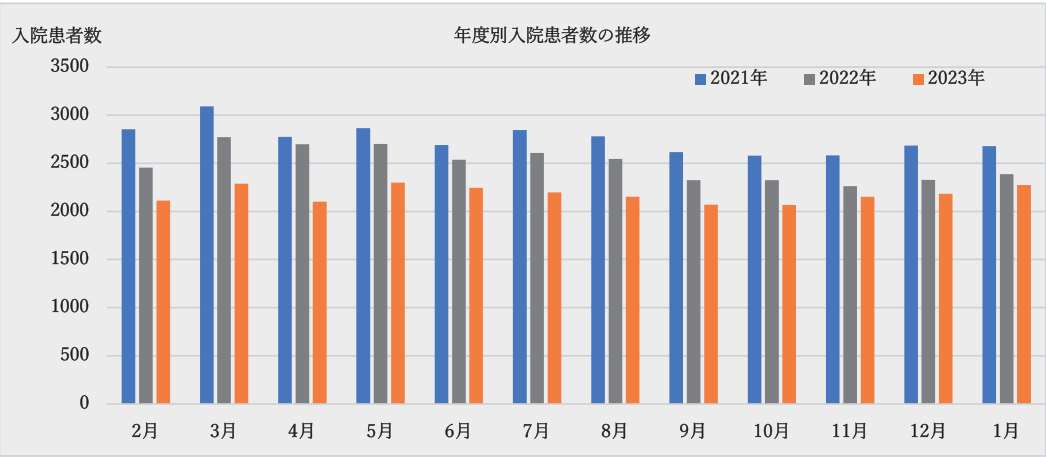
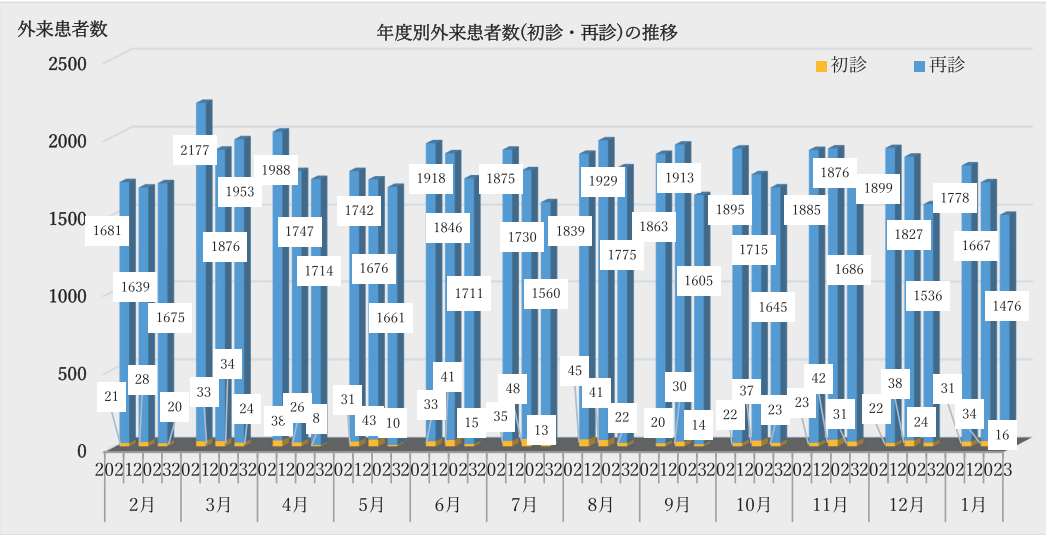
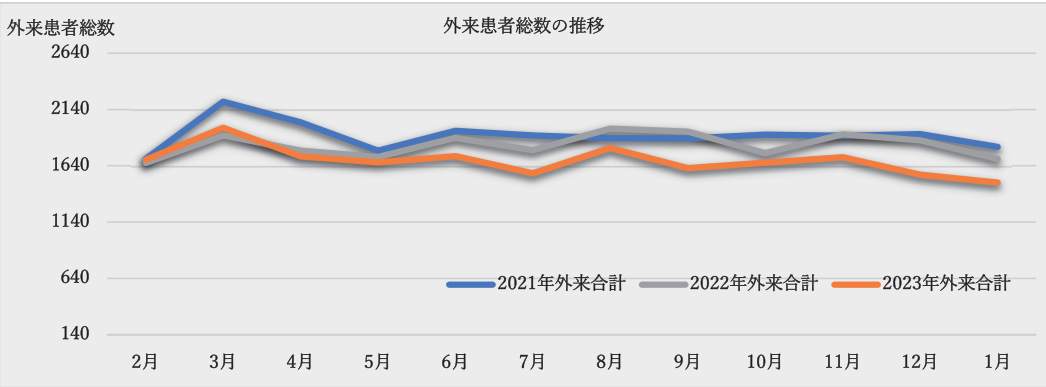
小国公立病院 眼科



派遣先地域医療拠点病院名	県立こころの医療センター
氏 名	日高洋介
診療科名	神経精神科
事業期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日

1. 本寄附講座事業における状況・成果概要
- 外来患者の診療、新型コロナの対応などの診療活動や若手医師への指導等を行った。
2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況
- 就学資金貸与医師を含め、神経精神科医局から派遣されている若手医師の指導を行った。
3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)
- 外来患者は、1月当たり60名～80名の診療を行った。
また、精神疾患や認知症の患者が新型コロナに感染した場合の入院対応等も行った。
4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)
- こころの医療センターはメディカルネットワーク利用施設ではないため、今後利用を検討する必要がある。
5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況
- 地域医療拠点病院に該当しない。
6. 地域医療における今後の課題・解決策等
- 引き続き診療支援を行っていく。

県立こころの医療センター 神経精神科

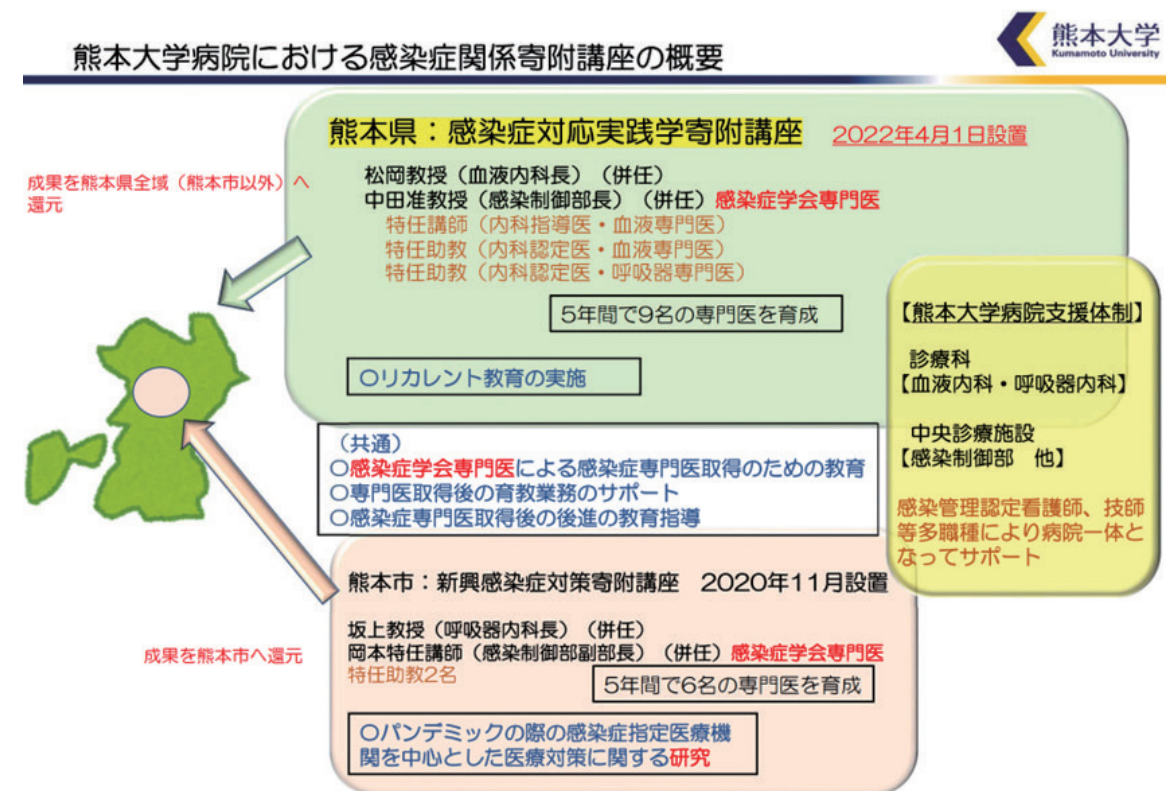


7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要

【スタッフ一覧】

- 教授(兼任) 安永 純一郎(血液・膠原病・感染症内科学講座)
日本血液学会評議員、日本癌学会評議員、日本HTLV-1学会評議員、日本内科学会認定内科医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医
- 准教授(兼任) 中田 浩智 (感染免疫診療部)
日本内科学会認定内科医、インфекションコントロールドクター(ICD)、抗菌化学療法指導医、日本エイズ学会認定指導医、日本感染症学会認定感染症専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本感染症学会認定感染症指導医
- 特任講師 岩永 栄作
日本内科学会認定内科医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本内科学会総合内科専門医
- 特任助教 古田 梨愛
日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医



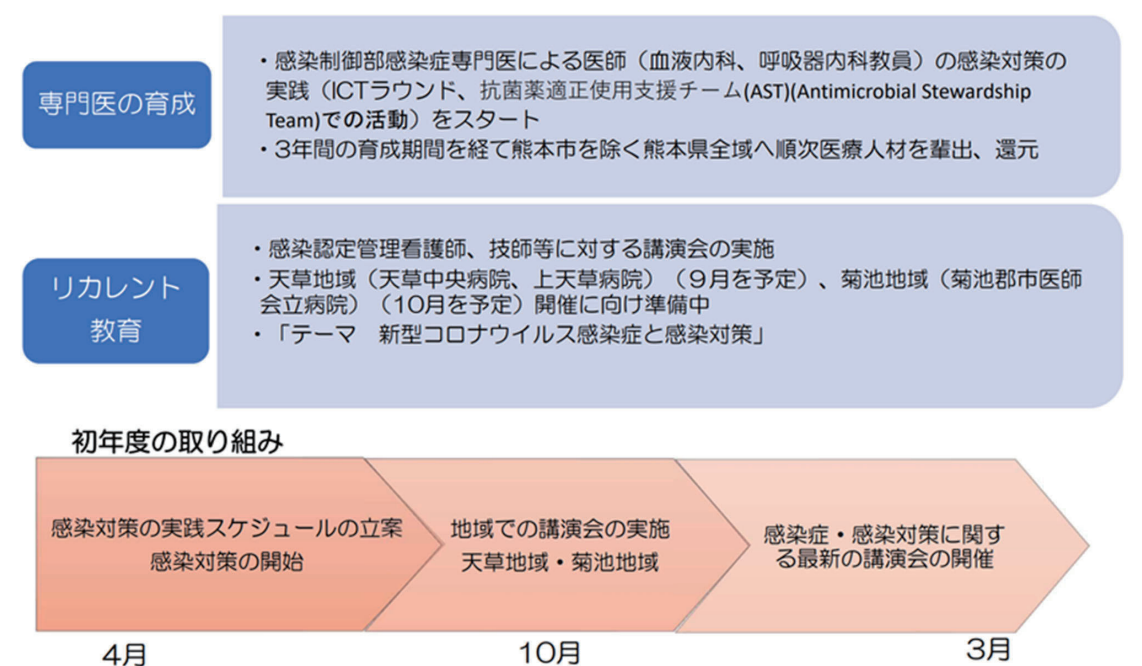
(1) 寄附講座設置概要

現在大流行している新型コロナウイルス感染症をはじめ、多くの新興ウイルス感染症が出現し、人類にとって大きな脅威となっています。新型コロナウイルス感染症で実感されたように、人々の移動の高速化により一箇所で発生した感染症が瞬く間に全世界に拡がる時代となりました。

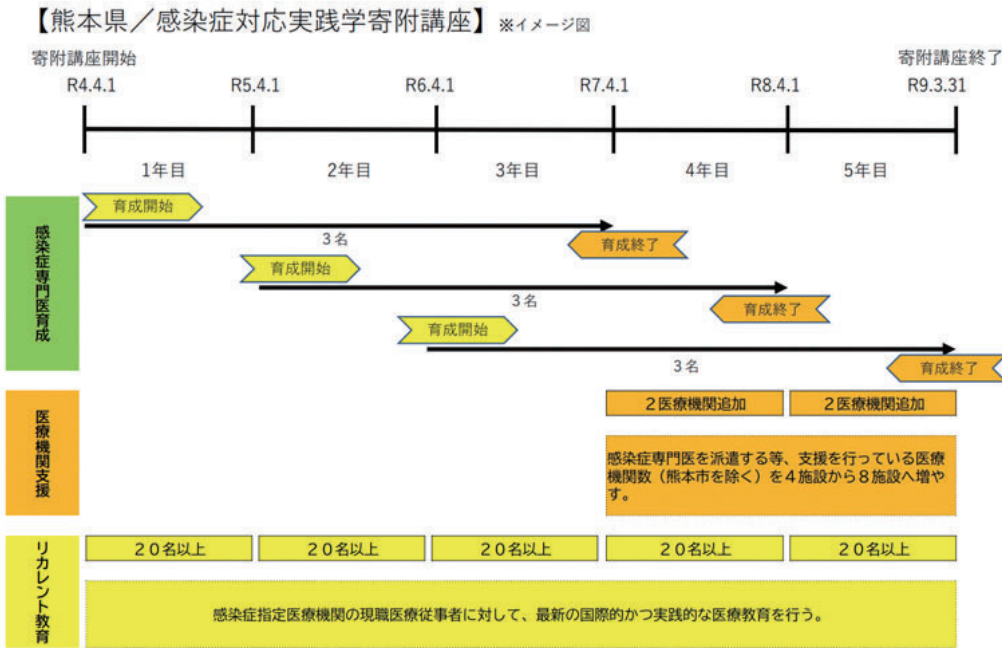
新興感染症や災害時の感染症に対応できる幅広い知識、経験を有する医師・メディカルスタッフが極めて少ない状況であり、これらの感染症に対応できる人材の育成は喫緊の課題です。

本講座においては、熊本県全域で感染症に対応できる医療体制の連携・強化を図ることを目的として、熊本大学病院の感染症専門医を中心に、血液内科や呼吸器内科などの関連診療科及び感染制御部などの協力を得て、病院一体となって、講座運営、教育を行うこととしており、プランとしては、5年間で9名の感染症専門医を育成することとしており、先に設置された市の寄附講座においては「熊本市」へ、県の本寄附講座においては、「熊本市以外の熊本県全域」へ、その育成した人材を送り込むこととしています。併せて、熊本県内の感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の開催等、リカレント教育の実践により、県内各地域における医療現場の最前線に立つ医療従事者の人材育成、ひいては、その地域のゆるぎない医療体制の確立へと繋げていければと考えております。熊本大学病院の理念には、「高度な医療安全管理によって、患者本位の医療を実践し、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献すること」がうたわれており、これらの課題の解決に向けて貢献することは、社会的使命の一つであると考えます。

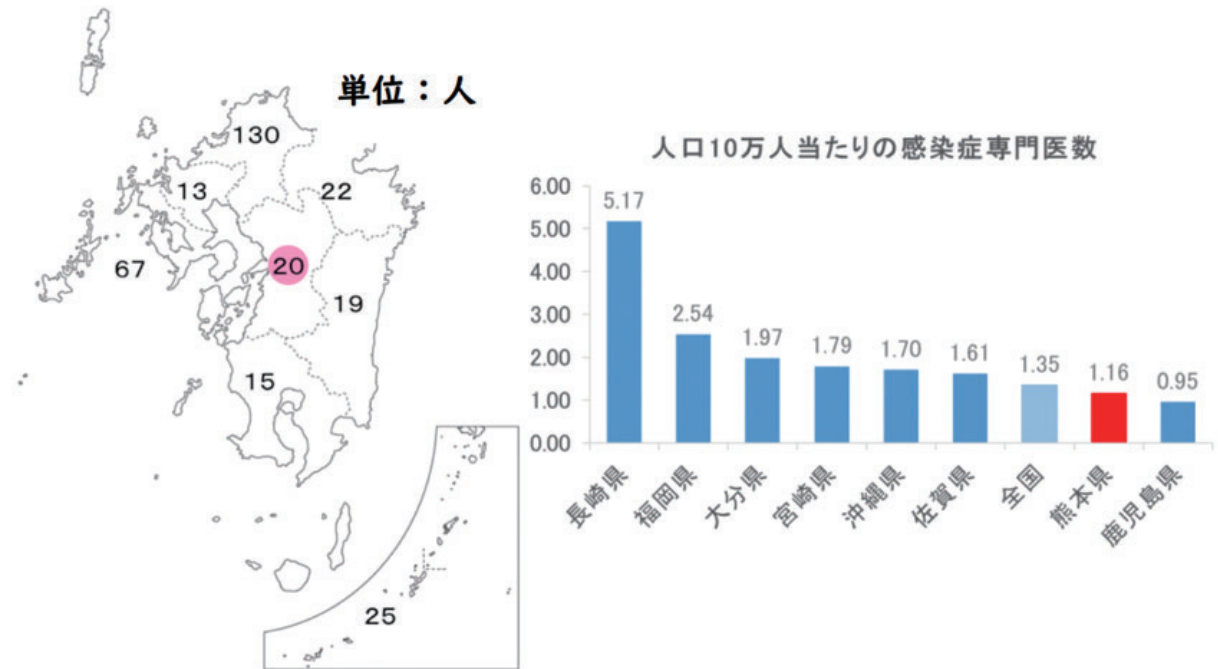
感染症対応実践学寄附講座の4月からの取り組みについて



感染症対応実践学寄附講座事業期間中のプラン

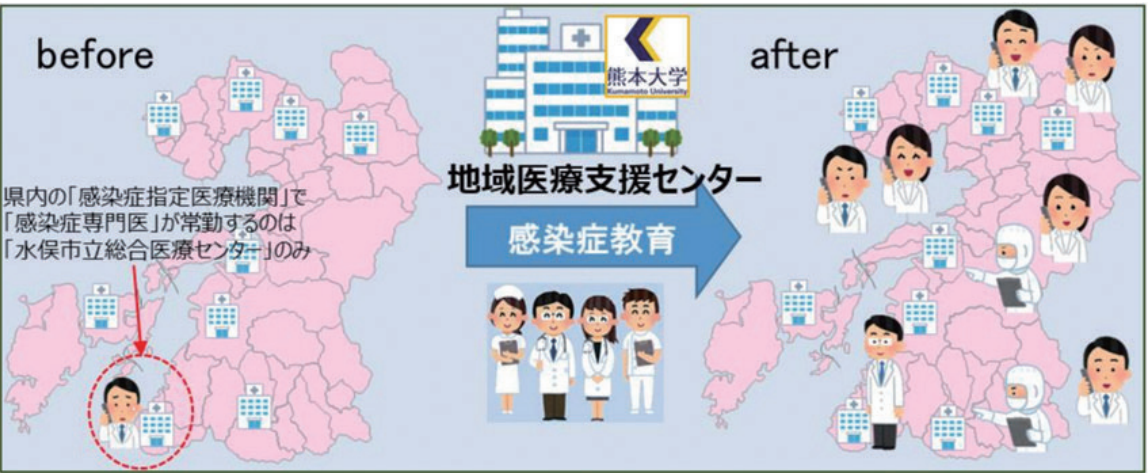


【県内の「感染症専門医」数 令和4年(2022年)4月現在】
育成人数は、令和4年度6名、令和5年度6名だが、今後増員予定である。



(2) 熊本県内における感染症専門医および施設認定の状況

熊本県の感染症専門医の数は全国平均を下回っており、研修を実施できる認定研修機関も限られています。専門医数の1/3は医師経験40年以上であり、世代交代への対応が求められている状況です。人口の約半数を占める熊本市ですら、感染症指定医療機関が1カ所(8床)しかなく、急激な感染症の急増に指定医療機関だけで対応するには限界が懸念されています。



【参考：九州各県の専門医認定者数】
福岡県 130、佐賀県 13、長崎県 67、熊本県 20、大分県 22、宮崎県 19、鹿児島県 15、沖縄県 25

2. 年間活動実績

月	活動内容
通年	【新型コロナウイルス診療】 ・重症患者受け入れ、(大学病院 ICU) 【一般感染対策】 ・ICT コンサルテーション (随時) ・抗菌薬適正使用支援チーム(AST)(Antimicrobial Stewardship Team)会議：毎週火曜日 ・院内感染対策チーム (Infection Control Team : ICT) ラウンド：毎週木曜日 【感染症リカレント教育コースの作成】 ・(先端ウイルス学コース、院内感染制御コース、災害時感染対策コース)等の受講・人材育成へむけた動画コンテンツの整備
9月	臨床実習入門「感染対策」(学生向け実習指導)
10月	【令和5年度前期感染症セミナー】 開催日時：令和5年10月29日(日)14時00分～16時00分 開催場所：熊本城ホール 座長：坂上 拓郎(呼吸器内科)、安永 純一郎(血液・膠原病・感染症内科) 演 者：岡本 真一郎(熊本大学病院)、岩越 一(熊本市民病院) テーマ：新型コロナウイルス感染症 ～これまでの総括と今後の課題～ 内 容：① 岡本 真一郎：パンデミックからわかったこと ② 岩越 一：熊本市民病院におけるこれまでの対応と今後の課題

11月	【熊本地域でのカンファ】 開催日時：2023年11月16日（17名） 開催場所：熊本大学病院 対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者 テーマ：新興感染症に対する講習及びPPE着脱訓練 内 容：感染対策指導
12月	【玉名地域での講演会】 開催日時：2023 年 12月15日（約 40 名） 開催場所：くまもと県北病院 演 者：岩永 栄作、中田 浩智 対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者 テーマ：感染症への理解と感染対策 内 容：① 熊本の HIV 感染の状況、② 冬場の感染症と感染対策 【球磨地域での講演会】 開催日時：2023 年 12月1日（約 15 名） 開催場所：球磨郡医師会館 演 者：中田 浩智 対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者 テーマ：感染症への理解と感染対策 内 容：新型コロナウイルスとインフルエンザの最新の知見
2月	【令和5年度後期感染症セミナー】 開催日時：令和6年2月4日（日）13時30分～16時00分 開催場所：熊本市医師会館 座長：坂上拓郎（呼吸器内科）、安永純一郎（血液・膠原病・感染症内科） 演者：大曲貴夫（国立国際医療研究センター病院）、尾田一貴（熊本大学病院） テーマ：ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～ 内容：① 大曲 貴夫：日本の新しい薬剤耐性（AMR）対策 アクションプランのめざすところ ② 尾田 一貴：抗菌薬適正使用に関わる多面的取り組み ～サーベイランスから個別化投与まで～

【セミナー等の開催】

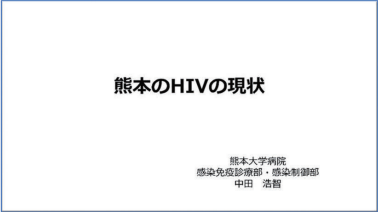
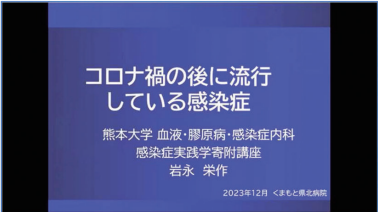
感染症実践学寄附講座の活動目標として医療者、行政担当者も含めた多職種を対象としたセミナーを年2回以上企画・実施しております。令和5年度の開催実績は以下の通りです。

- 令和5年度前期感染症セミナー：2023年10月29日
テーマ：新型コロナウイルス感染症 ～これまでの総括と今後の課題～
- 熊本大学病院多職種カンファ：2023年11月16日（17名）
テーマ：新興感染症に対する講習及びPPE着脱訓練
- 玉名地域での講演会：2023年12月15日（約40名） 開催場所：くまもと県北病院
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 球磨地域での講演会：2023年12月1日（約15名） 開催場所：球磨郡医師会館
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 令和5年度後期感染症セミナー：2024年2月4日
テーマ：ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～

各セミナーの実施概要

- 令和5年度玉名地域感染症講演会（くまもと県北病院）
熊本大学病院 令和4年度 感染症実践学寄附講座セミナー
「コロナウイルス感染症の取り組みと今後の課題」

開催概要：
令和5年12月15日に感染症実践学寄附講座セミナーをくまもと県北病院で開催しました。2演題の講演があり、岩永特任講師によりトピックス「コロナ禍の後に流行している感染症」が、中田准教授より「HIVの基礎と熊本の現状」として最新知見についての解説が行われました。
参加人数はweb聴講を合わせて307名で、医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、臨床工学技士、事務職など周辺機関を含め多職種の聴講がありました。



<参加者アンケート>

・あらためて標準予防策を徹底しようと思いました。・HIV感染に対する考え方が変わりました。必要以上に警戒していたと思いました。HIVウイルスも基本的なPPE対応で怖がる必要はないと分かりました。HIVの最新の話が聞かれてよかったです。HIVの正しい知識を得ることで、針刺しや緊急内服への対応を考える時、落ち着いて行動できると思いました。それよりも肝炎抗体を持っておくことの重要性を感じました。自分の感染カードは自分で管理しているので、猛省しました。SARS-CoV-2のN抗体はウイルス表面に対する抗体ではないので、感染防御に関与するのでしょうか？既感染を判断する指標にはなると思うのですが、ありがとうございました。コロナウイルスに関わらず様々な感染症が増えてきているので、自分ができる感染症対策を出来るところから実践していきたい。コロナだけでなくHIVや梅毒など若者への感染症も増えており、検査も時には必要であることがわかった。今後の看護に活かしていきたい。コロナだけでなくインフルやプール熱等々感染が流行しており、予防や対策など理解することは重要なので勉強になりました。コロナは発症前より感染力があり、インフルエンザは発症後感染力があるので、症状が出たら、より一層手洗・うがい等の感染予防が重要であると再認識できた。コロナ禍前に流行していた感染症の再燃やHIVについて、気をつけるべきポイントが再度確認でき良かったです。標準予防策の大切さも再確認しました。コロナ感染症でHIVについて何となく忘れがちになっていたが、水面下では患者の高齢化が問題となっており、生活習慣病や血液透析・精神疾患など合併症の問題が出てきている。本日の講演を聴き、改めてHIVの現状について理解できた。コロナ対策からHIVの最新知見まで、参考になりました。しっかりと感染症対策をして業務に取り組もうと思いました。わかりやすかったです。改めて感染症の怖さを知り日頃から自分が行える感染対策について再認識しました。感染症における一番の対策は標準予防策だということを学んだ。感染症予防のために肩より上に手を持って行って極力触る事が無いように気を付けたい。感染対策として今後も手指消毒・手洗い・マスクの着用は継続したいと思います。HIV/AIDSについて、わかりやすく説明されていて理解しやすかった。通常の日常生活では感染しないし、標準予防策で対応は十分であることがわかり、恐れる病気ではないことが理解できました。感染対策のうちの一つにある手指衛生が自分自身十分には行えていないと思うので見直して行きたい。基本の手洗い、マスクの重要性をより思った。今後も予防が必要だと感じた。施設や病院でもまだまだ、コロナのクラスター発生している現状。マスクや手洗いといういなど基本的なスタンダード プリコーションが重要であると思った。又、患者さんへの指導も行なっていきたい。HIVが九州地区に多いのも以外で梅毒やB型肝炎の際は注意して検査の必要性を医師と相談していきたい。少し難しい部分もあった。新型コロナウイルスの感染力が発症前や発症時にピークになることや、鳥由来新型インフルエンザの死亡率が新型コロナウイルスの何倍にもなると予想されていることを知り勉強になりました。他人事のように思っていたましたが、HIVなどの感染症は、我々のすぐ近くにあるということを認識できた。丁寧に説明されてよく理解できました。冬場の感染症については自身も留意すべき点があって有意義だった。HIVの講演については、知識を増やす点において有意義だった。特にHIVの講義はとても勉強になりました。どういった際に検査を検討すべきかについて知ることができて良かったです。内容は難しかったのですが、勉強になりました。梅毒やHIV感染症に関する最新の情報や取り組みを学びました。標準予防策をしっかり行い勤務していきたいと思います。普段触れる機会が無い抗HIV薬について、現在の方向性について知ることができてよかったです。聞いてみてよかった。無意識に腕を頭の高さまで上げてしまう事があるので、感染予防として腕の高さを意識して業務にあたろうと思いました。

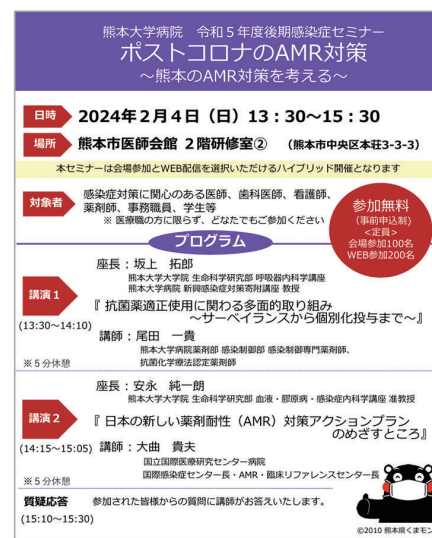
●令和5年度後期セミナー

熊本大学病院 令和5年度 感染症セミナー

開催概要：

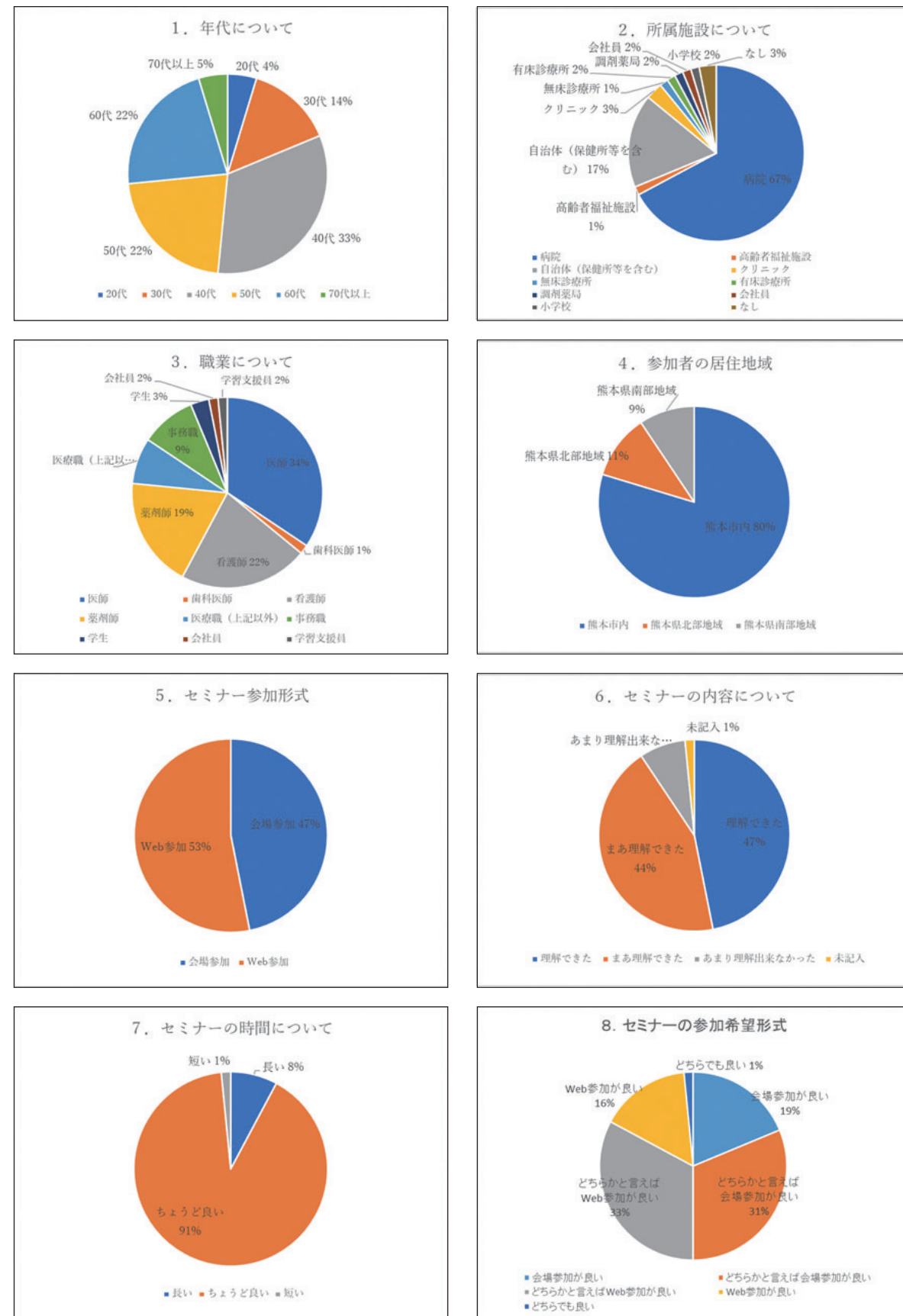
令和6年2月4日に「熊本大学病院 令和5年度 後期感染症セミナー」を、熊本医師会館での現地開催およびWebでのハイブリッドセミナー形式にて開催しました。テーマを「ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～」と題し、大曲 貴夫先生(国立国際医療研究センター病院)から「日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策」、尾田 一貴先生(熊本大学病院)から「抗菌薬適正使用に関わる多面的取り組み」についてご講演いただきました。

薬剤耐性菌への対応について最新知見についての解説が行われました。参加人数は135名で、医師、薬剤師、看護師、獣医師、介護職、臨床検査技師など多職種の聴講があった。参加者アンケート結果も概ね好評でした。



<参加者アンケート>

・日本の感染症領域のトップランナーである先生の講演を熊本で拝聴できてよかったです。・興味ある内容で大変良かった・興味深い内容で面白かったです。勉強になりました。・わかりやすいご講演ありがとうございました。・機会があればまた参加させていただきます。・分かりやすく、仕事上に活かせる内容であった・特定の抗菌薬の適正使用に対してとても分かりやすくお話して頂きありがとうございました。職場に持ち帰り抗菌薬を漫然と使用することの危険性など伝達していきたいと思いました。・第一線の講師の方からわかりやすいお話を拝聴でき参考になった。web参加でしたが、ハンドアウトがダウンロードできれば、たいへん嬉しいです。また、オンデマンドなどでも聴けるとより理解が深まるかなと思います。・来年度の診療報酬改定での介護施設との連携や AWaRe分類など、勉強になりました。AMR対策として考えなければいけないことについて考える機会になったと思います。



【リカレント教育へ向けた感染症研修webコースコンテンツの作成】
（先端ウイルス学コース、院内感染制御コース、災害時感染対策コース）

高度医療人の育成・リカレント教育へ向けた感染症教育用のwebコンテンツの作成を行いました。熊本大学のEラーニングサイトに感染症リカレント教育の講習コースを設置し、11編の動画公開を行い、13名のコース受講者(院内)を登録しました。

抗菌薬適正使用
第1部 (PK-PD)



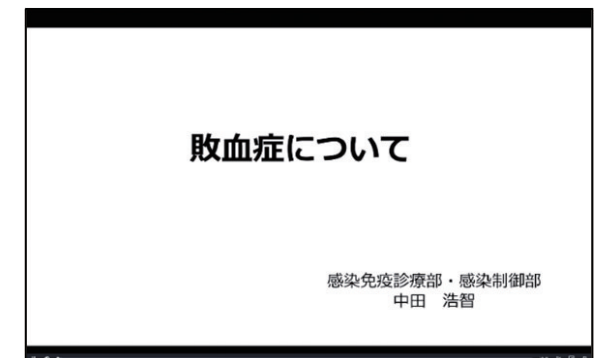
第2部 (抗菌薬の役割)



第3部 (抗菌薬選択)



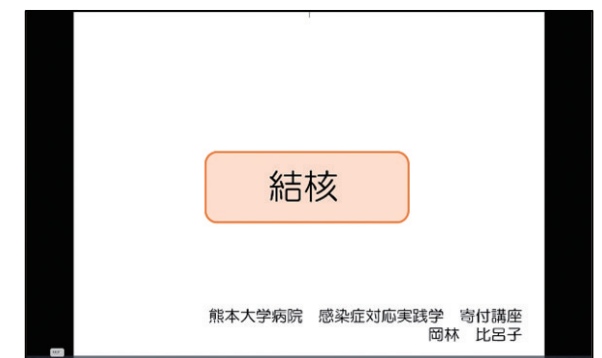
敗血症



呼吸器感染症
成人市中肺炎診療の基本



結核



日和見感染症と発熱性好中球減少症
発熱性好中球減少症



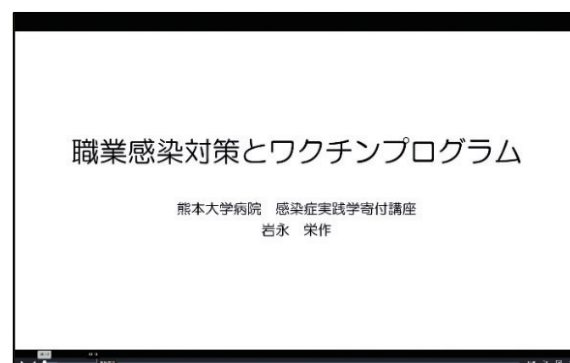
日和見感染



免疫不全
HIVと免疫再構築



職業感染対策
職業感染対策とワクチンプログラム



災害医療
災害と感染症



8 業績

1. 熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター）

【論文、執筆】

- Masaharu Akao, Hikari Tsuji, Kengo Kusano, Kunihiko Matsui, Shinya Hiramitsu, Yutaka Hatori, Hironori Odakura, Hisao Ogawa. Clinical characteristics and outcomes of Japanese atrial fibrillation patients with poor medication adherence: A sub-analysis of the GENERAL study. Journal of cardiology. 2023. 81. 2. 209-214
- Eiichiro Yamamoto, Hiroki Usuku, Daisuke Sueta, Satoru Suzuki, Taishi Nakamura, Kunihiko Matsui, Kenichi Matsushita, Tomoko Iwasaki, Naritsugu Sakaino, Toshihiko Sakanashi, et al. Efficacy and Safety of Esaxerenone in Hypertensive Patients with Left Ventricular Hypertrophy (ESES-LVH) Study: A Multicenter, Open-Label, Prospective, Interventional Study. Advances in Therapy. 2024. 41. 3. 1284-1303
- Masahiro Sugawara, Sunao Kojima, Ichiro Hisatome, Kunihiko Matsui, Kazuaki Uchiyama, Naoto Yokota, Eiichi Tokutake, Yutaka Wakasa, Shinya Hiramitsu, Masako Waki, et al. Impacts of Febuxostat on Cerebral and Cardiovascular Events in Elderly Patients with Hyperuricemia: Post Hoc Analysis of a Randomized Controlled Trial. Clinical pharmacology and therapeutics. 2024
- 高本 文明、高柳 宏史：著書の執筆内容について監修・助言、ことばの点滴：医療Q&A(下)、熊本日日新聞社(出版)、258-275, 2023
- 医療系AIガイドライン作成チーム(大西 弘高, 佐瀬 雄治, 森田 瑞樹, 高柳 宏史, 大野 每子)、プライマリ・ケアにおけるAI利用ガイドライン - プライマリ・ケア医におけるAI利用の可能性と注意点 -

【研究】

- 松井 邦彦(分担研究者)、基盤研究(C)「臨床現場での多重課題における意思決定要因の解明」(研究代表者：小山 博史)、研究期間：2020-04-01-2025-03-31
- 松井 邦彦(分担研究者)、基盤研究(C)「粒子状物質による急性心筋梗塞や院外心停止の発症および発症メカニズムの解明」(研究代表者：小山 博史)、研究期間：2021/04/01-2024/03/31
- 松井 邦彦(研究開発分担者)、「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション(RRI)」推進に資する取り組み」、研究期間：2022/12/01-2025/03/31

【学会発表】

- Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. What Perspectives do U.S. Hospitalists who had Clinical Training in Japan have toward Introduction of Hospitalist Services for the Work Style Reform in Japan? A Qualitative Interview Study. Society of General Internal Medicine Annual Meeting 2023. May 10-13. Aurora, Colorado. (Poster presentation)
- Michito Sadohara, Hiroshi Takayanagi, Kunihiko Matsui. The educational impact of fieldwork and lodging trip for medical students who have obligation to work at rural area. WONCA 2023. October 26-29. Sidney, Australia. (Oral presentation)
- 西村 理恵, 植田 真一郎, 松井 邦彦, 佐土原 道人, 東恩納 美樹, 作間 未織, 森本 剛、「臨床医学系学会における研究公正・倫理教育の現状と課題」、医学教育学会、2023/07/28-2023/07/29、長崎市、(口演)
- 阿部 貴美香, 高柳 宏史, 園川 仁美, 古池 雅明, 松井 邦彦, 「ここ、熊本で医師になること～地域医療広報誌 Cocode を通して～」、第 14 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 2024、2023/05/12-2023/05/14、豊田市、(ポスター)
- 平木 亨弥, 高柳 宏史, 永野 心, 松岡 りほ, 松井 邦彦, 「コロナ禍の中でつなげる～熊本大学の地域医療ゼミの取り組み～」、第 14 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 2024、2023/05/12-2023/05/14、豊田市、(ポスター)

【講演会、講師】

- 高柳 宏史、「総合診療の専門性とは～家庭医療学の分野から～」、第3回熊本地域医療勉強会、2023/06/23、(講演)
- 高柳 宏史、「総合診療医のためのメンタルヘルスケアの基礎」、第91回KOPe定例会、2023/10/18、(講義)
- 高柳 宏史、「災害の地域への影響～熊本地震、水俣病～」、長崎大学・福島県立医科大学共同大学院 災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)医学科コース「地域医療学」、2023/12/20、(講義)
- 高柳 宏史、「共に築くプライマリ・ケアとは～2つの事例をとおして～」、令和5年度臨床検査講習会、2024/01/14、(講演)
- 高柳 宏史、「海外と比較でミエル！日本の総合診療医！」、Dr. Prime Academia レクチャー、2024/01/31、(講演)
- 高柳 宏史、「日常診療におけるポリファーマシーに対する合理的な減薬の一手」、2023年度日本プライマリ・ケア連合学会熊本県支部講演会・総会、2024/02/17、(講演)
- 高柳 宏史、「ICPC-3について」、日本プライマリ・ケア連合学会オンラインICPCセミナー、2024/03/20、(講義)

2. 地域医療・総合診療実践学寄附講座

【論文、執筆】

- Kosuke Ishizuka, Kiyoshi Shikino, Akira Kuriyama, Yoshito Nishimura, Emiri Tanaka, Saori Nonaka, Michito Sadohara, Mitsuru Moriya, Noriko Yamamoto. A proposal for coping strategies on burnout among Japanese resident physicians. Journal of General and Family Medicine. Vol. 25, p 83-84, 2024

【研究】

- 荒木 智、基盤研究(C)「トレハロースによる腸-脳-心連関の解明」、研究期間：2022/04/01-2025/03/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関する質的研究」、研究期間：2018/08/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「働き方改革のためのホスピタリスト・システムの導入に対し、米国で働く日本人ホスピタリストはどのような見方をしているか?」、研究期間：2018/09/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関するアンケート調査」、研究期間：2019/06/21-2025/03/31
- 佐土原 道人、「研修医のストレスに関する実態調査」、研究期間：2018/07/20-2023/03/31
- 佐土原 道人、「研究倫理と公正に係る患者・市民参画(PPI)に関する質的研究」、研究期間：2023/12/05-2025/03/31
- 佐土原 道人、「ポストコロナの地域医療特別実習の教育的効果とコミュニティへの視点に関する研究」、研究期間：2023/11/22-2025/03/31
- 佐土原 道人、「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション(RRI)」推進に資する取り組み」、研究期間：2022/12/01-2025/03/31
- 北村 泰斗, 佐土原 道人(研究開発分担者)、「軽症・中等症として入院したCOVID-19患者における入院長期化の関連因子」、研究期間：2022/12/05-2029/03/31

【学会発表】

- Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. What Perspectives do U.S. Hospitalists who had Clinical Training in Japan have toward Introduction of Hospitalist Services for the Work Style Reform in Japan? A Qualitative Interview Study. Society of General Internal Medicine Annual Meeting 2023. May 10-13. Aurora, Colorado. (Poster presentation)
- 佐土原 道人、「レジデント(研修医)のバーンアウトーいかに防ぎ、いかに救うかー「Well-being 2.0」」、ACP(米国内科学会)日本支部年次総会・講演会2023、2023/06/24、オンライン、(オンライン講演)

- Michito Sadohara, Hiroshi Takayanagi, Kunihiko Matsui. The educational impact of fieldwork and lodging trip for medical students who have obligation to work at rural area. WONCA 2023. 2023/10/26-2023/10/29. Sidney, Australia. (Oral presentation)
- 西村 理恵, 植田 真一郎, 松井 邦彦, 佐土原 道人, 東恩納 美樹, 作間 未織, 森本 剛、「臨床医学系学会における研究公正・倫理教育の現状と課題」、医学教育学会、2023/07/28-2023/07/29、長崎市、(口演)

【講演会、講師】

- 佐土原 道人、「社会が求める医師の臨床能力とは、臨床研修の問題点への対応」、第22回熊本大学病院群臨床研修指導医研修ワークショップ、2023/12/01-2023/12/02、(タスクフォース)
- 佐土原 道人、「医師臨床研修制度の理念と概要、臨床推論を引き出すプレゼンテーションの指導、臨床研修現場での評価とポートフォリオ、指導医に必要な医療安全・労務管理の知識、フィードバックセッションの体験」、第29回徳洲会グループ臨床研修指導者養成講習会、2023/12/16-2023/12/17、(タスクフォース)
- 佐土原 道人、研修評価、2023年度全日病・臨床指導医講習会、2024/01/14, 2024/01/28、(タスクフォース)
- 佐土原 道人、フィードバック, 研修方略、令和5年度臨床研修指導医講習会(全国自治体病院協議会)、2024/02/03-2024/02/04、(タスクフォース)
- 佐土原 道人、研修方法と研修評価、令和5年度第1回看護師特定行為指導者講習会(全日病)、2023/09/10、(タスクフォース)
- 佐土原 道人、研修方法と研修評価、令和5年度第3回看護師特定行為指導者講習会(全日病)、2023/11/19、(タスクフォース)

3. 教育拠点（くまもと県北拠点・河浦拠点）

【論文、執筆】

- Shimanaga S, Oyama K, Takaki Y, Miyagi T. Usefulness of Fecal Calprotectin in Differentiating Inflammatory Bowel Disease in a Young Patient with Autism Spectrum Disorder. Journal of Hospital General Medicine. 2024

【学会発表】

- Kohta Oyama, Sadahiro Tamiya. Thai medical students studying community medicine in Kumamoto Prefecture, Japan. WONCA World Conference. 2023/10/26-2023/10/29. Sidney, Australia. (ポスター)
- 鶴田 真三、「若手医師が国診協施設にたどり着く理由」、全国国保地域医療学会、2023/10/7

【講演会、講師】

- Kohta Oyama. Healthcare for the Elderly in Japan. School of Medicine Annual Scientific Conference 2023. 2023/12/13-2023/12/15. (口演)

4. 総合診療科 医局員・専攻医

【論文、執筆】

- 平賀 円、「病院総合医チームPresents実践！使える論文MyTop5-超高齢者医療編-」、プライマリ・ケア(一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会発行)、page72-74 Vol.8 No.4 2023

【学会発表】

- 松田 圭史、「Potential use of new generation of immunomodulatory imide drugs (IMiDs) against IMiDs resistant multiple myeloma.」、第82回日本癌学会学術総会、2023/09/21-2023/09/23、(ポスター)

- 平賀 円、「施設看護スタッフとの連絡ツールにグループチャットを導入した事による変化について」、第27回日本病院総合診療医学会学術総会、2023/08/26-2023/08/27、東京、(口演)
- 平賀 円、「山間部の地域中核病院で経験したツツガムシ病の5例のまとめ」、日本プライマリ・ケア連合学会 第18回九州支部総会・学術大会、2024/01/20-2024/01/21、宮崎、(口演)
- 下地 徹、「在宅看取りにおける緊急時対応を向上させるための取り組み～当院での看取り本と在宅患者確認表の導入～」、日本プライマリケア連合学会九州支部総会・学術大会

【講演会、講師】

- 平賀 円、「私の考える総合診療～専門医第一期生の目線から～」、熊本県医師会令和5年度日本医師会生涯教育講座、2024/02/24、(口演)



おわりに

1. 教員

■ 荒木 智 特任准教授（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

地域医療・総合診療実践学寄付講座に赴任し1年半が経過しました。やっと仕事にも慣れることができ、今年度は就学資金貸与学生や医師の面談などのキャリア形成支援業務や地域医療機関への診療支援に携わらせていただきました。

今年一番、思い出に残ったのは3年ぶりに実施された上天草地域での夏季地域医療特別実習に参加させていただいたことです。現在、天草地域で診療支援をさせていただいておりますが、実習の指導を通して、改めて病院を出て地域を学ぶことの重要性を学ばせていただきました。医師となり20年の節目の年となりましたが、今後も総合診療医としての学びを深めてまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 佐土原 道人 特任助教（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

診療支援先は、昨年度は、小国公立病院と阿蘇医療センターでお世話になりました。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。

総合診療専門研修プログラム関連では、来年度も途切れなくプログラムに1名の専攻医を得たこと、専攻医の修了見込みが1名、専門研修修了者が専門医試験に1名合格、特任指導医からの移行で複数の専門医の取得者ができました。ゆっくりですが、着実に総合診療専門研修もひろがりをみせて安定した運営ができてきております。引き続き専攻医の専門研修を各連携施設でお願いすることになりますので、ご指導をよろしくお願いします。

コロナ禍から、ウィズ／ポストコロナ時代へと移っていった昨年度ですが、地域卒学生や自治医科大学学生を対象に行っている地域医療特別実習が、4年越しに開催できました。学生のカリキュラムの都合で、夏季と冬季の2回に分けて行いました。その成果は、昨年度シドニーで開催された世界家庭医機構で発表し、今年度もボストンの米国総合内科学会で発表予定です。我々の教育活動を世界に発信できることは、うれしい限りです。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 高柳 宏史 特任助教（地域医療支援センター）

2022年から家庭医療学の講義を2コマ、総合診療学の中で設けることになり、今年は2年目でした。家庭医療学を2コマで概説するというのは、難しいことであると感じつつも、海外におけるFamily medicineの教科書、論文などを準備のために読み吸収・咀嚼してまとめるというのは、自分自身にとってもとても深い学びになっています。

以前から、家庭医療学について講義で触れているのですが、「プライマリヘルスケア」や「プライマリケア」という言葉は家庭医の地域での取り組みを整理しまとめたものであるというのが、最初の大きな学びでした。

第一講では、家庭医療学が一つの専門領域として確立された歴史的な経緯、その中でプライマリヘルスケアやプライマリケアがどのように生まれたかについて話をしています。

第二講では、家庭医療学の専門性の確立の中で触れることになる患者中心性について概説しています。さらに、継続的な医師・患者の関係性、そして、包括性について概説しています。

近年、統合という言葉が総合診療分野で多用されていますが、海外においてこの統合という言葉はintegrated careやintegrative medicineといった言葉があります。しかし、それぞれ方向性の異なるものです。このことに恥ずかしながらこの2コマの家庭医療学の講義を開講してから気が付きました。今では、そのどちらも家庭医としての診療にはつながってくる内容であるため、場面場面でちゃんと使い分けるようになりました。興味のある方は、それぞれの意味する内容を調べてみてください。

一年間、ありがとうございました。

■ 北村 泰斗 特任助教（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

今年度は、地域医療・総合診療に関連した臨床研究、地域枠学生・医師のキャリア支援、医学部カリキュラム、テレビ会議システムを利用した合同WEBカンファ、総診セミナー、診療支援（学内総合診療科外来、そよう病院外来、くまもと県北病院救急外来）等の活動に関わらせていただきました。

なかでも、初参加となった夏季地域医療特別実習は、本講座のエッセンスが詰まっていて、学生とともに自身の学びになりました。今後の活動に繋げていきたいと思っています。

診療支援の場では、高齢化が進み、限られた資源の中で、それぞれの生活に応じた医療や福祉との適切な関係をうまくコーディネートすることへのニーズを感じますし、総合診療医としてのやりがいを感じる部分でもありました。これから地域医療に携わっていただける学生や医師の方にも、専門性ととともに総合診療マインドを持つことの面白みを実際に体感してもらいながら、将来、地域医療の場で自然とそれらを実践してもらえよう工夫したいと思います。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしく願い申し上げます。

■ 鶴田 真三 特任助教（河浦教育拠点）

河浦病院に赴任して3年目になりました。河浦拠点が動き出して以降、はじめてレジデントの入れ替わりがありましたが、それぞれのレジデントに合わせて教育を行うことができました。それぞれのレジデントも無理なく楽しんで河浦での生活を過ごせていたようなので、その点ではよかったと思います。

さて、河浦病院での総合診療科の活動としては、昨年に比べ、社会的にコロナ禍が薄れてきたこともあり、地域活動ができるようになってきたことで、活動の幅を広げられていると思います。地域住民向けの講話、地域の医療・介護・福祉の多職種との協議の場や勉強会、地域の祭への参加、ボランティア活動、地域の方との釣り等、以前よりレジデントや学生にも経験してもらえようになりました。地域活動ができるようになってきたからこそ、その楽しさ、やりがい、大変さを改めて実感し、僻地だからこそ地域で生きていくことの楽しさを自分自身も改めて感じています。天草や、天草に似たような僻地での仕事の楽しさ、僻地での暮らしの楽しさを学生や若手医師、若手多職種にさらに伝えていきたいと考えています。そのために、今後も学生やレジデントの天草地域（特に河浦）への派遣や宣伝をどうぞよろしく願いいたします。

今後も自分たちが地域へ浸透していき、より一層、地域の街づくりの一員となれるよう、頑張っていると思います。

■ 中村 孝典 特任助教（くまもと県北教育拠点）

令和5年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教として前年に引き続きくまもと県北病院教育拠点にて臨床業務および卒前卒後教育を行いました。

前年度同様自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで毎度のことながら新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では新たに2名の後期研修医が入職しました。それぞれタイプの違う学習者であり指導医としての自分の引き出しの少なさを痛感する日々でした。ただ自分のプライベートの時間を使って、医学教育の勉強会にも参加するようになりそこで得た知識を、ダイレクトに自分の教育現場で生かすこともできました。

そんな中で、日々の診療や定期的な後期研修医との振り返りを通じて、彼らの成長を実感でき教育者としてのやりがいを実感することもでき、指導医としては大変有意義な一年となりました。

研究活動については、ほぼ進捗はなく臨床、教育のみに時間を割いていました。今年度については更に後期研修医が増えるためタイムマネジメントを意識して、臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を続けながら、研究活動も行っていきたいと考えています。

2. 非常勤講師・客員研究員

■ 田宮 貞宏 県北教育拠点指導医（くまもと県北病院 院長／総合診療科）

令和6年度の「医師の働き方改革」「診療報酬改定」を見据えながら、新型コロナウイルス感染症対策でいびつになった診療体制を平時に戻していく1年だったと思います。その中で重要な課題が人員の確保です。

特に看護師の確保には多くの医療機関で様々な取り組みがなされています。先日、看護学生に向けて国家試験の対策のコンテンツを病院のInstagramに定期的に発信していきたいので協力を、との要請がありました。最近の学生は国家試験の勉強にSNSのコンテンツを利用していることが多いとのことでした。結構、驚きつつも、クリアカットな内容を短時間で確認できるのは実際便利だろうなと思いますし、それで病院の知名度が上がるのなら良い試みだと思いました。一方で医師に関しても同様と思いますが、学生時代の最終的な評価がキーワードの確認と選択肢のチョイスを極めて国家試験に合格することとなると、入職後の実臨床との関わりの中でのサポートの必要性を再認識した次第です。実臨床では選択肢を選ぶ前に、不適切問題にならないように様々な情報「キーワード」を求め続け、問題文を作りなおす作業が醍醐味ですね。

人集め、教育…引き続き、頑張ってまいりましょう。

■ 小山 耕太 非常勤講師／県北教育拠点指導医

（くまもと県北病院 総合診療科／熊本県健康福祉部健康局医療政策課 熊本県へき地医療支援機構）
「ワクワクが止まらない」

熊本大学に帰還して11年目、教育拠点に赴任して10年目に突入しました。コロナ感染症が社会的に5類感染症となり、院内では依然として2類感染症当時と変わらぬ対応を求められる混沌としたこの頃です。

この10年でくまもと県北教育拠点（当拠点）としての熊本県北地域及びくまもと県北病院への様々な効果（地域完結型医療の達成、救急医療体制の充実化、小児診療24時間体制の構築、卒後臨床研修医の増加、診療科の新規設置・常勤化、医師の増加等）について、熊本県の一部の地域効果として示されました。当拠点設置当初から、教育的取り組みについて、現行のくまもと県北病院研修医、専攻医、熊本県修学資金貸与（地域枠）医師から広げる構想はありましたが、設置当初のメンバーは、当時の責任者で現病院長の田宮先生と私の2名でしたので、実質的に困難な時期でもありました。それから10年が経ち、当時の研修医が指導医の立場まで成長した現在、教育の持つ真の力を創設メンバーとして実感しつつあります。

このタイミングにして私個人としては、これまでの教育拠点での取り組みを基に、当初の教育対象を熊本県北地域から熊本県全土に展開する機会を得ました。2023年4月から熊本県庁医療政策課に現在の教育拠点責任者・総合診療科部長を兼務の形で就任したのです。「まさか自分が行政の職を得るとは・・・」と感じたのは、私だけはありません。私以外に医師がいない環境に身を投じることは、まさに新たな視野を広げる良い機会になりました。詳細については割愛しますが、自治医科大学学生・卒業医師を対象に教育的取り組みを展開することが決定し、2024年1月から自治医大卒業医師が義務年限で赴任する現場に赴き、これまで当拠点で実践した教育・診療支援を開始しております。この取り組みが、熊本県自治医大卒業医師が抱える課題に「どの様に」貢献し、実りある地域医療実践を可能とするのか、実践する私自身が楽しみでワクワクが止まらない毎日です。

最後に、教育の持つ真の力について、拠点設置当初にご指導頂いた諸先輩方が仰った通り、「効果を実感するまでに10年掛かる」は、真実でした。イキッて「5年で効果を出して見せます」とか言った私をお許してください。現在の新たな教育的取り組みの効果を実感できる10年後を楽しみに、今日も新しいステップを踏み、組織としての飛躍のため、常に前向きに活動したいと思います。

引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしく願い申し上げます。

ゆっくりだけど、確実に前進

■ 古賀 義規 客員研究員（御所浦診療所 所長）

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の1つで、総合診療科医師2名による常勤体制となっています。私が長期間勤務している一方で、もう1名は自治医大卒医師あるいは地域枠医師の派遣をうけて1-2年ごとに交代する体制となっています。

R5年度もクリクラ等の医学生実習、熊本県県北病院や秋田県などからの地域医療研修を受け入れることができました。前年度まで2年続けてCOVID-19流行に伴い中止となっていた天草圏域での医学生夏季実習は、R5年度は何とか実施されることになり御所浦も医学生を受け入れることができました。

R6年度は県内のへき地医療の連携や継続性強化のための活動に注力し、教育面では多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助になりたいと思います。

■ 片岡 恵一郎 客員研究員（小国公立病院 病院事業管理者）

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに所属させていただいており、2023年度が6年目となりました。

2023年3月の地域医療構想調整会議で、小国公立病院の阿蘇医療圏域内での役割を「地域密着型多機能病院」と定義し、積極的に運営を継続していく事になりました。地域密着型事業の一貫として、2023年度は「小国郷医療MaaS・DX推進事業」が国のデジタル田園都市国家構想の事業に採択され、1年間かけて、約8400万円の事業を実行致しました。この事業を実行するにあたり熊本大学からもご支援・ご協力を頂きながらの事業遂行となりました。

2023年7月には、閉院する民間のクリニックの診療を引き継ぐ形で「おぐにサテライト診療所」を開所し、医療MaaS・DX推進事業の拠点としての運営を開始しました。この診療所では、これまで通院されていた患者さんの対面診療を継続しながら、訪問診療とオンライン診療をハイブリッドで提供できる様、システムを構築致しました。そして、2024年2月より、いよいよオンライン診療車「柴三郎号」が小国郷を走り始めました。医療スタッフの不足、診療する場所の不足、高齢者の移動手段の不足を一気に解決する可能性のあるこの「柴三郎号」のポテンシャルを十分に引き出せる様、知恵を絞っていきたいと考えております。少子高齢化の進んだ医療資源の少ない地方での課題解決の為の強力なツールとして地域医療の実習・研修にも良い素材を提供できるものと考えております。

新しい事業の立ち上げの年で地域医療支援センターへの出入りが少なくなってしまう、大変心苦しく思っておりますが、熊本大学からの地域医療支援は、地方にとって本当に貴重なもので、今年度も多大なるマンパワーを小国の医療現場に送っていただきました。

2024年度も、引き続いての厚いご支援に対してご恩返しができる様、客員研究員としてできる事を微力ながら務めさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 松本 朋樹 客員研究員（松本内科・眼科 院長）

天草から、医療法人孔和会 松本内科眼科の松本朋樹です。天草地域医療センターでの勤務の後、客員研究員の肩書を拝命し、両親のクリニックを継承しつつ、リクルートを中心に大学でのプロジェクトに関わらせていただいております。

今年度は承継の方で慌ただしく、あっという間に一年が過ぎ去ってしまいました。天草から熊本・九州の総合診療を盛り上げることができるよう、精進していきます。

医師の偏在は大きな課題の一つとなっていますが、総合診療はそれを解決する鍵となる診療科であると確信しており、卒前・卒後教育を通した総合診療の啓蒙は大きな意味を持っていると考えます。

本年度も大変お世話になりました。

3. 総合診療科 医局員・専攻医

■ 武末 真紀子 医師（大学院生）

今年度は出産・育児と大学院での研究の両立で慌ただしい一年でした。産後は年齢と思わぬ乳腺トラブルのため想像をはるかに超えた体調の悪さで、なかなか研究を進められない焦りなど仕事面ではつらい時期もありました。研究に関しては、本格的にシステマティックレビューを開始することができましたが、やってみると思ったより手間取る部分もありますが、思ったよりスムーズな部分もあり、遅れはとりつつ少しずつ前進していると思っています。次年度の前半のうちに結果まで出せるように進めていく予定です。次年度は仕事復帰も視野に頑張っていこうと思います。

■ 松田 圭史 医師（御所浦診療所）

今年度は御所浦診療所での勤務となりました。御所浦は離島ですので船を利用しなければ辿り着くことができません。そのような環境での勤務は初めてでしたので、とても新鮮で充実した1年となりました。診療においては、救急搬送や紹介などの際には離島ならではの難しさを感じることがありましたが、患者さんとの距離も近く、訪問診療や学校健診など地域医療・総合診療の醍醐味を存分に味わうことができました。生活においても、診療所からはオーシャンビューですし、魚釣りや島のイベント(夏祭り、恐竜博物館オープン、など)を楽しむことができました。

また、今年度で熊本県医師修学資金貸与制度による義務年限も無事満了となりました。義務として地域で勤務するわけですが、どの地域でも温かく迎え入れて下さり、多くのことを勉強・経験させて頂きました。今後もこの経験を活かして熊本県の地域医療・総合診療に貢献できればと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 空田 健一 医師（湯島へき地診療所）

湯島には施設がありません。島の住民は、この2年間で240人から190人に減少しました。島での生活が困難となり、島を出て行く高齢者の方々の寂しそうな姿を見てきました。見送る方々の寂しそうな姿も見てきました。出て行かれた島の人々は誰もが、できるだけ長い間、島で生活することを望んでいました。島の人同士のつながりは強く、仲間とのきずなの中で暮らすことが島の人々にとって幸せなのでしょう。

島には豊かな自然がありますが、働き口は少ないため、今後も急速に人口が減少していくと思われます。そのような中、上天草市立湯島へき地診療所では、1日に10人程度をゆっくり診察しています。一生懸命に働いても、いろんな陰口を言われることもあります。島出身の看護師さんのおかげで、負担がものすごく軽減しています。

これまで患者さんとの共通の理解基盤を探りながら診てきて、最近は処方内容も変化がなくなりました。救急は島で粘るより、早急に済生会みすみ病院に送ることを望まれるため、閾値を低くして紹介しております。

島の患者さんは基本的に元気で、右肩下がりに老衰が進行しています。コロナで進行が速まったかもしれませんが、今の診療所のメインの仕事は、住民が島での生活はもう限界と感じて、島から出て行かれるまでを見守ることです。湯島の医療は、限られた医療資源であらゆる状況に対処する経験を積める貴重な場ではなく、総合診療専門医としての成長が乏しいように感じてきました。私は、熊本大学の地域枠の方々にとって湯島は、働くメリットよりデメリットの方が大きいと思うので、おすすめしません。今後は、「看護師が島にいてくれるから安心」と言われるような看護師を育て、Joinやオンライン診療を活用すればよいと思います。

湯島の関係者が一体となって、実情を踏まえた将来の医療提供体制について協議していただけますと幸いです。

■ 平賀 円 医師（阿蘇医療センター 内科）

令和4年～5年度は阿蘇医療センターで2年間の勤務を行いました。甲斐病院長や湯本副院長をはじめ様々な方々のサポートのおかげで充実した2年間になりました。コロナ禍真っ只中の阿蘇は、ドライブスルー発熱外来やコロナ感染病棟など慣れないものばかりで、病院や施設でもクラスターが生じることもあり、施設スタッフと連携しながら対応したことも良い思い出です。

熊大総診の後輩である松岡先生も令和5年度から阿蘇勤務となり、あらたな挑戦として、チーム回診、学生/研修医教育に力を入れました。私が去った後も、そのようなチーム体制という文化が根付いてくれれば幸いです。

8月には日本病院総合診療医学会で、1月には日本プライマリケア学会九州地方会でそれぞれ発表を行いました。現地に参加して様々な先生方と直接お話しすることで、私自身もとても刺激になりました。今後のやる気につながることでしょう。

また、2月には医師会生涯教育講座で講師としてお話す機会をいただき、私の総合診療医としての2年間を話しました。開業医の先生らとも情報共有することの重要性をあらためて認識できました。

また、「力を入れた事」といえば、熊大総診のSNSを立ち上げ、日々なんらかの情報をアップしていたことです。日々というほど頻繁ではないですが、他病院や研修医・学生ともしは繋がりを持てる様になったかと考えております。熊大総診を盛り上げるため、若い方々に興味を持って貰えるように、今後も継続していきたいと思います。

地域勤務が一旦おわり、令和6年4月からは、熊本赤十字病院で後期研修を行います。高次医療機関での勤務は初めてで緊張しておりますが、総診とのダブルボードを目指す内科専攻医として、初心にもどり、基礎能力を高めていきたいと考えます。

体調を壊さず、仕事もきちんとこなし、こどもの成長を見守り、大学院もガンバリマス。

■ 久保崎 順子 医師（熊本医療センター 総合診療科）

現在、国立病院機構熊本医療センター 総合診療科に勤務しています。この1年も業務は特に変わらず、外来(新患・再来)、救急外来(当直含む)、入院患者診療を担当しました。日々の診療では、未だに嬉しいこと、反省することが同じくらいありますが、毎日、丁寧に患者さんを診ることが出来る今の環境(総合診療科の先生方と、看護師さんや秘書さんたち皆さん)に感謝しています。

診療以外のことだと、去年から開始していた院内急変についてデータ収集が形になり、まずは院内の勉強会で発表できました。(私は患者さんのご家族に急変リスクについてお話をする際、このデータを引き合いに出すこともあり、結果的に実用性がありました。) また、歯科からコンサルトとなった下顎骨髄炎の症例を院内学会で発表しました。

また、病院総合診療医学会で若手の先輩方が作っている「良質な診断のワーキンググループ」の仲間に入れていただき、学会発表や学会誌への論文投稿を行いました。そのグループでは、診断エラー、医療におけるAI、総合診療科⇄他科のコンサルトについてなど、興味深いテーマを扱っています。その関連で医学書院の「総合診療」に執筆もさせていただく機会がありました。

いずれも、上司の先生方の手助けがあったからこそ出来たことです(マイペースなので迷惑をかけていることもしばしばではないかと思ひます)。日々感謝でいっぱいです。

今年は、熊本大学の先生方との交流を増やしたいと思っています。今年も何卒宜しく願いいたします。

■ 永田 洋介 医師（球磨郡公立多良木病院）

総合診療専門医として必要とされることを考えながら活動する1年でした。

総合診療科外来に加え、救急外来での救急対応、一般病棟管理や集中治療管理、診療所勤務、地域公演と様々な経験をしました。

様々な場面においても、健康を管理することはまさに総合診療そのもので、多面的に考えることの重要性を学びました。

今後も引き続き成長出来るように研鑽を積みしたいと思います。

■ 早川 香菜美 医師（地域医療センター）

令和5年度は1年間の後期研修の期間をいただき、熊本大学病院緩和ケアセンター並びに熊本地域医療センター緩和ケア科で半年ずつ緩和ケアの研修をさせていただきました。熊本大学病院では、緩和ケアチームの一員として様々な診療科で診断、治療されている患者様の症状緩和を中心に、コンサルテーション活動を行わせていただきました。チーム内での多職種との連携はもちろんのこと、他科との連携についても大変なことも多くありましたがとても勉強になりました。熊本地域医療センターでは緩和ケア病棟で主治医として終末期医療に携わらせていただきました。主治医として人生の最終段階にある患者様・ご家族との関わりは、個別性も高く日々頭を悩ませるものでしたが、以前と比較して苦手意識は薄くなったかなと思っています。

緩和ケアの分野は奥が深く1年という短い時間ではまだまだ学び足りないなと思っているので、また機会があればより深く学びたいです。

この1年で学んだことを来年度からの地域医療に活かしていきたいと思います。

■ 下地 徹 専攻医

2023年4～6月に熊本大学附属病院にて救急科研修、7月からは天草市立河浦病院にて総合診療研修をし、計5年間というやや長い時間をかけて総合診療専門研修プログラムの履修期間を終えることができました。また、その間短い期間でしたが小国公立病院での外来・救急診療をすることもでき、地域で少しずつ経験を積んでいると感じました。この一年間で一番印象に残っているのは河浦病院でのことです。慢性疾患のマネジメントを勉強できたこともよかったです。地域のヘルスプロモーションのための地域講話、学生の地域勉強会の引率、病院職員と心肺蘇生講習会などを行い、それらの活動を通して地域志向性や成人教育についても学ぶことができました。思い返すと、前年度までとはかなり違うことに触れてきたなと感じます。学ぶほどに総合診療医としてはまだまだ未熟だなと感じることが多いのですが、楽しく学べていると感じています。今後ですが、これから専門医試験の準備をすすめながら、今まであまり考えてこなかった今後の自分のキャリアについても考えていこうと思います。

■ 本田 宏介 専攻医

令和5年度は3つの病院に勤務しました。4月～6月は天草市立河浦病院勤務でした。比較的小さな病院ですが、MIRI以外はだいたい揃っていました。訪問診療に力をいれていますが、訪問先では医療機器がほとんど使えないため、問診の力や身体診察の力を養えたと思います。診療科間の壁がなくコンサルトしやすい良い雰囲気病院でした。新鮮な海の幸、山の幸など、近所のお店の料理が美味しかったです。

7月～12月はくまもと県北病院で、2つの診療科に勤務しました。7月～9月は小児科でした。患者さん自身が訴えを言葉にできないことも多く、ご家族から情報を訊きだす力、患者さんの表情や泣き声等から重症度のある程度判断する力が必要でした。10月～12月は総合診療科でした。小児科では単独での主治医にはならなかったため、久しぶりに7～8名の主治医になり、また病態も複雑な方が多かったため、上級医に毎日アドバイスを頂きながら奮闘していました。毎朝総診の入院患者さんや外来患者さん、重要症例のカンファがあり、オンコールや救外勤務の日もあるので、非常に勉強になる病院でした。

1月～3月は熊本大学病院の主に救急外来勤務でした。様々な診療科から医師が来ているため、総診の先生方からはもちろん、同日勤務になった他科の先生方からの学びもあり、勉強になります。

令和6年度は総診専門医受験に向けての資料を揃え、専門医試験受験に向かって精進する所存です。

■ 松岡 隼平 専攻医

いつもお世話になっております、専攻医3年目の松岡隼平です。私も専攻医3年目を迎え、総合診療科としての役割などを意識した働き方を徐々に実行に移す段階にきました。何よりもまず自分にとって大きかったのは、直近の総合診療専門医を取られた先輩である平賀先生と同じ職場となったことでした。正直2年目までは、総合診療専門医の先輩や、年度の近い先輩に積極的にお話を聞ける機会というのが日常の中では少なく、そのせいもあり勝手がわからず専門医のタスクの進捗も進まないといった状況でしたが、気軽に質問ができることや、何より実際に専門医を取った方からの意見なので、参考にさせ

てもらうことが多かったです。また、今年度は仕事と家庭の両立を行うことの大変さやその成り立たせるための方法を学びました。周りの方々の協力を得ることや、チームでの仕事の分担、業務効率を上げるための院内の取り組みなども行い、ポートフォリオのテーマにもさせていただきました。3年間で一番、総合診療科としての働き方を意識した1年間だったと思います。心残りは、自分の体力的精神的余裕があまり作れず、日常業務と専門医タスク以外のことに注力できなかったことです。

来年度は、平賀先生も異動になられるので、自分がチームのリーダーシップを発揮し、専門医の取得、学会発表などにも力を注げるような1年にできればと思います。

■ 西富 友哉 専攻医

令和5年度は熊本大学病院総合診療科で勤務をしていました。大学病院の総合診療科では複数の医療機関を受診したのちに、診断がつかない、あるいは症状が改善せず現状に満足できないという患者が多く見られました。3次医療機関を含む前医で既に種々の検査をされている方や、複雑な心理社会的背景が影響していると考えられる方も多く、これ以上自分にできることがあるのだろうかと考えることもありました。その一方で、様々な医療機関を受診されて来た方でも、丁寧な病歴聴取と身体診察で診断の糸口をつかみ、最終的に治療に至った症例も数多くあり、総合診療科としての醍醐味を実感すると同時に、病歴聴取と身体診察の重要性を改めて認識しました。

地域のクリニックでの診療や健診を行う機会もありました。クリニックでは実施できる検査が少なく、血液検査も即日結果がわかるのは赤血球、白血球、血小板ぐらいという中で、丁寧に病歴聴取や身体診察を行おうにも大勢の患者を待たせているため時間が取れないなど、大学病院とはとても対照的でした。また、健診では大部分が症候のない健康な人であり、見逃しを防ぐために丁寧な診察が求められる一方で、1人にかけられる時間は3分として計画が組まれていたため、クリニック以上に時間的制約がありました。これら対照的な施設で経験を積めたことで、総合診療を学ぶ者として幅が広がったように思います。来年度も一つ一つ経験を積んでいきたいと思っています。

■ 足立 瑛彦 専攻医

県北病院に来てから、この1年で私が得たものは、「プロフェッショナルの意識」であると言っても過言ではない。特に、自分が見る疾患について、ガイドラインや教科書をその都度参照しながら治療をしていく姿勢が、この1年で確立した。医師として至極当然出来ねばならないことだが、私は初期研修医から専攻医1年目まで殆どこうした姿勢を学んで来なかった。遅きに失した感があるため、県北病院で早めに「軌道修正」できた意義は大きい。同時に、患者さんの検査を行うときに、目的や被験者の負担を考えてから施行したり、どのような状態なら退院できるか、他職種と相談する習慣がついたことも付記しておく。

今後、研修している間に、臨床で使える知識の勉強をつづけること、およびCV挿入や気管挿管などの手技も身に着けるのが、今の自分の課題である。加えて、小児科で研修したり地域医療にかかわったりしながら、自分が将来すべきことを決めていきたい。

■ 田添 英典 専攻医

2023年3月に初期研修を終え、熊本大学病院総合診療科に入局させていただきました。4月からくまもと県北病院に勤務し、1年間の内科研修を行いました。風邪から敗血症、膠原病、悪性腫瘍にいたるまで、さまざまな症例を経験することができ、総合診療医に求められる知識の幅広さを実感しました。また、地域医療連携室の方々に力を借りながら退院支援に携わる中で、地域医療の面白さを改めて感じた1年でもありました。生活に困難を抱えている患者さんひとりひとりのために、多職種で力を合わせてオーダーメイドの解決策を考えることに、とてもやりがいを感じました。

今後も日々の診療を通して医学的な知識を深めるとともに、地域包括ケアや介護保険制度についても勉強していきたいと思っています。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

4. 事務スタッフ

■ 無田 英昭 地域医療支援コーディネーター

令和5年度は、熊本県地域医療支援機構が設置され本格的に事業を開始してからちょうど10年目。そして、熊本県修学資金貸与医師の一期生の中から、義務年限を満了する初めての先生を輩出する節目の年となりました。また、この数年、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業の縮小や中止等を余儀なくされていた支援機構の事業をようやく再開できる、そのような年となりました。ご縁があって令和5年度からこの仕事に携わるようになった私にとっては、何もかも初めての経験であり、ドタバタしているうちにあっという間に過ぎた1年でした。この1年をどうにか乗り越えることができたのも、松井先生をはじめ地域医療支援センターの先生方や同僚スタッフの皆様ののおかげであり、そして、支援機構や貸与制度の創設以来、円滑な事業運営ができるよう常に創意工夫を重ね、改善を図りながら、この10年間の歩みを着実に進めて来られた歴代の先生方やスタッフの皆様のご尽力のおかげです。心より感謝を申し上げたいと思います。新年度は、新たに7名の貸与学生が加わり、面談や実習等でお付き合いさせていただく貸与学生、貸与医師等を合わせた数はちょうど100名になります。微力ではありますが、熊本県の地域医療の進展に少しでもお役に立てるよう引き続き頑張りたいと思います。

■ 川添 光芳 地域医療支援コーディネーター

令和5年4月、定年後の再就職ということで、熊本大学病院地域医療支援センターの地域医療支援コーディネーターに採用され、何をすればいいのか解らずオロオロしながら、早くも1年が過ぎようとしています。地域医療支援センターという名称から、医師不足地域の支援や地域医療に従事する人材の育成などをお手伝いするのが自分の役割だろうと想像していましたが、実はとても人との関わりが大切な仕事ばかりでした。

8月の炎天下に上天草で実施した夏季地域医療特別実習や、打って変わって12月の年末に阿蘇・小国で実施した冬季地域医療特別実習は、修学旅行的な楽しい雰囲気の中、学生さんが、実際の地域医療の現場で一生懸命かつ積極的に実習に取り組んでいる姿を目にして、体力的に大変な思いもしましたが、やりがいも感じました。

また、地域医療支援機構の広報誌「COCODE!」の制作にも携わらせていただきました。「COCODE!」の配布を心待ちにしている方がたくさんおられ、地域医療に奮闘されている医師の魅力などを、広く県民に知らせていく大事な仕事だと実感しました。

もう一つ私が担当している、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座を中心にした地域医療支援体制の構築は、まだまだ浸透していない部分もありますので、今後さらに事業を充実させるのが課題だと思っています。

このように、地域医療支援コーディネーターの仕事は、思いの外大変だという印象ですが、センターや県庁医療政策課の方々に支えてもらって、とても良い環境で仕事をさせていただいているのは大変ありがたく、今後も微力ではありますが頑張っていこうと思っています。

■ 原田 淳子 女性医師復職支援コーディネーター

今年度4月からコーディネーターとして着任しました。働く女性や子育て世代に関わる経験はあったものの、医師の先生方のキャリア形成や就労環境は知らないことばかりで、言葉の意味を調べることから始める日々でした。専任医師の先生が不在で、十分な活動ができたとは言えませんが、松井先生や関係の先生方、事務の皆さんに助けていただき、1年を過ごすことができました。

ちょうど「医師の働き方改革」が本格始動する前年でしたが、医師のワークライフバランスの確立と安全・安心の医療体制の確保の両立、その中で一人の医師が目指す医師像に到達する道のりは、なかなか険しそうだと感じました。

今年度、冊子CLOVER第5版を作成するに当たり、県内病院のご協力を得て出産・育児支援制度のアンケートを実施しましたが、女性医師や子育て医師が制度をうまく活用できるか否かは現場の対応次第の部分もあります。

実際に制度や支援を利用できる環境づくりが進み、一人でも多くの先生方が、生きがいと楽しみを持って医師の仕事ができるよう、お手伝いをしてまいりたいと思います。

■ 山口 香 事務補佐員

今年度は、新型コロナウイルスの影響が残った昨年度までとは違い、ほぼ従来の業務が戻った1年でした。4年振りに夏季・冬季地域医療特別実習も実施され、マスクを外した笑顔の学生を見て、本来の日常が戻ったことを実感することができました。

私事ですが、地域医療支援センターで約1年、その後、地域医療・総合診療実践学寄附講座で約5年程お世話になりましたが、今年度をもって、退職することになりました。あっという間の6年でした。その間様々な業務を担当させていただきましたが、それまでに経験した事務とは違い、時代の変化を感じた日々でした。Excel、Word等のPC操作だけではなく、コロナ禍で大活躍したZoomなどのオンライン、YouTubeへのアップやHP更新などなど、全く経験の無い事に日々戸惑いながらも、同じ事務補佐の皆さんの助けをお借りして、何とか乗り切ることが出来ました。松井先生をはじめ、先生方、コーディネーターの皆さん、事務補佐の皆さんなど、周りの方々に恵まれたお陰で、大過なく過ごす事が出来たと思っています。本当にありがとうございました。

3月末で退職後、家庭の事情で県外へ転居しましたが、ニュースで熊本県の話が取り上げられるたび、スーパーで熊本県産の野菜や食品を見るたび、熊本愛を実感しています。たった6年間ではありますが、熊本の地域医療問題に関わってお仕事が出来たことを、今、改めて嬉しく思っています。

これからもお世話になった皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

■ 山並 美緒 事務補佐員

新型コロナウイルス感染症が5類に移行した5月以降から平常業務に徐々に戻り、慌ただしく過ぎた1年でした。以前は難なくこなしていた業務も、コロナ渦で自分自身がスローペースになっていたことと、その間に自分も着実に年を重ねていたことも相まって様々な場面で着いていくのが必死でした。特に、夏季実習で湯島散策をした時は、炎天下の中歩いて体力の無さを痛感しました。危うく倒れて先生方に迷惑をおかけするところでした。

もう一つ実感したことは、コロナ渦に入学した地域枠学生の皆さんにとってこの数年は、今後医師になり地域で勤務していくために不可欠な人間関係を構築するのに大きくマイナスになったということです。夏季実習が開催されなかったり地域医療ゼミもWeb開催で、縦の繋がりが薄く地域医療を知る機会も少なく、絆が薄くなったこの数年を卒業までにどうにか取り戻せるように尽力していくのが、当センター・寄附講座の当面の使命だと思います。

来年度も、熊本の地域医療を支える方々を支える立場で、微力ながら頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

■ 横手 友紀子 事務補佐員

ご縁があり、今年度より再び本事業に携わらせていただくこととなりました。初めましての方も、日頃よりお世話になっている方もよろしくお願いいたします。

離れていた期間、私は以前から興味があったWebデザインを学ぶ機会を得ました。プロの講師陣からの直接の指導はとても学びになり、また、様々な年代・経験の方々と肩を並べて学習に取り組んだのも刺激的で貴重な時間でした。

さて、学習の機会と言えば、新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、これまで制限してきた、夏季実習(冬季実習)、肥後ふるさと医学生実習を今年度は再開することができました。

私は夏季実習に同行しましたが、うだるような暑さのなかでも実習を楽しみながら、真剣に学習に取り組む、学年・大学問わず交流を深め協力しあっている様子が印象的でした。また、ふるさと実習は直接様子を伺う機会はありませんでしたが、利用学生から県の地域医療に関心をもち進路決定の参考にもなると好評いただきました。

これらだけに限らず、様々な事業の再開を受け、私たちの取り組みが、将来、地域医療を担う皆様にとって何かの糧になればと改めて感じております。

最後になりますが、関係する皆様のご協力のもと、本年も順調に事業を行うことができました。心より感謝申し上げます。

10 あとがき

令和5年度の活動報告をさせていただきましたが、今年度は地域医療支援センター設立10年目の節目の年でありました。令和5年5月にはCOVID-19感染症も5類に移行し、感染状況も落ち着いたため3年ぶりに「夏季地域医療特別実習」を実施することができました。また試験等で夏季実習に参加できなかった学生を対象に、今年度が初開催となる「冬季地域医療特別実習」も実施しております。これらの実習は将来勤務する地域に赴くことで地域の特色や問題点を知り、地域医療に取り組む意欲を醸成する貴重な機会です。本年度は多くの修学資金貸与学生ならびに県内出身の自治医科大学生に参加していただきました。参加学生は事前学習を行ったうえで参加しており、病院や診療所のみならず地域住民の生活の場を実際に見て学ぶことで知識と経験の融合が図れたことと思います。来年度以降も引き続き貴重な学びの機会である特別実習を継続してまいります。また令和6年度の地域枠入学者は7名となっており、熊本県で活躍される方々が順調に増加しております。また修学資金貸与医師の2名の先生が本年度で義務年限を終えられることとなりました。熊本県の修学資金貸与医師としては初めての義務年限終了医師であり、令和6年3月には県庁で感謝状の贈呈が行われました。今後も面談や実習等を通して修学資金貸与学生の皆様のキャリア形成をさらに充実させるべく方策を進めてまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE !」もvol.6およびvol.7を発行しました。今後も編集委員として熊本県内の地域医療の魅力をお伝えできるよう努めてまいります。

最後に本年度は馬場秀夫機構理事長を始め、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多くのご指導・ご支援を賜りましたこと深く御礼申し上げます。また来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院

地域医療・総合診療実践学寄附講座

地域医療支援センター

荒木 智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel: 096-373-5627 Fax: 096-373-5796

E-mail: chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP: <http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/>



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel: 096-373-5794 Fax: 096-373-5796

E-mail: chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp

HP: <http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/>

